博士学位論文（東京外国語大学）

Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏　　名	古賀 健太郎
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 277 号
学位授与の日付	2019 年 9 月 4 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	フランス語複合名詞の生産的な形成法について Construction Morphology の枠組みを用いた形態統辞的考察

Name	Koga, Kentaro
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 277
Date	September 4, 2019
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Productive Formation of French Compound Nouns： A Morpho-syntactic Analysis Based on the Construction Morphology

フランス語複合名詞の生産的な形成法について

Construction Morphology の枠組みを用いた形態統辞的考察

古賀　健太郎

目次

序論 ―――――― 4

第 1 章　複合名詞の定義：先行研究の概観 ―――――― 8

1.1.　複合語の定義と分類 ―――――― 8
1.2.　統辞と語形成：「語」とは何かという問題 ―――――― 11
1.3.　派生と複合 ―――――― 17
1.4.　属性叙述と下位分類標示 ―――――― 21
1.5.　凝結度 ―――――― 25
1.6.　生産性 ―――――― 28
1.7.　語形成–統辞間の連続的関係と生産性 ―――――― 32
1.8.　通時的な変化 ―――――― 36

第 2 章　理論的枠組み：Construction Morphology について ―――――― 41

2.1.　統辞規則が想定しない構造の形成 ―――――― 41
2.2.　語彙ベースの形態論 ―――――― 44
2.3.　語彙項目としてのスキーマ ―――――― 47
2.4.　複数のスキーマの結合 ―――――― 51
2.5.　スキーマとサブスキーマ ―――――― 54
2.6.　スキーマの多様性：構成素指定の度合い ―――――― 57
2.7.　語彙―統辞：二次元的連続体の可能性 ―――――― 62
2.7.1. 構成素指定の度合いと成句度 ―――――― 62
2.7.2. 「レ」の字型モデルの可能性 ―――――― 63
2.7.3.「レ」の字型モデル：フランス語の場合 ―――――― 66
2.7.4. 語彙化、構文化、脱語彙化 ―――――― 67
2.7.5. 語彙–統辞間の二次元的な連続体：まとめ ―――――― 73
2.8.　スキーマと類推 ―――――― 75
2.9.　文体と個人差：語形成モデルとの関連 ―――――― 78

第 3 章　Pause-café 型複合名詞の性質 ―――――― 83

3.1.　分類上の位置づけ ―――――― 83

3.2. 属詞的な[N1 + N2] ———— 85
3.3. 関係的な[N1 + N2] ———— 89
3.4. 省略的な連辞 vs. 複合名詞 ：「名付け」と「説明」 ———— 93
3.5. 語形成モデル：特定の組み合わせ ———— 99
3.6. 属詞性と語形成モデルの内部構造 ———— 102

第 4 章　特定の N1 + さまざまな N2 ———— 107

4.1. Pause-café 型複合名詞の実例調査 ———— 107
4.2. 特定の N1 + さまざまな N2：全体の傾向 ———— 108
4.3. 意味的不完全性と下位範疇化 ———— 111
4.4. N2 に見られる傾向：[espace + N2]の場合 ———— 114
4.4.1.N2 に入る名詞の細分類 ———— 114
4.4.2.人やその集団を示す名詞 ———— 116
4.4.3.出来事を示す名詞 ———— 117
4.4.4.物を示す名詞 ———— 118
4.4.5.場所を示す名詞 ———— 119
4.4.6.N2 に見られる傾向と「目的」「所属」の意味関係 ———— 119
4.5. 空間のセグメント化と下位範疇化 ———— 120
4.6. Laverie vs. espace laverie：指示対象への参照の仕方 ———— 123
4.7. 「場所（区画）」範疇の創設 ———— 125
4.8. それぞれの語形成モデルと N2 組み合わせ可能性 ———— 129
4.8.1.「N1 名詞」次第で組み合わさる名詞の傾向は変わるのか？ ———— 129
4.8.2.[pause + N2] ———— 129
4.8.3.[assurance + N2] ———— 131
4.8.4.[service + N2] ———— 132
4.8.5.[rayon + N2], [coin + N2] ———— 135
4.8.6.N2 の意味特性と構成素間の意味関係 ———— 141

第 5 章　さまざまな N1 + 特定の N2 ———— 142

5.1. N2 は「名詞」なのか？ ———— 142
5.2. Série(s) télé, garage(s) auto…：切除された語彙素 ———— 143
5.3. 形成モデルのあり方 ———— 146
5.4. さまざまな N1 + 特定の N2：全体の傾向 ———— 148
5.5. 「低頻度 N2」と「高頻度 N1」 ———— 149

5.6. AdjR の欠如を補完する N2 ———— 151
5.7. AdjR と N2：競合か棲み分けか ———— 155
5.7.1. 4 つの可能性 ———— 155
5.7.2. 属性叙述的な AdjR：事実上の AdjQ 化 ———— 156
5.7.3. 凝結と分類的な性質 ———— 157
5.7.4. 「事行」か「対象物」か ———— 162
5.7.5. 頻度の低い AdjR ———— 166
5.8. 別の語形成モデルがもたらす競合 ———— 167
5.8.1. [N1 + culinaire] vs. [atelier + N2] ———— 167
5.8.2. 文体上の使い分け？ ———— 170
5.9. サブスキーマとしての[N1 + AdjR]と[N1 + N2] ———— 172
5.9.1. 3 タイプのサブスキーマ ———— 172
5.9.2. [N1 + AdjR / N2]の限界 ———— 174

第 6 章　もうひとつの語形成モデル：[N1 + spécial + N2] ———— 176

6.1. Pause-café 型複合名詞の一変種？ ———— 176
6.2. Spécial の形態統辞的特徴 ———— 179
6.3. 実例調査 ———— 181
6.4. [spécial + N2] : N1 を伴わない場合 ———— 183
6.5. [N1 + spécial + N2]と[N1 + à + N2] ———— 188
6.5.1. 2 つの語形成モデルの対応関係 ———— 188
6.5.2. 構成素組み合わせ可能性の高さ ———— 190
6.5.3. 無冠詞の N2 ———— 193
6.5.4. 結合スキーマとしての[N1 + [spécial + N2]] ———— 195
6.5.5. Spécial の語彙的意味はどうなったのか？ ———— 197
6.6. [N1 + N2], [N1 + AdjR]と[N1 + spécial + N2]：まとめ ———— 201

結論 ———— 204
参考文献 ———— 209
謝辞 ———— 223

【巻末付録】
1. Pause-café 型複合名詞 筆者収集分 ———— 225
2. [N1 + spécial + N2] 筆者収集分 ———— 234
3. [N1 + spécial + N2] *Est Républicain* コーパス ———— 238

序論

現代フランス語の複合名詞の中には、「名詞＋名詞」（以下[N1 + N2]とする）のように、一般的な統辞構造と表面上は対応しないものがあるが、その中のいくつかは高い生産性を発揮することができる。ここで言う生産性とは、特に、構成素の組み合わせにおける自由度の高さを意味している。本稿ではそのことに注目し、統辞規則に必ずしも基づかない方法で形成される複合名詞がどのような仕組みで生産性を獲得するのか、Booij (2010)で提唱されている Construction Morphology（以下 CM とする）の理論的枠組みを援用しながら考察する。

複合は語彙（または形態論）[1]と統辞の境界で見られる現象である。その結果物である複合語の取り扱いについては、ひとつの語彙的要素として扱うのか、名詞句のような統辞構造の一種として捉えるべきかで、長らく議論が成されてきた。この「語彙か統辞か」、あるいは「形態論か統辞論か」という問題は、複合語と見なされるものの中の多様性抜きには議論できないだろう。例えば couteau à beurre（バターナイフ）のような[N1 + à + N2]型の複合名詞は、一般的な統辞構造（この場合名詞句）を色濃く反映した構造を呈しており、どちらかというと統辞寄りの複合と言える。一方で新古典的複合語(composés néoclassiques)などと呼ばれる auto-école（自動車学校）や biodiversité（生物多様性）のようなタイプは、N1 が接頭辞に近い性質を示していることから、むしろ派生に近い、形態論寄りの形成と言える。

新古典的複合語以外の[N1 + N2]についても、少なくとも表面上は統辞規則に対応していない以上、新古典的複合語のように、形態論寄りの形成を想定できそうだが、N2 の形容詞化を想定するなど、フランス語の一般的な統辞構造との対応関係を模索することも不可能ではない。さらに言えば、先行研究でも指摘されているように、[N1 + N2]

[1] 統辞との関係性を考える際には、本稿では語彙と形態論を一体的にとらえることとする。というのも、形態プロセスの中には、それ自体が一つの語彙素のように機能しているものが含まれており、語彙と形態論は不可分な関係にあると考えられるからである。この点については第 2 章で詳しく論ずる。

自体にも構造的多様性が想定される(cf. Noailly 1990)。したがって「形態論（語彙）寄りか統辞論寄りか」ということを検討する際には、N1 や N2 がそれぞれどのような形態統辞的機能を有しているかを明らかにすることが不可欠になろう。

生産性に関する議論に関しても同様である。英語やドイツ語などと比較すると、フランス語をはじめとするロマンス諸語では[N1 + N2]型の複合名詞は生産性が高くないと一般的には認識されているが、 [N1 + N2]型複合名詞のサブタイプ次第では、必ずしもそうではないことが分かる。たしかに、例えば centre-ville（中心街）という[N1 + N2]が存在しているからと言って、N2 を別の名詞に置き換えることができる訳ではない(i.e. *centre-village, *centre-commune)。しかし対照的に pause-café（コーヒーブレイク）のような[N1 + N2]には、N2 としてさまざまな名詞が入る余地があることが示唆される(e.g. pause déjeuner ランチ休憩, pause yoga ヨガ休憩 etc.)。つまりフランス語においては、ある特定の条件下でのみ生産的な[N1 + N2]の形成が実現される可能性があるのである。したがって具体的にどのような場合に、またどのような仕組みでそれが実現されるのかを、実例を基に詳細に検討する必要があるだろう。

それらを踏まえて本稿で特に着目するのは、[N1 + N2]のうち、pause-café や assurance-vie（生命保険）のように、N1 の下位範疇を示すタイプである。この構造では N2 が N1 の補語として機能し、「N2 のための N1」という「目的」の意味関係が認められることが多いことが特徴である。以下これを「pause-café 型」複合名詞と呼ぶことにする。さらに、offre spéciale printemps（春期特別セール）のように、N2 の直前に形容詞 spécial を伴う構造（以下「[N1 + spécial + N2]型」とする）についても、その構造上の類似性から同じく検討の対象とする。

この 2 つのタイプはいずれも、①フランス語の一般的な統辞構造に（少なくとも表面上は）対応していない；②それにもかかわらず、構成素の組み合わせ可能性に一定の自由度が認められる、という 2 点が特徴的である。統辞規則に準じていないのであれば、それらが生産性を実現するための独自の仕組みが別にあると考える必要があるだろう。これを踏まえ、語彙（形態論）・統辞の両面から、当該構造の占める位置を分析するとともに、CM の理論を参考にしながら、その生産性を実現する仕組みについて検討して

いく。

考察は筆者自らが 2010 年 8 月から 2017 年 9 月の間に収集した pause-café 型、[N1 + spécial + N2]型それぞれの実例をもとに行う。これら実例は主にフランス国内で発行・放送された新聞、雑誌、テレビ番組、ウェブサイト、街中の看板（フランス国内）などで観察されたものである。pause-café 型は 1,282 件、[N1 + spécial + N2]型は 299 件収集した。以下本文中でこれらを引用する場合は、状況に合わせて、観察された複合名詞のみ、あるいはそれが含まれる文全体を示す。また、収集した全種類の実例は巻末の付録に掲載する。

第 1 章では複合名詞の定義に関して、主要な先行研究を概観した上で検討する。具体的には、属性叙述的性質の有無、派生と複合、凝結度と生産性といった点が問題となる。加えて通時的な変遷についても言及する。その中で語彙（語形成）と統辞の間の関係性に注目し、両者がせめぎ合う連続体に新たに「生産性」という指標を取り入れることで、複合名詞の形成プロセスのより詳細な説明ができないか模索する。

第 2 章では本稿で援用する Construction Morphology (CM)について論ずる。語彙素ベースの(lexeme-based)形態論のひとつである CM では、語形成モデル自体も、あたかもひとつの語彙素のようにレキシコンに記載され得ると考えている。この考え方が、本稿で特に対象とする pause-café 型や[N1 + spécial + N2]型の生産的な形成の説明にも適用できるのではないかという点について、他のいくつかの語形成プロセスも引き合いに出しながら検討する。そして pause-café 型をはじめとする構造の一連の形成が、「語彙―統辞」および「生産性」という 2 つの軸の上に二次元的に展開している可能性について指摘する。

第 3 章では現代フランス語で見られる[N1 + N2]構造における pause-café 型複合名詞の位置づけについて考察する。このタイプの複合名詞に見られる形態統辞的特徴をまとめたうえで、その生産的な形成を可能にする語形成モデルの具体的なあり方について検討していく。

これらの議論を受けて第 4 章と第 5 章ではそれぞれ、「特定の N1 + さまざまな N2」と、反対に「さまざまな N1 + 特定の N2」という組み合わせによる語形成モデルの可

能性について論じていく。実際にどのような名詞が「特定の N1」または「特定の N2」として現れる傾向があるのか、また、組み合わさるもう片方の要素との間に結ばれる意味関係はどうなるのか、収集した実例の結果をもとに分析する。

これと同時に第 5 章では、N2 の形態統辞的性質を関係形容詞(AdjR)との比較を通しながら考察する。AdjR は名詞基底に接尾辞が伴うことで形成されるが、この AdjR が形式的に存在しない場合に、pause-café 型が代わりにその不在を補完しているかのように見える。このことに着目し、pause-café 型と[N1 + AdjR]という 2 つの形成法の棲み分けの可能性について考えていく。

ところで先にも触れたように、pause-café 型の実例の中には、N2 の直前に形容詞 spécial を伴うタイプが散見された。この[N1 + spécial + N2]型については特に、形容詞 spécial と、[N1 + à + N2]型における前置詞 à との対応関係に注目したい。これを踏まえて第 6 章では、この[N1 + spécial + N2]型における形容詞 spécial の機能について明らかにしていく。また、N1 を伴わない[spécial + N2]という構造についても合わせて分析し、最終的に pause-café 型、[N1 + AdjR]、[N1 + spécial + N2]（および[spécial + N2]）、そして[N1 + à + N2]をはじめとする前置詞を介した構造が、フランス語の複合名詞の中でどのような位置づけにあるかを明らかにしていく。

ここまでの考察を通して、必ずしも一般的な統辞構造に対応しているとは言えない pause-café 型複合名詞のような構造が生産性を実現する仕組みについて明らかにする。そして CM が提唱する語彙理論に立脚した、フランス語における語彙と統辞のインターフェースについて新たな形で捉え直す必要性を提案する。

第 1 章

複合名詞の定義:先行研究の概観

1.1. 複合語の定義と分類

複合(composition)とは、複数の語彙的項目(items lexicaux)が組み合わさることで、新たな語彙的項目が形成される現象であり、その結果物を一般に複合語(mots composés)と呼んでいる(cf. Lehmann & Martin-Berthet 1998 : 217, Bauer 2003 : 40, Gleßgen 2009 : 2965)。

ただし言語システムの中で複合語が占める位置についてははっきりとせず、長らく議論の的となってきた。複合語が形態(語形成)部門に属するのか、それとも統辞部門に属するのかという問題は、複数の語彙的項目によってひとつの語彙的項目を新たに作り出すという、複合語の形成過程によってまさに引き起こされるものだからである[2]。

フランス語の複合語(特に複合名詞)の研究史は Darmesteter (1874)や Nyrop (1899)にまでさかのぼる。この 2 つの研究をはじめ、つい最近までの研究の多くに共通するのは、複合名詞の内部構造を統辞構造の反映物と考える点である。例えば[N1 + N2]型複合名詞には、[N1 + 前置詞(PREP.) + N2]や[N + Adj]という名詞連辞との対応関係が想定される。前者の前置詞を伴った連辞との対応については Darmesteter (1874) や Guilbert (1971)、高田(1989)、Fradin (2009)など多くの研究において指摘されてきた。一方 N2 が既存の形容詞に対応する可能性についても Noailly (1990)などで指摘されている。ただし最近では Corbin (2004)や Fradin & Kerleroux (2009)など、統辞よりはむしろ形態(語形成)部門の中で複合のプロセスを説明しようとする試みも盛んになってきている。その背景には、語彙情報のあり方および言語における語彙の果たす

[2] 英語の場合は、強勢位置の違いによって複合語と連辞を区別できる余地があるが(e.g. blackboard [ˈblæk.bɔːd] vs. black board[blæk.ˈbɔːd])、強勢が語の弁別に関与しないフランス語では、複合語を音声面から定義するのは困難である。

役割をどのように捉えるかという問題が常に横たわっている（語彙の捉え方に関する議論は第 2 章を参照）。

複合語がひとつの語彙的単位なのか統辞構造なのかという問題の影響は表記の仕方にも及んでいる。多くの複合語の表記法は必ずしも定まっておらず、porte-parapluies（傘立て）のように、構成素間にハイフン(trait d'union)を付すこともあれば、portemanteau（コート掛け）のように 2 つの構成素を一続きに綴ることもあるほか、compte rendu（報告）のようにスペースをあける場合もある。また同じ複合語内で表記が揺れる例も散見される(e.g. compte rendu vs. compte-rendu　報告書, cf. Mathieu-Colas 1994 : 45-46, 129-151)。ハイフンで構成素を結んだり、一続きに綴ることは、複合語を 1 つの語彙的項目とする考え方を反映したものと捉えることができるだろう。一方で構成素間にスペースを空けることは、複合語が統辞構造との類似性を示唆していることの裏返しとも言える。

フランス語においてハイフン(trait d'union)が付される語（複合語以外も含む）の言語情報学上での取り扱いについて考察したのが Mathieu-Colas (1994)である。この研究では複合名詞を大きく以下の 10 のカテゴリーに分類している(pp.70-80):

I. **Composés sur particules** ≪小辞による複合[3]≫:
un demi-tarif（半額料金）, un après-midi（午後）, un non-lieu（免訴）

II. **Composés sur thèmes savants et assimilés**
≪学者的な語幹およびそれに類する語幹による複合≫ :
un oto-rhino-laryngologiste（耳鼻咽喉科医）, un vidéo-clip（ビデオクリップ）, une tragi-comédie（悲喜劇）

III. **Composés sur verbes** ≪動詞による複合≫:
un tire-bouchon（栓抜き）, un couche-tard（夜更かしの人）, un va-et-vient（往来）, un cessez-le-feu（停戦）

IV. **Composés sur cardinaux** ≪数詞による複合≫:
le quatre-cent-vingt-et-un (421), un mille-feuille（ミルフィーユ）

[3] Composé sur… という表現はあくまでも第一要素の品詞を基準とした分類を行う上で便宜的に用いている(*op. cit.* : 70)。

V. **Composés sur adjectifs** ≪形容詞による複合≫:

le clair-obscur（明暗法）, le prêt-à-porter（高級既製服）, le premier-né（第 1 子）

VI. **Composés adjectif + nom** ≪形容詞＋名詞型複合≫:

un beau-frère（義兄、義弟）, le ras-le-bol（退屈）

VII. **Composés nom + adjectifs** ≪名詞＋形容詞型複合≫:

un cordon-bleu（料理の名人）, un cerf-volant（凧）

VIII. **Composés nom + nom** ≪名詞＋名詞型複合≫:

un aller-retour（往復）, un bain-marie（湯煎鍋）, le sud-ouest（南西）, un riz-pain-sel（兵站部将校）

IX. **Composés nom + prép + x** ≪名詞＋前置詞＋名詞型複合≫:

un œil-de-bœuf（丸窓）, le bouche-à-bouche（人工呼吸）, un arc-en-ciel（虹）, un abri-sous-roche（岩陰遺跡）

X. **Divers** ≪その他≫:

un bout-dehors（船首斜しょう）, un pH-mètre（pH メーター）, un je-ne-sais-quoi（名状し難いもの）, un guili-guili（こちょこちょ）, un ex-voto (lat.)（奉納物）, une mezzo-soprano (it.)（メゾソプラノ）, le hit-parade (en.)（人気番付）, le hara-kiri (ja.)（切腹）

上記の分類はあくまでも表記上、語中にハイフンが付される複合名詞に基づく分類である。これに加えて pomme de terre（じゃがいも）や couteau à beurre（バターナイフ）、café glacé（アイスコーヒー）など、構成素間にハイフンを付さないものや、portemanteau などのように一体化させて表記するものも考慮し、さらにそれぞれのカテゴリーを細分化した場合、想定されるカテゴリーの総計は 500 を超えると Mathieu-Colas (1988)では指摘されている[4]。

上の分類の中で表記上の揺れが特に顕著に観察されるのは VIII.の「名詞＋名

[4] ちなみに Mathieu-Colas (1996)による後の分類では、pomme de terre や couteau à beurre、café glacé のようなタイプの複合名詞も考慮に入れたうえで、17 の主要なカテゴリーと、カテゴリー同士を組み合わせたより複雑な構造（e.g. le dialogue Nord-Sud 南北対話）に関わる 8 の補足カテゴリーを提案している。

詞型複合」である。Mathieu-Colas (1994 : 145-146)によれば、収集された 2,800 の「名詞＋名詞型複合」のうち、約 1,000 の表記上の変異が見られたという。その中で abrivent (風よけ, cf. abri-vent)のように、構成素同士を結合して表記する例は約 50 ほどと少なく、ハイフンかスペースかで揺れている例が圧倒的であったと報告している[5]。

1.2. 統辞と語形成:「語」とは何かという問題

複合語の位置づけを把握するためには、語彙または形態論（ここでは両者を便宜的にまとめて「語形成」とする）と統辞とのインターフェースにおいて、どのような作用が観察されるかを特定する必要がある。その中では「語」とは何かということについても、同時に検討する必要があるだろう。

高田(1998 : 242-249)は合成法（本稿における複合に対応）を統辞法と語彙の間に位置づけ、単なる形態論の一部ではなく、この両者と相互に影響を与え合いながら文法の一翼を担うものであると説明している。合成法は新たな語彙的単位の生産に寄与している（図中の③の関係）だけでなく、統辞法を補助する作用も持っているという（図中の②の関係）。なお後者の補助作用については、もとをたどると統辞法から語彙へのシフト[6]（図中の①の関係）も関係していると論じている。

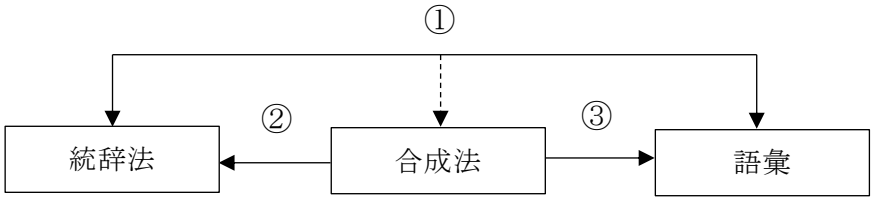


図 1： 合成法の位置づけ（高田 1998 : 242）

なお、統辞法と語彙の間の関係には双方向性がある。統辞法から語彙へのシフトは語彙化(lexicalisation)という用語で説明される一方、逆方向の動き（語彙から統辞法

[5] 例えば *Petit Robert* で bateau(-)mouche（パリのセーヌ川遊覧船）は、« bateau »の項目内ではハイフン付きで表記されていた一方で、« mouche »の項目内ではスペースを空けて表記されている(*op. cit.* p.146)。

[6] 高田(1998)では Albert Sechehaye の提唱した成句(locution)という用語を用いてこの統辞から語彙へのシフト現象およびその結果物を説明している。cf. Sechehaye, A (1921) « Locutions et composés », *Journal de psychologie normale et pathologique*, 18, pp.654-675.

へ）は文の組み立ての際に生じる流れである(p.243)。

特に興味深い指摘は、統辞法から語彙に移る（①）途中で異分析が生じ（図中の破線）、その結果として「新しい統辞法や合成法」(ibid.)がもたらされるという可能性についてである。最たる例は avoir faim（お腹がすいている）や faire peur（怖がらせる）のような、古フランス語由来の「動詞 ＋ 無冠詞名詞」構造である。これらは上図①の流れの中で異分析され、結果として現代フランス語の統辞規則に対応しないにもかかわらず、高い生産性を実現する「新しい統辞法」をもたらすに至った。これと同様に moulin à vent（風車）や moulin à café（コーヒーミル）といった[N1 + à + N2]型の合成語も、少数の成句（①）から異分析を経て生産性を実現した「新しい合成法」であると論じている。

この位置づけによれば、合成法はただ単に統辞と語彙の間に介在し、双方に新たな統辞的・語彙的単位を提供している訳ではない。合成法自体も、統辞から語彙へのシフトという流れからの影響を受けているということになる。この流れの中で異分析が起きなければ、avoir faim などの構造はそのままの形で完全に凝結し、他の「動詞 ＋ 無冠詞名詞」構造を生み出すことにはつながらなかっただろう。高田(1998：243-244)は異分析について「新しい統辞法や合成法を創造し、その結果、言語を変化させる革新的な要素となる」と述べているが、異分析を通して新しい合成法が生まれるということは、合成法自体もそれによって変化することを示唆する。したがって複合語を定義する際にも、統辞と語彙、そしてその中間にある語形成システムがこのような動的な関係性の下にあることを考慮する必要があるだろう。

では、この 3 者関係の中で具体的にどのような形で複合語を定義するべきだろうか。Lieber & Štekauer (2009)によると、複合語の定義においては「ミクロな問題」と「マクロな問題」が存在するという(pp.4-8)。前者は形態素の独立性の問題、後者は連辞と複合語の区別に関わる問題である。

まず「ミクロな問題」について考えたい。例えばチェコ語やロシア語のように屈折体系が高度に発達している言語では、複合語の構成素は独立形態素ではなく、むしろ語幹と接辞である。フランス語においても、psychologie（心理学）のような、いわゆる新古典的複合語(composés néoclassiques)、つまり古典ギリシャ語およびラテン語由来の語彙的

要素同士による複合の構成素はいずれも語幹[7]であり（しばしば連結辞-o-を間に伴う）：psych（心理）-o-logie（学、論）、その形成プロセスには接辞付加に類似する面がある[8]。

これに関連して Corbin (2004 : 1290)は、4 種類の派生プロセス―転換、接頭辞付加、接尾辞付加、複合―の境界について以下のような指摘をしている。

« Les autres frontières ne sont pas problématiques (…). En revanche, la distinction entre un mot affixé et un mot composé dépend crucialement de la théorie. »

「他の境界は問題とならない。しかしながら、接辞付加された語と複合語との区別は理論に決定的に依存する。」

転換や接頭辞付加、接尾辞付加それぞれの境界は、形式面から容易に判別ができる。その一方で新古典的複合語や、multifonction（多機能の）や antivol（盗難防止の）のような、構成素の少なくとも片方に接辞的な性質が示唆される構造を派生語と見るのか、それとも 2 つの語彙的要素による複合語と見るのかは、何を「語」と見なすのかという問題抜きには判断できない。

次に「マクロな問題」である。複合語の中には、表面的には連辞と変わらないように見えるものがあるが、意味や統辞操作可能性の観点において、これらに自由連辞とは異なる性質が見られることが知られている。例えば pomme de terre は文字通りには「地面のりんご（状のもの）」を意味するが、実際には「じゃがいも」を示す。構造的には pomme と(de) terre という 2 語（前置詞をカウントすれば 3 語）からなっているが、意味的には patate という単純な名詞と対応すること、また内部構成素の操作が困難なことから、凝結した 1 つの語のように扱うことも不可能ではない(cf. Martinet 1979, Gross 1990a etc.)。

このように、形式と意味の間に一対一関係が必ずしもなく、ずれが伴う可能性があることが、複合という現象の定義を難しくしている一因と考えられる。multi-や anti-のよう

---

[7] ただし実際には psychologie > psycho のように、切除を経て結果的に第 1 要素の語根（と連結辞）が形態的独立性を獲得したかのように見える例がしばしば観察される。切除に関しては 5.2 節も参照。

[8] 実際に、新古典的複合語の構成素の中には接辞化が示唆されるものがある。例えば oviforme（卵型の）の第 2 要素-forme は接尾辞-oïde や-acé(e)s, -ien あるいは-ique と互換性を持っており、同義語あるいは類義語として 2 つの形式が併存している場合(e.g. oviforme vs.ovoïde) も散見されることが Dal & Amiot (2008)において指摘されている。

に、形態的に独立していないながらも、何らかの語彙的意味を持っていると思われる要素は、果たして「語」なのか。また、形式的には複数の「語」で構成される pomme de terre は、あくまでも 2 つ（あるいは 3 つ）の「語」なのか、それとも 1 つの「語」なのだろうか。

ここで「語(mot)」というものが実際に示すものが何であるのか、整理しておきたい。「語」は形式、意味そして統辞クラスの 3 つの要素によって同定されると Lehmann & Martin-Berthet (1998 :19)は指摘している。例えば aller という語は、/ale/という（音の）形式と「行く、達する、進展する」、「往路」などの意味が結びついたものと考えられるが、その意味は最終的には実際の使用の中で特定される。

(1) a. Il est difficile d'aller au château à pied.

徒歩で城に行くのは難しい。

b. Je cherche un billet d'avion en aller simple pas cher.

安い往路のみの航空券を探しています。

例えば(1a)の aller は形容詞 difficile の補語として現れており、「行く」という意味の動詞として機能していることが分かる。対して(1b)では、aller は名詞 billet d'avion の補語として前置詞 en に導かれる形で現れ、「往路」を意味する名詞として機能している。このように語の意味は、それがどのような統辞位置で現れるか、つまりどの統辞クラスを占めるのかによっても変わってくるのである。

このように語を音韻的、意味的、統辞的情報の集合体とする捉え方は、ソシュール言語学における記号(signe)の概念に対応するものと言える。しかし Jackendoff (2002 : 176)も指摘しているように、語が必ずしも音韻・意味・統辞の 3 要素を常に揃えているとは考えにくい。例えば Salut（やあ）などの間投詞には、統辞的情報が欠如している。一方で Il pleut（雨が降る）の il は、統辞的情報を持つが意味を持っていない。語彙構造におけるこうした欠如は、ひとつの「語」のもとに保存されている情報が、必ずしもみな均質ではないことを示唆している。

さらに言うと、Il pleut の pleut は動詞 pleuvoir の活用形の 1 つであるが、pleut と pleuvoir を別々の語と見なすのか否かという問題についても考えなければならない。そのためには、語彙素(lexeme)と語形(word-form)を区別することが重要である。語彙素は

語彙における抽象的な単位であり、語形はその実現形である(cf. Bauer 2000a : 248, Booij 2010 : 169-170)。したがって(il) pleut, (il) pleuvait, (il) pleuvra などはいずれも、語彙素 PLEUVOIR[9]の実現形たる語形ということになる。語形の種類の分布は、同じ文法カテゴリーに属している語彙素の間であっても異なる。例えば PLEUVOIR は不定形や 3 人称単数といった、ごく限られた語形しか持たない一方、AIMER（愛する）が持つ語形はすべての人称・数を網羅している。さまざまな実現形としての語形を束ねる代表的かつ抽象的な形式であるという点から、語彙素は辞書の見出し語のようなものと解釈することも可能であろう。新語形成や借用、派生、複合など、語形成に関わる文脈において「語」という用語が用いられた場合には、それはむしろここで言う語彙素に対応することが多い。

その一方で、接辞は語彙素とは見なされない。何らかの指示対象を持っている語彙素とは異なり、接辞はそれ自体が特定の指示対象を持っている訳ではないからである。例えば接尾辞-aire は名詞基底に付加されることにより形容詞形を作ることができるが(e.g. dent_{N} 歯 > $\text{dentaire}_{\text{Adj}}$ 歯の)、それ自体に何らかの語彙的な意味を見出すことは難しい。この接辞は文法カテゴリーの変更という形態統辞的な操作のために付加されたに過ぎないからである。同様に接尾辞-ot(te)は名詞または形容詞基底に付加されることで「小ささ」「親しみ」「軽蔑」といった価値を示すことができる(e.g. maigre やせた > maigriot やせっぽちの)が、これらの価値は語彙的な意味とまでは言えない。Corbin (2004 : 1290)が指摘するように、接辞の意味的役割はあくまでも、付加される語彙素が持っている意味特性の中からどれを選び取るか決めることである。言い換えれば、-ot(te)は語彙素 maigre が持つ意味特性のどの部分をどのように選び取るかということを示しているのであり、その接辞自体が何らかの指示対象を持っている訳ではない。このように、指示対象の有無は語彙素と接辞を区別する重要な指標である。

ところで「語」または語彙素は「語彙的項目(item lexicale)」と同義で用いられることも多い。語彙的項目とは、メンタルレキシコンの中に保存される語彙的情報のことを示す。この語彙的項目にどのようなものを想定するかは、文法における語彙の位置づけを

[9] これ以降、語彙素と語形を特に明確に区別する必要がある場合には、語彙素を大文字で表記することにする。

どうするかによって大きく異なる。具体的には、Chomsky を始めとする生成文法の、統辞に絶対的な役割を想定する立場と、HPSG (Head-Driven Phrase Structure Grammar, cf. Pollard & Sag 1994)や Construction Grammar (cf. Goldberg 2006)に代表される、文の構成において語彙的情報が果たす役割を重視する見方の 2 つがある。

前者のように、文の構成における統辞の役割を重視する諸派は、メンタルレキシコンはあくまでも個別的 (idiosyncratique)な情報のみが保存された、静的な装置として捉えている。それとは反対に後者の立場を取る Jackendoff (2003)や Booij (2010)などは、語彙的項目の中にも構文的な仕組みがあると主張する。後者の考え方に沿えば、例えば「次々と N がやってくる」という意味を持つ [N + après + N]でさえも、そのスキーマ（形成モデル）自体が語彙的項目のひとつとして機能しているということになる（e.g. jour après jour： 来る日も来る日も, question après question： 質問そしてまた質問[10]）。もしそうであるのならば、レキシコンはむしろ動的なものとして解釈されるだろう。

このように、「語」とは何かという問いは、形態論、統辞論との間の関係性の中で、語彙（レキシコン）のあり方をどう捉えるかということと不可分な問題である。語彙を動的に捉える立場においては、[N + après + N]のような構造だけでなく、Le prix est de 15 euros (値段は 15 ユーロです：cf. Lauwers 2012)[11]のような動詞連辞レベルの特定の構造の形成においてさえも、語彙的項目たる形成モデル(i.e. [NP_Cop_de_Q NP])を想定することは不可能ではない。そうなると、「語」と見なされるものと従来「文」と見なされてきたものとの境界はよりあいまいになるだろう。

よって本稿では「語」および「複合語」という用語は極力避け、研究対象である pause-café や offre spéciale printemps（春期特別割引）のような構造―いずれも N1 を主要部とする名詞として機能する―は「複合名詞」と呼ぶことにする[12]。そして語彙につ

---

[10] フランス語におけるこのような[N + PREP. + N]構造のコロケーション研究については Magri & Purnelle (2012)も参照。

[11] この構造においては数量を表す要素(15 euros)に先立って前置詞 de が置かれていることが特徴的である。Lauwers (2012)ではこの点に注目し、de を伴わない場合(le prix est 15 euros)や類似の数量表現との比較をしながら、当該構造が[NP_Cop_de_Q NP]というモデル（Lauwers は construction と呼んでいる）を基に形成されていることを指摘している。

[12] 同様の理由で、syntaxe の訳語についても、「統語（論）」ではなく「統辞（論）」を本稿では採用する。

いては後者の立場、つまり動的な装置を想定することで、本稿で取り上げる構造の生産的な形成が説明できるものと考える。この点については第 2 章にて改めて論じることにする。

1.3. 派生と複合

Lieber & Štekauer (2009 : 5)は、派生と複合の区別―先述の「ミクロな問題」―に関して、Bauer (2003)が主張しているような語彙素同士の組み合わせとしての複合名詞の定義に一定の妥当性を見出している。つまり、語形が形態的に独立しているか否かにかかわらず、複数の語彙素の結合が認められる限り、それを派生ではなくむしろ複合と見なすということである。では先にあげた multi-は語彙素（拘束語幹）なのだろうか。それとも接辞なのだろうか。そして multifonction（多機能の）のような構造の形成は、複合によると言えるだろうか、それとも派生と見なすべきだろうか。

Lehmann & Martin-Berthet (1998 : 166-173)は multi-や anti-（反～）などは独立形態を持たない接頭辞と見なす一方、après-midi の après-や maladroit（不器用な（人））の mal-など、前置詞や副詞として独立形態を持つものは「独立接頭辞(préfixes autonomes)」または「分離可能な接頭辞(préfixes séparables)」として区別している。その上で、後者の独立接頭辞を伴う以下の形成プロセスはいずれも、複合語形成の枠組みとして位置づけられると考えている。

(2) a. Prép. + N (après-midi)

b. Prép. + V (surnager 表面に浮かぶ)

c. Adv. + Adj. (maladroit)

つまり、例えば après-midi は「前置詞＋名詞」型の複合名詞ということになる。après-は接頭辞的性質を持った前置詞としてここでは解釈されている。

一方で multi-や anti-などは独立形態を持たない以上、それを伴った形成法は、上の基準に沿えば複合ではないということになる。しかしだからと言ってこれらが単なる接辞付加であるかと言うと、以下の例を見る限りそうとも言えない。

(3) a. couteau multifonction[13] 多機能ナイフ

b. *couteau fonction

これは multifonction が名詞 couteau の直後に置かれた例であるが、multi-なしの場合、この位置に現れることはできない。この点は例えば possible（可能な）と impossible（不可能な）が相互に入れ替え可能であることとは対照的である。このことから、fonction と multifonction が、形態統辞的には均質なパラダイムを形成していない可能性が示唆される。

同様の傾向は anti-でも見られるが、anti-なしでも主要部名詞の直後に置くことができる以下のようなケースもある。

(4) a. mouvement anti-nationaliste 反ナショナリスト運動

b. mouvement nationaliste ナショナリスト運動

ただし-iste の付加によって形成された要素は、anti-なしでも一般的に名詞としても関係形容詞（cf. 1.4 節）としても機能し得ることから、anti-の有無自体が直接的要因だとは考えづらい。

その一方で-iste を伴わない以下のような[anti- + N]の場合には、先の[multi- + N]と同じく、anti-を伴わない N を主要部名詞の直後に置くことは難しい。

(5) a. spray anti-moustique 蚊よけスプレー

b. *spray moustique

このことから、anti-mousitque は moustique（蚊）と意味上は互換性があるように見えても、形態統辞的分布は同じではなく、単純に入れ替え可能な要素ではないことが示唆される。

似たようなことは複接派生(parasynthèse)と呼ばれる現象においても確認できる。複接派生は接頭辞と接尾辞がセットで語幹に付加される現象である。例えば indéniable（否定できない、明白な）のような形容詞の形成は、接頭辞 in-と接尾辞-able が同時に動詞語幹に付加されることで実現される。「同時に」付加されると考えるのは、接頭辞と接尾

[13] 複数形では couteaux multifonctions となる。他に couteau(x) multifonctionnel(s)という形式も観察される。後者のように名詞由来の形容詞が入る場合を含めた当該構造の取り扱いについては 2.5. 節を参照。

辞のどちらかだけが付加された形式が成立しないからである[14]。

(6) a. indéniable

b. *indénier (cf. dénier)

c. *déniable

ここでは dénier と*indénier というパラダイムは成立していない。同様に*déniable と indéniable という対立も存在していない[15]。(3)で fonction と multifonction が必ずしも相互入れ替えできなかったのと同じような傾向が、複接派生でも見られるのである。

この一連の例から示唆されるのは、派生プロセスと見なされているものの中には、「語幹に接辞が付いて派生した」という順序立てでは説明できないものがあるということである。別の言い方をすると、ここで取り上げた構造の形成プロセスの出発点は語幹（となる基底）ではない可能性がある。Fonction が先にあって、そこに multi-が付加されたのではなく、むしろ[multi + N]という形成モデルの存在が前提で、fonction は N のスロットを埋めたに過ぎないのかもしれない。indéniable も同様に、[in- + V + -able]というモデルが当該構造の形成の基になっている可能性がある。もしそうであるならば、以下に図示したように、形成プロセスに直接関わる要素は「それぞれの接辞」と「語幹」ではなく、「（接辞等が事前指定された）語形成モデル」と「（モデルの空白部分を埋める）語幹」ということになるだろう。

---

[14] ただし[V-able]はかなり生産性が高いため、[in-V]は成立しなくても[V-able]はあり得るというケースも少なからずある(e.g. incontournable 不可避の / *incontourner / ?contournable)

[15] *déniable という形式が存在しない背景には、indéniable が意味の構成性(compositionnalité)を失いかけている点、そして他の形容詞がすでに*déniable の代わりの役割を果たしている点が考えられる。1 点目については、indéniable が構成素の意味の足し算によって得られる「否定できない」という意味から、「明白な」という拡張した意味(cf. évident, clair)の方にシフトしていると考えられる。意味の構成性が弱まってしまったのであれば、形態分析によって indéniable から*dénibale を形成することは難しいだろう。2 点目の可能性については、実際*déniable の代わりとして refusable（拒否できる）や niable（否定できる）が存在する。この 2 形式はいずれも non refusable（拒否不可能な）や ce n'est pas niable（それは否定し得ない）のように、否定の意味合いを伴ってもよく現れる。したがってこれらは*déniable だけでなく、意味がシフトしてしまった indéniable の字義通りの意味（i.e.「否定できない」）を代わりに示すものとしても機能していると考えられる。同様の傾向は incroyable（信じられない、とてつもない）に対する croyable（信じられる：否定の意味合いを伴って現れることが多い）など、他の[in-V-able]と[V-able]の対立においても見出すことができる。

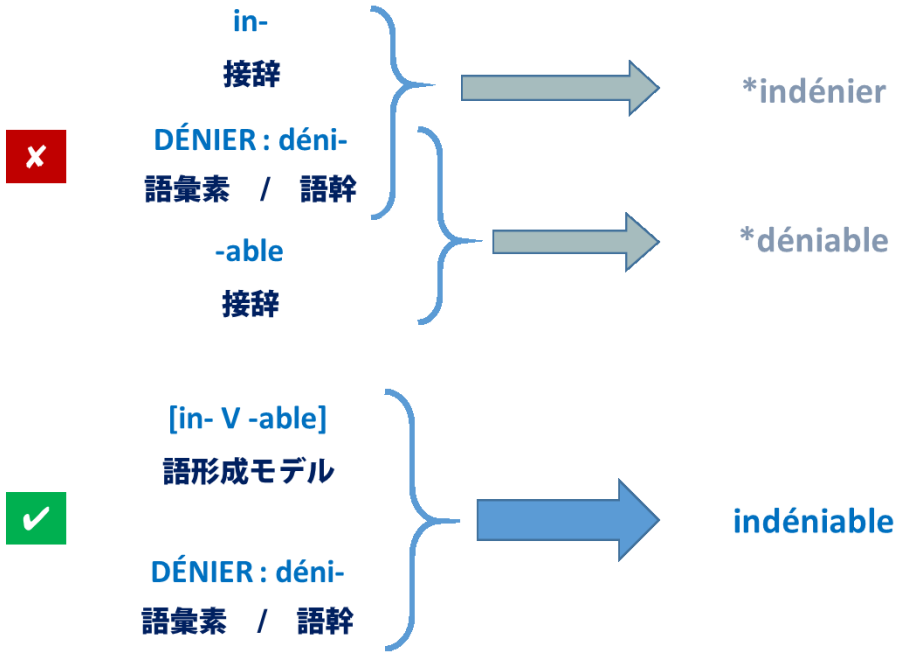


図 2： 形成モデルに基づく複接派生のプロセス

もし indéniable のような形式が1つ1つの形態素の足し算によってもたらされるのであれば、*indénier や*déniable の形成はその前段階として必須となる。それだけでなく、*indénier や*déniable のどちらが先に形成されるべきかという順番の問題も生ずるだろう。実際には存在しないにもかかわらず、複数の形式とその形成の順番を想定する必要があるというのは、説明として妥当性に乏しいように思える。むしろ[in- + V + -able]という語形成モデルから直接もたらされると考えることで、存在しない形式の想定を回避し、より簡素で実態に沿った複接派生の説明が可能になるだろう。

詳しくは第 2 章以降で取り上げるが、語形成上の枠組みとしての「語形成モデル」と、枠内の空白を埋める内容物としての「語幹（または語彙素）」という図式は、pause-café のような複合名詞にも想定可能である(e.g. [pause + N2]というモデルと、N2 部分を埋める語彙素)。その点を考慮すると、[multi + N]や[in- + V + -able]のような構造の形成をむしろ複合と同じようなプロセスとして捉えることも可能になる。

一方 multi-を語彙素と見るべきか接辞と見るべきかについては、語彙情報をどのように捉えるかと言う本質的な点にも関わる問題である。先の Lehmann & Martin-Berthet (1998)ではこれを接頭辞と見なしたが、Booij (2010)をはじめとする語彙ベース

の形態論の立場から見れば、multi-は語彙素と捉えられる。この詳細についても改めて第 2 章で取り上げることにする。

1.4. 属性叙述と下位分類標示

次に「マクロな問題」の方、つまり複合名詞と連辞の違いについてである。Café glacé のように、表面上は「名詞＋形容詞」の形式を呈する構造は名詞連辞なのか、それとも複合名詞の一種なのだろうか。この問題については、un café glacé が un café froid（冷たいコーヒー）とどう違うのかを比べることで、ある程度説明ができるだろう。具体的には、現れた形容詞が主要部名詞に対してどのような機能を果たしているかが問題となる。

形容詞と一般に呼ばれているもののうち、限定詞の一種とも言える指示形容詞や所有形容詞、疑問形容詞を除いたものを狭義の形容詞とすると、その中には指示対象の属性を叙述するものと、対象の下位分類を示すものの大きく 2 種類がある。前者は品質形容詞（adjectifs qualificatifs： 以下 AdjQ）、後者は関係形容詞（adjectifs de relation： 以下 AdjR）と呼ばれている。Un café froid における froid は主要部名詞 café を修飾する AdjQ であるのに対し、un café glacé の glacé は café の下位分類を示す AdjR である。この 2 種類の形容詞の性質の違いが、名詞連辞か複合名詞かという問題と深く関わっているのである。

AdjQ を伴った un café froid は名詞連辞である。そのことは、形容詞 froid に程度を示す副詞を付加したり、café の性質を表す別の形容詞と等位接続させたりすることができることから分かる。

(7) a. un café froid

b. un café {très / vraiment / assez} froid

{とても／本当に／かなり}冷たいコーヒー

c. un café froid et fort

冷たくて濃いコーヒー

ここで注目したいのは、どのような統辞操作を受けたとしても、結果として示される事物は café（コーヒー）で変わりないという点である。言い換えれば、これらの操作はひと

つの範疇としての「コーヒー」ありきで行われており、範疇の変更をもたらすものではないということである。AdjQ をはじめとするこれら修飾要素は、主要部名詞によってあらかじめ提示された「コーヒー」という対象の属性について、それが「冷たい」か、「本当に冷たい」か、あるいは「冷たくて濃い」かなどを示しているに過ぎない。

さらに言うと、そのようにして示された属性は、発話時点で問題にしている「コーヒー」に対してのみ有効である。「本当に冷たいコーヒー」は、任意の「コーヒー」の属性を個別的に叙述しているのであり、その再現性は保証されていない。もし「本当に冷たいコーヒー」というものが安定的に再現されるのであれば、それは「コーヒー」の新たな下位範疇になり得るだろうが、実際にはそうなっていない[16]。当該構造において統辞操作が自由にできるのは、まさにこの属性叙述における個別性あってのことだと言えるだろう。そして、叙述の対象に合わせて任意に追加された AdjQ をはじめとする諸要素はいずれも、連辞における付加部(adjoint)、つまり選択的な要素であると考えられる。

これに対して AdjR の glacé を伴った un café glacé は名詞連辞ではなく複合名詞である。このことは AdjR に関する数々の先行研究でもすでに指摘されているところであるが(cf. Bartning 1980, Bartning 1984, Bosredon 1988, Gross 1988, Monceaux 1992, Bartning & Noailly 1993)、大きく整理すると、構造内部への統辞的操作の困難さ、下位分類としての安定性、補部(complément)としての AdjR の性質という観点から説明できる。

まず 1 点目として、un café glacé では先の un café froid とは異なり、構造内部に対するいずれの統辞的操作も受け付けない。

(8) a. un café glacé

b. *un café {très / vraiment / assez} glacé

c. *un café glacé et fort

*un café glacé et fort が不可能な一方で un café glacé fort（濃いアイスコーヒー）という構造は文法的に可能である。ただしこの場合、統辞的操作は café glacé という構造の外部から、つまり café glacé ひとまとまりに対して行われており、AdjQ の fort は

[16] 後述する un café chaud ou glacé (cf. 9)のように、場合によっては属性叙述的な構造が下位範疇標示に関わることもある。

glacé と同じ統辞位置にある訳ではない(i.e. [un [café glacé] fort])。いずれにしても café glacé という構造の緊密性は高く、内部構造を任意で変更することが困難なことが分かる。

次に下位分類における安定性についてである。構造の緊密性が高いということは、café glacé が示す内容が安定的に再現されることを意味する。形容詞を分類的なもの(les classifiants)と修飾的なもの(les qualifiants)の 2 種類に分類した Anscombre (1991 : 115-123)によると、分類的な形容詞は特定の発話状況に左右されることのない、客観的で安定した分類クラスを示す。例えば vin rouge（赤ワイン）はワインの下位範疇の 1 つを示すものとして機能しており、実際に今目の前にあるワインがどれくらい赤いかといったことは問題にはならない。対照的に un vin délicieux（美味しいワイン）は、今そこにあるワインの性質について説明しているのであり、「美味しいワイン」という下位範疇を形成するものではない。

Un café froid と un café glacé の例で見てみると、前者が目の前にある「コーヒー」の「冷たさ」を叙述したのとは対照的に、un café glacé が示すのは一製品（必ずしも売り物とは限らないが）としての「アイスコーヒー」である。その飲み物は再現性が高く、どの「アイスコーヒー」をサンプルとして取り出しても、それは café glacé であることに変わりはない。また、この café glacé は「コーヒー」の一種ではあるものの厳密にはただの「コーヒー」とは異なるものとして認識されている[17]。つまり café glacé という事物がひとつの概念として成立し、さらにそれが「コーヒー」の下位に属することが示されるのである。

そして 3 点目についてだが、café glacé が緊密性の高い構造で、かつ確固とした 1 つの概念として成立しているということは、形容詞 glacé は café の補部であるということができる。ここで言う「補部(complément)」とは、主要部の意味内容を明示する(préciser)ためのもの、つまり指示対象をさらに特定するために必要な要素のことを示す。例えば café はあらゆる種類の「コーヒー」を指示対象とする。その対象を特定の下位範疇に絞る役割を果たすのが glacé や viennois（cf. café viennois : ウインナーコーヒー）, décaféiné（カフェインレスの）のような補部である。したがって un café froid et fort (cf.

[17] 無標の「コーヒー」は「温かい」飲み物である。ただしそれが「ブレンドコーヒー」なのか「エスプレッソ」なのか、あるいはそれ以外なのかという点については、実際には文化的な差異がある。

7c)における froid や fort がいずれも付加部であったのとは対照的に、un café glacé における glacé は省略不可能な、対象指示の上で必須の要素であると言える。換言すると、「アイスコーヒー」という対象を示すためには café glacé という、崩すことのできないひとかたまりの語彙的単位が必要ということであり、つまりはこの「かたまり」が、本稿で「複合名詞」と定義するものである。

ところで、AdjR はもっぱら主要部となる名詞(N1)の後方に置かれ、多くは名詞基底から派生接辞を伴って形成される(e.g. $dent_N$ > $dentaire_{AdjR}$)という特徴があるが、実際には名詞から派生したもの以外の形容詞も AdjR として機能するケースがある。その場合にもやはり下位概念の成立が認められる。以下の例を見てみたい。

(9) Dans les Starbucks, il y a d'abord le choix entre prendre un café petit, moyen ou grand, puis entre <u>un café chaud ou glacé</u> et enfin, on peut rajouter tous les suppléments que l'on veut : (…)
(http://guichetdusavoir.org/viewtopic.php?f=2&t=18758 下線は筆者)
スターバックスではまず S・M・L どのサイズのコーヒーにするかを選んでから、<u>ホットコーヒーにするかアイス(コーヒー)にするか</u>を選びます。その後希望のトッピング類を追加できます(…)

ここでは glacé が chaud という形容詞に等位接続している。Chaud(熱い)は先述の froid(冷たい)と意味的に対をなすことからも分かる通り、本来的には属性叙述を行う AdjQ である。しかしこの文脈における café chaud は、un café chaud et fort(熱くて濃いコーヒー)などにおける(AdjQ としての)chaud とは厳密には異なる性質を持っていると考えられる。ここで問題となっているのは「ホットコーヒー」と「アイスコーヒー」という、コーヒーの下位分類である。Café chaud と café glacé は同じ café という範疇に属しているものの、厳密には 2 つの異なる飲み物だからである。基本的には AdjR によって成される下位分類標示だが、この例のように属性叙述を主な機能とする形容詞によってもそれが成されることがあることが分かる[18]。

[18] Café froid についても、実際には café glacé(アイスコーヒー)の別の呼び方として用いられることもあるようである。その場合は(9)における café chaud と同様に、下位分類標示としての機能を持つことになる。

このように、形容詞における属性叙述と下位分類標示の区別は、究極的には実際の発話の中で判定するほかないのであるが、一方で AdjR が本来的に持っている意味を完全にないがしろにする訳にもいかないだろう。Mélis-Puchulu (1991 : 35-36)は、「派生の中で予測可能な意味(le sens dérivationnellement prédictible)」を「文脈的な意味(le sens contextuel)」から区別することを提案している。前者は発話内で現働化される前の段階で AdjR が本来的に示す、いわば語彙的な意味―具体的には「関係的な(relationnel)」(p.35)意味―であると主張している。ここで言う「関係的な」意味とは、主要部名詞によって示される指示対象をさらに特定する動き、つまり分類上の上下関係と捉えることができるだろう。名詞から派生してできた形容詞は、基本的にはこの「関係的な」意味を示すようになっているが、具体的にどのような関係性が構築されるかは、組み合わさる主要部名詞次第でもある。実際、派生プロセスとしては AdjR と目される形容詞であっても、本来の「関係的な」意味が限られた主要部名詞との組み合わせでしか実現せず、それ以外は「修飾的な」意味合いの方向にシフトしているというケースが散見される。この点については 5.7 節で改めて取り上げるが、いずれにしても AdjR の語彙的な意味と文脈的な意味は必ずしも合致しないことが示唆される。

同じ事は AdjQ に対しても言えるだろう。上で見た froid や chaud は、「語彙的な意味」の段階では修飾的である（属性叙述的である）一方、(9)のような文脈に置かれた場合に限って「関係的な意味」で解釈され得るということになる。

これらの点を踏まえて、以降は本来的に属性叙述を指向する froid や chaud のような形容詞を AdjQ として、下位分類標示を指向する glacé のような形容詞は AdjR として議論を進めていく。文脈などの作用によって両者の形式と機能が交錯する場合には「AdjR の AdjQ 化（本来的には下位分類標示を指向する形容詞が属性叙述的に機能するようになること）」のような言い方でこれを示すこととする。

1.5. 凝結度

Café glacé に代表される[N1 + AdjR]の内部構造に一定程度の緊密度が認められるということを前節で確認したが、同じような傾向は、couteau à beurre（バターナイフ）

のような[N1 + PREP. + N2]構造の一部にも見出すことができる。いずれの構造にもある程度の凝結(figement)を想定することができるだろう。

Gross (1988, 1990a)はフランス語の[N1 + Adj]および[N1 + PREP. + N2]型複合名詞は、語彙と統辞の連続体的関係の中で位置づけられると考え、複合名詞の凝結度(degré de figement)には段階的な違いがあることを、統辞テストを用いて指摘した。以下に Gross が提案した[N1 + Adj]の凝結度を判定する 9 つの項目を示す。

I. 形容詞の述語性

II. 形容詞の名詞化

III. 同じ範列に属する形容詞との入れ替え

IV. 単数形／複数形

V. 程度を表す副詞の挿入

VI. 他の形容詞との等位接続

VII. 形容詞の省略

VIII. 他の N1 との入れ替え

IX. 形容詞と[de + N2]との非対応： Adj ≠ [de + N2]

この中で該当する項目が少なければ少ないほど、その構造がより凝結していると考えることができるだろう。ちなみに項目 V と VI については、先の 1.4.節でもすでに取り上げている。

Gross (1988 : 69-70)が調べた[N1 + Adj]の実例の中で、この 9 つの項目が全く該当しなかったものはなく、該当数は 2～6 項目の間であった。また、該当数が同じでも、どの項目が該当するかは異なることもある。理論的には 512（i.e. 2 の 9 乗）種類の該当パターンが想定されるだろうと Gross は述べている。ちなみに 2 項目と最も該当項目が少なかった（つまり最も高い凝結度が示唆された）[N1 + Adj]は eaux usées（排水）で、以下のような結果であった（+は該当、-は非該当を表す）。

I. - *ces eaux sont usées.

II. - *l'usure de ces eaux

III. + eau(x) potable(s), eaux sales

IV. - {*une eau usée / des eaux usées}

V. - *des eaux très usées

VI. - *des eaux usées et sales

VII. - des eaux {usées / *ø}, *des eaux usées sont de l'eau.

VIII. + {des pneus / des vêtements / des eaux} usé(e)s

IX. - *des eaux d'usure

一方で、自由な名詞連辞の場合には、当然ながらこの 9 項目すべてが該当することになる。以下は un livre difficile（難しい本）の場合の結果である。

I. + ce livre est difficile.

II. + la difficulté de ce livre

III. + un livre facile, un livre lourd

IV. + {un livre difficile / des livres difficiles}

V. + un livre très difficile

VI. + un livre difficile mais intéressant

VII. + un livre {difficile / ø}, un livre difficile est un livre.

VIII. + {un travail / un devoir / un livre} difficile

IX. + *un livre de difficulté

大ざっぱに言ってしまえば、このテストで一定の凝結度が示唆されるものは AdjR、9 項目すべてが該当した un livre difficile の difficile のような形容詞は AdjQ ということになる。

ちなみに[N1 + PREP. + N2]型複合名詞に関しても、多少の違いこそあれ、おおむね同じ観点からの指標が Gross (1990a)で示されている。ここでも該当項目が少ない方が、凝結度がより高いことが示唆される[19]。以下に例示したものははいずれも自由な名詞連辞である（下線は筆者）。

[19] Gross (1990 : 88-89)ではこの 5 項目のほかに、N1 または N2 のどちらかだけが凝結している（部分的な凝結 figement partiel）可能性にも言及している。例えば une montagne de difficultés（問題の山）は、N1 を他の名詞に置き換えることができない(e.g. *une colline de difficulté)一方で、N2 に入る名詞には自由度が見られる。また、補助動詞(verbes support)による連辞に置いた場合にも、N2 は単独で成立することが可能である。

I.　N1、N2 それぞれ独立した限定

On a procédé à l'aménagement du territoire.

われわれは管轄区域の改良を進めた。

II.　N1 または N2 の代名詞化

la voiture de Luc → sa voiture

リュックの車　→ 彼の車

III.　他の N1 または N2 との入れ替え

le livre de Paul / le cahier de Paul

ポールの本　/ ポールのノート

IV.　N1 または N2 のみを修飾または限定する要素の挿入

le voiture neuve de mon frère

私の弟の新しい車

V.　単数形／複数形

le(s) livre(s) de Luc

リュックの本

このうち 1 番目の項目に関して付言すると、pomme de terre や couteau à beurre など、一定の凝結度が見込まれる構造の場合には、N2 が無冠詞であることに注目する必要があるだろう。この無冠詞の N2 については 6.5.節で改めて取り上げることにする。

このように、[N1 + Adj]および[N1 + PREP. + N2]のいずれにも言えるのは、凝結した構造であればあるほど、統辞的操作を内部構造に対して行うことが難しくなるということである。一方で、完全に凝結していない限りは、統辞が関わる余地は多かれ少なかれ残されているということでもある。したがって Gross (1990 : 89-90)も指摘しているとおり、これら複合名詞の形成は 100 パーセント形態論的（あるいは逆に統辞的）な現象という訳ではなく、形態（語形成）・統辞の両面にまたがった現象と見なすべきであろう。

1.6.　生産性

前の 2 つの節を通して、凝結という現象が複合名詞と自由な名詞連辞を区別を示

す有力な指標たり得ることが明らかになった。その一方で、フランス語複合名詞の中には、pause-café 型のように、凝結しているにもかかわらずある程度の生産性を実現できる構造が存在することを本稿の冒頭で述べた。凝結しているのに生産性が高いとはどういうことか。またそもそも、生産性とは何を示しているのか。

生産性は頻度(fréquence)と密接に関連している概念であるが、語形成に関する議論で一般に頻度と言った場合、タイプ頻度とトークン頻度の 2 種類があることに留意すべきである。前者は特定のプロセスによって形成された構造の種類に関わる指標であり、後者はその具体的な構造ひとつひとつが、任意のテクスト内で何回現れるかに関わる指標である。

例えばフランス語の-ble という接辞は動詞基底に付加され「～できる」という意味の形容詞を派生させるが、付加される動詞の種類に制限が見られず、潜在的にあらゆる動詞に付加することができる。つまり-ble による接辞付加によってできる派生語のタイプ頻度は高いと言える[20]。一方で同じように動詞から形容詞をつくる接辞-if (e.g. : créer > créatif 創造的な)は、一部の動詞にしか付加することができない[21]。動詞からの形容詞派生においては、-ble の方が-if よりもタイプ頻度が高いと言えるだろう。その一方で [V-ble]の実現形のトークン頻度はそれぞれ異なる。例えば任意のコーパスにおいて(6c)で見た*déniable のトークン頻度は限りなくゼロに近いことが予想されるのに対し、portable（持ち運べる）や accessible（アクセスできる）のトークン頻度は一定程度の高さを示すことになるだろう。

この 2 種類の頻度のうち、本稿で注目するのはタイプ頻度の方である。例えば pause を N1 にとる[N1 + N2]は以下のようにさまざまである（ただしこれは網羅的なリスト

[20] ただし実際には先に見た*déniable のように、潜在的には想定可能だが実際にはほとんど観察されない形式があることも事実である。これに関して Corbin (1987)は語形成プロセスの可用性(disponibilité)と収益性(rentabilité)を区別して論じている。前者はそのプロセスが潜在的に適用される可能性を、後者はそのプロセスが実際にどれだけの実現形を生み出すかを示している。[V-ble]に即して言うと、このプロセスの可用性は極めて大きいが、実際には*déniable のように実現されない形式も一定数あることから、その収益性は、可用性の大きさの割にはそこまでの規模にならない可能性がある。

[21] 具体的には vision (< voir)や location (< louer)のように、派生においてのみ現れる特別な形の語幹（Bonami, Boyé & Kerleroux (2009)はこれを「隠された語幹(radical caché)」と呼んでいる）を持つ動詞にのみ、この-if という接辞が付加されることができる。

ではない）。ここに[pause + N2]というモデルによる語形成プロセスを想定した場合、そのタイプ頻度は高いと考えられる。

(10) a. pause-café　　コーヒーブレイク

b. pause thé　　ティーブレイク

c. pause vin blanc　白ワインブレイク

d. pause goûters　おやつ休憩

e. pause déjeuner　ランチ休憩

f. pause sieste　　昼寝休憩

g. pause pétanque　ペタンク休憩

h. pause méditation　瞑想休憩

i. pause internet　　ネット休憩

j. pause clope　　たばこ休憩

それとは対照的に、例えば Hôtel-Dieu（市民病院）のような構造は、同じように[N1 + N2]でありながら、その形成プロセスに高いタイプ頻度を確認することは難しい。実際、現代フランス語では[Hôtel + N2]（または[N1 + Dieu]）という構造は生産的に形成されない。Hôtel-Dieu は古フランス語の統辞構造が化石的に残った一例であり、現代フランス語においては Hôtel-Dieu という全体で 1 つの語彙的単位として凝結したものと見なすことができるだろう。このように、同じ[N1 + N2]であっても、それぞれの成立を可能にする形成プロセスのタイプ頻度はまちまちである。よってこのタイプ頻度を見ることで、生産性を実現する構造とそうでないもの（凝結して語彙化する場合も含め）を区別できる可能性がある。

ある構造のタイプ頻度が高いということと、それが高い生産性を実現するということに深い関連が示唆される一方で、もう 1 つ考慮するべき指標が「規則性」である。ある構造に基づく語形成が別の形式に対しても適用可能であるためには、その語形成プロセスが規則的でなくてはならない。もし他の形式にもそれを適用できないのであれば、そのプロセスは個別的(idiosyncratique)あるいはその場限りの(éphémère)ものであり、結果として高いタイプ頻度も生産性も実現できないことになる。

(10)であげた[pause + N2]の各形式を見ると、いずれも何らかの規則性をもって形成されているように見える。純粋に形式面だけ見ると、pause を N1 に取れば、任意の名詞を N2 として迎え入れることができることが示唆される。またこの構造では N1 の pause は常に N2 の主要部である。一方意味面で言えば、ここに挙げた各形式はいずれも「N2 に関する休憩」という「関係的」(relationnel)な意味関係、あるいはさらに進んで「N2 のための休憩」という「目的」の意味関係を結んでいることが確認できる。[pause + N2]で結ばれる意味関係は一定であり、N2 に入る名詞次第で「関係的」とは別の意味関係になるといった可能性は低い[22]。そうしたことから意味関係においても規則性を見出すことが可能である。

これと対照的なのがかばん語(mots-valises)である。かばん語も[N1 + N2]型複合名詞と同じように、主に 2 つの名詞によって構成される現象であるが、2 つの語彙素を形態的に接合させるという点、またその際に片方または両方の構成素基底を部分的に切断するという点が、[N1 + N2]型複合名詞との大きな違いである。構成素のどこで切断するかは主に音声・音韻的要因によって決定され、形態的な境界は必ずしも尊重されない(cf. Lehmann & Martin-Berthet 1998 : 218-220)。

例えば franglais（英語訛りのフランス語）は français（フランス語）と anglais（英語）を接合させた構造であるが、N1 である français の切断は、その内部の形態境界(franç-ais)には基づかず、あくまでも双方の構成素が共通にもつ音声切片上で行われている(i.e. fr**an**~~çais~~ + **an**glais > franglais)。また、そのようにして切断された要素(i.e. fr(an)-)が、ほかのかばん語や複合名詞などの形成にそのまま利用されることはまれである[23]。また場合によっては、切断点の位置や構成素の順番に変異が見られることもある。例えば

[22] N2 に属詞的な意味関係を積極的に構築する名詞が入る場合には、その限りではない。例えば「稲妻」を意味する名詞 éclair は、N2 の位置に現れる際には「（電光のように）素早い」あるいは「一瞬の」という属詞的な意味合いを示す。したがって une pause éclair という組み合わせの場合には「稲妻のための休憩」ではなく、むしろ「一瞬の休憩」という意味で解釈される可能性が高い（「稲妻のための休憩」というものを実際に想像しづらいという要因も含めて）。この[N1 + éclair]を始めとする属詞的な[N1 + N2]については 3.2 節を参照。

[23] 形態境界を考慮せずに切断された要素が他のかばん語の形成に利用されたと思われる例として「ヘリコプターの」を示す héli-がある。『小学館ロベール仏和大辞典』によると héliport (ヘリポート héli~~coptère~~ + ~~aéro~~port)という語は 1952 年には確認されているが、ここで切断された héli-という要素は後に形成されたと思われる動詞 hélitreuillage (héli~~coptère~~ + treuiller ヘリコプターで吊り上げる：1974 年には確認)およびその名詞形の hélitreuillage（1977 年）でも見られる。

aliment（食品）と médicament（薬）を接合させた alicament（健康食品）に対して、同じ意味ながら構成素の順番が逆の médicaliment という形式も存在する。

構成素の切断点が、形態境界を考慮せず、しかもどの構成素とどの構成素を実際に組み合わせるかで個別的にしか決められない以上、かばん語の形成プロセスに形態的な生産性を想定するのは困難である。また構成の仕方に変異が見られる点からも、この形成プロセスには一定の恣意性が示唆される。こうしたことから、ten Hacken & Smyk (2003 : 17)や Fradin, Montermini & Plénat (2009 : 32-44)が指摘しているように、かばん語の形成は、生産性ではなくむしろ語彙的創造性(créativité lexicale : cf. Guilbert 1975)に基づいていると見なすべきだろう。

Pause-café 型複合名詞とかばん語の形成における生産性の比較を通して、規則性―あるいは Bauer (2001)が「規則による統率性(rule-governedness)」と呼んでいる性質―は、生産性を支える本質的な要素であることが示唆される。ある語形成プロセスについて、それが規則性を持っていなければ、生産性を実現するのは困難であり、結果的にそのタイプ頻度も極めて限定的な規模にとどまるだろう。

かばん語とは対照的に、形態的生産性が示唆される pause-café 型複合名詞については、形成の際に常時アクセスが可能な規則あるいは規則性を保証する仕組みを想定するべきであろう。ただしこの規則性は統辞規則によってもたらされるとは考えづらい。[N1 + N2]という構造がフランス語の統辞規則では想定されていないからである。詳細は第 3 章にて取り上げるが、むしろ[pause+ N2]という特定のパターンが語形成上の 1 つのモデルとして機能していると考えるべきである。

1.7. 語形成―統辞間の連続的関係と生産性

高田(1998)が「新しい合成法」と合わせて「新しい統辞法」を想定していること(cf. 1.2 節)からもうかがえるように、凝結していながら高い生産性を実現する構造は複合名詞だけにとどまらない。成句のような比較的大きい単位でも[pause+ N2]などと同じような現象が確認できる。例えば以下の発話に見られるような表現である。

(11) À L'heure des échanges 2.0, sans respect de la grammaire, point de salut.

(*Vanves Infos*, Décembre 2016, N°310, p.28　下線は筆者)

交流 2.0 の時代、文法への配慮なしには救いはない。

[sans NP, point de salut]あるいは[hors de NP, point de salut]という定型表現[24]は « Hors de l'Église, point de salut »（教会を離れて救いはなし）という古典的表現を基にしたものと言われている。否定辞 point の用法は、現代フランス語では « Point d'argent, point de suisse »（金なくして人動かず）のようなことわざや文語的表現の中などに限られる。そういった意味では、point を含んだ諸構造は現代フランス語の統辞規則からは距離を置いた、いわば規則外の構造だと言える。しかしながら[{sans / hors de} NP, point de salut]という表現では、上の例のように未指定の NP（名詞連辞）の部分を入れ替えたさまざまなヴァリアントが観察される[25]。つまり化石的な構造でありながら、現代においてもある種の生産性を実現している訳で、成句と複合名詞という違いこそあれ、[pause+ N2]における凝結度と生産性の間の関係性にも似ている。

このように、凝結と生産性の両立は構造の規模にかかわらず可能である。そこでは[pause + N2] や[sans NP, point de salut] 、さらには先に取り上げた[multi + N]や[in- + V + -able]のような形成モデルが重要な役割を果たしていることが示唆される。形成モデルは現代フランス語の統辞規則では規定できない特殊な構造に規則性を与える。高田(1998)の議論に即して言えば、これは異分析の結果もたらされた「新しい統辞法または合成法」そのものである。複合名詞の定義においても、この形成モデルが果たす役割を見逃すことはできないだろう。これまでの研究では、複合名詞は基本的に語形成と統辞の連続体的関係の中に位置づけられてきたが、本稿ではさらに 1 つ基準を加え、「語形成―連辞」と「生産性」という 2 つの軸の中で複合名詞を位置づける必要性を提案する。そうすることによって、どの場合にこの「新しい統辞法または合成法」があると見なせるの

[24] point de の代わりに pas de が用いられる場合もある。

[25] 他の例もいくつか挙げておく。: « Sans cette initiative citoyenne, point de salut »（この市民ボランティアなしにやっていくことはできない。www.liberation.fr 2017 年 12 月 25 日）; « hors de la science, point de salut »（科学なしに救いなし。 www.lepoint.fr 2017 年 12 月 15 日）; « Sans respect des océans, point de salut climatique »（海洋の尊重なしに気候面での救いなし。www.ouest-france.fr 2017 年 9 月 27 日）。最後の例では point de salut にも統辞的変更が加えられている点が興味深い。

かを、より正確に特定できると考える。

「語形成―統辞」という変数を縦軸に、「生産性」を横軸にとり、現代フランス語の複合名詞および成句の位置づけを整理すると、以下の図のようになる。

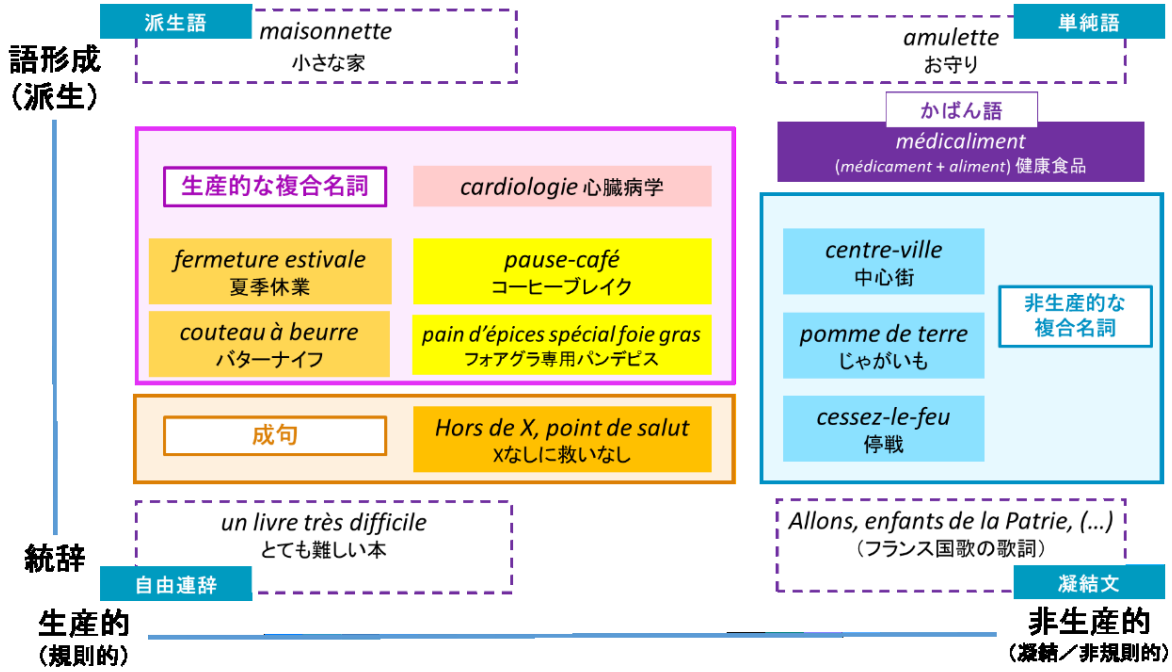


図 3：フランス語複合名詞および成句の位置づけ[26]

まず四隅にそれぞれ配置された枠（破線で囲まれた 4 つ）はいずれも複合名詞でも成句でもない。Maisonnette（小さな家）は、名詞 maison（家）と指小辞-ette に分析可能であることから、語形成規則にのっとった派生（接尾辞付加）のプロセスを想定できる。これに対して amulette（お守り）は高度に凝結した語彙的単位である。一見 amul-と指小辞-ette の組み合わせのようだが、amul-が何を示しているのかは明らかではなく[27]、これを語幹として認定するのは難しい。したがって単純語と同じく、構造全体が完全に語彙化した単位であると言える。統辞においても完全に凝結した構造を想定することは可能である。典型的な例は歌の歌詞である。パロディーなど創作的な試みを除けば、歌詞は

[26] 先述の[multi- + N]や[anti- + N]も、位置づけとしては cardiologie のような新古典的複合語に近いと考えられる。ただし[multi- + N]も[anti- + N]も基本的には形容詞(AdjR)として機能し、この図の「生産的な複合名詞」という括りとは若干外れると考えられるため、図の中には含めていない。

[27] *TLFi* によると、この語彙素の語源はラテン語の amuletum であるが、綴り字が女性名詞を想起させることから、これを男性名詞とするべきか女性名詞とするべきかについては議論があるという。

常に一字一句同じである。宣誓の言葉などもこの部類に入るだろう。反対に凝結していない構造は un livre très difficile（とても難しい本）のような自由連辞である。この構造は統辞規則に基づいて構成される。

残る 10 種類のうち、右側に縦に並んでいる 4 種類の構造はいずれも高度に凝結しているか、規則性に基づかない語形成（i.e. かばん語：médicaliment（健康食品））であり、これらは生産性を実現することができない。 [N1 + N2]および[N1 + PREP + N2]においては centre-ville（中心街）や pomme de terre（じゃがいも）のように、特定の構成素組み合わせが凝結している場合がある。また cessez-le-feu（戦闘を中止せよ > 停戦）のように、1 つの発話全体が凝結したと思われるものもある。これらとは反対に、左列に配された[N1 + AdjR](i.e. fermeture estivale 夏季休業)や[N1 + à + N2](i.e. couteau à beurre バターナイフ)は、構成素組み合わせ自由度の高い生産的な構造である。ただし内部構造への統辞的変更に一定の制限が見られることから、自由な連辞ではなく、ある程度凝結した構造である。

中心部に配された 4 種類の構造は、凝結と生産性の両方の性質を備えているように見えて特に興味深い。cardiologie（心臓病学）のような新古典的複合語では、構成素は古典ギリシャ語またはラテン語由来の拘束語彙素同士が基本である（もちろん biodiversité のように、片方の構成素が独立語彙素の場合もある）。この拘束形態素の種類は独立語彙素の種類と比べると圧倒的に少なく、組み合わせ可能性もおのずと限られてくる。Pause-café のような複合名詞についても、生産性が実現する構成素組み合わせは限定的と見られる。[N1 + spécial + N2]については、N1 と N2 の組み合わせ自由度は比較的高い可能性があるが、両構成素の間に位置する spécial を任意の形容詞に置き換えることは難しいようである（詳細は第 6 章を参照）。そして[hors de NP, point de salut]のような成句の場合、構成素を入れ替えられるスロットの規模は語彙素レベルから句レベルまで幅があるが、構成素のいくつかは少なくとも固定されている。

特定のスロットにどんな語彙素があらかじめ配置されるか、またその結果構成素間の統辞・意味的関係はどうなるのかということは、統辞規則では規定できない個別的な情報である。centre-ville のようにそれ自体が凝結しているのであれば、centre-ville をその

まま語彙情報として登録すれば済む話であるが、[pause + N2]や[N1 + spécial + N2]のように生産性が示唆される場合には、これらの形成モデルがそれ自体で 1 つの語彙情報のように機能していると考えるべきであろう。

このように複合名詞（または成句）においては、たとえ表面上は似たような構造を呈していたとしても、その生産性が同等とは限らない。同じ[N1 + N2]構造であっても、centre-ville は語彙化している一方で、pause-café や pause déjeuner は語形成モデルによって形成された構造であり、モデルによって規則性が示されている以上、pause-café という形式がそのまま語彙化する必要性はないと言える。同様の違いは拘束語彙素を伴った語形成寄りの単位の形成から成句レベルの形成に至るまで観察される。「語形成―連辞」という従来からの基準だけでなく「生産性」という軸も加えることで、現代フランス語の複合名詞が取り得る位置がまちまちであることが明らかになった。またその多様性は[N1 + N2]や[N1 + à + N2]といった抽象度の高い形式的な違いによってというよりは、むしろ centre-ville と[pause + N2]のように、より個別的な、つまり語彙的なレベルにおいて現れ得るということが分かる。

1.8. 通時的な変化

ここまで複合名詞の定義に関わる諸問題について検討してきたが、最後に[N1 + N2]という構造の通時的な変遷についても触れておきたい。

Arnaud (2016a : 73)は、フランス語の関係的[N1 + N2]複合名詞が 1690 年の Furetière の辞書[28]にはすでに見られることを挙げ、このタイプの複合がフランス語にもともと存在した形成法の一つで、それが徐々に広く用いられるようになったと説明している。Noailly (1990 : 208-210)によると、[N1 + N2]という構造が広まった時期は 19 世紀中頃の産業革命期であり、それに伴う都市化や英独文化ブームといった要因が、この形態統辞構造の使用増加と関係している可能性があるという。

もちろん英語などからの借用によってもたらされた[N1 + N2]も存在する。しかしながらそのような形式であっても、生産性に基づくその後の広がりは借用元の言語とは関

[28] Furetière, A. (1690) *Dictionnaire universel, contenant généralement tous les mots français*, Le Haye : Leers.

係なく進展することになる。例えば pause-café (1966 年に確認)は英語の coffee break からの意訳(calque)である可能性があるが[29]、そこから発展的に形成されたと考えられる pause pipi（トイレ休憩：1970 年には確認）や pause-détente（リラックスして過ごす休憩時間：1977 年には確認）などは、もはや英語からの直接的な借用ではない。

借用元の言語の構造を顧みない一方で、このような発展形の形成の土台にはある種の規則性が見出せる。特に pause-café 型の場合、「N2 のための N1」という「目的」の意味関係が常に念頭に置かれているように見えるのは興味深い。

ところでこの「目的」の意味関係は、始めからフランス語の[N1 + N2]構造においてメジャーだったものではない。むしろ「所有」や「付属」といった意味から段階的に目的の意味合いが生じていった可能性がある。

古仏語では 2 つの名詞が前置詞などを介さずに並置される構造が存在しており、その場合 N2 は N1 の属格として機能していた。Marchello-Nizia (2009：2938)は Herslund (1980)の文献を引用しながら、属格に関する古仏語の構造には以下の 4 種類があったことを説明している。

I. 2 つの名詞連辞の並置：la fille le roi

II. 前置詞 à を含む構造：la teste au cheval

III. 前置詞 de を含む構造：le filz de sa sorur

IV. N2 の前置：la roi cort

このうち III は、現代フランス語の名詞連辞においても残っている(e.g. le fils de sa sœur 彼（女）の姉（妹）の息子)。II についても、古仏語と全く同じという訳にはいかないものの、現代フランス語で N2 が属格として機能し得るケースが見られる(e.g. la montre à mon père 私の父の腕時計)。IV は現代では見られない構造である。

残る I については、かなり限られた環境ながら、現代フランス語の中でも確認できる。そのひとつが Bourg-la-Reine（パリ南近郊 Hauts-de-Seine 県の町）や Prunay-le-Temple（パリ西近郊 Yvelines 県の町。テンプル騎士団が駐留したことに由来）のような地名をはじめとする固有名詞である。また hôtel-Dieu（市立病院）のように、機関名を表

[29] 英語における *coffee break* は 1951 年には確認されている。Cf. Picone (1996：211)

す名詞としても一部残存している。

現代フランス語で見られるもうひとつのタイプは、N1 が普通名詞で N2 が製品名やブランド名、企業名などである以下のような構造である。

(12) a. billet TGV　TGV のチケット

b. station Vélib'　ヴェリブ（パリのシェアサイクル）のステーション

c. usine Renault　ルノーの工場

ただし「普通名詞＋固有名詞」の組み合わせで N2 が必ず属格になるわけではない。例えば以下の例ではいずれも「N2 は N1 のなかの一つ（一人）である」という関係(cf. Noailly 1990 : 135-136)が成り立つことから、むしろ同格(apposition)構造との関連が示唆される。

(13) a. Référendum en Turquie : le président Erdoğan en quête de pouvoir absolu

（www.lesechos.fr 2017 年 4 月 14 日。下線は筆者）

トルコ国民投票：絶対権力狙うエルドアン大統領

b. La viande rosée caractéristique de la région fait l'objet depuis vingt ans de négociations privilégiées avec le supermarché Auchan.

（www.ladepeche.fr 2017 年 3 月 3 日。下線は筆者）

この地方特有のバラ色の食肉はこの 20 年の間、スーパーマーケット Auchan の優先交渉の対象とされてきた。

したがって現代フランス語の「普通名詞＋固有名詞」という構造が、古仏語の属格に関わる構造と一対一対応しているとは言えない。しかしながら、古仏語で存在していた構造では属格だったものが、徐々に性質を変えていった結果、(13)のような同格に似た構造が生まれるようになった可能性はあるかもしれない。

この点に関連して Picone (1996)は、現代フランス語の[N1 + N2]構造（N2 が普通名詞のケースも含む）が、同格的構造から従属的構造へのシフトを伴ってもたらされたと指摘している。例えば timbre-poste（郵便切手）という形式は 1848 年には確認されているが、N2 の poste が N1 の属格として機能していると考えることができる。N2 が無冠詞である点を除けば、古仏語における la fille le roi のような構造を引き継いだ構造と見る

こともできるだろう。この点を踏まえて Picone は、timbre-poste や、それに先立って出現が確認されている malle-poste（郵便馬車）や wagon-poste（郵便車両）といった形式を、Darmesteter (1874 : 38-50)の分析にしたがって「並置の属格(genitive of juxtaposition)」の一種だと見なしている。

しかしながら、timbre-poste は「郵便（局）に属する切手」という解釈だけでなく、「郵便のための切手」という、目的関係に基づいた解釈も可能である。実際に、timbre-poste より後に出現したと見られる[timbre + N2]の各形式の内部構造を見ると、N2 に属格（N1 に属する N2）としての機能を見出しづらいことが分かる。例えば timbre-taxe は「郵便料金不足分用の切手」であることから、N1 と N2 の間には、所有・所属関係というよりはむしろ「N2 のための N1」という目的関係を見出すことができるだろう。同様の可能性は、timbre-quittance（収入印紙）や timbre-réduction（値引きシール）、timbre-amende（罰金支払い用印紙）にも想定できる。

このことから示唆されるのは、malle-poste や wagon-poste など[N1 + poste]の各形式は「並置の属格」だったのが、timbre-poste を基にした[timbre + N2]の各形式が形成された時点で「N2 のための N1」という目的関係に読み変えられたという可能性である。この変遷の可能性を図にまとめると、以下のようになる。

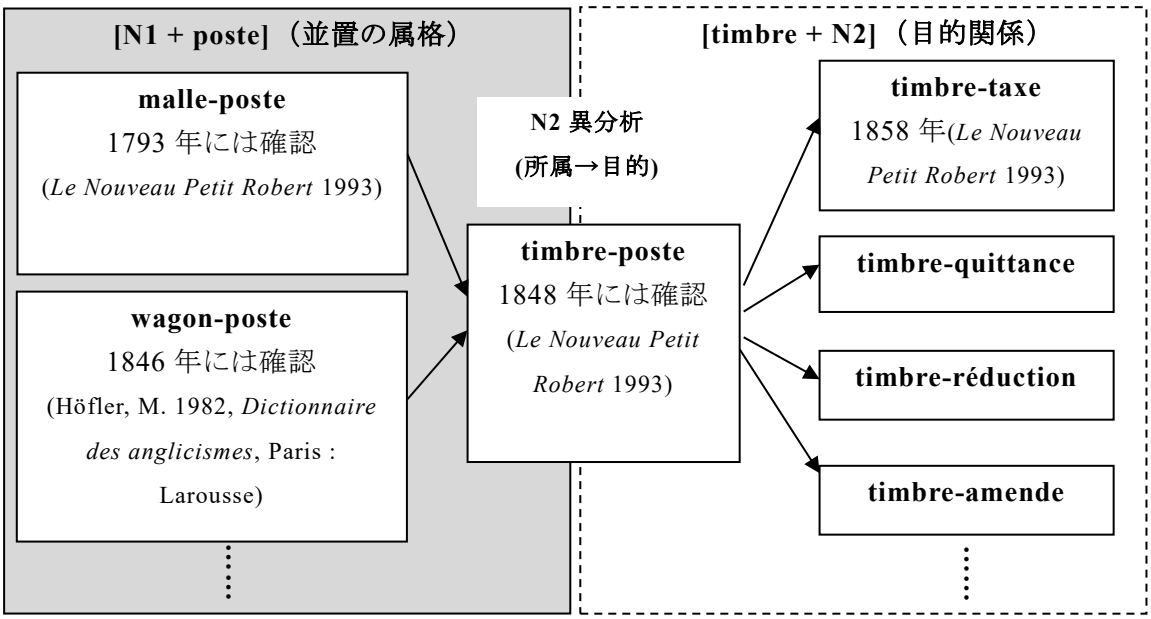


図 4： 所有・所属関係から目的関係への変化 ：[timbre + N2]の場合

ここで興味深いのは、la fille le roi のような「並置の属格」は古仏語では統辞規則にしたがって形成された名詞連辞であった一方で、「N2 が N1 の目的を表す」[timbre + N2]のような構造は、その後から出てきた新しい解釈だと考えられることである。なぜなら[timbre + N2]の諸形式が現れた時点では、2 つの名詞を並置させて「N2 が N1 の目的を表す」構造―Picone の用語に従って言えば「並置の与格」のような構造―が、自由な名詞連辞としてはあり得ない構造だからである。

統辞規則がこのいわゆる「並置の与格」を想定していない以上、[timbre + N2]の構造は語形成プロセス、つまり複合によって形成されると考えるのが妥当と思われる。また、[timbre + N2]に見られる形成上の規則性についても、統辞規則ではなく語形成プロセスの中で規定されていると考えるべきであろう。

ここまで複合名詞の定義において問題となる語彙・形態・統辞の関係性について、派生と複合、名詞連辞と複合名詞をそれぞれ比較し、また生産性や通時的変化にも言及しながら検討してきた。その結果 pause-café 型をはじめとする複合名詞の構造は名詞連辞の構造を一定程度反映したものである一方で、凝結しているために、内部構造への統辞的操作が制限されていることや、生産性を支える形成プロセスが必ずしも統辞規則に基づいている訳ではないことが明らかになった。つまり複合名詞は、ベースの構造は名詞連辞と共通していながら、統辞規則の統制下からは一定程度外れている構造なのである。そのため複合名詞の形成が規則的たりえるためには、統辞規則ではなく語形成のレベルにおいて独自の形成プロセスが規定されている必要性がある。次章ではその形成プロセスのあり方について検討する。

第 2 章

理論的枠組み：Construction Morphology について

2.1. 統辞規則が想定しない構造の形成

フランス語の複合名詞には、①pomme de terre, couteau à beurre など、統辞構造（名詞連辞）に準拠した形式でありながら一程度の凝結が見られるもの、②pause-café のように、現代フランス語の統辞規則では想定しづらい表面構造を呈しているもの、さらに③multifonction や psychologie のように、接辞的性質を持つ要素を構成素として含んでいるものがあることを、第 1 章で確認した。

ところでこれらは現代フランス語の文法規則（特に統辞規則）にのっとった形成と言えるだろうか。まず①のタイプについては、内部構造への操作が制限されているものの、基本的には統辞規則に基づく形成と言えるだろう。②については、表面構造は[N1 + N2]ではあるが、「被限定(déterminé)－限定(déterminant)」という順序についてはフランス語の名詞連辞のそれと対応しており、統辞規則から完全に逸脱した構造とまでは言えないだろう。その一方で③のタイプは「限定－被限定」の順序で構成されているという点で、統辞規則とは合致しない[30]。かといってこれが接辞付加かというと、そうとも言いきれないことを 1.3 節で指摘した。

さらに、[N1 + N2]の中にも「限定－被限定」の順序を取る以下のような形式があることを Loock (2012)が報告している。これらは英語からの借用と考えられるが、(14c)の pétanque club のように、英語にはなかったものをフランス語で作ったいわゆる「仏製英語」と見られる形式も散見されるという(p.5)。

[30] ただし AdjQ による N の修飾の場合には AdjQ が N に前置されることがある(e.g. une belle voiture 美しい車)。ただし前置がデフォルトの AdjQ は限られている（評価に関わる短音節の形容詞が多い）ほか、N に前置されるか後置されるかで意味が異なる AdjQ もある(e.g. l'année dernière 昨年 vs. la dernière année 最後の年)。

(14) a. la Star Academy/Académie　（テレビ番組名）

b. la grève attitude　ストライキに打って出る戦術

c. pétanque club　ペタンククラブ

このような「限定－被限定」型の構造は、現代フランス語における例外的な構造と考えられるが、統辞規則との関連においてこれらの構造はどのように位置づけられるべきなのだろうか。あるいはそのような「例外」を統辞規則は想定し得るのだろうか。

まず確認したいのは、「例外」であるということは、「非文法的」あるいは「誤用」であることとは別問題だということである。例えば 1.2 節でふれた[N + après + N]型の成句や、コピュラ動詞による数量表現における de の出現(e.g. Le prix est de 15 euros. cf. Lauwers 2012)は、構造的には有標だが決して非文法的あるいは誤用ではない[31]。「（非）文法的」という見方は、あくまでも統辞的観点を基準にした言語現象の捉え方に基づいており、語彙・形態そして統辞の連続体的な関係性は考慮されていない。また「誤用」というのは、形態・統辞規則ではなく言語規範との関連で定義される用語である[32]。

また「例外」である以上は、その構造なり構成素なりに何らかの個別的な情報が付加されている必要があると考えるべきである。一般的に統辞規則にしたがって構成されたものは、統辞構造の面では無標だと言える。その一方で、規則にそぐわない構造を呈するものは有標である。有標である以上、その構造的特殊性を何らかの方法で保存あるいは規定しておく必要があるだろう。

したがってその構造的特殊性を保存・規定する場所と方法が問題となる。もしその構造あるいは語彙項目が以下の centre-ville のように全く生産性を持っていないのであれば、それらは語彙化した連辞として、そのままの形でレキシコンに登録されると考えられる。生産性が想定されない以上、その内部構造の特殊性まで規定する必要性はなく、

---

[31] 文法「規則」ではなく文法「規範」に照らし合わせた場合には、規範文法から逸脱した構造が誤用と判断される可能性はある。例えば分裂文で ce sont で受けるべきところを c'est で受けることは話しことばでは特に頻繁に見られるが、一般的には誤用と見なされるだろう(e.g. Les euclides, c'est les gros camions qui ont des roues énormes　ユークリッドっていうのは、巨大なタイヤのついたトラックのことだよ(91,3, Dalle 6,7, cité dans Blanche-Benveniste 2000 : 40))。しかし規範は必ずしも言語の実際に即していない。したがって規範性(normativité)と規則性(régularité)はあくまでも区別して考えるべきだと本稿では考える。

[32] ただし第二言語習得の文脈では、学習者特有の言語使用が、目標言語の母語話者による言語使用と照らし合わせた場合に「誤用」と定義づけられる可能性はある。

あくまで centre-ville はひとまとまりの連鎖として捉えられることになるだろう。

(15) a. centre-ville　中心街

b. *centre-village

c. *centre-commune

外来語も基本的にはこれと同じである。別の言語の形態・統辞規則に基づいて形成された構造はたしかにフランス語から見れば特殊な構造になり得るが、その構造を再分析して新たな語形成を実現しない限り、以下のような外来語は凝結したひとまとまりの語彙的項目として認識され、内部構造については問題とならない。

(16) a. start-up　　スタートアップ企業（英語）

b. inchallah　そうなるように願う（アラビア語）

c. manga　　漫画（日本語）

これとは反対に、生産性が認められる場合には内部構造の分析が想定される。実際(14)の「限定－被限定」型の構造にも一定の生産性が示唆されるが、構成素の潜在的組み合わせ可能性の分布を見ると、興味深いことが分かる。それは、「限定」の N1 に入る語彙項目にある程度の自由度が想定される一方で、「被限定」の N2 に入る語彙項目はあらかじめ決まっている点である。実際[N1 + attitude]という形式には grève attitude (cf. 14b)以外にも、Vélib'attitude （Vélib'（シェアサイクル）を使うという移動作法）など合計 44 種類の N1 が Loock (2012)で報告されている。一方で attitude に意味的に近い別の名詞（e.g. comportement 振る舞い）に同様の「限定－被限定」型の形成が可能かと言うと、必ずしもそうではない。

さらに言うと、[N1 + attitude]のような特定の構造内における構成素の意味が、通常の（自由な連辞内に置かれた時の）意味とは異なる可能性もある。それが顕著な例として[beau- + N]における beau-（女性形は belle-）がある。beau は通常は「美しい」を意味する品質形容詞であるが(e.g. Ma mère est belle 私の母は美しい)、親族名称を N2 とする[beau- + N]においては「義理の N2」を意味する(e.g. ma belle-mère 私の義母)。

こうしたことから示唆されるのは、構造的な特殊性を示す諸形式はいずれも、特定の語彙項目に紐づけられた形で形成されるということである。逆に言えば、語彙項目の

中には、特定の構造の中に位置づけられた際に、特別な意味を示すものがあるということでもある。いずれにしても、統辞規則に基づかない構造の形成には、語彙が深く関わっていると考えられる。連辞の構成が統辞規則によって制御されているのとは対照的に、[N1 + attitude]や[beau- + N]などの形成は、特定の語彙項目内の情報によって制御されているようにも見える。

2.2. 語彙素ベースの形態論

統辞規則に準拠しない構造の形成が語彙部門と密接に関わっている可能性は、Jackendoff (2002)や、Construction Morphology (CM)を提唱した Booij (2010)などで指摘されている。いずれの先行研究にも共通しているのは、形態プロセスを形態素ベース(morpheme-based)ではなく語彙素ベース(lexeme-based)で捉えている点、そして、統辞規則の代わりに[N1 + attitude]や[beau- + N]などの構造的特殊性を規定する仕組みとしてスキーマ（または construction）という概念を想定している点である。

形態素ベースの形態論(cf. Baudouin de Courtenay 1972, Bloomfield 1933 etc.)は、形態素を言語における意味の最小単位とする前提に立ったアプローチである。形態的独立性の如何に関係なく、あらゆる形態素を同次元に置き、それぞれの持つ意味の足し算によって、派生語（あるいは複合語）全体の意味が形作られていくと考える点が特徴である。例えば anti-délocalisation（反移転）という派生語では、anti-, dé-, local, -is(er), -ation という 5 つの形態素を想定し、それらの持つ意味―語彙的なものから文法的なものまで―の積み重ねで「反移転」という意味が成り立つと考える。

確かに形態素ベースのアプローチは、多数の接辞によって連辞に相当する単位を構成する抱合語の説明などにおいて有効と思われる。しかし一方で、先に見た(3)の[multi- + N]や(6)の複接派生のように、形態素をひとつひとつ足し算していくという過程が想定しづらい場合の形成プロセスを説明するのは難しいだろう。

(=3) a. couteau multifonction　多機能ナイフ

b. *couteau fonction

(=6) a. indéniable　否定できない、明白な

b. *indénier　(cf. dénier)

c. *déniable

これに対して語彙素ベースのアプローチは、形態素ではなく語彙項目を派生や複合といった形態プロセスの出発点として位置づけるとともに、語形成モデルのような抽象化された要素にも語彙項目と同じ資格を想定することが特徴である。この点については Booij (2010 : 3-11)による英語の-er 型動詞由来名詞を例にした説明を基に検討してみることにしたい。

英語の-er による動詞由来名詞の形成は非常に生産性が高く、skyper（スカイプで通話する人）などの新語形成にも貢献している。このプロセスによって形成される「（元の）動詞―-er 名詞」のペアを網羅的にリストすることはおそらく不可能である一方で、プロセス自体を以下のように抽象化することは可能である。

(17)　$[[x]_V\ er]_N$　　'one who Vs'　　(Booij 2010 : 2)

このような抽象化された形式を construction またはスキーマ(schema)と呼ぶ。Construction は Construction Grammar (Croft 2001, Goldberg 2006 etc.)において提唱されている、形式と意味のペアリングを示す概念で、主に統辞規則が想定しない構造（e.g. フランス語の[N + après + N]構造）に対して用いられる。統辞レベルにおいてこの construction をどれくらいの抽象度まで想定するかは立場によって異なるようだが、CM を提唱した Booij はこの概念が形態分析においても有効であると主張し、形態プロセスにおける construction の対応概念を特にスキーマと呼んでいる。

Booij は、このようなスキーマによる抽象化は（元の）動詞と-er 名詞という、2 つの語彙項目が成す範列関係から導き出されると考えている。例えば以下のような範列である。

(18) a. buy　-　buyer

b. eat　-　eater

c. shout　-　shouter

d. walk　-　walker　　(ibid.)

ここに挙げたいくつかのペアを見ただけでも、左列の元の動詞と、右列の名詞形の間の関係性に規則性を見出すことができるだろう。重要なのは buy と buyer という、2つの「語彙項目」を比べているという点である。これが、当該プロセスを動詞形態素 buy と「動作主」を示す名詞化接辞-er の組み合わせとして捉える形態素ベースのアプローチとの相違点である。語彙素ベースの形態論は、既存の語彙項目を形態分析の出発点とする「アウトプット志向の(“output-oriented” cf. Booij 2010 : 4)」アプローチと言える。

ちなみに skyper のような新語は、buyer や walker といった特定の既存形式からの類推ではなく、 (17)のような抽象化されたスキーマから直接的に形成されている可能性がある(ibid.)。元の動詞と名詞形の間の規則性がこのスキーマによってひとたび規定されれば、あとは任意の動詞[33]を x のスロットに挿入すればよいということになる。生産性の高さはこうしたスキーマを想定することで説明できるだろう。このようなアウトプット志向の一連の分析過程は以下の図のようにまとめられる。

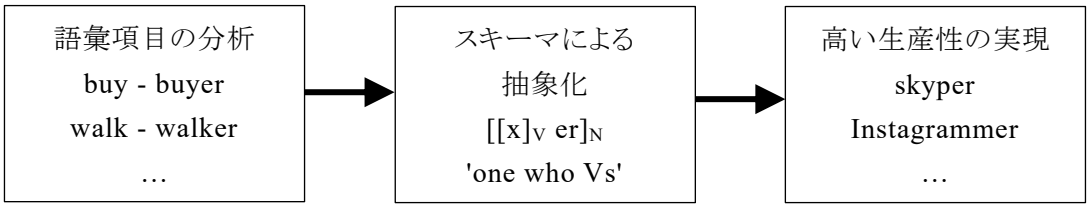


図 5： 英語の[V-er]型名詞のアウトプット志向の形態分析[34]

このように、形態素ではなくアウトプットされた語彙項目を形態分析の出発点とし、スキーマによる抽象化を経て生産性を実現するという流れは、[N + après + N]のような統辞構造の形成プロセスにも想定できる。以下はそれを示したものである。

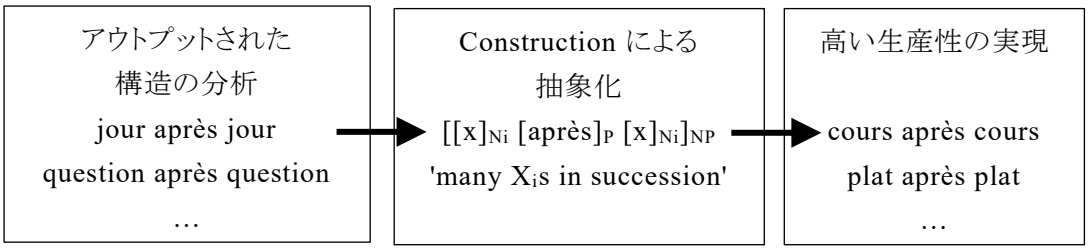


図 6： フランス語の[N + après + N]の形態統辞分析[35]

[33] 動詞 skype（スカイプする）は名詞からの品詞転換（ゼロ接辞による派生）形である。
[34] Instagrammer： 写真共有アプリ Instagram で写真を公開する人。
[35] 本構造の分析・抽象化の過程に際しては英語の[N+PREP.+N]構造について論じた Jackendoff (2008)を参考にした。

なお図内に示した実例はあくまで参考であり、jour après jour や question après question が抽象化に必須という意味ではない。実際にアウトプットされたものであれば、あらゆる形式が同様の分析の対象となり得る。

図 5 と図 6 に見られるパラレリズムから示唆されるのは、形態と統辞の連続体的関係である。形成される結果物がひとつの語彙的項目であれ連辞であれ、いずれの場合にもアウトプットされた形式を分析し抽象化するという手続きは同じである。また、抽象化によって得られた construction（またはスキーマ）は、あくまでもアウトプットされたものを分析した結果であり、それが必ずしも統辞規則に対応しているとは限らない（むしろ多かれ少なかれ逸脱している）。そういった意味では、「construction に対応する概念が語形成にも想定できる」というよりは、逆に「語形成におけるスキーマのようなものが、特定の統辞構造においても見られる」と見るべきかもしれない。Café glacé や pomme de terre (cf. 1.4-1.5 節)のような複合名詞が形式的には統辞規則に準じた構造を成しているのと対をなすように、jour après jour のような統辞規則に基づかない構造の形成が、統辞ではなく語形成的な仕組みを通じて行われていても不思議ではないだろう。

2.3. 語彙項目としてのスキーマ

既存の語彙項目を抽象化することによって得られたスキーマ（統辞構造の場合は construction）は、それ自体が一つの語彙項目として機能していると考えられる (Jackendoff 2002 : 172-177, Booij 2010 : 4-11)。例えば英語の buyer という語彙項目が特定の音韻形式(PHON)、形態統辞特性(SYN)そして意味(SEM)を持ち合わせているのと同じように、$[[x]_V\ er]_N$ というスキーマもこの 3 要素を持っている。ただし x に相当する情報が未指定であるという点が、実際に現れる buyer のような語彙項目とは異なる。このスキーマが持つ PHON, SYN, SEM の各特性の構造は以下のように図示される。

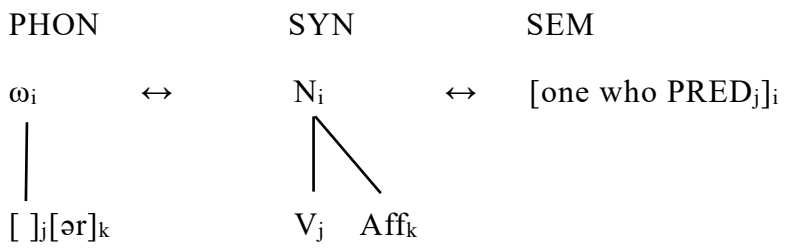


図 7： 英語の[V-er]型名詞のスキーマ (Booij 2010 : 8)[36]

それぞれの特性の間に付された矢印は、この 3 種類の情報がシステマティックな関係を結んでいることを示している。また、PHON の j にあたる情報（音節数）と、SEM の $PRED_j$ に相当する情報が未指定になっている。一方で SEM では-er に関する情報が記載されていないことにも注目すべきであろう。これは、-er 自体が語彙的項目として機能しているわけではないことに起因する。-er が形容詞や副詞の比較級を形成する際にも用いられることを考えると、この接辞は統辞機能の標示を専らその役割とし、どのような機能を示すかはどのスキーマに置かれるか（比較級形成には[V-er]型名詞とは別のスキーマを想定できる）によって決まると言えるだろう。

ここで興味深いのは、スキーマや construction を、それぞれ形態規則や統辞規則の一種とするのではなく、いずれも語彙項目と考える点である。レキシコンが特殊で個別的な項目の保管場所であるということは、形態素ベースであれ語彙素ベースであれ、いずれのアプローチにおいても同意されている前提であるが(Aronoff 2000 : 348)、純粋に語彙的な項目だけではなく、規則に相当するような言語的な計算装置でさえも、この「個別的な項目」の一つとして保管対象となり得るというのが、語彙に関する「最大主義者(maximalists)」(ibid.)の主張であり、その計算装置に相当するものがスキーマや construction である。すなわち、言語的計算の仕組みとして、本質的かつ一般的な枠組みとしての形態統辞規則と、特定の条件に特化した語彙的情報としてのスキーマ（あるいは construction）という 2 つが存在するということになる。

このように考えることで、[N1 + attitude]のような統辞的に見て有標な構造の生産性を、一般的な形態統辞規則とは切り離して説明することが可能となる。[N1 + attitude]

[36] 図中の Aff は affix、PRED は predicate を示す。

は主要部が右方に位置するという点で、フランス語の統辞規則にそぐわないことを 2.1. 節で確認したが、主要部の位置に関わる情報が語彙項目たる以下のようなスキーマ[37]で指定され、それにしたがって形成が行われているとすれば、そのプロセスに統辞規則が介入する余地は必ずしもなく、結果として統辞的に有標な構造となっても問題にはならないことになる。

(19) $[[x]_{Ni}\ [attitude]_{Nj}]_{Nk} \quad \leftrightarrow \quad [SEM_j \text{ with relation R to } SEM_i]_k$

同じことはフランス語における新古典的複合語(cf. 1.2 節)とその拡張形においても言える。これらは[N1 + attitude]と同じように「限定―被限定」の順番で構成素が配置される。例えば「生物、生命の」を表す bio-は、同じように古典ギリシャ語由来の拘束語彙素である-logie や-graphie などを主要部として置く(cf. 20a)が、フランス語の自由語彙素も、主要部としてこれらにとって代わることが可能である(cf. 20b)。

(20) a. biologie（生物学）, biographie（伝記）, biotope（ビオトープ）

b. biodiversité（生物多様性）, biotechnologie（生物工学）,

biodégradation（微生物分解）

拘束語彙素も自由語彙素も同様に主要部の位置を占められることから、両者の区別を特にすることなく、以下のようなスキーマを想定することができるだろう。

(21) $[[bio]_{N/Ai}\ [x]_{Nj}]_{Nk} \quad \leftrightarrow \quad [SEM_j \text{ with relation R to } SEM_i]_k$

このような形で、[N1 + attitude]や[bio + N2]のような構造を形態統辞規則の「例外」や「違反」と見なしたりすることなく、あくまでも形態統辞規則とは別の枠組みと考えることで、構造的特殊性と規則性の両立に関する問題は解決することができるだろう。

ところで(19)や(21)のスキーマの右辺では、構成素間で結ばれる意味関係を R とした。この R はスキーマの時点では未指定であり、実際に x に入る語基次第で変わるものと考えられる。この点に関しては Booij (2010 : 76-84)がオランダ語の-er で終わる名詞に見られる多義性との関連で説明している。それによると、-er の右方に現れる要素としては動詞(V)、名詞(N)、数量詞(Q)、数詞(Num)の大きく 4 種類があるという。これを一般化したスキーマは以下のようになる。

[37] 以下、紙面の都合で図 7 に示したようなスキーマの 3 極構造は簡略化して表記する。矢印の左側は音韻形式(PHON)と形態統辞特性(SYN)を示し、右側は意味(SEM)を示す。

(22) $[X_i\text{ -er}]_{Nj} \leftrightarrow$ [entity with relation R to $SEM_i]_j$ (X = V, N, QN, Num)

(Booij 2010 : 84)

例えばこの中の[N-er]の実例を見ると、VVD-er は「VVD（自由党）のメンバー」である一方、watersport-er は「ウォータースポーツに熱中している人」、rolstoel-er は「車椅子使用者」となる。同じ[N-er]であっても、R が最終的に示す内容は組み合わさる要素次第で微妙に異なっていることが分かる。

さらに言うと、(22)のスキーマ内の X に、4 種類のカテゴリーのうち何が入るかで、$[X_i\text{ -er}]$の指示対象は人、人の集団、あるいは物と変わる。また、N に関しては地理的な名称に関する N とそれ以外の N で別々のスキーマを想定するべきだとしている。それぞれのカテゴリーとの組み合わせに合わせてスキーマを想定すると以下のようになる。

(23) $[[x]_{Vi}\text{ -er}]_{Nj} \leftrightarrow$ [entity involved in $SEM_i]_j$

e.g. klopp-er 'knock-er'

(24) a. $[[x]_{Ni}\text{ -er}]_{Nj} \leftrightarrow$ [person with some relation to $SEM_i]_j$

e.g. watersport-er 'water sports enthusiast'

b. $[[x]_{Ni}\text{ -er}]_{Nj} \leftrightarrow$ [inhabitative of $SEM_i]_j$

e.g. Utrecht-er 'inhabitant of Utrecht' (cf. Utrecht-enaar)

(25) $[[x]_{QNi}\text{ -er}]_{Nj} \leftrightarrow$ [object with property $SEM_i]_j$

e.g. twee-kapp-er 'two-roof-er, semi-detached house'

(26) $[[x]_{Num,i}\text{ -er}]_{Nj} \leftrightarrow$ [entity with some relation to $SEM_i]_j$

e.g. twintig-er 'person in his twenties'

Booij はこれらの意味関係を積極的に細分化することはせず、その代わりに「N に関連する」という、抽象度の高い未指定の意味関係として R を想定している。その一方で、(23)-(26)に示したスキーマはサブスキーマとして、(22)に示した一般化されたスキーマとの重層構造(cf. 図 8)を成していると考えている。

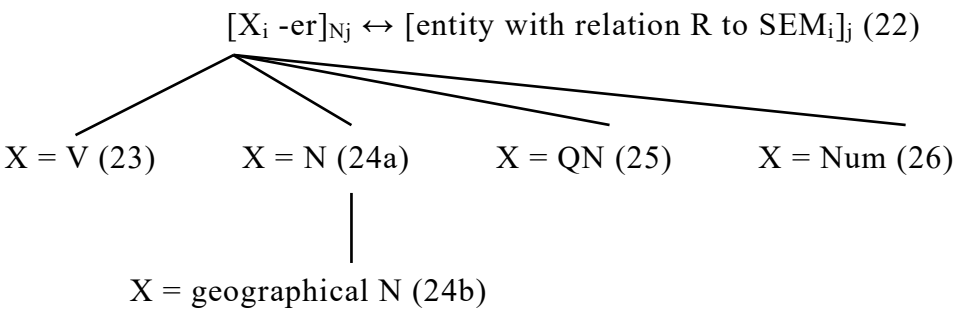


図 8： オランダ語-er 名詞のスキーマとサブスキーマ(Booij 2010 : 84)

このような重層構造を想定することで、それぞれのサブスキーマがまったく独立した別々の語形成プロセスではなく、共通のスキーマを基盤として派生したプロセスであることを説明できる。また、このモデルは新語形成のプロセスの説明においても有効である[38]。

2.4.　複数のスキーマの結合

語形成は時に複数のスキーマが結合することによって実現する。Booij (2010 : 45-46)はオランダ語の ge-tak-t（枝分かれした ＜tak 枝）や breed-ge-schouder-d（肩幅の広い ＜schouder 肩）のような名詞由来形容詞は、それぞれ複数のスキーマの結合によって形成されていると指摘している。まず ge-tak-t であるが、これは[ge-V-t]という過去分詞の形を取っている。しかしながら tak はあくまで名詞である。そこで、動詞への品詞転換が想定されるわけだが、tak という自由語彙素が動詞として現れることはないという。したがって当該構造は以下の 3 種類のプロセスを同時並行的に行うことで成されると考えるべきであると指摘している。

(27) a. N から V への品詞転換　　$[[x]_N]_V$

b. 過去分詞形の形成　　$[ge\ [x]_V\ t]_V$

c. 動詞から形容詞への品詞転換　　$[[x]_V]_A$

[38] 例えばフランス語において aimable (< aimer)（愛らしい）など動詞由来の[V-able]が、より抽象度の高い[X + able]に属するサブスキーマと考えることで、X の部分に動詞語幹以外の要素が入った別のサブスキーマが、新語形成の際に使用される可能性を想定できるようになる。実際[V-able]以外にも、新語や臨時語(hapax)として micro-ondable（レンジ調理可能な）や présidentiable（大統領の資質がある）のような名詞由来の[N-able]構造が存在する。

この 3 つのスキーマを結合した最終形は(28a)のような構造になる。getakt は、スキーマ内の未指定スロット x に tak を加えることによって実現する(cf. 28b)ということになる。

(28) a. $[[ge\ [[x]_N]_V\ t]_V]_A$

b. $[[ge\ [[tak]_N]_V\ t]_V]_A$ (Booij 2010 : 46)

一方 breed-ge-schouder-d の場合は、(28a)のスキーマにさらに(29)のプロセスを想定することが必要である。最終的なスキーマは(30a)のようになる。

(29)「形容詞＋形容詞」型複合 $[[x]_A[y]_A]_A$

(30) a. $[[[x]_A\ [[ge\ [[y]_N]_V\ d]_V]_A]_A$

b. $[[[breed]_A\ [[ge\ [[schouder]_N]_V\ d]_V]_A]_A$ (ibid.)

スキーマの結合を想定することで、フランス語の indéniable (cf. 6)や multifonction (cf. 3)などの形成についても説明が可能となる。indéniable のような複接派生には、(31)の 2 つのスキーマを結合した(32a)のような構造が考えられるだろう。

(31) a. $[in\ [x]_A]_A$ (cf. in- + juste > injuste 不公平な)

b. $[[x]_V\ able]_A$ (cf. porter + -able > portable 持ち運び可能な)

(32) a. $[in\ [[x]_V\ able]_A]_A$

b. $[in\ [[déni]_V\ able]_A]_A$

オランダ語の getakt のような構造の場合と同じく、結合前の 2 つのスキーマ(cf. 31a-b)がそれぞれ単独で機能するか否かというのは問題にならない。実際には(31a)のスキーマは injuste のような形容詞を作ることができ、(31b)のスキーマは portable のような構造を形成するが、仮にこれらが単独で機能しなかったとしても、それは結合スキーマの機能を妨げるものではない。結合スキーマはあくまで複数のスキーマを一括して同時に作動させるものであり、これらを同時に実行する限り、個々のスキーマが単独で有効か否かは関係ないのである。したがって*déniable という形式が個別に存在していようがいまいが、indéniable の成立自体に直接的には影響を及ぼさないということになる。

[multi + N]の場合はどうだろうか。この構造は多くの場合、主要部名詞を後方から限定する環境に現れることから(e.g. couteau multifoncton)、AdjR に相当する構造と見るのが妥当であろう。また実際には multidisciplinaire（多分野の）のように、N の代わり

に名詞から派生した形容詞(A)が入ることもある。このことを反映してまず、以下のようなスキーマを仮に想定してみることにする。

(33) $[\text{multi } [x]_{N/A}]_A$

次に multidisciplinaire という形式について考えてみる。[multi + A]の多くは、A がそれ自体で自由語彙素たり得るという点が、先の複接派生の場合との違いである。したがって名詞基底に接辞付加を伴った形容詞化プロセス(i.e. discipline_N > disciplinaire_A)が想定できる。スキーマとして表すと以下のようになる。

(34) a. $[[x]_N \text{ aire}]_A$

b. $[[\text{disciplin}]_N \text{ aire}]_A$

Multidisciplinaire の形成過程においてもこのような形容詞化プロセスが想定されるが、実際には事はそこまで単純ではない。なぜなら接辞付加によって得られた形容詞（単独）が示す意味と、[multi + A]における A（形容詞）が示す意味は必ずしも一致しないからである。以下はその例である。

(35) a. multidisciplinaire　多分野の、学際的な

b. disciplinaire　　規律上の、懲戒の

この例の場合は、名詞 discipline の多義性が問題となる。discipline には「学問分野」、「規律」の両方の意味があるが、派生形の disciplinaire は後者の意味のみに対して有効である。一方で[multi + A]に置かれた場合には、もっぱら前者の「学問分野」を示す。 もし multidisciplinaire の形成の前段階として discipline > disciplinaire という派生プロセスが想定され、そして multi-という要素が「多くの」という意味を示すのであれば、multidisciplinaire は「多くの規律上の」あるいは「多懲戒の」といった意味になるはずである。しかし実際はそのようになっていない。

このことから、multidisciplinaire の形成に関わるプロセスが、discipline > disciplinaire というプロセスを前提としない、むしろそれとは直接的な関係のない別のプロセスであることが示唆される。Multidisciplinaire は、disciplinaire に multi が単に付加されたというよりは、むしろ discipline という語彙素が①接辞付加による形容詞化、そして②$[\text{multi } [x]_A]_A$ というスキーマの適用、という 2 つのプロセスが同時に実現されることに

よってもたらされたと考えられる。つまり indéniable と同じような複接派生と同様の、以下のような結合スキーマが想定できるだろう。

(36) a. $[[x]_N \text{ aire}]_A + [\text{multi } [x]_A]_A = [\text{multi } [[x]_N \text{ aire}]_A]_A$

b. $[\text{multi } [[\text{disciplin}]_N \text{ aire}]_A]_A$

単独のスキーマである(34)と結合スキーマである(36)は、たしかに同じ形容詞化のスキーマを共有してはいるが、結合スキーマは単なるスキーマの足し算ではない。この 2 つのスキーマは実際には分離することはできず、常にセットで適用される。つまり、結合スキーマもそれ自体で 1 つの独立した構造であり、単体のスキーマでは見られないような独自の構造的特性を兼ね備え得るということになる(cf. Booij 2010 : 45)。

Disciplinaire という形容詞をもたらすスキーマと multidisciplinaire を形成するスキーマが別々に存在しているのであれば、各形式が示す意味内容が異なっていても不思議ではない。このことから示唆されるのは、どのような語形成プロセスを採用するかということは、単に形式的な問題だけでなく、基底となる語彙素の語彙情報をどのように取り出すかという、意味面にも少なからず関わる問題だということである。基底語彙素のどの意味的側面を取り立てるかを示すという機能は Corbin (2004 : 1290)ではそれぞれの接辞に対して想定されているが（cf. 1.2 節）、CM の理論に即して考えると、その機能は各接辞にではなく、むしろスキーマそのものの中に組み込まれていると言えるだろう。

2.5. スキーマとサブスキーマ

これを踏まえて今度は[multi + N]と[multi + A]との共存関係について考えてみる。どちらにも共通しているのは、形式全体としては形容詞(A)になることである。まず[multi + A]であるが、ここでどの接辞が付くかは A の基となる N によって異なる。例えば discipline の場合は-aire によって形容詞化される一方で、nation（国民）の場合は-al (i.e. national)、tradition（伝統）の場合は-el である(i.e. traditionnel)。

その一方で N がゼロ接辞で形容詞化されている場合を見てみると、表 1 の multi-destinations より下の各形式のように、そもそも形容詞化接辞を伴った形式を持たないものが少なからず存在していることが分かる。

表 1： フランス語の[multi + N]の実例

[multi + N]		N	接辞を伴った形容詞化
multifonction	多機能の	fonction	fonctionnel
multinorme	多方式受像の	norme	normatif
multi-destinations	周遊型の	destination	?destinationnel
multicâble	複数ケーブルによる	câble	?câblaire
multicoque	多胴型の（船）	coque	-
multipage	複数ページの	page	-
multirisque	マルチリスクの（保険）	risque	-
multi-services	よろず請け合いの	service	-

この表からも示唆されるように、フランス語ではあらゆる名詞が接辞を伴って形容詞化できる訳ではない。したがって接辞付加が想定できない場合には、N がゼロ接辞による品詞転換で形容詞化したと考える必要が出てくるだろう。転換による形容詞化は以下のようなスキーマとなる。

(37) a. $[[x]_N]_A$

b. $[[\text{destination(s)}]_N]_A$

ただしこの転換スキーマが現代フランス語において単独で存在するとは考えにくい。もしそうならば、あらゆる名詞語基が、ある時は名詞として、またある時は形容詞として機能できることになるだろうが、実際にはそうではない。むしろある特定の環境下でのみ、名詞語基が形容詞へと転換していると考える方が妥当である[39]。multi-destinations の場合で言うと、destinations が形容詞化するのは$[\text{multi } [x]_A]_A$というスキーマが同時に適用された場合に限るということになろう[40]。したがって以下のような結合スキーマが想定

[39] 一方で、choc（衝撃）, fleuve（河川）などは接辞付加なしで品質形容詞(AdjQ)として機能することができることが Noailly (1990)などで報告されている。ただしそのような転換が可能なのは特定の語彙素に限られる。この点については 3.2 節も参照。

[40] このように、単独では生産的でない語形成プロセスが、別の語形成プロセスと共に適用される場合に限って生産性を実現する現象を Booij (2010 : 47-50)は「埋め込まれた生産性(embedded productivity)」と呼んでいる。

できる。

(38) a. $[[x]_N]_A$ + $[\text{multi } [x]_A]_A$ = $[\text{multi } [[x]_N]_A]_A$

b. $[\text{multi } [[\text{destination(s)}]_N]_A]_A$

なお fonction や norme についてはそれぞれ接辞付加による形容詞形(i.e. fonctionnaire, normatif)も存在するが、$[\text{multi } [x]_A]_A$ の形成においてはこの両者が競合している可能性がある。この N と AdjR の競合関係は pause-café 型複合名詞でも観察することができるのだが、詳細は第 5 章で詳しく論じることにする。

[multi + N]と[multi + A]の共存関係についてまとめると、[multi + N]は主に形容詞化接辞が適用できない N の場合に、[multi + A]の代わりとして現れると言える。[multi + A]では組み合わさる接辞の種類にヴァリエーションが見られたが、[multi + N]もその 1 つだと捉えることができる。したがって[multi + N/A]の形成においては、$[\text{multi } [x]_A]_A$ というメインのスキーマに加えて、組み合わさる接辞に合わせて（ゼロ接辞も含む）以下のようなサブスキーマが想定できる（ここでは紙面の都合上、一部の形容詞化接辞を示すにとどめる）。

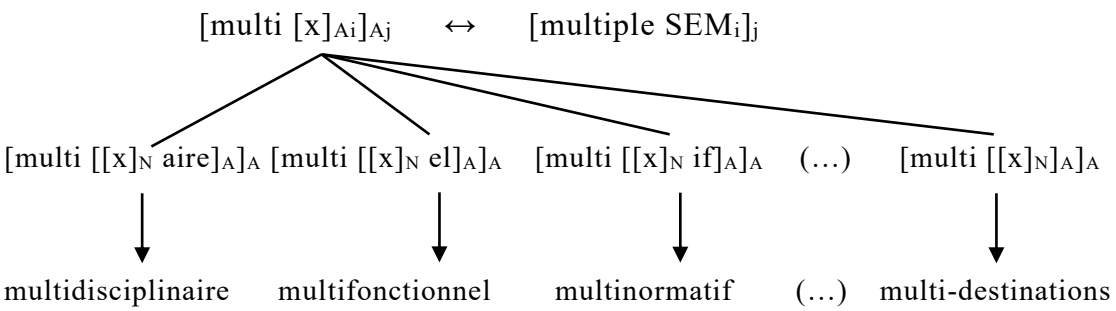


図 9： フランス語の[multi + N/A]のスキーマとサブスキーマ

このように、スキーマは常に単独で機能するとは限らず、複数が同時並行的に適用されたり（i.e. スキーマの結合）、サブスキーマを伴って重層的に構成されたりするものである。語形成においてはこのスキーマを含め、レキシコンに保存されている項目をどのように組み合わせるかということが問題となる。Jackendoff (2002：180)が主張するように、形態部門は接辞付加に関する「規則」を適用する場所ではなく、むしろこのような語

彙「項目」の操作を取り扱う所だと言えるだろう。

2.6. スキーマの多様性：構成素指定の度合い

スキーマや construction の構成素指定の度合いはさまざまである。例えば Jackendoff (2002：174)は英語の “*way*-construction”について、以下のような構造を提案している。

(39) [$_{VP}$ v NP pp] : V pro$_e$’s way PP, 'go PP while/by V-ing'

e.g. Frank drank his way across the country (ibid.)

フランクは（酒を）飲みながら国を渡り歩いた

この construction では動詞、名詞句、前置詞句いずれも語彙的には指定されていない（名詞句は way のみが指定されているが、代名詞は未指定）。したがってこの 3 つのスロットに入る要素の潜在的な組み合わせは、未指定の構成素が 1 つずつのフランス語における[N1 + attitude]や[bio + N2]などよりも格段に多いと考えられる。

英語の “*way*-construction”は動詞連辞を形成するが、これに対して名詞連辞や複合名詞の中にも、構成素の語彙的指定が少なく、抽象度の高いスキーマが想定できるものがある。例えばフランス語の[Num + raisons + PP]（Num は数詞、PP は前置詞連辞）という構造―以降便宜的に「n 個の理由」構造と呼ぶ―は主にネット上の記事タイトルにおいてひとつの定型のように用いられるが、語彙的に指定されているのは raisons の部分のみである。数詞と前置詞連辞（pour lesquelles または de + Vinf.による場合が多数のようである）のスロットは未指定であり、数詞が 2 以上の整数という条件を満たす限り、以下のようにさまざまな組み合わせを実現させることができる。

(40) a. Sept raisons pour lesquelles on souhaite longue vie à Twitter[41]

Twitter に長生きしてもらいたい 7 つの理由

b. Dix raisons pour lesquelles je m'abstiendrai dimanche prochain lors du second tour des régionales en Île-de-France[42]

私が来週日曜のイルドフランス地方選第 2 回投票を棄権する 10 の理由

[41] www.telerama.fr 2016 年 3 月 21 日。

[42] https://blogs.mediapart.fr/ferdinand-cazin/blog/091215 2015 年 12 月 9 日。

c. Vingt raisons pour lesquelles « Wannabe » des Spice Girls a changé la face du monde[43]

Spice Girls の「Wannabe」が世界の様相を変えた 20 の理由

d. Six raisons de découvrir Nice et sa région[44]

ニースとその周辺を観光する 6 つの理由

e. Dix raisons de ne pas zapper Metz-TFC[45]

メッス対トゥールーズ戦をザッピング視聴しない 10 の理由

ただしこれらの構造が統辞規則に整合しているという点では、英語における "*way*-construction"とは異なっている。また意味の面でも、構成性(compositionnalité)に反するような点は特に見当たらない。自由な連辞との違いがあるとすれば、それは本構造が持つ「ラベル」としての性質であろう。新聞の記事タイトルには「説明」と「名付け」の両方の機能が備わっていることが指摘されているが、ネット記事タイトルとして「n 個の理由」構造がよく観察されるのも、そのことと関連している可能性がある。この点については 3.4 節で詳細に取り上げる。

複合名詞で抽象度の高いスキーマを持つ例としてはフランス語の[V + N]型複合名詞が挙げられるだろう。この構造では N が他動詞 V の直接補語という統辞的関係を示す。スキーマとしては以下のような構造が想定できるだろう。

(41) $[[V]_k\ [N]_i]_{Nj} \leftrightarrow [\text{AGENT / INSTRUMENT}_j \text{ of ACTION}_k \text{ on OBJECT}_i]_j$

(Booij 2010 : 38)

ただし V に入る動詞語基（1/2/3 人称単数現在形として用いられる語幹に相当）の音節数には一定の制限が見られることが Villoing (2009)で指摘されている。それによると、観察された動詞語基の大多数が単音節であったという。したがって V のスロットには一定の制限があることになるが、その条件を満たす動詞語基の種類はかなり多く、その V の直接補語となる N には音節数の制限は特に認められないことから、潜在的な構成素組み合わせ可能性は相当な大きさになることが予想される。

---

43 www.20minutes.fr 2016 年 7 月 8 日。

44 www.infotravel.fr/destinations/europe/france/six-raisons-de-decouvrir-nice-et-sa-region/ 2014 年 11 月 26 日。

45 www.ladepeche.fr 2017 年 5 月 13 日。

意味について見てみると、実際の形式が示す対象が V の動作主（人）であるのか、あるいは V を実行する道具（物）であるのか、また道具の場合、それが具体的にどのような形状のものなのは、形式的には明示されていないことが分かる。

(42) a. casse-cou　危険な場所、向こう見ずの人 （動作主）

b. porte-drapeau　旗手、旗立て （動作主／道具）

c. essuie-main　手拭き （道具）

d. essuie-glace　ワイパー （道具）

例えば casse-cou は、「首砕き」という文字通りの意味から隠喩的に「危険を冒す」という意味が導き出されたものであるが、場所を表す場合もあれば人を表す場合もある。同じように porte-drapeau は、「旗を持つ（役割を担う）人」という風に辞書では一般的に説明されるが、実際には「旗を立てるホルダー」、つまり道具を示すことも可能である。また、同じ「何かを拭くための道具」であっても、essuie-main は布巾の形状をしているが、essuie-glace は形状的には布巾ではない。

このことからフランス語の[V + N]型複合名詞はその事物または人が果たす機能や動作だけを標示した外心的複合語(composés exocentriques)であることが分かる[46]。ただ外心的複合語だからといって意味の構成性が全くないという訳ではなく、上で見たようにスキーマ(cf. 41)において構造全体の意味内容は大まかに定められている。スキーマの時点では 2 つの構成素がいずれも語彙的に未指定なこともあり、かなり抽象的な内容である。ある[V + N]が V の動作主であるのか、あるいは V を実行する道具なのかといったことについては、あくまでも実際の V と N の語基の組み合わせが行われて初めて指定される。スキーマの時点での意味内容の抽象度が高めという点では、上で見た未指定の意味関係 R(cf. 22)に通じるものがある。

フランス語の[V + N]型複合名詞の例が示すように、スキーマの抽象度（構成素の指定度合い）と構造のサイズの間には直接的な相関がない。語彙寄りの構造だからと言って抽象度の高いスキーマが不可能という訳ではなく、またサイズの大きい統辞寄りの構造であっても、スキーマにおいて語彙的指定の度合いが高いものもある。

---

[46] 中には porte coupe-feu（防火扉）のように、[V + N]に先立つ形で主要部となるべき名詞を置く（$[N_i\ [V + N_j]_{N/A}]_N$）ケースもあるが、[V + N]単独で現れる場合と比べると少数派である。

サイズの大きい構造ながらスキーマの構成素指定度が高いと思われる例として、フランス語の Tu es belle comme X（君は X のようにきれいだ）という構造を取り上げてみたい。この表現は主に女性の美しさを褒めるために用いられるが、皮肉が効いた例を含め、X にさまざまな名詞連辞(NP)を置くことができる。その一方でこの連辞を構成する残りの部分はある程度固定されているように見える（ただし belle の代わりに jolie が現れることもある）。以下にインターネット上や歌の歌詞で観察された例の一部を挙げておく。

(43) a. Tu es belle comme une rose

君はバラのようにきれいだ

b. T'es {belle / jolie} comme un cœur

君はハートのようにきれいだ（かわいい）

c. T'es belle comme un camion

君は大型トラックのようにきれいだ

d. Tu es belle comme le fond d'une poubelle

君はゴミ箱の底のようにきれいだ

e. T'es belle comme un menu mcdonald's… En photo c'est appetissant. En vrai c'est dépitant[47]

君はマクドナルドのメニューのようにきれいだ…写真では欲をそそるが、実際には残念な内容だ

f. T'es belle comme un garage avec un toit // T'es belle comme une assurance vie // Tu m'terrifies // t'es belle comme un écureuil qui couve ses noix // T'es belle comme un CODEVI[48]

君は屋根付きガレージのようにきれいだ。君は生命保険のようにきれいだ。君は僕を怯えさせる。君はクルミを抱え込んだリスのようにきれいだ。君はCODEVI（貯蓄預金の一種）のようにきれいだ。

最後の歌詞からの引用はスキーマを効果的に使用した例として特に興味深い。こ

[47] « http://jaimelagrenadine.com/post/138398603415/tes-belle-comme-un-menu-mcdonalds-en-photo » 2016 年 1 月 31 日

[48] Daran, *Belle comme* (2007 年)の歌詞より。二重スラッシュは改行位置を示している。

の楽曲では上に挙げた部分以外にも幾度にもわたり[tu es belle comme NP]が出現するが、形容詞 belle と意味的に結び付きにくいような名詞句がいずれの未指定部分にも配置されることで、「君がきれいだ」という命題と、その裏にある影の部分（社会不安など）との間のコントラストを強調する効果がもたらされているように見える。Tu es belle（君はきれいだ）という命題が必ずしもその字義通りに解釈されなくなるという傾向は、本構造が統辞規則からもたらされるのとは別の、意味的に特殊な構造へとシフトしていることを示唆している。ただし字義通りの解釈の余地も未だ残されている(cf. 43a-b)ため、[tu es belle comme NP]が完全に成句化しているとは言えない。成句に対して、統辞的規則性があり、かつ意味の構成性が認められるものはコロケーションと呼ばれるが、本構造はコロケーションの一種でありながら、そこから成句へ移行する初期段階に位置している可能性がある。

スキーマにおける構成素の指定度合いと、スキーマによって形成される構造のサイズとの間の関係性をまとめると以下の表のようになるだろう。

表 2： スキーマのサイズと構成素指定の度合い

		構成素指定の度合い	
		高	低
構造のサイズ	語彙寄り	[pause + N2]	[V + N]型複合名詞
	統辞寄り	[tu es belle comme NP]	[Num + raisons + PP] [Plus X, plus Y]

同じ語彙寄りの構造であっても、構成素の一部が指定されている pause-café 型複合名詞がある一方で、[V + N]型複合名詞のような構成素の指定度が低いものもある。同様に、統辞寄りの構造においても[tu es belle comme NP]のような未指定のスロットが比較的小規模なものから、「n 個の理由」構造や相関的比較構文のように構成素組み合わせおよびその内部構造に一定の自由度が認められるものまで、構成素指定の度合いは構造のサイズにかかわらずさまざまである。

2.7.　語彙―統辞：二次元的連続体の可能性

2.7.1. 構成素指定の度合いと成句度

スキーマによって形作られる構造は、それが語彙サイズであろうと連辞サイズであろうと、その構成素に関する何らかの指定を伴う。つまり全く自由な組み合わせではなくなる訳だが、かと言って完全に凝結している訳でもない。このような特性を示す諸構造は、語彙―統辞間の連続体にどのように位置づけるべきなのだろうか。

この点に関して Wulff (2013：286-287)は、「スキーマ化(schematization)」あるいは「脱語彙化(delexicalization)」(ibid.)の度合いと「成句性（idiomaticity）」(ibid.)の度合いとを区別することを提案している。この 2 つの指標を英語におけるスキーマ化を例にしてまとめたのが以下の図である。

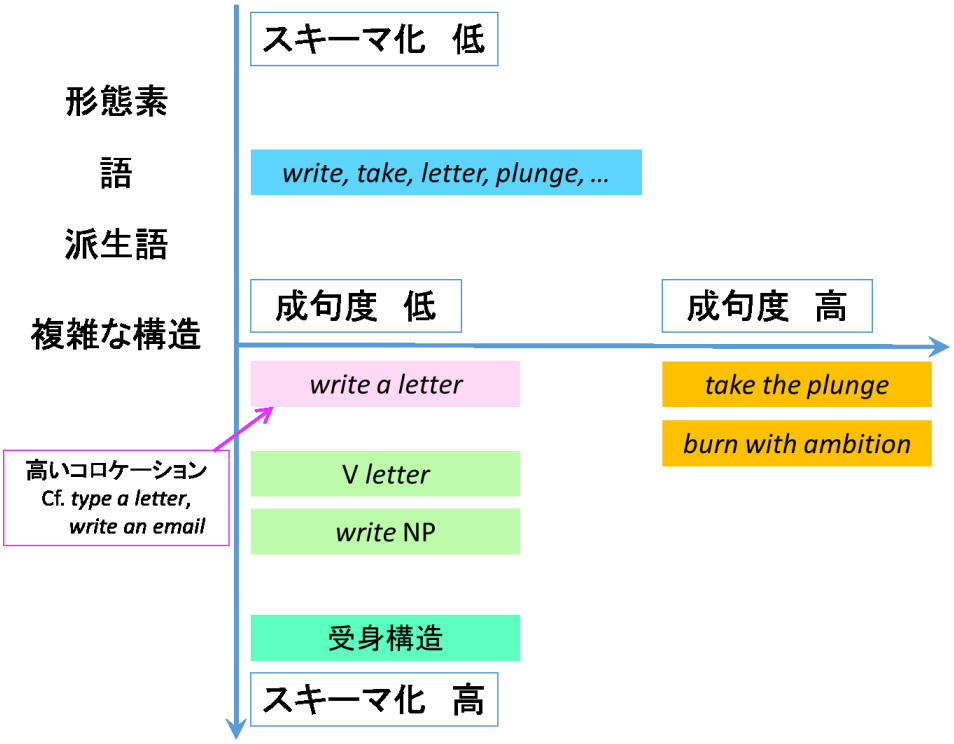


図 10：スキーマ化と成句度の関係性

(Wulff 2013：287 を元に筆者が和訳および説明を加筆)

縦軸はスキーマ化の度合いを示している。これは前節までで取り上げた「構成素指定の度合い」に対応する指標である。例えば write や letter のような単純語は、形式面での未指定要素を持たず、スキーマ化の度合いは低い。一方で英語の受身構造のスキーマでは構成素はいずれも未指定であることから、スキーマ化の度合いが高いと言える。他方、横軸は「成句性（idiomaticity）」の度合いを示したものである。Take the plunge（飛び込みをする→思い切ってやってみる）や burn with ambition（情熱に燃える→心血をそそぐ）にはいずれも意味の構成性が認められない。成句の内部構造を統辞的にも意味的にも分析できないという点を考慮すると、成句性の度合いは先に挙げた「凝結の度合い」(cf. 1.5 節)と言い換えることができるだろう。

この分析で興味深いのは、write a letter のようなコロケーション（凝結はしていない）と take the plunge のような凝結度の高い成句とを区別している点である。図で示されていることからも分かるように、成句度の高い構造はスキーマを作りだす構造群（cf. 縦軸）から一定の距離を置いて存在している。つまり write a letter のようなコロケーションが[V + letter]や[write + NP]のような何らかのスキーマをもたらす潜在的な可能性を持っているのに対し、凝結した成句がスキーマ化のプロセスに寄与する可能性は低いということである。また、成句度が高まれば高まるほど脱語彙化（スキーマ化）の可能性は低くなることも指摘されている(ibid.)。

2.7.2. 「レ」の字型モデルの可能性

たしかに、スキーマの抽象度が高いということはそれだけ構成素の組み合わせ自由度が高いということでもあり、結果として凝結とは逆の性質、つまり生産性を実現することにつながると考えることができるだろう。ただ一方で Wulff のこの分析には 2 つの問題がある。

1 点目は凝結した構造の位置づけがあいまいな点である。ここでは脱語彙化について注目する一方で、逆の動きである語彙化については積極的な言及が成されていない。統辞と語彙の間に双方向のシフトが想定されることを指摘した高田(1998)の議論（cf. 1.2 節）を踏まえれば、ここで語彙化の動きについても考慮するべきであろう。実際 take

the plunge が統辞的・意味的に分析不能なことから、これはむしろ語彙化していると考えられる。一方で、縦軸においてこれと同じレベルに位置づけられている write a letter というコロケーションはあくまで自由な動詞連辞である。したがって両者をと同じレベルに位置づけるのは妥当ではない。Take the plunge や同じく語彙化している burn with ambition については、むしろ write などの単純語と同列に置くべきではないだろうか。

もうひとつの問題は、スキーマ化の度合いが低い構造における成句度に関してである。Wulff は動詞句レベルでの成句化について取り扱う一方で、語形成レベルにおける成句化（凝結）の可能性についてはふれていない。すでに指摘したように、語形成レベルにおいても構成素の指定度合いは構造によってまちまちである。ただ、より詳細に見ていくと成句度（凝結度）とスキーマ化の度合いとの間に相関があることが示唆される。

例えば Hôtel-Dieu のような凝結した[N1 + N2]は成句度が高くスキーマ化の度合いは低い。統辞的・意味的分析が困難であるうえに、構成素の組み合わせが Hôtel と Dieu で固定されているからである。それに比べて（同じくフランス語の）[multi + N]は 2 つの構成素のうち一方のみ指定されているという点で、スキーマ化の度合いは Hôtel-Dieu に比べると高い。成句度についてはどうかと言うと、構造的には現代フランス語の統辞規則にそぐわない「限定―被限定」の連鎖である一方で、意味的な規則性は認めることができる。したがって完全に凝結した構造ではなく、Hôtel-Dieu に比べると成句度は低いと言える。

ここから示唆されるのは、同じ複合名詞であっても凝結度が高ければ高いほどスキーマ化の可能性が低く、逆にそこまで凝結していなければ、それだけスキーマ化される余地が生まれるということである。この傾向は英語の動詞連辞についての上掲の Wulff の指摘にも対応する。

Wulff 自身が指摘している「成句度が高いとスキーマ化の可能性は低くなる」という点に加え、ここで指摘した「統辞から語彙へのシフトを考慮する必要性」および「語形成レベルでも成句度とスキーマ化の間に相関関係が示唆される」という 2 点を踏まえ、本稿ではスキーマ化と成句度に関して Wulff が提示した 2 軸の関係を、以下のような「レ」の字状の図として書き換えることを提案する。

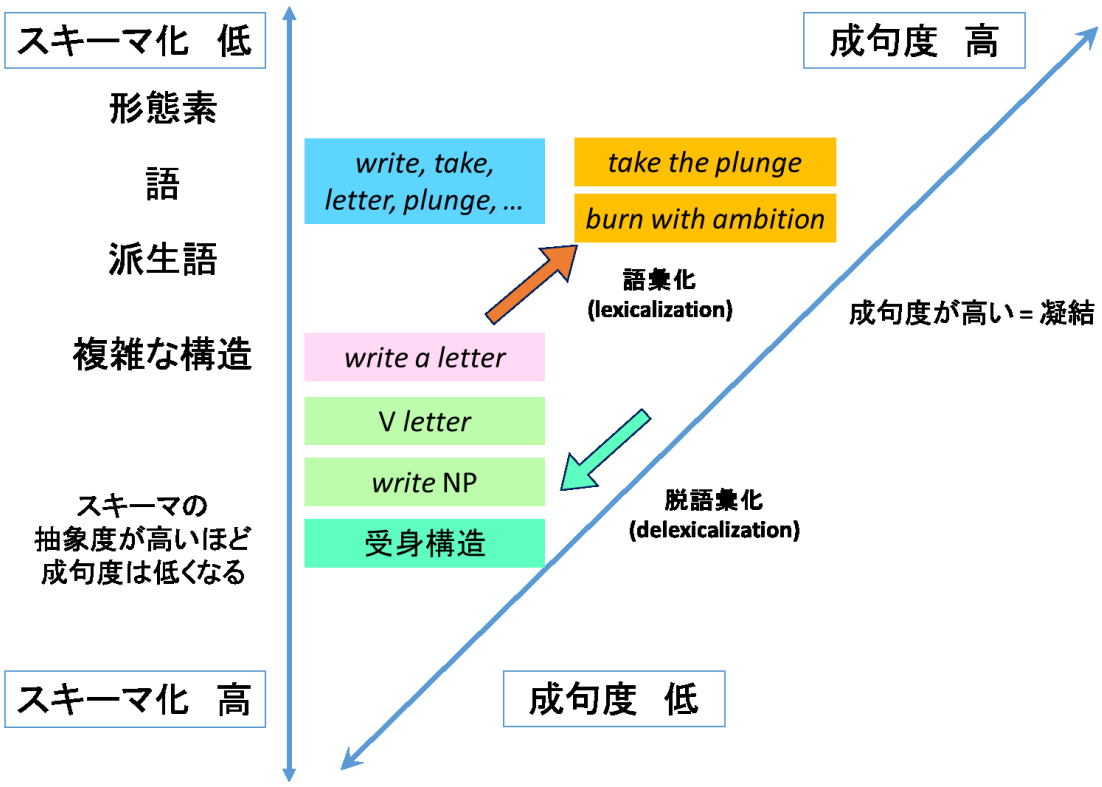


図 11： スキーマ化と成句度の関係性（筆者による改良版）

この図の特徴は、元の図ではスキーマ化の軸に対し垂直に配されていた成句度の軸を、スキーマ化が高い方に向かってすぼまるよう斜めに配置したことである。これによってスキーマ化の度合いが高いと成句化の可能性が低いという傾向を表すことができる。そして語彙化および脱語彙化に関しては、この成句度の軸に平行になるような動きとしてそれぞれ示した。Take a plunge をはじめとする語彙化した動詞連辞は、write a letter のような自由な連辞の位置から斜め右方向にシフトする。真上方向にシフトしないのは、この構造が凝結しており、スキーマ化に寄与する可能性が低いという Wulff の指摘を反映した結果である。一方真横方向のシフトでないのは、当該構造が実際には連辞としてではなくむしろ write や letter と同じような語彙的項目へと変化したことを考慮したためである。反対に脱語彙化については、徐々に成句度が低くなると同時にスキーマ化の度合いが高くなるという、右上から左下方向への矢印で示すことができる。

2.7.3.「レ」の字型モデル:フランス語の場合

前節では Wulff の提案した図表をたたき台にして、構成素指定の度合いと成句度の関係をより正確に説明するための「レ」の字型のモデルを提案した。今度はこの図を表 2 (cf. 2.6 節)で取り上げたフランス語の 5 つの構造に適用することを通して、語彙―統辞間の関係性について考えてみたい。以下にその表を再掲する。

表 2(再掲): スキーマのサイズと構成素指定の度合い

		構成素指定の度合い	
		高	低
構造のサイズ	語彙寄り	[pause + N2]	[V + N]型複合名詞
	統辞寄り	[tu es belle comme NP]	[Num + raisons + PP] [Plus X, plus Y]

まず「語彙寄り」に分類された[pause + N2]と[V + N]について見てみたい。語彙―統辞間の連続体の中での位置づけは、両者ともに複合名詞であるという点で、一見すると同じレベルに位置しているように見える。しかし両者のスキーマ化の度合いは同じではない。スキーマ化の度合いが低ければ低いほど語彙寄りになり、高ければ高いほど統辞寄りになることを踏まえると、厳密には[pause + N2]の方が[V + N]よりも語彙寄りに位置していると考えることができるだろう。

同じことは統辞寄りに分類した[tu es belle comme NP]と[Num + raisons + PP]、[Plus X, plus Y]についても言えるだろう。未指定のスロットがより多い後者 2 つの方が[tu es belle comme NP]よりもさらに統辞寄りに位置することが示唆される。さらに、純粋に未指定のスロットの数という点で比べると、統辞寄りであるはずの[tu es belle comme NP]よりも複合名詞を形成する[V + N]の方がスキーマ化の度合いが高く、結果として前者よりも後者の方が統辞寄りのスキーマとして位置付けられる可能性さえある[49]。これを踏まえて図 11 と同じような図にこの 5 つの構造を配置すると以下のようになる。

[49] もちろん両者の未指定スロットのサイズは同じではない。前者ではスロットのサイズは名詞連辞相当である一方、後者では基本的に語彙素(V と N)である。ただし[V + N]では carnet de santé(健康手帳)のように統辞的に複雑な形式が N に入ることもあり得る(e.g. protège carnet de santé 健康手帳カバー)。

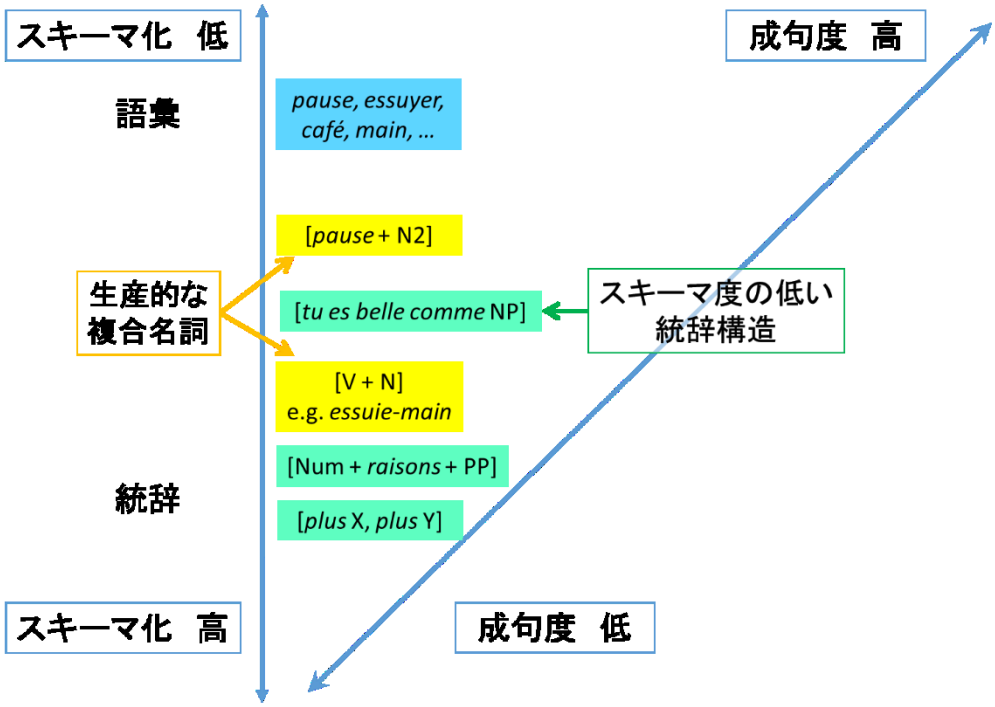


図 12：フランス語の 5 種類のスキーマの位置づけ

場合によっては複合名詞の方が一部の動詞連辞よりもスキーマ化の度合いが高いということは、語彙と統辞の境界がそれだけ曖昧であることを示唆する。複合名詞だからと言ってこれらすべてが統辞構造よりも語彙的指定度の高いスキーマを呈するとは限らないのである。

2.7.4. 語彙化、構文化、脱語彙化

ところで、上の図で留意したいのは[tu es belle comme NP]は cessez-le-feu（戦闘を中止せよ＞ 停戦）などと違い、完全に語彙化した凝結構造ではないという点である。この構造は先述のように意味の構成性が若干失われつつあるものの、統辞的にも意味的にも基本的には規則的なままであり、write a letter のようなコロケーションの域をまだ完全には出ていないと考えられる。一方の cessez-le-feu は成句度の高い構造であり、図中では右上方向に位置づけられるだろう。この右上のエリアには Hors de l'Église, point de salut（教会なくして救いなし：cf. 1.7 節）や On ne fait pas d'omelette sans casser des

œufs（卵を割らねばオムレツはできない＞ 何らかの犠牲なくして事は成せない）のような格言・ことわざも位置することになるだろう。

統辞規則一般をスキーマ化の究極（図中の最下部）として位置付けると、そこから右上方向にシフト（語彙化）するのが cessez-le-feu や Hors de l'Église, point de salut のような凝結連辞である。一方コロケーションの一種とも目される[tu es belle comme NP]は、右上ではなく真上方向にシフトしたものと考えることができる[50]。[tu es belle comme NP]のような構造は統辞的・意味的規則性をほとんど変えることなく、構成素の組み合わせ可能性だけが変化している。この真上方向へのシフト、つまり構成素の語彙的指定の度合いがより高まったスキーマがもたらされることを便宜的に「構文化」と呼ぶことにする。図にすると以下のようになる。

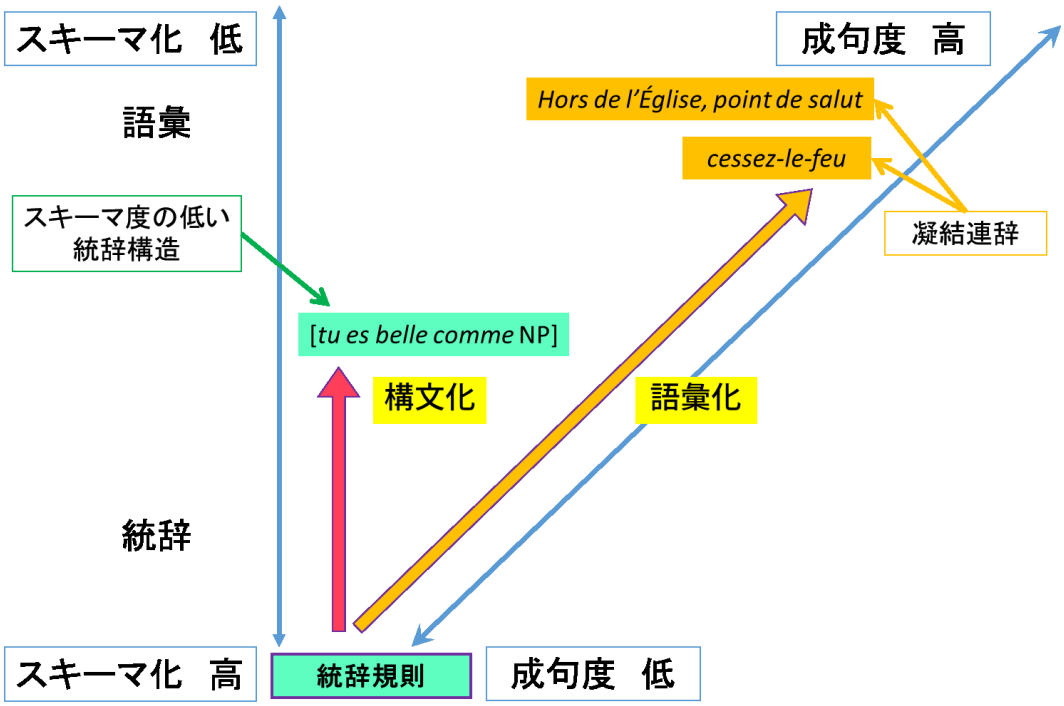


図 13： 構文化と語彙化

[50] これらは「部分的凝結(figement partiel)」として説明されることもあるが、その見方は必ずしも適切ではない。たしかに構成素の一部が指定されている点が凝結を示唆するが、かと言って必ずしもそこに統辞的・意味的不規則性が認められる訳ではない。[tu es belle comme X]のように、統辞的・意味的規則性を保ちながら構成素の一部を未指定とする構造も可能である。部分的凝結があるとすれば、下で改めて取り上げる[hors de NP, point de salut]のような、すでに凝結していた連辞を再分析した結果もたらされた生産的な構造がそれに該当するだろう。

ちなみに構文化(constuctionalization)という概念は Traugott & Trousdale (2013)で提案されているが、その定義は「新たな形式と新たな意味の組み合わせの創造(the creation of $form_{new}$-$meaning_{new}$ (combinations of) signs)」(p.22)、そして「スキーマ性・生産性・構成性の度合いの変化を伴う(It is accompanied by changes in degree of schematicity, productivity, and compositionality.)」とあるように、かなり広い。本稿における「構文化」は Traugott & Trousdale が想定するもののうち、統辞的・意味的規則性をおおむね保ったままで生産性に変化をきたす（構成素の語彙的指定の度合いが高まる）現象をもっぱら示すことにする。

さらに、スキーマ度の低い統辞構造は統辞規則からの構文化だけでなく、凝結した連辞からの脱語彙化によってももたらされる可能性がある。実際 Hors de l'Église, point de salut という格言をもとに、さまざまな[hors de NP, point de salut]構造が形成されていることを 1.7 節で確認した。Wulff (2013)は凝結構造がスキーマ化に寄与する可能性は低いと考えているが、この[hors de NP, point de salut]をはじめ、特定の凝結表現をベースにしたと思われる生産的な構造は実際には少なからず存在する。Tel père, tel fils（この父してこの子あり）のような[tel N1, tel N2]構造や、Plus on est de fous, plus on rit（人数が多いほど、より笑える（楽しい））のような[plus X, plus Y]構造はその最たる例であろう[51]。このような脱語彙化によるシフトも考慮すると、以下の図のような関係性が浮かび上がる。

[51] 実際ことわざではこのような相関的な二項構造(structure binaire)がよく観察される。ことわざ表現の統辞・意味構造については Kleiber (2000)や Mejri (2001)を参照。

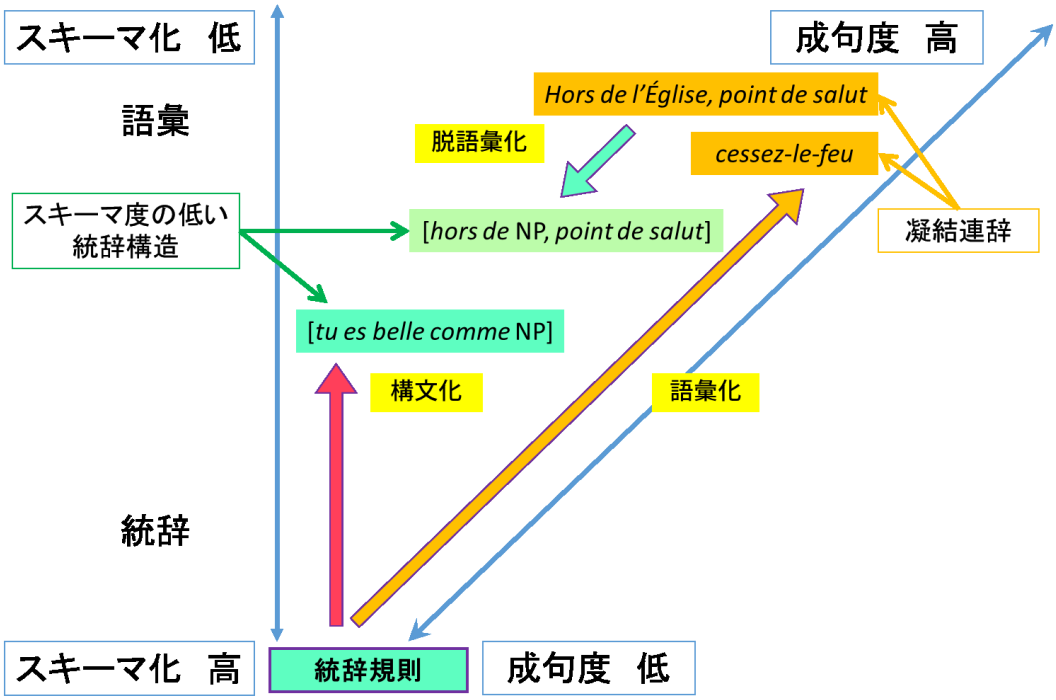


図 14： 構文化と語彙化および脱語彙化

ここから示唆されるのは以下の 2 点である。1 点目は、語彙―統辞間の連続体的関係は、実は線的ではなく二次元的であるということである。従来、語彙―統辞間のシフトは語彙化と脱語彙化という単一線上の双方向の動きとして説明されてきた。これは上図においては成句度の軸に対応するものである。しかし統辞規則とは異なる仕組みで語形成における生産性が担保される可能性を、この単一線上で説明することは難しい。なぜなら成句度はあくまでも統辞規則と意味的規則性に照らした際の逸脱度を示したものであり、そこに「統辞規則には準じているが、構成素が部分的に指定された状態で生産性を実現する構造」や、「統辞規則からは逸脱しているが、何らかの規則性を持って生産性を実現する構造」のようなものはそもそも想定されないからである。

そこで新たに生産性に関わる指標、つまりスキーマ化の度合いという軸を加えることで、コロケーションに準じた[tu es belle comme NP]のような構造や、現代フランス語の統辞規則に準拠していない[hors de NP, point de salut]のような構造をより正確に位置づけることができるようになる。一方で成句度の指標は排除するのではなく、スキーマ化の度合いと相関する指標として位置付けることで、語彙と統辞の間で見られる 3 つの動き

（語彙化、脱語彙化そして構文化）を一体的に捉えることが可能となる。語彙―統辞間の連続体に生産性（i.e. 規則性）という軸を交える必要性についてはすでに 1.7 節でも指摘したが、前節から本節にかけて検討してきたスキーマ度と成句度の間の関係性からも、生産性とそれを担保する仕組みが語形成において重要な位置を占めていることが結果的に示された。

上の図によって示唆されるもう 1 つの点は、スキーマは統辞規則と凝結構造の両方から形作られるということである。統辞規則からは構文化によって、凝結構造からは脱語彙化によって、生産性を実現する仕組みとしてのスキーマがそれぞれ供給される。またスキーマによって形成される構造のサイズの大小にかかわらず、構文化も脱語彙化も起こり得る。

例えば動詞とその直接補語から成る[V + N]型複合名詞は、動詞連辞の構造をかなり反映した構造であることから、特定の凝結構造が抽象化したと言うよりはむしろ統辞規則をベースにした上で構文化した構造だと言える。言い換えれば統辞規則を語形成の領域に持ち込んだようなものである。同じように couteau à beurre（バターナイフ）のような[N1 + à + N2]型複合名詞や、fermeture estivale（夏季休業）のような[N1 + AdjR]型複合名詞はいずれも名詞連辞をベースに構文化した構造である[52]。

それとは対照的に Penelope gate のような[X + gate]構造(cf. 2.8 節)は、Watergate という特定の凝結構造を異分析した結果、脱語彙化したと考えられる。同様に[pause + N2]や[N1 + spécial + N2]も統辞規則にそぐわない部分があることを考えると、これらも何らかの凝結構造をベースにしている可能性がある（さまざまな[pause + N2]が pause-café という個別形式から発展的に形成された可能性については 1.8 節で確認し

[52] [V + N]も[N1 + à + N2]も厳密には連辞そのままの構造という訳ではない。前者は V の補語としての N が無冠詞であり、後者の場合は N2 が無冠詞である。これは複合名詞が特定の事物に対する「名付け」と「説明」の両方の機能を有していることに起因する（「名付け」と「説明」の区別については 3.4 節で詳しく取り上げる）。複合名詞であるためには、補部を無冠詞であることが（高度に凝結した構造を除き）必須要件であり、たとえ統辞規則に最大限準拠したタイプであってもそれは同じである。したがって統辞規則と複合名詞の対応を検討する上では、無冠詞という点は割り引いて考える必要がある。そのように捉える限りでは、[V + N]は動詞連辞の、[N1 + à + N2]は名詞連辞の構造を色濃く反映した上でそれぞれ構文化したものだと見なすことは可能だと考える。なお[N1 + AdjR]については 1.4 節でもすでに少しふれた通り、形式上は名詞連辞と変わらないものの、実際には構成素組み合わせ可能性に一定の制限がかかることがある（詳細は 5.7 節を参照）。そういう意味でこれも構文化のひとつだと考えられる。

た)。

統辞規則と凝結構造の両方からスキーマが供給されるという図式を複合名詞と連辞の 2 つに整理して示すと、以下のようになる。

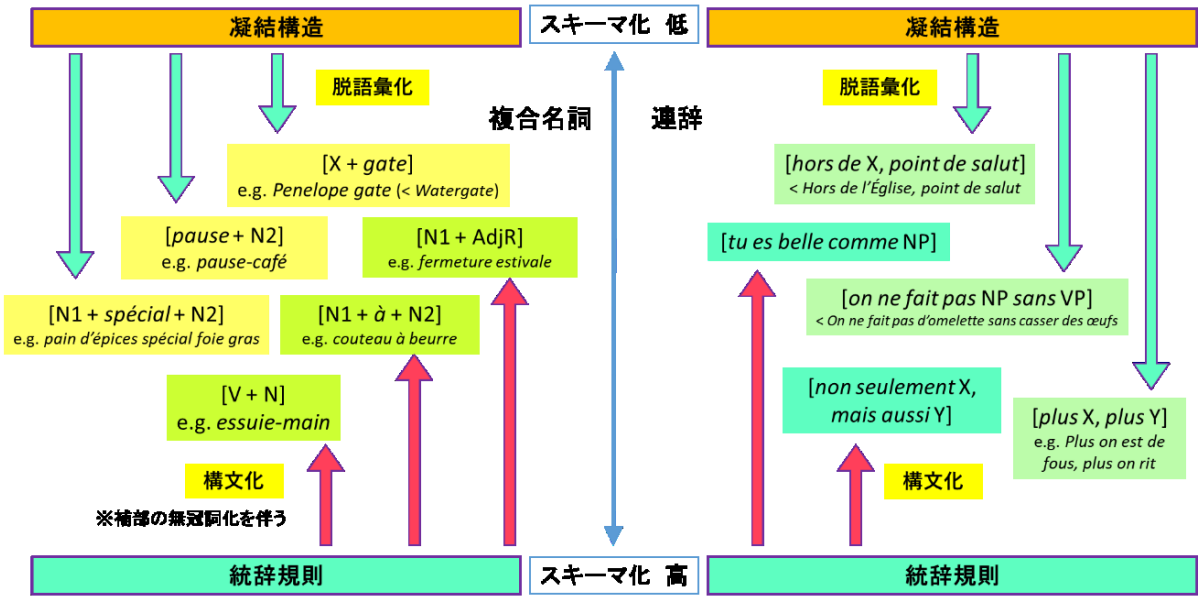


図 15： 複合名詞と連辞におけるスキーマの供給

図の左半分では複合名詞において凝結構造と統辞規則の両側からスキーマが供給される様子を示している。統辞由来のスキーマが必ずしも凝結構造由来のものよりもスキーマ化の度合い(構成素指定の度合い)が高いとは言えないようである。特に凝結構造由来と思われる[N1 + spécial + N2]と、統辞由来の[N1 + à + N2]が、スキーマ化の度合いにおいては同じレベルに位置し得るという点は興味深い(第 6 章でこの 2 種類の構造の間の互換性について改めて言及する)。

一方、図の右側はその連辞版である。ことわざ等から脱語彙化したと思われるスキーマには、未指定のスロットが 1 か所に留まるもの(i.e. [hors de NP, point de salut])もあれば、2 か所以上にわたるものもある[53]。中には[Plus X, Plus Y]のように、一般化が進ん

[53] 参考までに[on ne fait pas NP sans VP]の例を挙げておく。

- On ne fait pas d'aveugles sans casser des yeux　目がやられなければ失明はしない(Coluche, *Et vous trouvez ça drôle !*, 2000 年)
- On fait pas de planète sans casser du CO2　二酸化炭素を壊さねば地球はできない　> CO2 を減らす努力なしに地球の未来はない
  (Marcel et son orchestre, *CO2* の歌詞の一部, 2006 年)

このスキーマは on ne fait pas d'omelette sans casser des œufs　(卵を割らねばオムレツはできない

だ結果、スキーマの典拠であった（と思われる）凝結構造をもはや特定することが難しくなったものもある。他方、自由な連辞が構文化したものについても、未指定部分が比較的限られている[tu es belle comme NP]のようなスキーマがある一方で、未指定のスロットを複数持ち、かつそこに入る要素のサイズにも幅がある[non seulement X, mais aussi Y]のようなスキーマ（X および Y には単一の名詞から文単位の要素（動詞連辞）までさまざまなサイズの要素が入り得る）もある。

2.7.5. 語彙―統辞間の二次元的な連続体：まとめ

このようにスキーマは、それが複合名詞を形成するのか連辞を形成するのかにかかわらず、凝結構造と統辞規則の両側から供給される。前者からは脱語彙化によって、後者からは構文化によってスキーマが形作られる。ここにさらに成句化（凝結）という別の動きも考慮すると、語彙―統辞間で展開される二次元的な連続体のすがたが浮かび上がってくるのである。その 3 つの動きを 1.7 節で提案した図(cf. 図 3)に落とし込んだのが以下である。

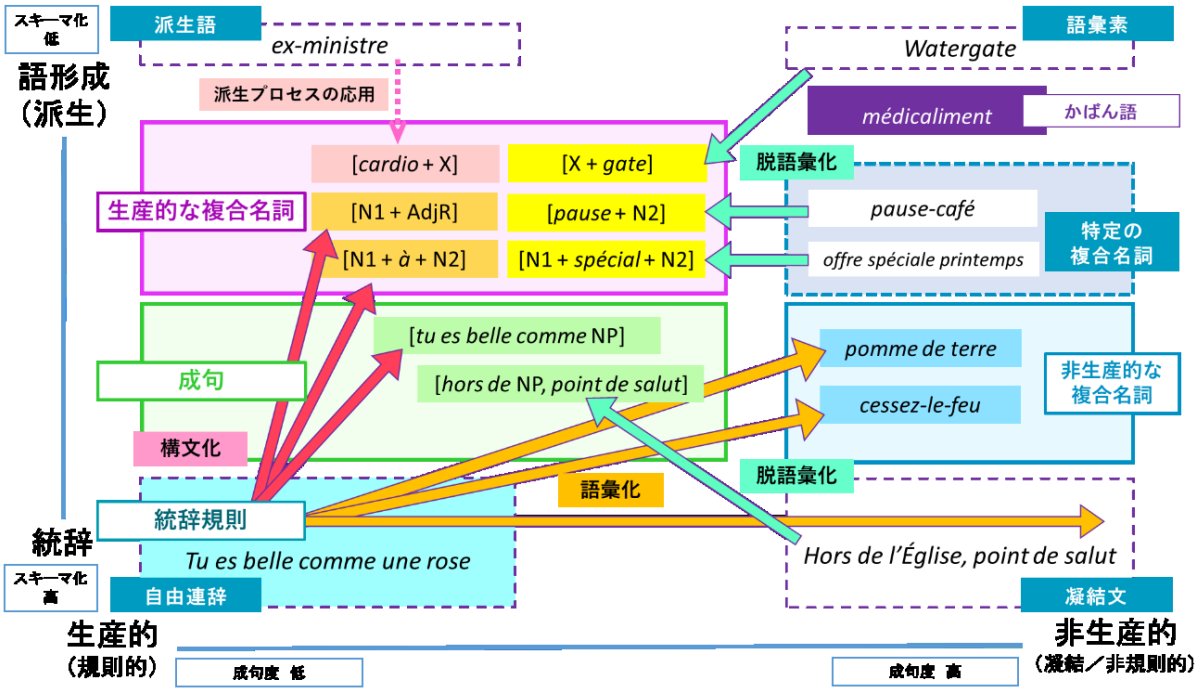


図 16：「語彙―統辞」・「生産性」の二次元的連続体における構文化・語彙化および脱語彙化

> 何らかの犠牲なくして事は成せない）を基に形作られたものと思われる。

縦軸は語彙（語形成）と統辞の連続性を、横軸は生産性を示している。前者は図 14 における「スキーマ化の度合い」と、後者は同図における「成句度」に対応する。なお今回の図ではこの 2 つの軸が配置の都合上、横につぶれた L 字型になっているが、実際には図 14 のような「レ」の字型と同じものである。

統辞規則と、それによってもたらされる自由連辞は最も規則的な統辞的単位として左下に位置づけられる。ここから右側、つまり凝結の方向にシフトするのが語彙化である。語彙化は複合名詞レベルから文章（発話）レベルまで、異なる規模で起こり得る。これに対し、同様に規則的な統辞構造を出発点としつつも、完全な凝結構造ではなく構成素の一部だけに制限をかけたスキーマをもたらすのが構文化である。スキーマはある程度の生産性を実現するため、上図では中央付近にいずれも位置することになる。スキーマが作り出す単位の規模は複合名詞レベルから成句レベルにまで及ぶ。この構文化と相似形を成すような流れが脱語彙化である。これは凝結した構造やある特定の形式からスキーマを作り出す流れである。スキーマの元となる要素は Watergate のような単純語（本来は分析不能な語）から Hors de l'église, point de salut のような発話レベルまで多岐にわたっている。結果として生産的な複合名詞や成句が構文化と同様にもたらされる。なお、実際には図 12 や図 14 に表したように、スキーマ化の度合いにおいて複合名詞と成句はかなりオーバーラップしている。図 16 では便宜的に両者の配置を明確に分けているが、実際には両者がかなり入り乱れた形で配置されることになるだろう。なお cardiologie や biodiversité のような新古典的複合語に関しては、統辞ではなく派生プロセスの方に依拠する形でスキーマがもたらされていると考えられるため、上図の中では ex-ministre（前大臣）のような派生語から複合名詞がもたらされる流れとしてこれを表している。

このように、生産性という軸を交えながら語彙―統辞間の連続体的関係を見ることによって、語形成における生産性の実現の仕組みをより詳細に説明することが可能になるのである。生産性を実現するスキーマは統辞サイドと語彙サイドの両側から同じように供給され、既存の統辞規則がカバーしていない、いわゆる「新しい統辞法や合成法」（cf. 高田 1998：243）としての複合名詞や成句の形成を実現している。スキーマが占めるこ

のエリア（上図の中央部分）は、語彙部門と統辞部門がそうして互いにぶつかり合う場所であり、そこでは安定した規則とも静的な凝結構造とも性格を異にする、新しい構造が生み出される余地を常にはらんでいる。その点で言語の動的な性質を垣間見ることのできる場所であると言えるだろう。

2.8. スキーマと類推

1.6 節において、形態的な生産性は Bauer (2001)が「規則による統率性(rule-governedness)」と呼んでいる性質によって特徴づけられると指摘した[54]。それと対照的なのが類推(analogy)による語形成である。生産的な語形成は抽象化されたパターンを基に実現されるが、類推は実在する語彙項目を参照することで実現する。Bauer (2001)は類推の特徴として「規則を変更する(rule-changing)」性質を挙げ、生産的な語形成と区別した。

しかしながら実際には、Bauer 自身も認めているように、生産的な語形成と類推を明確に区別することは難しい。両者はむしろ連続体的な関係にあると考えられる。なぜなら生産性を支えるスキーマも、既存の語彙項目を出発点にしているという点(cf. 2.2 節)で類推と同じだからである。Booij (2010 : 89)も指摘しているように、両者は抽象化の度合いの点で異なっているに過ぎない。

例えば crème lunaire は文字通りに訳すと「月のクリーム」ということになるが、実際には月明りによる紫外線から肌を守るためのクリームである。これは crème solaire（太陽のクリーム ＞ 日焼け止め）を参照元とする類推で、solaire を、その対義語である lunaire に置き換えることで成り立っている。crème lunaire が実際にどのような機能を持つクリームであるかは、crème solaire が「日光から肌を守る」クリームであるという意味（語彙情報）を参照することで理解できる。その参照は両者を等位接続などの形で示したり(cf. 44a)、あるいは参照元たる crème solaire をも同時に想起させるような説明を crème lunaire に対して付すこと(cf. 44b)によって行われる[55]。

---

[54] CM のアプローチでは、形態的な生産性は「規則(rule)」というよりは、それぞれの語彙項目からもたらされた語形成上の「規則性(regularity)」によって実現すると考える。言い換えれば、生産的な語形成は「スキーマベース(schema-based cf. Booij 2010 : 89)」で実現されるということになる。

[55] 類推元の形式が言語的に常に明示されるとは限らない。仮に「月光焼け止め」と聞いた受け手が

(44) a. Il faut mettre de la crème lunaire et pas solaire pour les coup de lune !

(www.jeuxvideo.com/forums/42-51-40048656-1-0-1-0-creme-solaire-la-nuit.htm 2015 年 7 月 30 日、下線は筆者)

月の光になら日焼け止めじゃなくて月光焼け止めを塗らなきゃ！

b. Dans un (faux) documentaire, Rosapark lance la moon cream. Une crème lunaire qui protège les coureurs des coups de lune.

(www.cbnews.fr 2016 年 11 月 23 日、下線は筆者)

ドキュメンタリー風動画の中で Rosapark は moon cream を取り出している。これはランナーを月の光から守るための月光焼け止めクリームである。

この例のように、一時的な類推による形式の成立においては、その参照元である既存形式の支えが重要な役割を負っている。図 17 に示したように、このプロセスにおいてスキーマによる抽象化は想定されず、あくまでも既存の特定の形式に依存することで実現する現象であると言える。

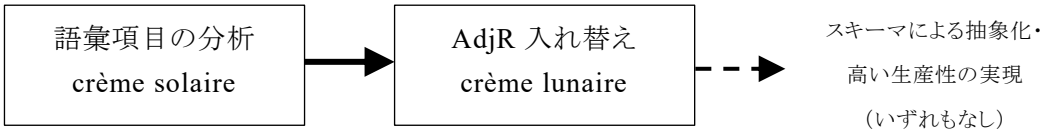


図 17： 類推による crème lunaire の形成

ほかに類推の例としてよく引き合いに出されるのが Watergate（ウォーターゲート（事件））のような[X + gate]構造であるが、比較的高い生産性が認められることから、単なる類推の域にとどまっていない可能性がある。この構造は元々は 1972 年に Watergate という名の建物（米民主党本部）で起きた盗聴事件に端を発する政治的スキャンダルを示していたが、語構造に分析が加えられ、Water を別の語基に取り替えることで「X に関する政治スキャンダル」という意味の新語を形成するようになったものである。以下に最近形成されたと思われる例をいくつか挙げる。表記法（スペースやハイフンを付す

「日焼け止めではなくて？」というようなことを脳裏に浮かべたりするのであれば、crème solaire への参照が結果的に成されていることになるだろうが、実際に発話としてそれが現れない限り、類推元への参照の有無を判断するのは難しい。

か否か）には揺れが見られる。

(45) a. Choi Soon-sil gate （韓国の朴槿恵元大統領の知人、崔順実氏にまつわる政治スキャンダル： 2016 年）

b. Penelope Gate （フランスのフィヨン元首相の夫人ペネロプ・フィヨン氏にまつわる政治スキャンダル： 2017 年）

c. Russia Gate （アメリカのトランプ政権とロシア政府との密接な関与に関する疑惑： 2017 年）

これらがいずれも類推によって形成されたと仮定した場合、Watergate という特定の形式が常にその参照元として想定される必要がある。しかしながらこの[X + gate]構造が少なからず生産性を実現していることを考慮すると、当該構造の形成の度に Watergate という特定の形式を参照する必要性が本当にあるのかどうかは微妙と言わざるを得ない。むしろさまざまな[X + gate]の実現形式（そこにはもちろん Watergate も含まれるだろう）の存在が、構造の抽象化を可能にしていると考えられる。その結果としてもたらされるスキーマは以下のようになるだろう[56]。

(46) $[[x]_{Ni}\ [gate]_{N}]_{Nj} \leftrightarrow [\text{political scandal pertaining to SEM}_i]_j$

(Booij 2010 : 90)

全体の形成過程を図にすると以下のようになる。上の crème lunaire の場合とは異なり、スキーマを介して生産的な形成が実現可能と考えられる。

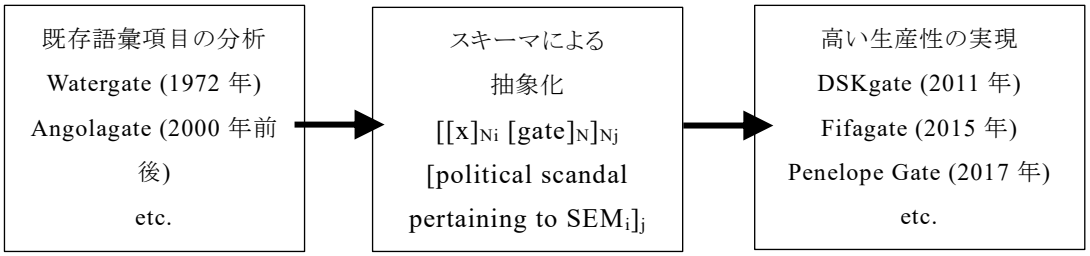


図 18 : [X + gate]構造の生産的な形成[57]

[56] さらに言うと[X + gate]は政治スキャンダル以外の事象の名付けにも適用され得る。例えば Vélibgate （パリのシェアサイクル Vélib’の運営主体が交代した際に起きたさまざまな不具合： 2018 年）は Twitter のハッシュタグとして広まった新語だが、ここでは政治スキャンダルではなく運営の失敗(cf. fiasco)を示している。

[57] Angolagate はアンゴラへの武器供与に関する事件、DSKgate は Dominique Strauss-Kahn 元 IMF 専務理事の女性問題をめぐる一連のスキャンダル、Fifagate は国際サッカー連盟(FIFA)の汚職

スキーマによる抽象化が起こることで、それぞれの[X + gate]の形成時にわざわざ既存形式(i.e. Watergate)を毎回のように参照する必要性が弱まる。そうすると[X + gate]のタイプ頻度も高くなり、それがスキーマを強化する、つまりより常時的にアクセスしやすくすることにもつながっていくと考えられる。

ちなみにこの構造における名詞 gate が、スキーマが成立した時点で本来の意味である「門」の意味をほぼ失い、別の意味に変わっているという点においては、Bauer の言う rule-changing な性質をこのようなプロセスに見出すことは可能である。また[N1 + attitude]のような主要部が右方に位置する構造も、統辞規則にそぐわないという点で rule-changing だと言える。しかし例えば indéniable のような複接派生においては、そのような「規則変更」は必ずしも想定されない。Rule-changing か否かというのは、生産的な語形成と単なる類推を区別する決定的な指標とは言えないだろう。むしろ生産的な語形成と類推は不可分の関係にあり、両者の間に違いがあるとすれば、それは構造の抽象化の度合いである。

2.9. 文体と個人差:語形成モデルとの関連

本稿では生産性の高さを、特定の語形成モデル(スキーマ)がどれだけ多くの種類の形式を実際にもたらしているかという点で判定しているが、この判定は必ずしも容易ではない。そこには文体や話者の個人差という問題が常に関わっているからである。

例えばフランス語で「料理教室」を表す語彙形式としては以下の 3 つが可能である。

(47) a. atelier de cuisine : [N1 + de + N2]

b. atelier culinaire : [N1 + AdjR]

c. atelier cuisine : [N1 + N2]

この 3 種類の形成法の競合関係について Noailly (1990 : 176-178)は、最も早い段階から使用され、最も「適確(correcte : ibid.)」なのは[N1 + de + N2]による形式であり、そ

事件をそれぞれ示す。

れに比べると[N1 + AdjR]はより近代的かつテクノクラート的性質を帯び、やや重い印象になるという。そして[N1 + N2]はより「当世風(mode)で、軽妙(désinvolte)で、滑稽(drôle)な」(ibid.)性質を持った文体の中で使われるものだと指摘している。確かに、筆者の収集した実例の中でも、広告や看板、新聞の見出し[58]など、軽妙で人目を引きつける狙いが込められた文脈や環境で[N1 + N2]が現れている例が特に目立った。ただし、同じテクストの中でこの 3 つの形成法が共存する例も実際には観察されるなど(cf. 5.8.2 節)、それぞれの形成法の頻度や生産性の違いが、本当に文体による差と言えるのかは微妙なところである。

語形成モデルの生産性は文体だけでなく時代にも影響を受ける。事物に対する名付けの際には、他の言語からの借用(e.g. nem 春巻き)、かばん語や頭文字語(e.g. sms ショートメッセージサービス)など、さまざまな語形成法が選択肢として用意されているが、どの語形成法を選択するかは言語ごとに異なるだけでなく、同一言語の中でも地域や時代によって変化する。例えばフランス語で「鉛筆」をどう呼ぶかには地域差があることを Avanzi (2017 : 12-15)は指摘している。それによると、イルドフランス、ノルマンディーの両地方とフランス南西部では crayon à papier という呼び方が多数派な一方、フランシュコンテ地方をはじめとする東部では crayon de papier、プロヴァンス地方やブルターニュ地方では crayon gris、ナント周辺やノール、パドゥカレ両県では crayon de bois、ベルギーでは crayon と呼ばれる傾向が強いということである。

時代によって呼び名が変わる例としては「洗濯機」が挙げられる。これは従来 machine à laver と呼ばれてきたが[59]、最近では[V + N]型の lave-linge という形式に取って代わりつつある[60]。lave-linge は lave-vaisselle（食器洗い機）からの影響で広く使われるようになった可能性が指摘されている(cf. Lerat 1994)。このような類推の積み重ねは、結果として[V + N]型の形式を増やすと共に、この構造の生産性の上昇にもつながると考えられる[61]。

---

[58] 新聞の見出しの場合、複合名詞は記事の「名付け(naming)」と記事内容の「説明(description)」を同時に果たしていると Booij (2010 : 170)は指摘している。これについては 3.4 節も参照。
[59] 少なくとも 1950 年の広告において la machine à laver と表記されているのが確認できる。
[60] *TLFi* によると lave-linge は 1970 年の文献においてすでに確認されている。
[61] lave-vaisselle を受けて lave-linge が形成されたこと自体が、ただちにあらゆる[V + N]の組み合わせによる当該形成法の生産性の向上に直結するかどうかは、実際のところは分からない。ただ

語形成においては個人差も見逃すことのできない要素である。フランス語の母語話者が皆等しく、あらゆる語形成法を自由に扱うことができる訳ではない。例えば(47)で見たように、cuisine に対応する AdjR は culinaire だが、フランス語母語話者が皆この 2 つの形式の対応関係を把握しているとは限らない。特に culinaire のように、元の名詞とは異なる語幹が用いられる場合には、話者が名詞から形容詞形を作り出すことさえ難しい可能性がある。AdjR が学術用語などに多いという点も考慮すると、話者の学歴など社会言語学的要因が、このような語形成プロセスの可用性に何らかの影響を及ぼしていたとしても不思議ではない。

また(46)の[X-gate]構造の形成は、政治をはじめとする時事問題に精通していない限り、自由にアクセスできるものとは考えにくい。ある人は[X-gate] の諸形式を抽象化して（スキーマを作り出して）当該形式を生産的に形成できる一方、ある人はせいぜい既存形式の構成素を取り替えるだけの類推にとどまる、といった状況が生まれる可能性は十分にあるだろう(cf. Booij 2010 : 92-93)。

一方、極端に高度な形態分析の場合には生産性ではなくむしろ創造性、つまり言葉遊びの領域に関わることになる。例えばフランス語には「10 代」「20 代」をそれぞれ示す語彙項目がない（代わりに adolescent / jeunesse（青少年）や jeune（若者）が用いられる）が、trentenaire （30 代）, quadragénaire （40 代）などを参考にしながら 10 代(?décenaire)および 20 代(?vigénaire)を表す形式を構築する試みがネット上などで散見される。この場合、既存形式の形態分析に加え、語源であるラテン語の形成法についての知識も必要となるため、高度な言語学的知識が要求される。別の言い方をすれば、trentenaire や quadragénaire などを形成するプロセスは現代フランス語においては生産的でなく、それ故にラテン語などの専門知識を駆使しなければ、10 代や 20 代（一桁世代や 110 歳代以上もだが）に対応する形式を作り出すことはできないということである。このように非生産的な語形成法を敢えて適用することは創造的な語形成手段というべきで

---

lave-vaisselle, lave-linge の場合は動詞語基が同じであることから、類推の延長として他の[lave + N]の形成を容易にする可能性はあるだろう。ここではこれ以上深く取り上げることはできないが、[V + N]型複合名詞のスキーマをどのように想定するか（[V + N]というスキーマの下に[lave + N]のようなサブスキーマを想定すべきか）は、構成素組み合わせの傾向を実例から分析した上で検討する必要があるだろう。

あろう。

したがって、少なくともアウトプットにおける語形成法（生産的なものであれ、創造的なものであれ）の使用可能性は、それぞれの話者のレキシコンの豊かさ（語彙項目の総数）や、形態分析への感度の高さ、さらには百科事典的知識の度合いや社会言語学的要因に多かれ少なかれ依存しており、ある話者が生産的に利用する語形成プロセスが、他の話者においても同じように生産的とは限らない。

その一方でインプット、つまり提示された形式の受容、理解においては、上に挙げた話者間の違いの影響は比較的小さいと考えられる。なぜならインプットにおいては構造の抽象化は必要とは限らず、少なくとも類推による形成と同じように、話者の知っている既存形式と提示された形式を比較すればよいだけの話だからである。例えば micro-ondable（レンジ対応の）のような形式を理解するためには、cyclable（自転車用の）など同じような構造の既存の形式を参照すればほぼ事足りる[62]。必ずしも$[[[x]_N]_V\text{-able}]_A$ のようなスキーマを想定しないといけないということではない。

このように、語形成プロセスは文体や話者の知識に多かれ少なかれ影響を受けるものである。本稿ではあくまでも現代フランス語全体として見た時に生産的と思われる語形成プロセスの記述説明を主眼に置くため、これらの指標が与える実際の影響についてはこれ以上深くは触れない。語形成におけるこの社会言語学的側面については、文体や話者毎に応じたサブコーパスの構築などを通じて、今後明らかにされることが期待される。

本章では生産的な語形成を実現する装置として、CM をはじめとする語彙素ベースのアプローチで提唱されているスキーマ（または construction）の概念に注目し、それがレキシコンの中でどのような位置づけにあるのかを検討してきた。スキーマは形態規則ではなく、抽象化された語彙項目と考えることで、現代フランス語の統辞規則にはそぐわない諸構造が生産的に形成される仕組みを説明できることが分かった。また、スキーマ

[62] ただし比較すべき既存の形式を見出せない場合には、当然ながら提示された形式の理解も難しくなるだろう。この傾向は学術用語において顕著である。特に fongicide（抗真菌の）の fongi-のように、学術用語以外でほとんど現れない古典ギリシャ語またはラテン語由来の拘束語彙素（fongi-はラテン語由来）が、あらゆるフランス語話者のレキシコンで共有されているとは考えにくい。一方で-cide は insecticide（殺虫剤）あるいは bactéricide（殺菌剤）など、一般に流布している形式の中にも見られることから、特別な知識を伴わずに理解される余地がある。

による諸構造の生産的な形成は、語彙と統辞との間の関係が単に語彙化と脱語彙化の流れだけではないことを示唆していることが明らかになった。次章ではこの考え方に沿い、同じく統辞規則に準拠していないと見られる pause-café 型複合名詞の性質について、またその生産性が具体的にどのようなスキーマを伴って実現しているのかについて論じていく。

第 3 章

Pause-café 型複合名詞の性質

3.1. 分類上の位置づけ

フランス語の[N1 + N2]において問題となるのは、その内部構造の多様性である。形式上は 2 つの名詞が並置されているに過ぎない一方で、構成素間の統辞的・意味的関係を子細に見ていくと、内部構造が一様ではなく、いくつかのタイプに分類できることが分かる。したがって[N1 + N2]の先行研究においても、この分類をどのようにするかというのが避けては通れない問題とされてきた。Pause-café 型についての検討に際しても、この種類の複合名詞が分類上どのタイプに位置づけられるかということを明らかにしておく必要がある[63]。

先行研究を概観すると、[N1 + N2]は統辞的観点から少なくとも 3 つから 4 つのサブタイプに分類できることが分かる。手始めに Arnaud (2016a : 73)の分類を見てみることにする。この研究では以下の図のような 3 つの下位カテゴリーを提示している。

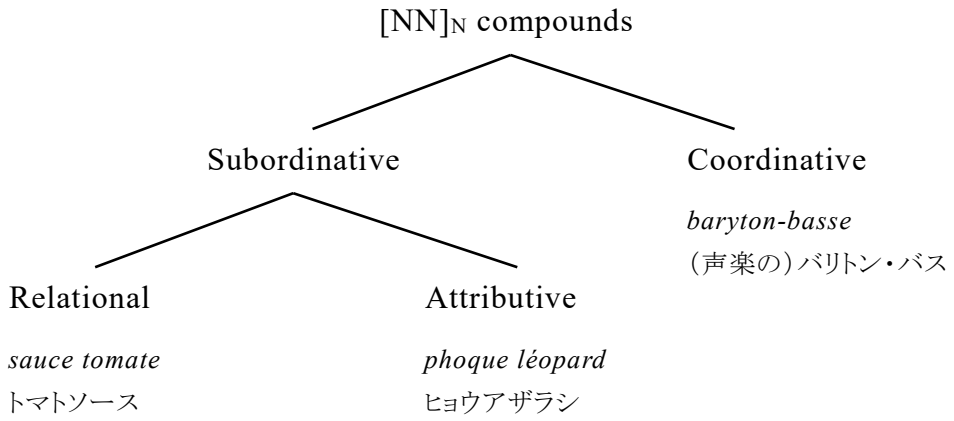


図 19 ： フランス語の[N1 + N2]の下位分類 (Arnaud 2016a : 73)[64]

[63] Rouge-gorge（赤喉→ヨーロッパコマドリ）などの外心的複合語(composés exocentriques)については、ここでは考察の対象としない。

[64] この下位分類は英語の[N1 + N2]型複合名詞にも有効だと Arnaud は述べている。

まず注目すべきは、[N1 + N2]を「従属(subordination)」と「等位(coordination)」の2つに大別していることである。前者は統辞的にも意味的にもN1を主要部とする[65]一方、後者は意味的にはN1・N2の両方に主要部としての性質を見出すことができるというのが違いである[66]。この両者を区別すべきというのは、いずれの先行研究にも共有されている見解である。

次に「従属(subordination)」の下位分類について見てみる。この項目をいくつに分類するかは研究によって多少の相違がある。この相違は、分類において意味面での違いをどれくらい考慮するのかという点に起因しているように見える。あくまでも統辞的基準に沿って分類した場合、上のArnaud (2016a)やVilloing (2012)のように「属詞的(attributive)」と「関係的(relational)」の2つに分類することができるだろう。一方で構成素間の意味関係についても考慮した場合には、圧倒的に多くのサブカテゴリーを想定する必要が出てくる。実際意味関係に基づいて「従属」型の実例809件の分類を試みたArnaud (2003)によると、N1・N2間の意味関係は54パターン想定できるという。この54の意味関係は実際の[N1 + N2]と一対一対応している訳ではなく、特定の[N1 + N2]に複数の種類の意味関係を想定することもできるのだが、この中で最も多く認められた意味関係が「N2が一般名詞N1の目的・対象である」であった[67]という報告は興味深い。この「目的」の関係は「従属」型のうち「関係的」な[N1 + N2]に見出すことのできる意味関係のひとつである。

細分類が際限なくできる可能性のあるN1・N2間の意味関係についてはひとまずここでは置いておき、「属詞的」と「関係的」の間の相違点が、統辞の観点からどのように説明できるかという点を明らかにしておきたい。この2つのカテゴリーは、他の統辞構造

---

[65] 2.1節でもふれたように、中にはbrochettes party（串焼きパーティー）のように、N2を主要部とする形式もある、これらは英語法(anglicisme)を基にした形成であることが指摘されている(cf. Noailly 1990 : 173-176, Loock 2012 : 2-3)。

[66] ちなみに等位タイプについてはさらに①単一の指示対象がN1とN2でそれぞれ表される性質を兼ね備えているタイプと②2つの指示対象を並置してひとくくりにまとめるタイプの2つに細分できる。①としてはchauffeur-secrétaire（運転手兼秘書）が、②としてはhistoire-géographie（（教科としての）歴史・地理）が挙げられるだろう。後者については2つの構成素をひとくくりにまとめている具体的な存在（i.e. 主要部）が明示されていないという点から、外心的複合語の一種ととらえるべきだという指摘もある(cf. Scalise & Bisetto 2009 : 38-47)。

[67] 809件の実例のうち247件でこの「目的」の意味関係が確認できたという。

との比較を通して区別することができることが先行研究で示されている。具体的には、「属詞的」な[N1 + N2]は[N1 + AdjQ]と対応しており、「関係的」な[N1 + N2]は[N1 + PREP + N2]や[N1 + AdjR]に対応している可能性が指摘されている。

3.2. 属詞的な[N1 + N2]

[N1 + N2]の N2 が AdjQ に対応している可能性については、当該構造に関する先駆的研究のひとつである Nyrop (1899 : pp.330-335)ですでに言及されている。例えば名詞 femme（女性）は N2 の位置に現れる際には、品質形容詞 féminin（女性らしい）と同じような意味を示す。同様の傾向は romance, farce, bête などでも見られるという。これらの N2 が AdjQ の性質を帯びているという点は以下のような発話から確認することができる(ibid.)

(48) a. une réserve vraiment femme (A. Daudet, *Sapho*, p.21)

非常に女性らしい奥ゆかしさ

b. Pourquoi cette mort sentimentale et romance ? (A. Daudet, *Souvenirs*, p.54)

この感傷的で恋歌的な死はどうしてなのか？

c. Elle est très femme.

彼女は非常に女性らしい。

ここで指摘されている点は先の 1.4 節および 1.5 節における「属性叙述 vs. 下位分類標示」および「凝結度」の議論と対応する。「述語的」な[N1 + N2]の N2 は、程度を表す副詞によって修飾されることができ(cf. 48a)、他の AdjQ と等位接続できる(cf. 48b)。さらには(48c)のように、属詞として現れることも可能である。このように[N1 + N2]の内部構造は統辞的操作を受ける余地を残しており、凝結していないか、凝結度の低い名詞連辞であると言える。Arnaud (2016a)をはじめ、先行研究の中にはこの「属詞的」な[N1 + N2]も「複合名詞」の 1 タイプと捉えるものがあるが、以上のような理由で、本タイプを複合名詞の 1 つと見なすのは必ずしも妥当ではないと本稿では考える。

ところで、属詞的な N2 にはメタファーによる意味的拡張が認められることが

Noailly (1990 :54-63)で報告されている。例えば justice escargot（かたつむり司法）における escargot は軟体動物としての「かたつむり」を示している訳ではない。「かたつむり」が持つ典型的な特性の 1 つである「動きが遅い」という価値が取り上げられ、lent（遅い）に対応するような形容詞としてこの escargot が機能していると言える[68]。このようなメタファーは以下のように「形」や「色」、「衝撃の大きさ」などの各特性を示す N2 に多く認められるという。

表 3： メタファーによる拡張(cf. ibid.)

a. 形	jupe ballon	バルーン型スカート
b. 色	robe cerise	さくらんぼ色のドレス
c. 衝撃の大きさ	proposition coup de poing	鉄拳提案
d. 速さ／遅さ	justice escargot	かたつむり（のように遅い）司法
e. 大きさ	meeting monstre	モンスター級競技会
f. 素晴らしさ	violoniste étoile	スターバイオリニスト
g. 柔軟性	budget accordéon	アコーディオン（のように伸び縮みする）予算
h. 非正統性	président potiche	お飾りの大統領

どのような名詞がこのタイプの N2 になり得るのかについては、文学的創造によってほぼ無限に可能性が残されている一方で、頻度についてはある程度の傾向を見出すこともできる。実際、属詞的な N2 のうちさまざまな名詞(N1)との組み合わせが確認されるものはある程度限られている。しかもタイプ頻度が特に高いものになると、[N1 + N2]としてだけでなく通常の AdjQ と同じような統辞環境にこの属詞的な N2 を置くことも可能になるようである。

[68] ただしこの escargot が形容詞 lent と完全に入れ替え可能という訳ではない。Van Goethem (2012 : 80-81)が指摘するように、統辞構造で両者の現れ方が異なる場合がある(e.g. la justice est {lent / *escargot} (ibid.))。「遅い」の意味での escargot が属詞として現れる際には comme（～のような）などの要素を伴う必要がある。

例えば clé（鍵）[69]は「決定的な(décisif)」、「重要な(important, crucial)」を意味する N2 としてさまざまな名詞(N1)と共に現れることが van Goethem (2012)で指摘されている。いずれの例を見ても、もともとの「鍵」という意味はメタファーによる拡張を経てかなり希薄になっていると言える。以下に同氏がウェブニュース上のテクストから収集した[N1 + clé]の実例の一部を引用する(p.83)。

(49) a. un rôle-clé　　重要な役回り

b. un territoire-clé　重要な領地

c. un homme-clé　　重要人物（キーパーソン）

d. Dates clés　　重要な日付（歴史的出来事に関する）

この clé は属詞の位置に現れることができるほか、程度を表す副詞による修飾、他の形容詞との等位接続も可能である。最後の点に関しては、意味的にかなり近いと思われる形容詞 important との等位接続も有り得るという点は興味深い。Van Goethem によると、Webcorp[70]を用いた調査の結果、clé et important という連鎖は以下の例を含め合計 29 件確認されたという。

(50) C'est <u>un témoin clé et important</u> et sa version n'est pas contredite (cité dans van Goethem 2012 : 90, 下線は筆者)

それは<u>決定的かつ重要な証言</u>で、そのバージョンに異議は唱えられてない。

このような点から、[N1 + clé]の clé には AdjQ と同等の性質を認めることができる。ただ van Goethem はこの clé が初めから AdjQ としての機能を持っていた訳ではないと考えている。むしろ下図にまとめたように、第 1 段階として語形成モデル（Booij (2008, 2009)の提案する Construction Idiom に相当するもの、と同氏は説明している）による生産的な[N1 + clé]の形成があり、そこから第 2 段階として、異分析による clé の形容詞化があった結果、clé が属詞位置に N1 なしで現れる(e.g. ce qui **est absolument clé** pour l'avenir de ce sport　このスポーツの未来にとって絶対に重要なこと[71])ことさえ可能になったのではないかと指摘している[72]。

---

69 clef と表記される場合もある。

70 ウェブ上のテクストを対象としたコーパス分析ツール(http://www.webcorp.org.uk/)。

71 *op. cit.* p.89　太字化は引用元文献による。

72 スキーマ内の構成素という段階から独立した品質形容詞への移行は、ふたたびひとつの語彙的

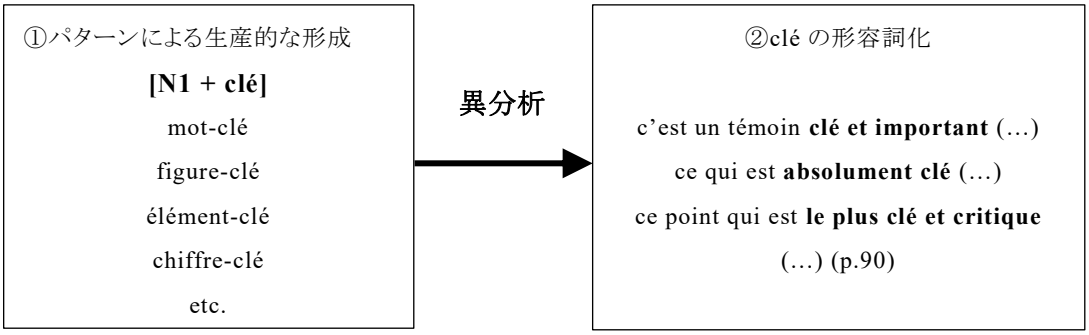


図 20 : clé の形容詞化 (ibid.)[73]

この 2 段階の変化の想定、特に、形容詞化の前に生産的な形成モデルを想定した点は興味深い。特定の名詞だけが N2 の位置を占めているパターンが存在しているのであれば、あらゆる名詞が「属詞的な」N2 として clé と同様の生産性を実現できている訳ではないことや、それらが一様に形容詞化している訳ではないことが説明できるだろう。実際、以下の例が示唆するように、先に挙げた escargot は N1 なしでの属詞位置では出現が難しい。

(51) a. *ce qui est absolument escargot (…)

b. ce qui est absolument clé (…)

一方で escargot は justice 以外の N1 との組み合わせも可能であることから、[N1 + escargot]にある程度の生産性があることが期待される。以下にその一例を挙げる。

(52) J'étais rentrée en France mi-février avec une grève des taxis et <u>un trafic escargot</u> entre l'aéroport de Roissy...

(https://planetejoceenasie.blogspot.jp/2015/01/en-route-pour-bangkok.html 2018 年 1 月 2 日参照、下線は筆者)

パリには 2 月半ばに戻っていたのだけど、タクシーのストライキがあってロワシー空港との間の<u>道はかたつむり状態</u>で・・・

こうしたことから、[N1 + escargot]の escargot は第一段階としての語形成モデルについては想定が不可能ではないものの、完全に品質形容詞になったとまでは言えず、あ

項目になったという意味で Norde (2009 : 120)の言う「脱文法化 (degrammaticalization)」の一例とも言えそうだと Van Goethem (2012 : 91)は指摘している。

[73] 図は筆者が独自に作成した。

くまで「属詞的な」N2 として―言い換えれば付加形容詞的実詞(le substantif épithète cf. Noailly 1990)として―機能していると考えることができる。

ところで[N1 + clé]や[N1 + escargot]のように、N1 が未指定で、N2 が特定の名詞で指定されている形成モデルは、属詞的な[N1 + N2]に限らず、関係的な[N1 + N2]においても想定が可能である。この点については 3.5 節で改めて取り上げたい。

3.3. 関係的な[N1 + N2]

関係的な[N1 + N2]とは「N2 が N1 に対して「所属」や「目的」などをはじめとする何らかの関係性を結んでいることを示す」構造で、統辞的には[N1 + PREP. + N2]や[N1 + AdjR]に対応し得る。「関係的である」というのは多分に抽象度の高い言い方であるが、それはこの構造に見出すことができる意味関係がそれだけ多岐にわたっていることの裏返しでもある。構成素間の意味関係が多岐にわたる一方で、構造全体としては N1 が示す指示対象の下位範疇を示すという点が、関係的な[N1 + N2]のいずれにも見られる共通の特徴である。本稿の考察対象である pause-café 型複合名詞は、この関係的な[N1 + N2]に対応するものである。

関係的な[N1 + N2]の N2 には、先の属詞的な N2 に見られたようなメタファーによる拡張は見られず、N2 はあくまでも元となる語彙素（名詞）の指示対象を指示内容とする。このことは Fradin (2009 : 432)の提案した以下のテストでも明らかである。

(53) *Un responsable surgelés est des surgelés du point de vue de??
冷凍食品担当者は??という点で冷凍されている

Responsable surgelés の surgelés は冷凍食品(produits surgelés)を示しているのであり、責任者(responsable)そのものの性質を表しているのではない。両者の間には「目的」あるいは「所属」の関係性が結ばれている。このことは justice escargot の escargot がかたつむりを示している訳ではなく、司法(justice)の遅さという点でかたつむりのようである(i.e. une justice escargot est un escargot du point de vue de sa lenteur)こととは対照的である。

構成素間で何らかの関係性が結ばれているという点は[N1 + AdjR]でも同じであ

る。例えば littérature enfantine（児童文学）では、littérature（文学）と enfantine（子どもの）の間に「目的」の関係が結ばれていると見なすことができる(i.e. littérature pour (les) enfants 子どものための文学)。あるいは「所属」の解釈ができないこともないだろう（[N1 + AdjR]については第 4 章で改めて取り上げる）。

その一方で、関係的な[N1 + N2]が名詞連辞[N1 + PREP. + N2]にも対応する構造であるという指摘にも注目したい。この可能性についてはフランス語の[N1 + N2]研究の嚆矢として位置付けられる Darmesteter (1874)ですでに言及されている。例えば assurance incendie（火災保険）の incendie は、前置詞句 contre l'incendie（火災に対する）に対応していると言える。この根拠として assurance contre l'incendie（火災に対する保険）という連辞が実際に存在することが挙げられる。この観点に基づいて Guilbert (1971 : LXXIII)は、対応する前置詞（句）として以下のような例を挙げている。

(54) a. **à** : thé-citron レモンティー　　cf. thé au citron

b. **avec** : dîner-débat 討論会付夕食会

c. **contre** : assurance maladie 疾病保険

cf. assurance contre l'incendie 火災保険

d. **de** : carte fidélité 顧客カード　cf. carte de fidélité

e. **en** : carton-pâte 厚紙

f. **par** : chauffage-gaz ガス暖房

g. **pour** : pause-café コーヒーブレイク

h. **sur** : assurance-vie 生命保険　cf. assurance sur vie

このように関係的な[N1 + N2]を統辞由来と見なす考え方は他の先行研究でも支持されている。Noailly (1990 : 107-108)はこのタイプの[N1 + N2]（同氏自身はこのタイプを « complémentation »（補足）と呼んでいる）の意味関係がいわゆる状況補語によって示されるそれと対応していることを指摘している。その上で構成素間の意味関係として大きく以下の 4 つを提案した。

表 4： 関係的な[N1 + N2]の意味関係 (cf. Noailly 1990)

a. 所属	« N1 contient N2 » 「N1 は N2 を含む」	plateau repas	ミールプレート
b. 所有	« N2 contient N1 » 「N2 は N1 を含む」	esprit péniche	ボートハウスの気風
c. 目的	« N1 est destiné à N2 » 「N1 は N2 のためにある」	pause-café	コーヒーブレイク
d. 原因	« N2 est à l'origine de N1 » 「N2 は N1 の原因である」	congé maladie	病気休暇

統辞構造において、いわゆる状況補語は前置詞連辞によって示されるが、Noailly は先の Guilbert (1971)とは異なり N2 と前置詞連辞との具体的な対応関係を積極的に模索することは避け、あくまでも意味関係に基づく分類を行っている。

関係的な[N1 + N2]を一律に名詞連辞の一変種と見なす先行研究もある。Fradin (2009 : 430-433)は関係的な[N1 + N2]をもはや複合名詞とは位置付けず、「2 枠による名詞構文(two-slot nominal constructs : op. cit. p.432)」と見なしている（属詞的な[N1 + N2]については「従属的な N + N 複合語(subordinate N + N compounds : 430)」と命名している）。一般的に複合名詞と見なされる pause-café や assurance-vie などと、résponsable surgelés のような、どちらかというと省略的な名詞連辞の両者に、統辞規則に基づく同一の形成プロセスを想定できるというのが Fradin の主張である。

例えば roman photos, langage auteur, espace fumeurs, impression laser はそれぞれ以下のような名詞連辞をベースにして形成されていると考えられる。この場合 N2 は冠詞を伴う場合もあれば、そうでないこともある(p.433)。

(55) a. roman [$_{pp}$ avec (des) photos] 写真付の小説

b. langage [$_{pp}$ de l'auteur] 筆者の言葉遣い

c. espace [$_{pp}$ pour (les) fumeurs] 喫煙者のためのスペース

d. impression [$_{pp}$ par laser] レーザーによる印刷

このような名詞連辞とのパラレリズムを考慮すれば、関係的な[N1 + N2]をいわば名詞連辞の簡略版と見なすこともできるだろう。しかしながらあらゆる関係的な[N1 + N2]を同様に名詞連辞の一変種と見なすことには、以下の 2 つの問題がある。

1 つ目は、対応する前置詞連辞の特定に関する問題である。Darmesteter (1874 : 138)自身が認めているように、実際にどの前置詞を伴った連辞と対応するかを特定することは必ずしも容易ではない。timbre-poste（郵便切手）は、timbre de poste とも、timbre pour poste とも、あるいは timbre à poste とも言い換えられる。また、対応すると思われる前置詞連辞自体が名詞連辞においてさまざまな統辞・意味機能を持ち得ることも考慮せねばならない。特に de と à については、その傾向が顕著であることが先行研究で報告されている(cf. Bartning 1996, Tsuruga 2007, 敦賀 2009, Markussen 2016 etc.)。こうした点を踏まえると、N2 と前置詞連辞との一対一対応を形式・意味の両面で想定するのは困難である。

むしろ先にあげた Noailly (1990)のように、形式にとらわれずあくまでも意味の観点から N2 が N1 に対して負う機能を分析するべきであろう。それぞれの形式は意味関係の実現形のひとつに過ぎない。「目的」の意味関係は timbre pour poste や timbre à poste そして timbre-poste のように、複数の実現形を持ち得るということである。この実現形が統辞規則によるもの、つまり連辞でなければならないという理由はない。[timbre + N2]のように、語形成サイドの枠組みによってこの「目的」の意味関係が実現されることは十分にあり得ることだろう。

もう一つの問題は生産性に関わることである。特定の[N1 + N2]だけが実現し得る高い生産性については、名詞連辞とのこの対応関係だけでは説明することが難しい。Centre-ville（中心街）は centre de (la) ville（都市の中心）という名詞連辞と対応しているが、なぜ*centre-village や*centre-commune といった形式は生まれないのだろうか。名詞連辞では両者ともそれぞれ成立できる（i.e. centre {de / du} village （村の中心）, centre de (la) commune （町の中心））ことを考えると、[centre + N2]の形成におけるこのような制限は、名詞連辞との対応関係だけでは説明しきれないのである。また逆に、[pause + N2]をはじめとする生産的な[N1 + N2]の方についても、やはり同様の理由で説

明に困難が生じる。統辞構造では基本的に構成素組み合わせの潜在的自由度が無限である以上、特定の構成素組み合わせの場合のみに高い生産性が示唆されるという傾向は統辞規則では想定しづらい。

むしろ語形成の領域において何らかの規則性が担保されていて、そのおかげで一部の[N1 + N2]が生産的に形成されていると見る方が妥当だと思われる。組み合わせ可能性がある程度限定されているというのは個別的な情報であるが、語彙的項目とはまさにこうした個別的な情報の集合体のことである。[pause + N2]のような語形成モデル自体がひとつの語彙的項目のように扱われると考えれば、この組み合わせでなぜ高い生産性が実現し、centre-ville ではそうならないのかを説明することが容易になる。

3.4. 省略的な連辞 vs. 複合名詞：「名付け」と「説明」

関係的な[N1 + N2]が統辞構造なのか複合名詞なのかという議論においてもうひとつ問題となるのは、省略的な名詞連辞と複合名詞の区別をどうするかである。関係的な[N1 + N2]すべてを一様に省略的な名詞連辞として扱うのが困難であるのと同じように、これらすべてを複合名詞として扱うことも妥当性に欠ける。両者が連続体的関係にあることは確かであるが、語形成における規則性および生産性に関する議論に先立っては、語形成の領域で作られる構造を、統辞由来の構造から区別しておく必要がある。そのための指標として何を持ち出すかということが検討されるべきである。

この点に関して Arnaud (2015：674-675)は、路上の看板やカタログ上などに見られる(56a)のような[N1 + N2]は、(56b)に示したような名詞連辞の「電報版(telegraphic version)」に過ぎず、したがって語彙的単位の議論でこれを取り扱うことは「安全ではない(not safe)」と指摘している。

(56) a. parking cars 200m　　バス駐車場 200m

b. parking des cars à 200m　　200m 先にバスの駐車場

こうした点を踏まえて「通常の統辞的環境か、辞書上で引用されているもの」のみを分析対象として Arnaud は扱っているのだが、ここではどのような構造であれば省略的な連辞であり、どのような構造が語彙的要素なのかは明示されていない。例えば espace

fumeurs (cf. 55c)に代表される[espace + N2]という構造は生産性がかなり高いうえに、街中の看板やそれに準ずる標示でもよく見かけるが、Arnaud の主張に沿うと、これらは分析の対象外となる可能性がある。

図 21： 列車チケット予約ウェブサイト上で観察された[espace + N2]
(www.voyages-sncf.com 2017 年 8 月 24 日)

例えば上の図中には 2 つの[espace + N2]―espace poussette（ベビーカースペース）と espace nurserie（託児スペース）―が、それぞれを示すアイコンと共に現れている。これらは列車チケット予約サイト上の案内表示の一つとして使われていることから、言語使用上は(56a)と同じような環境に現れていると言える。しかし[espace + N2]はこういった状況のみならず、Arnaud の言う「通常の統辞的環境」にも現れ得る。

(57) Après l'espace papeterie, la Fnac crée l'événement en lançant Fnac it! Bordeaux est la 1ère ville de Province à accueillir ce nouvel espace destiné aux passionnés de High-Tech.
(*Direct Bordeaux 7*, 2010 年 11 月 26 日, p.4　下線は筆者)
文具店スペースに続き、Fnac it!の開始で Fnac が話題を呼んでいる。ハイテク好き向けのこの新たなスペースを開設するのは、地方都市ではボルドーが初めてとなる。

この espace papeterie は新聞（紙媒体）の記事本文中に現れたものである。したが

って Arnaud の基準に従えば、分析対象に入れてもよい例ということになる。さらに[espace + N2]は以下のように話しことばの中でも観察される。Arnaud の分析対象はもっぱら書き言葉であるため、氏の言う「通常の統辞的環境」に話しことばによる発話がどう該当するのかはあまりはっきりとしない。

(58) mais tu peux eu~ tu pourras peut-être eu faire euh faire en sorte que le l'espace douche soit vraiment un espace et pas juste un un bac hein tu vois que que qu'on y soit à l'aise enfin toujours

(clapi > reunion_conception_mosaic_architecture　下線は筆者)[74]

君はその・・・君はシャワースペースを、ただの桶じゃなくてさ、本当に 1 つのスペースとして作っていいんだよ。だってやっぱり快適に利用したいだろう。

同じ[espace + N2]の形式を呈しているのに、現れる文体的環境によって一方は語彙単位の議論の対象から外し、もう一方は対象に含めるというのが、果たして適切な処理の仕方と言えるのか、疑問の残るところである。

この問題に関しては「名付け(naming)」と「説明(description)」を区別することを提案している Booij (2010 : 169-175)が参考になるだろう。それによると、複合名詞は（Booij はこれらを名詞連辞ではなく複合名詞と捉えている）統辞的方法による説明に代わる一手段として利用され得るという。以下のような新聞の見出し（オランダ語）はその最たる例である(*op. cit.* : 170)。

(59) a. zwemles-regeling　水泳レッスンアレンジメント

b. het Cruyf-interview　Cruyf 氏インタビュー

c. Schelde-verdieping　Schelde 川深掘

このような見出し的な用法において、複合名詞は事象の「説明」とその「名付け」を同時に行っていると考えられる(ibid.)。同じことは 2.6 節で見た「n 個の理由」構造においても言える。例えば six raisons de découvrir Nice et sa région （cf. 40d)では、記事タイトルである本構造自体が、記事の内容（i.e. ニースとその周辺を観光する 6 つの理由）を

[74] CLAPI コーパスに収録されている reunion_conception_mosaic_architecture というファイル名の談話データである。テクスト中の「~」は言いよどみを示す。本コーパスをはじめ、既存のフランス語話し言葉コーパスから引用したデータとその出典表記方法については第 4 章冒頭脚注を参照されたい。

要約的に「説明」していることになるが、同時に記事自体を「名付け」ることにもつながっている[75]。

その一方で、先に Arnaud (2015)が挙げた parking cars 200m (cf. 56a)については少なくとも「説明」の機能を負っていると考えられる。また、このような標識上の記述がもっぱら「説明」の機能しか持っていないとは限らない。以下の例のように、「名付け」の機能を見出せる場合もある。

(60) Ces panneaux de « cédez-le-passage cycliste au feu rouge » ont été expérimentés avec succès dans le Xe arrondissement, (…). (http://lci.tf1.fr/france/societe/paris-les-cyclistes-pourront-passer-au-feu-rouge-sous-conditions-8634545.html 2016 年 1 月 20 日参照、下線は筆者)
この「サイクリスト赤信号で道ゆずれ」の標識は第 10 区で試験導入され、効果が見られた。

ここでは自転車利用者が、交差点を渡ってくる歩行者がいたら道を譲ることを条件に、赤信号でも進んでよいことを示す看板について取り沙汰されているが、引用符で括られた標識のが説明している内容[76]« cédez-le-passage cycliste au feu rouge »がそのまま、標識そのものを名付けるものとして機能していると考えることができる[77]。

同様に、(57)のようにいわゆる「通常の統辞的環境」で現れた[N1 + N2]にも、「名付け」と「説明」の両方の機能を認められるだろう。Espace papeterie は、そのスペース（店内の一角）を名付けるとともに、その場所の機能・目的を説明している[78]。さらに言え

---

[75] さらに言うと、この[Num + raisons + PP]という構造自体に独自の含意が生じていることが示唆される。teuf (< fête パーティー)のように音節の順番を反転させる verlan という語形成法自体が隠語的なコノテーションを帯びるのと同じように、この「n 個の理由」構造自体が単なる「名付け」機能を超えて、本構造を採用すること自体に何らかの特別な意味合い（「記事タイトルらしさ」や「ネットメディアっぽさ」など）が見出せる可能性がある。ネット上の記事タイトルという特定の文脈的環境でこの構造が多く見られれば見られるほど、その傾向は強くなると考えられる。

[76] 当該の標識は街中で実際にはこういった文字で表示されることは少なく、自転車のアイコンと進行方向を示した矢印を赤枠の三角形で囲った形で表されることが多い。

[77] これと関連して Bosredon (2012)が、Paysanne bêchant devant sa chaumière（田舎家の前で土を掘る農婦：Van Gogh の作品）のような芸術作品名においても、説明的な名付けが認められることを指摘している。名付けの概念に関する諸問題については Petit (2012)も参照。

[78] この性質は rapport qualité-prix（コストパフォーマンス）のような[N0 [N1 + N2]]構造(cf. Noailly 1990 : 84-86)ではよりはっきりと表れている。ここでは N0 の rapport（関係）が、qualité（品質）と prix（値段）の間の意味関係をメタ言語的に示すことによって、指示対象となる概念を説明しながら名付けている。

ば[espace + N2]によって espace（場所、スペース）の下位範疇を示すことができる訳だが、これも「名付け」の機能に密接に関わっている。以下の発話はそれを示す好例である。

(61) En entrant dans le hangar, on peut découvrir plein d'objets rangés dans un ordre précis, un coin bibelots, un coin jouets, un autre vêtements, puis électroménagers, livres... Puis en avançant un peu, on voit le coin meubles, et c'est là que travaille Thierry, un compagnon qui est là depuis longtemps mais qui ne reste pas tout le temps ici.
(http://classes-presse-2011.ac-rennes.fr/spip.php?article1675 2012 年 5 月 9 日参照、下線は筆者)
倉庫に入るとたくさんの物品が並べられている光景を目にすることができる。順番は正確には、置物コーナー、玩具コーナー、他に衣服そして電化製品、書籍…と続く。それから少し進むと家具コーナー、ここがティエリーが働いている場所だ。彼は長らくここに勤める同僚だが、常にこの場所にいる訳ではない。

この発話では倉庫(hangar)の中にたくさんの物が秩序だって並べられていることを説明しているが、[coin + N2]という構造を用いることによって、この広い空間を複数の coin（一角、コーナー）としてセグメント化する効果が生み出されていることがうかがえる。もしこれらを単に bibelots, jouets, vêtements…と列挙した場合には、それぞれの指示対象はあくまでもその物品（置物、玩具、衣服 etc.）であるに過ぎない。それらの間に何らかの秩序や関連性が示唆されるというよりは、下図左に示したように、ただ単純に並置されている印象にとどまる。

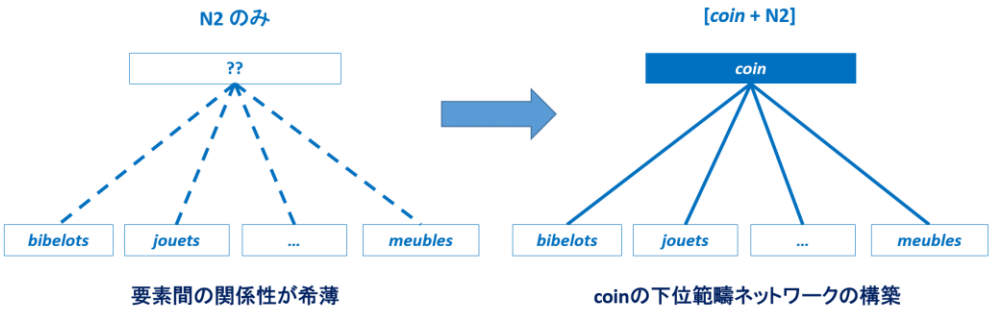


図 22 : [coin + N2]による下位範疇化

一方[coin + N2]によって示すと図の右側のようになる[79]。ばらばらに見えた物品が coin の下位範疇ネットワークの一員として組み込まれることで、指示対象間に秩序立った関係性が生まれる。[coin + N2]が示すのは場所(coin)であるが、並べられた物品を直接示すのではなく敢えてこのように「場所」という名のもとに名付けを施すことによって、物品の間の関係性を明らかにするとともに、それらが秩序立って配置されている様子を表すことができる。

このように、新聞の見出しや通常の書かれた文章、さらには話しことばなどで現れる[N1 + N2]には「説明」だけでなく「名付け」の機能も同時に備わっており、また下位範疇のネットワークを構築する可能性もあることが分かった。それとは対照的に、parking cars 200m のような構造は「説明」の機能を持つ一方で「名付け」の機能は認められない[80]。この構造は「バス駐車場が 200 メートル先にある」という事実を「説明」はしても、それ自体が直接何らかの指示対象やその下位範疇を構築する訳ではない。「説明」の機能のみを持つというのは、まさに parking des cars à 200m (cf. 56b)のような自由な連辞が持つ特徴である。したがって parking cars 200m のような構造はやはり複合名詞ではなく「省略的な名詞連辞」と見なすべきであろう。

---

[79] 発話内で列挙されているもののうち vêtements では coin が省略されており(i.e. un autre (coin) vêtements)、électroménagers と livres は[coin + N2]の構造を取っていないが、前後に[coin + N2]の構造がこれらを挟むように配置されていることから、この 3 つに関しても同じ下位範疇ネットワークに属するものと見なすことが可能だろう。

[80] 「名付け」機能がないということは、これによって指示対象の下位範疇を示すことも難しいだろう。実際 parking cars 200m は「駐車場」の下位範疇とは言えない。

Espace papeterie や espace douche をはじめとする[espace + N2]や[coin + N2]は、現れる文体的環境にかかわらずそこに「名付け」と下位範疇化の機能を想定できる限り「省略的な名詞連辞」とは性質を異にすると言える。したがって Arnaud が提案した「省略的な名詞連辞を分析対象から外す」という解決策は、「『名付け』の機能が認められない名詞連辞は分析対象から外す」と読み替えるべきかもしれない。そうすることによって [espace + N2]をはじめとする諸形式の規則性と生産性に関する議論を整理することができるようになる。

以上の議論を踏まえ改めて pause-café 型複合名詞の[N1 + N2]における位置づけを確認してみる。Pause-café のような[N1 + N2]は N2 に下位分類標示の機能が認められる「関係的な」二名詞構造のひとつである。そして、特定の組み合わせに限り生産性を実現できる点や、「説明」と「名付け」の両方の機能を兼ね備えているという点から、この構造は省略的な名詞連辞ではなく、特定の語形成プロセスを経て形成された複合名詞であると言える。

3.5. 語形成モデル：特定の組み合わせ

Pause-café 型複合名詞の生産性については、構成素の組み合わせ可能性の大きさと言い換えることができることを 1.6 節で確認した。ただし、あらゆる N1 と N2 の組み合わせが可能という訳ではない。例えば pause-café の構成素のうち N1 の pause（休憩）を、類義の repos（休息）に置き換えることはできない。その一方で、すでに例示したように、N2 の café（コーヒー）を thé（紅茶）や sieste（昼寝）などの名詞に置き換えることは可能である。

また逆に、N1 に構成素入れ替え可能性が示唆される一方で、N2 を別の名詞に替えることが難しいケースもある。例えば N2 としての cadeau(x)（プレゼント）は以下のようにさまざまな名詞を N1 として受け付けることができるが、cadeau(x)を別の任意の名詞に入れ替えて同じような N1 範列を実現させることは難しい。

(62) a. boutique cadeaux　ギフトショップ

b. chèque cadeau　ギフトカード

c. coffrets cadeau　ギフト用詰め合わせ

d. idées cadeaux　プレゼント案

e. papier cadeau　包装紙

f. paquet cadeau　プレゼント包装

g. solution cadeau　プレゼント向けの商品プラン

(63) {*boutique / ?chèque / *coffrets / ?idée / *papier} don

例えばこれら[N1 + cadeau(x)]の cadeau(x)を、「贈り物・寄付」を意味する don に入れ替えると、さまざまな N1 との組み合わせはかなり難しくなる。chèque や idée など、名詞によっては組み合わせが全く想定できないわけでもないようだが、これらは[chèque + N2]や[idée + N2]のように、N1 の方がさまざまな N2 と組み合わさることができるという要因によるところが大きく、したがって[N1 + don]という組み合わせによる生産的な語形成モデルの想定の可能性は低いと言える。

こうしたことから、pause-café 型複合名詞のうち生産的な形成が可能なのは、特定の構成素組み合わせパターンに限られることが示唆される。しかもその組み合わせパターンは、具体的には「特定の N1＋さまざまな N2」あるいは逆に「さまざまな N1 + 特定の N2」というように、構成素のいずれかがすでに決まっており、もう片方が未指定であると考えられる。*boutique don (cf. 63)のような形式が成立困難なのは、構成素の組み合わせがいずれのパターンにも当てはまらないことがひとつの大きな要因であると考えることができるだろう。これらの点をまとめると以下の図のようになる。

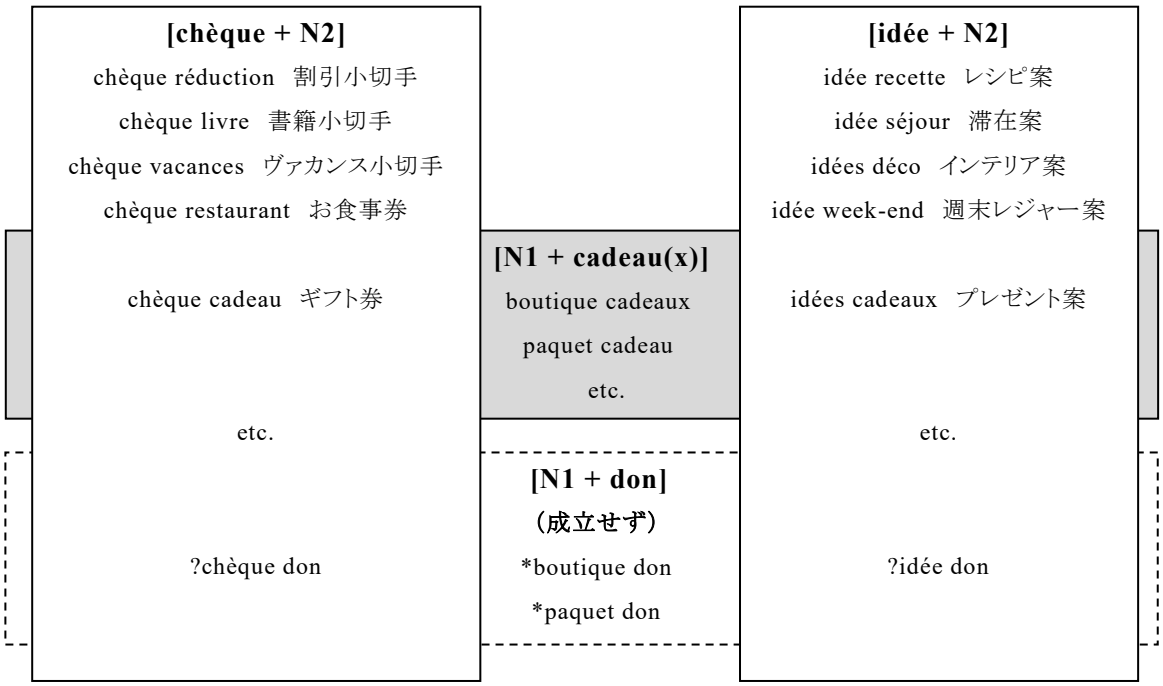


図 23：[N1 + cadeau(x)]および[chèque + N2]、[idée + N2]の生産的な形成

ここに示された組み合わせのうち、[N1 + cadeau(x)]と[chèque + N2]そして[idée + N2]はいずれもさまざまな名詞と組み合わさることが観察される。したがって「特定の N1 ＋さまざまな N2」という形成モデルとして[chèque + N2]と[idée + N2]の 2 つが、そして「さまざまな N1 + 特定の N2」という形成モデルとして[N1 + cadeau(x)]を想定することができるだろう。なお chèque cadeau と idées cadeaux については、その背後に 2 種類の形成モデルが同時に存在していることが想定される。chèque cadeau は形成モデル[chèque + N2]によってもたらされたとも、[N1 + cadeau(x)]によってもたらされたとも言えるだろう。

一方で [N1 + don]という組み合わせには形成モデルが成立していないと捉えることができる。ただし chèque や idée と don との組み合わせに関しては、生産的な語形成モデル[chèque + N2]または[idée + N2]の作用によって、成立する余地は残されていると想定されるだろう。

3.6. 属詞性と語形成モデルの内部構造

構成素の片方のみが指定された語形成モデルについては先述の van Goethem (2012 : 89)が[N1 + clé] に関する議論の中で提案している(cf. 3.2 節)が、ここで取り上げている[N1 + cadeau(x)]、[chèque + N2]、[idée + N2]の 3 つも同じような構造を成していると言える。ただし[chèque + N2]と[idée + N2]については、指定されているのが主要部としての N1 であるという点が特徴である。これとは対照的に、[N1 + clé]をはじめとする属詞的な[N1 + N2]の方では、基本的に N2 の方が指定されている。N1（主要部）の方が指定されている語形成モデルの可能性については、属詞的な[N1 + N2]に関する先行研究でも特に指摘されていないようである。このことをまとめると以下の表のようになる。

表 5： 属詞性と語形成モデルの内部構造との関連

	属詞的な[N1 + N2]	関係的な[N1 + N2]
「特定の N1 + N2（未指定）」	—	[chèque + N2] [idée + N2] etc.
「N1（未指定）+ 特定の N2」	[N1 + clé] [N1 + escargot] etc.	[N1 + cadeau(x)] [N1 + papier] etc.

この分布関係は 2 つの点において興味深い。1 つ目は、特定の N1 に基づいてさまざまな N2 の範列が展開される場合、この N2 は基本的には関係的な意味を N1 と結ぶという傾向が示唆されることである。言い換えれば、[chèque + N2] にしろ[idée + N2] にしろ、ここにどのような名詞を N2 として迎え入れたところで、構成素間には関係的な意味が構築される可能性の方が高い。そこに属詞的な意味関係が成り立つ可能性は、ないか、あったとしても非常に限定的である[81]。構造内の意味関係が語形成モデルの時点ですでに規定されているように見えるということは、CM におけるスキーマの考え方とも対

[81] 例えば idée clé という組み合わせの場合には、[idée + N2]という関係的な形成モデルと [N1 + clé]という属詞的な形成モデルが競合することになるだろう。前者を採用した場合には「鍵に関するアイデア」という意味に、後者を採用した場合には「重要なアイデア」という読みになる。もちろん une idée clé et importante のように、構造面で clé の属詞性がそもそも確認できるような場合には、後者の意味として解釈されるだろう。

応する。2.3 節で概観したように、CM ではスキーマを単なる語形成上の鋳型としてではなく、それ自体を 1 つの語彙項目として捉えている。例えば Watergate や Penelope gate のような構造では、[X + gate]というスキーマ自体が「X に関するスキャンダル」という固有の意味情報を持っていることが指摘された。これと同様に[chèque + N2] や[idée + N2]といった pause-café 型複合名詞についても、それぞれの語形成モデル自体が、固有の意味を持っている可能性がある。もしそうであるのならば、この 2 つの構造の場合には、語形成モデル[82]として以下のような形式と意味の対応関係が想定されるだろう。

(64) a. $[[\text{chèque}]_{Ni}\ [x]_{Nj}]_{Nk} \quad \leftrightarrow \quad [SEM_i \text{ with relation R to } SEM_j]_k$

b. $[[\text{idée}]_{Ni}\ [x]_{Nj}]_{Nk} \quad \leftrightarrow \quad [SEM_i \text{ with relation R to } SEM_j]_k$

ここでは chèque および idée とそれぞれの N2 との間は「N2 に関係のある N1」という抽象度の高い意味関係を想定したが、場合によっては「所属」や「目的」など、さらに特化した意味関係を語形成モデル上に規定することもできるかもしれない。その点については次章で詳しく検討するが、いずれにしても主要部名詞(N1)が特定されている語形成モデルでは、構成素間の統辞意味的関係が関係的になるという傾向は注目に値する。

表 5 から読み取れることで興味深いもう 1 つの点は、「さまざまな N1 + 特定の N2」という組み合わせにおける各種語形成モデルの分布が、AdjQ と AdjR という 2 種類の形容詞の区別と対応しているように見えることである。例えば属詞的な[N1 + N2]における clé は、意味面で AdjQ の important に似通っているように見える。それに対し関係的な[N1 + N2]における papier（紙）は、意味面で électronique（電子の）や informatique（IT の）、numérique（デジタルの）と同じ範列に属し得ることが、papier とこれら AdjR とが等位接続された以下の例からも示唆される（下線はいずれも筆者による）。

[82] ここに示す形成モデルの構造は完全版ではない。完全版については 5.3 節にて提示する。

(65) a. Des dictionnaires papier aux dictionnaires électroniques

(Les journées Internationales des Dictionnaires, 2000 年大会のテーマ、下線は筆者)

紙の辞書から電子辞書へ

b. La cohabitation éphémère entre le livre papier et le livre numérique, symbolisée par la présence inédite d'Amazon au Salon du Livre 2012 ne saurait cacher la guerre intestine qui fait rage.

（www.nonfiction.fr/article-5750-la_guerre_des_livres_naura_pas_lieu.htm 2012 年 7 月 8 日参照、下線は筆者）

Salon du Livre 2012 への Amazon の新規出展が象徴するように、紙の書籍と電子書籍の束の間の共存は、熾烈を極める業界内の争いを隠さずにはいられないだろう。

c. Nous nous chargeons de tous vos travaux de reproduction de documents, originaux papier ou informatiques, noir et couleur, dans tous les formats.

（http://corep.fr/fr/repro-copie/?PHPSESSID=73c866522d6d752a81527278ab997874 2012 年 4 月 4 日参照、下線は筆者）

紙またはデジタル媒体の原本、白黒およびカラー、あらゆるサイズ、あらゆる文書複製の作業を私どもがお引き受けいたします。

属詞的な[N1 + N2]のうち N2 としてよく現れる名詞の中には、異分析によって AdjQ としての地位を確立しているものがある。このことは clé を例に取り上げた van Goethem (2012)の議論の中で示唆されたが（cf. 3.2 節）、同じような傾向が関係的な[N1 + N2]において N2 としてよく現れる cadeau(x)や、この papier などにおいて見られてもおかしくはないと思われる。Clé が AdjQ になったのと同じような変化を papier から AdjR への流れとして想定すると、以下の図のようになるだろう。

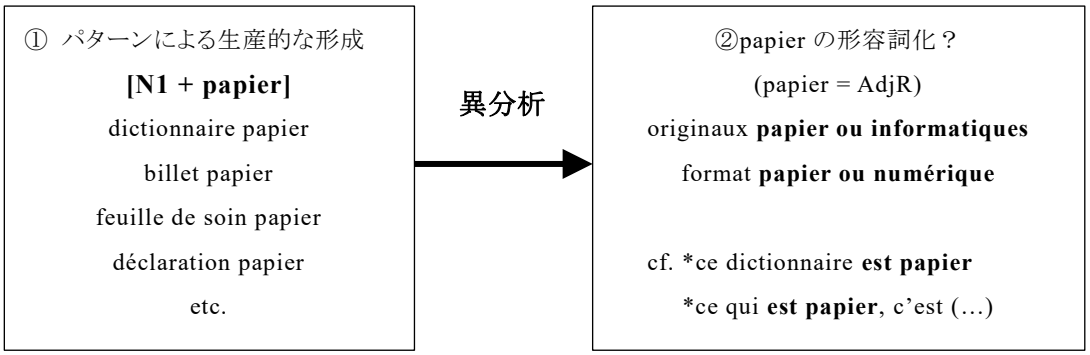


図 24 : papier の形容詞化の可能性

属詞的な[N1 + N2]にしろ関係的な[N1 + N2]にしろ、N2 が語彙的に指定されている場合に、その N2 が既存の形容詞（AdjQ または AdjQ）と互換性があるように見えるのは注目すべき点である（この点については第 5 章で改めて取り上げる）。

その一方で、N1 が語彙的に指定されている語形成モデルの場合には、その N1 に既存の何らかの要素との互換性を想定するのは難しい。[pause + N2]の pause が AdjQ や AdjR に対応している訳ではなく、強いて言えば単独の名詞としての pause に対応しているだけである。しかも clé などとは異なり、語形成モデル内の pause の意味はあくまで「休憩」であり、それは単独の名詞としての pause のそれと変わらない（他方[N1 + clé]における clé の意味が「鍵」ではなくなりつつあることは 3.2 節で確認した）。3.3 節で指摘したように、関係的な[N1 + N2]は N1 の指示対象の下位範疇を示す。もし[pause + N2]における pause の意味が「休憩」ではない何か別のものになってしまっていたら、pause の下位範疇を[pause + N2]によって示すことはそもそも困難になったであろう。このように、N1 があくまで元の語彙素の統辞的・意味的情報を保持した状態で当該位置に収まっているというのが、[N1 + clé]の clé や[N1 + papier]の papier などの場合とは違う特徴である[83]。

ここまで属詞的な[N1 + N2]と関係的な[N1 + N2]との比較を通じて、pause-café 型複合名詞の分類上の位置づけを明らかにした。その上で、この複合名詞の生産的な

[83] ただし中には[rayon + N2]の $rayon_1$ のように、単独で現れる場合と関係的な[N1 + N2]の中で現れる場合とで、指示対象が微妙に異なるケースも存在する（単独では「棚」を示すが、複合名詞の主要部として現れる場合には「売り場」を意味する。なお、「光線」や「範囲」を意味する $rayon_2$ は異なる語彙素と見なし区別する）。

形成を実現する仕組みとして、構成素の片側が語彙的に指定された語形成モデルの想定可能性を提案した。特に関係的な[N1 + N2]においては、主要部名詞(N1)の方が指定された語形成モデルが、N2 が指定されたモデルと同じように可能であることを指摘した。では実際にどのような名詞がこの指定されたスロットに入り得るのか、またそれに対する未指定のスロットにはどのような名詞が見られるのか、以下 2 つの章にわたって、実際に観察された pause-café 型複合名詞の例を分析する。

第 4 章

特定の N1 + さまざまな N2

4.1. Pause-café 型複合名詞の実例調査

ここまでの議論で、関係的な[N1 + N2]には語形成モデルとして N1 があらかじめ指定されたものと、N2 が指定されたものがあることが指摘されたが、実際にどのような組み合わせが見られるのだろうか。本章では生産性が実現する 2 つのケースのうち、まず「特定の N1」と「さまざまな N2（未指定）」という組み合わせに注目し、筆者が実際に収集した実例を基に考察する。

分析に用いる実例は 2010 年 8 月から 2017 年 9 月までの約 7 年間にわたって筆者が収集したものが中心である。ソースはフランス国内で出版・放送されている新聞や雑誌、テレビなどのメディアのほか、商業施設のチラシなどの広告や商品パッケージ上の標示、ウェブサイト、街中の看板などである。ウェブサイトの中にはフランスだけでなく、近隣のフランス語圏（モナコなど）と思われるものも一部含む。また大半は書かれたものであるが、テレビ番組内で話された内容や話しことばコーパス[84]から得られた実例など、話しことばにおける例も含まれている。その結果得られた実例は、pause-café 型複合名詞が延べ数で 1,282 件である。

ところで今回収集した実例の中では、N1 の直後に形容詞（spécial が圧倒的に多かった）が現れる構造も 299 件（延べ数）観察された。この[N1 + spécial + N2]について

---

[84] 話しことばの実例に関しては以下のコーパスのデータを参照した：①TCOF（23 時間の談話を収録。参考ウェブページ：« http://www.cnrtl.fr/corpus/tcof »）；②東京外国語大学フランス語話しことばコーパス（54 時間の談話を収録。参考ウェブページ：
« http://www.coelang.tufs.ac.jp/multilingual_corpus/fr/index.html »,
« http://cblle.tufs.ac.jp/ja/information/68.html »）；③CRFP（36 時間の談話を収録。参考ウェブページ：« http://www.up.univ-mrs.fr/delic/corpus/index.html »）；④CLAPI（17 時間の談話を収録。参考ウェブページ：« http://clapi.ish-lyon.cnrs.fr »。
なおこれらのコーパスに収録されている談話データにはそれぞれ名前が付けられている。以降の出典表記においては「コーパス名 ＞ 談話データ名」という形式を取ることにする（e.g. TCOF > Pap_pet_thi_reu : TCOF コーパスに収録の Pap_pet_thi_reu というファイル名の談話データ）。

も、N2 が N1 の補部だと認められることから、当初は pause-café 型複合名詞の一変種として収集していた。しかしながら考察を進める中で独自の語形成モデルを有している可能性が示唆されたため、最終的には pause-café 型複合名詞とは分けて扱うことにした。本構造の実例およびその分析については第 6 章にて改めて行うこととし、本章では（[N1 + spécial + N2]以外の）pause-café 型複合名詞の実例のみを扱う。

Pause-café 型複合名詞の構成素組み合わせのパターンは全部で 1,083 あった。このうち N1 に入る名詞（以下便宜的に「N1 名詞」とする）は 366 種類、N2 に入る名詞（同じく「N2 名詞」とする）は 566 種類であった。この値は以下のような変異をそれぞれ同じものとして集計した場合の種類数である[85]:

① automobile（自動車）に対する auto など、切除された形式;

② chocolat（チョコレート）に対する chocolat blanc（ホワイトチョコレート）などの下位項目的変異。

いずれにしても N1 に入る名詞の種類の方が N2 に入る名詞よりも少ない傾向にある点は興味深い。特定の N1 名詞がかなり多くの種類の名詞との組み合わせを実現していることが要因として考えられる（詳しくは後述する）。以下 N1 名詞において、特にさまざまな名詞と組み合わさるものにはどのようなものがあるかを報告するとともに、構成素間の具体的な意味関係についても説明する。なお、特定の N2 名詞がさまざまな名詞(N1)と組み合わさる場合については次章で取り扱うこととする。

4.2. 特定の N1 + さまざまな N2： 全体の傾向

366 種類観察された「N1 名詞」の N2 との組み合わせ可能性は一様ではない。例えば soirée（夕べ、夜のパーティー）は 21 種類の名詞との組み合わせが確認できたが、意味的に同じ範列に属する après-midi（午後）と組み合わさった名詞は guinguette（大衆酒場）の 1 種類のみであった（i.e. après-midi guinguette： 大衆酒場のように飲食と歌やダンスを楽しみながら過ごす午後のイベント）。組み合わせ可能性のばらつきを示した

[85] ちなみにこれらの変異をそれぞれ別物と見なす場合には、「N1 名詞」は 392 種類、「N2 名詞」は 645 種類になるが、これ以降示す集計値は諸変異を同一物と見なす前者の分類方法に基づくものとする。

のが以下の図である。

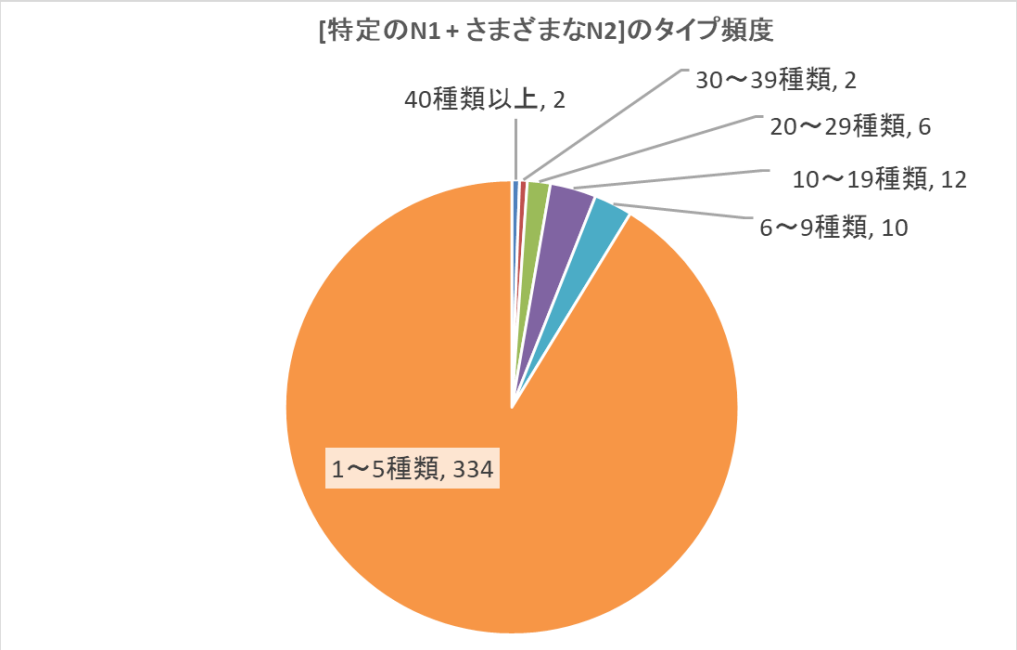


図 25：N2 との組み合わせ可能性

この図から、高い生産性はごく一部の「N1 名詞」を伴った場合にのみ実現されていることがうかがえる。40 種類以上の名詞(N2)との組み合わせが見られたのは[espace + N2]と[pause + N2]のわずか 2 種類であった一方、先の[après-midi + N2]のように、名詞(N2)との組み合わせが少数（1～5 種類）[86]にとどまったのは 334 種類と、全体の約 91%に及んだ。

では具体的にどのような「N1 名詞」が高い生産性に関係しているのだろうか。N2 との組み合わせが 6 種類以上の「N1 名詞」について、組み合わせが多い順にこれらを並べたのが以下の表である。

[86] ここでの 5 種類以下という線引きはあくまでも便宜上のものである。組み合わせ可能性の高低は程度に関する問題であるため、明確な線引きは難しいのが実際である。

表 6： さまざまな名詞(N2)と組み合わさる「N1 名詞」

	N1	type N2	exemples	
1	espace	83	espace détente	休憩スペース
2	pause	40	pause apéro	食前酒休憩
3	assurance	36	assurance chômage	失業保険
4	rayon	33	rayon bd	漫画売り場
5	coin	28	coin barbecue	バーベキューコーナー
6	service	28	service billetterie	チケットサービス
7	accès	25	accès commerces	商店入口
8	pôle	21	pôle concours	選抜試験センター
9	soirée	21	soirée loto	くじ引きパーティー
10	atelier	20	atelier calligraphie	習字教室
11	point	17	point renconre	ミーティングポイント
12	côté	16	côté esplanade	広場側
13	opération	16	opération séduction	魅力発信キャンペーン
14	mode	14	mode avion	機内モード
15	tarif	13	tarif demi-journée	半日料金
16	idée	12	idée déco	装飾アイデア
17	journée	12	journée pêche	フィッシングデー
18	papier	12	papier aquarelle	水彩画用紙
19	prix	12	prix catalogue	カタログ価格
20	goût	11	goût banane	バナナ味
21	solution	11	solutions communication	伝達ソリューション
22	offre	10	offre abonnés	契約者割引
23	chèque	9	chèque cadeau	ギフトカード
24	version	9	version anime	アニメ版
25	produit	8	produit camping	キャンプ用品
26	ticket	8	tickets restaurant	食事券
27	plan	7	plan canicule	猛暑対策
28	avantage	6	avantages étudiant	学生特典
29	kit	6	kit dégustation	試食キット
30	soin	6	soin corps	ボディーケア
31	sortie	6	sortie piétons	歩行者出口
32	timbre	6	timbre réduction	割引シール

最もタイプ頻度が高かったのが[espace + N2]で、N2 として détente（休憩、リラックス）をはじめ 83 種類の名詞が観察された。それに続き pause（休憩）の下位範疇を示す[pause + N2]（40 種類の N2）、assurance（保険）の下位範疇を表した[asssurance + N2]（36 種類の N2）と続く。

また、リストされた「N1 名詞」は意味的に 3 種類に分類することができる。具体物を表す名詞、出来事を表す名詞、そして、それ自体では特定の事物を表すのに不十分

な名詞である。

まず、白地（無色）の「N1 名詞」はそれ単独で具体物を表す名詞である。例えば 3 番目の assurance は、それ自体が「保険」という具体的な商品あるいは社会的な仕組みを示しているため、Vous avez une assurance ?（保険に入っていますか？）のように、補部を伴わなくとも現れることができる。同じことは papier（紙：18 番目）や chèque（小切手：23 番目）、produit（製品：25 番目）、ticket（チケット：26 番目）、timbre（切手、シール：32 番目）にも言えるが、表中の 32 種類の「N1 名詞」の中では 6 種類と、比較的少数にとどまった。さらに、名詞(N2)との組み合わせ数の上位に見られたのは assurance のみであった。

緑色にマークした 7 種類の「N1 名詞」はそれぞれ何らかの出来事を表す。例えば pause（休憩：表中 2 番目）は勤務時間や会議といった他の出来事にしばしば挟まれる形で設けられる、時間限定のイベントである。Soirée（夕べ、パーティー：同 9 番目）や journée（日中：同 17 番目）の場合には、その出来事が行われる時間帯についてもあらかじめ規定され得る。これらの名詞は先の具体物名詞と同じく、単独でも具体的なイベントを示すことができる。

表中で多数を占めたのが、黄色でマークした「N1 名詞」である。これらには意味的に不完全な面があるように見える。次節にてその特徴について詳しく分析する。

4.3. 意味的不完全性と下位範疇化

上の表中で黄色でマークされた名詞は、いずれも抽象度が高く、それ自体が確固たる指示対象を持っているのか疑わしい点が特徴である。特に espace, rayon, coin, accès, pôle などの、何らかの場所をメタ談話的に示しているような名詞が上位に多い点は注目に値するだろう。例えば espace（表中 1 番目）はそれ自体では「場所、空間」を意味するに過ぎず、その「場所」が具体的に何であるのかは分からない。「棚」を意味する rayon（同 4 番目）は商業施設の売り場のことも示すが、Pourquoi le beurre manque dans les rayons de supermarché（なぜバターがスーパーの売り場で不足しているのか）[87]のよう

[87] www.lesechos.fr 2017 年 10 月 12 日、記事タイトル。

に「売り場」一般について言及する場合を除けば、それが何の「売り場」なのかということが問題となる。場所を表す名詞以外でも同じで、例えば service（同 6 番目）は具体的に何の「サービス」または「（組織の）課」なのかを明示しない限り、service そのものが示す内容はかなり抽象度の高い次元にとどまるだろう。

同様に mode（モード：14 番目）や version（版：24 番目）も、それ自体は分類の単位を与えているに過ぎず、明確な指示対象を内在的に有している訳ではない。これらの名詞は補語を伴って初めて、具体的な事物を示すことができるようになる。

このように、それ自体では意味的に不完全な部分がある名詞を Legallois (2006 : 10-12)は「不完全指定の名詞(noms sous-spécifiés)」と呼んでいる。これらは指示対象のプロトタイプを持たないのが特徴である。例えば espace は境界指定された何らかの「場所」を示しているが、この「場所」というもののプロトタイプを想定することは難しい。同じように idée（表中 16 番目）は「考え、アイデア」を意味するが、それ自体に明確なプロトタイプがある訳ではない。J'ai une idée（私にひとつ考えがある）と言った際には、それがどのような「考え」なのかということが常に問題となる。

このような名詞における意味的な不完全性は補部によって補われなければならない。補部の現れ方は語形成レベルから談話レベルに至るまでさまざまである。語形成レベルでは N2 (e.g. espace détente)や AdjR (e.g. espace culturel 文化スペース)などによって、統辞レベルでは前置詞連辞(e.g. espace de travail collaboratif 協働スペース)などの形で、そして談話レベルでは以下のように「コロン効果(effet deux-points)」(cf. Blanche-Benveniste 2010)を伴って現れたりする。

(66) Tu vois, le monde se divise en deux catégories : ceux qui ont un pistolet chargé et ceux qui creusent. Toi, tu creuses.
いいか、この世の中は 2 つのカテゴリーに分かれる。弾の入った銃を持つ奴と地面を掘る奴だ。お前さんは地面を掘る方だ。
（映画 *Le Bon, la Brute et le Truand*, 原題 : *Il buono, il brutto, il cattivo*, 監督 : Sergio Leone, 1966 年）

これは映画の仏訳セリフからの引用であるが、初めに「2 つのカテゴリー(deux

catégories)」がメタ談話的に示されている。この catégorie という名詞は、それ自体で明確なプロトタイプを持っている訳ではなく、分類上の単位をメタ言語的に提示しているに過ぎないので、いわゆる「不完全指定の名詞」である。したがって指示内容を具現化するために補部が必要となるのだが、それはコロンを挟んで（実際には話された言葉のため、コロンではなくポーズが置かれる）提示された 2 つの名詞連辞(i.e. ceux qui ont un pistolet chargé et ceux qui creusent)によって実現されている。

これらの例からも示唆されるように、補部による「不完全指定の名詞」の指示内容の具体化は下位範疇ネットワークの構築をもたらす。Espace が具体的にどのような「場所」なのかを指定するということは、espace に複数の下位範疇があることを結果的に示唆することになるだろう。Rayon fromage（チーズ売り場）という「売り場」があるということは、rayon viandes（肉売り場）や rayon fruits et légumes（果物・野菜売り場）など、具体的には分からないまでも、他にも何らかの複数の「売り場」が存在していることを暗示することにつながる。このことは mode や version、さらには表中には現れていないが type（タイプ：N2 との組み合わせ 5 種類）や catégorie（カテゴリー：同 4 種類）など、それ自体が分類上の単位を表す「N1 名詞」においてはより顕著である。このように、下位範疇化への道筋が[N1 + N2]という構造に至る前の語彙的な意味の段階ですでに示されているという点は興味深い。それ自体では意味的に不完全な名詞がなぜ関係的な[N1 + N2]の N1 としてよく見られるのかという点については、その名詞が本来持つ意味的な特徴が、本構造によって実現する下位範疇化に適合するものだからだと説明することができるだろう。

その一方で、「不完全指定の名詞」でなくても下位範疇化は可能である。例えば pause は、仮に on fait une pause ?（休憩しますか）と言ったところで、その「休憩」が具体的にどんなものか（何をして過ごす休憩なのか）ということは必ずしも問題とならないという点で、「不完全指定の名詞」とは認められない。しかし pause-café や pause apéro（食前酒休憩）などのように、「休憩」の下位範疇を[pause + N2]によって示すことも可能である。つまり「N1 名詞」が「不完全指定の名詞」でなかったとしても、その事実自体は下位範疇の形成を妨げるものではない。「不完全指定の名詞」はその意味的特徴上、関係的な[N1 + N2]構造と相性が良いというだけの話であり、それ自体で確固たる指示対象を

持ち得る名詞であっても、関係的な[N1 + N2]構造によってその下位範疇を示すことができる。ただし「不完全指定の名詞」と違って、必ずしも下位範疇を形成しなければならない訳ではない。つまり、補語による下位範疇の提示は「N1 名詞」が「不完全指定の名詞」の場合には必須だが、そうでない場合には選択的だということである。

4.4. N2 に見られる傾向 : [espace + N2]の場合

4.4.1. N2 に入る名詞の細分類

ここまで「N1 名詞」に注目してきたが、pause-café 型複合名詞の構成素間の意味関係の構築は「N1 名詞」だけによって決定する訳ではない。それらと組み合わさる名詞(N2)の傾向についても目を向ける必要があるだろう。ここでは一番多くの種類が確認された[espace + N2]に着目し、どのような名詞が N2 に入り、それが構成素間の意味関係にどう影響するのかを分析する。

以下の表は今回確認された 83 種類の[espace + N2]を、N2 に入る名詞の意味ごとに 4 つのグループに分類したものである。なおこの分類は完全ではなく、グループ分けが曖昧なケースも少なからず含まれている（詳しくは後述する）。

表 7 : [espace + N2]

	N1	type N2			N1	type N2	
グループ1 人やその集団を示す名詞 （17種類）				グループ3 物を示す名詞 （15種類）			
1	espace	abonné	契約者	44	espace	0%	（乳脂肪分）0%（の乳製品）
2	espace	adultes	大人	45	espace	2 roues	二輪車
3	espace	animateurs	イベント従事者、司会者	46	espace	bagages	手荷物
4	espace	bébé	赤ちゃん	47	espace	carte de séjour	滞在許可証（申請・更新）
5	espace	client	顧客	48	espace	chaussures et souliers	靴＆短靴
6	espace	coureur	ランナー	49	espace	chocolat	チョコレート
7	espace	enfant	子ども	50	espace	colis Cityssimo	Cityssimoの小包
8	espace	famille	家族	51	espace	high-tech	ハイテク（製品）
9	espace	fauteuils roulants	車椅子（使用者）	52	espace	infos jeunes	若者向け情報
10	espace	maman	母親	53	espace	multimédia	マルチメディア（製品）
11	espace	membre	メンバー	54	espace	notes	成績（管理）
12	espace	personnel	従業員	55	espace	poussette	ベビーカー
13	espace	presse	報道（関係者）	56	espace	ressource	リソース
14	espace	secrétariat	秘書	57	espace	vélos	自転車
15	espace	seniors	お年寄り	58	espace	vin	ワイン
16	espace	société	法人	グループ4 場所を示す名詞 （13種類）			
17	espace	stagiaires	インターン参加者	59	espace	accueil	受付
グループ2 出来事を示す名詞 （26種類）				60	espace	bar et salon	バー＆応接間
18	espace	achats	購買	61	espace	boutique	ショップ
19	espace	adhésion	入会	62	espace	bureau	書斎、オフィス
20	espace	boxe	ボクシング	63	espace	cinéma	映画館
21	espace	communication	通信	64	espace	cuisine	キッチン、料理
22	espace	conduite	運転	65	espace	douche	シャワー
23	espace	conseil	相談、アドバイス	66	espace	laverie	ランドリー
24	espace	coworking	協働	67	espace	milk et bar	ミルクバー
25	espace	dégustation	試食	68	espace	nurserie	託児所
26	espace	dégustation vente	試食・販売	69	espace	papeterie	文具店
27	espace	détente	リラックス	70	espace	parapharmacie	ドラッグストア
28	espace	foot	サッカー	71	espace	pressing	クリーニング店
29	espace	gym	体操、ジムトレーニング	その他 （12種類）			
30	espace	internet	インターネット	72	espace	art et culture	芸術＆文化
31	espace	jeux	ゲーム	73	espace	audition	聴覚（補聴器販売）
32	espace	jeux-vidéo	テレビゲーム	74	espace	beauté	美容
33	espace	location	レンタル、貸出	75	espace	coiffure	ヘアスタイル
34	espace	loisirs	娯楽	76	espace	convivialité	懇談
35	espace	naissance	出産	77	espace	fidélité	愛顧
36	espace	paquets cadeaux	ギフト包装	78	espace	langues	言語（学習）
37	espace	prière	祈祷	79	espace	rentrée	新学期
38	espace	projet	プロジェクト	80	espace	restauration	飲食業
39	espace	repas	食事	81	espace	santé	健康
40	espace	retrait	受け取り	82	espace	santé beauté	健康・美容
41	espace	services	サービス	83	espace	sciences	科学
42	espace	travail	仕事				
43	espace	vente	販売				

全体的な傾向としては、N2 は N1 である espace（スペース）に関連する事物を示している。例えば espace 0%（表中 44 番目）は大学の学生食堂で、乳脂肪分ゼロの乳製品が並んでいるコーナーに標示されていたものであるが、構成素間には「関係的」な意味合い（i.e. 乳脂肪分ゼロ製品に関する場所）を見出すことができる。より具体的には「乳脂肪分ゼロ製品がある場所」という「所属」の意味合いと、「乳脂肪分ゼロ製品のための場所」という「目的」の意味合いの両方を想定できるが、どのような意味関係が優先され得るかは、N2 に入る名詞の意味内容によるところが大きいと思われる。以下それぞれの

グループごとにそれを分析していく。

4.4.2. 人やその集団を示す名詞

第 1 グループは「人やその集団を示す名詞」（計 17 種類）である。ここには adultes（大人）や bébé（赤ちゃん）といった年齢層と関連のある名詞のほか、abonné（契約者）や personnel（従業員）のような社会的役割に関する名詞、また secrétariat（秘書）や presse（報道（関係者））のような職業名詞が見られた。意味関係としてはほとんどの場合「目的」の関係が支配的だと考えられる。例えば espace bébé は商業施設内に設けられたスペースで、そこでおむつ替えをしたり、場合によっては乳幼児が遊べるようにもなっていることから、赤ちゃんのために設けられたスペースと捉えることができよう。このように、本グループにおける[espace + N2]は、N2 で示された特定のタイプの人間または集団のために設計されたものであり、それらの人間・集団はそのスペースの利用者あるいは受益者である[88]。

ところで fauteuils roulants は厳密には「車椅子」だが、ここでは「車椅子利用者」を換喩的に示していると捉え、このグループに分類した。以下は espaces fauteuils roulants が確認された実際のテクストである。

(67) Il y a <u>deux espaces fauteuils roulants</u> par train, c'est pourquoi si vous en avez besoin, nous vous conseillons vivement de nous l'indiquer dès votre réservation.
(www.eurostar.com/fr-fr/voyage/preparez-votre-voyage/plan-des-voitures-eurostar 2015 年 7 月 3 日参照、下線は筆者)
1 列車につき <u>2 か所の車椅子スペース</u>があります。よってもしこちらが必要な場合には、ご予約の段階でお知らせくださいますよう強くお勧めします。

これは列車の設備についての説明だが、車椅子を利用する乗客は車椅子をその「車椅子スペース」に置いて別の座席に座る訳ではなく、そのスペース自体が一般の座

[88] 唯一の例外は espace secrétariat であった。これは秘書のために設けられたスペースというよりは、秘書が常駐するスペースである。したがって「目的」よりも「所属」の意味合いで捉えた方が妥当である。

席と同じ扱いになる。この文脈において「車椅子」と「車椅子利用者」はかなり密接な関係にあり、両者の間で換喩が起こっても不思議ではない。この点は espace poussette（ベビーカースペース）にベビーカー利用者たる乳幼児が必ずしも存在している必要性がないのとは対照的である（ベビーカーだけをそこに止めて置くということは可能である）[89]。

4.4.3. 出来事を示す名詞

第 2 グループは「出来事を表す名詞」（計 26 種類）である。ここには adhésion（入会）や naissance（出産）のような動詞由来の出来事名詞が多く見られたほか、boxe（ボクシング）や jeux-vidéo（テレビゲーム）をはじめとするスポーツや娯楽に関連する名詞も散見される。第 1 グループと同様に、構成素間には「目的」の意味関係が想定できるが、同時に「所属」的な解釈、つまり N2 によって示される行為がその場所で行われるという捉え方も可能である。例えば espace adhésion（入会スペース）はパリのルーヴル美術館内に設けられた一角（通路とはガラスで仕切られた、店舗のような空間になっている）で、美術館の年間パス購入手続きを取り扱っているが、このスペースはまさに入会手続きという目的のために設置された場所であり、ここで「入会」という出来事が起こるということでもある。

なおこの中には internet（インターネット）や repas（食事）のように、出来事とも物（cf. 第 3 グループ）とも解釈し得る名詞もいくつか確認されたが、これらの名詞の場合にも「所属」としての余地が認められる。例えば espace internet はインターネットを利用するためのスペースであるとともに、インターネットという物（サービスとも捉えられるだろう）がそこにあるということでもある。インターネットを利用するためには閲覧のための端末が必須であるが、実際 espace internet と称される場所では、ウェブ閲覧用のコンピューターが設置されていることが多い[90]。この「所属」の意味関係は、次の第 3 グループおよび第

[89] Espace poussette の場合は「ベビーカー置き場」というように解釈できるだろうが、espace(s) fauteuil(s) roulant(s)の場合には単に「車椅子置き場」という解釈にとどまらず、「車椅子利用者が、その身を落ち着ける場所」という意味合いにもなり得るということである。

[90] コンピューターがそこにあるという意味では espace ordinateur という名付けも可能と思われるが、今回の調査ではその形式は確認されなかった。また espace internet がインターネットの閲覧をもっぱら想定するのに対し、espace ordinateur の場合にはそれ以外のコンピューターに関する活動（文書作成、表計算など）も想定に含まれる可能性がある。

4 グループではより顕著に現れてくる。

4.4.4. 物を示す名詞

「物を示す名詞」(計 15 種類)がリストされた第 3 グループでは bagages(手荷物)や poussette(ベビーカー)のような具体物や infos jeunes(若者向け情報)や notes(成績)のような抽象物を示す名詞が見られる。第 1・第 2 グループとは異なり、これらは受益者や出来事を直接的には示さない。そのため「目的」よりも「所属」の意味関係の方がむしろ支配的なようにも見える。例えば espace chocolat は菓子店においてチョコレートが陳列された空間を示しているが、chocolat はそのスペースの所属物である。Espace bagages は駅構内の標示で見られた例だが、これは手荷物預かり所、つまり荷物が一時的に所属する場所のことである。この 2 つの例からも示唆されるように、espace とこれらの名詞との間には poser(置く)という行為が間接的に関わっている。つまり espace chocolat は「チョコレートを置く(並べる)スペース (l'espace où l'on pose (expose) des chocolats)」、espace bagages は「荷物を置く(置いていく)スペース (l'espace où l'on pose (dépose) des bagages)」という解釈が可能である[91]。この「置く」という行為の結果、被動作主である chocolat や bagages はその場所(espace)に所属することになる。したがって結果的に「所属」の意味合いをここに認めることができるのである。

ちなみに N2 で示される物体と「スペース」との所属関係は一時的である。仮にチョコレートが品切れになった状態でも espace chocolat はチョコレートスペースであり続けられる。同様に、espace poussette にベビーカーが常に置かれていなければならない訳ではなく、極端な場合には自転車がそこに置かれていても espace poussette の意味内容への直接的な影響はない[92]。

---

[91] ここに「目的」の意味合いを見出すことも不可能ではない。その場合 espace chocolat は「チョコレートを置くための場所 (l'espace pour poser des chocolats)」という言い換えになるだろう。いずれにしても「所属」の関係が結果的に生じることになる。

[92] 歯ブラシを例えば窓サッシの溝を掃除するのに使ったとしても「歯ブラシ」は「歯ブラシ」であり続けるのと同じことである。

4.4.5. 場所を示す名詞

この「所属」の意味関係は第 4 グループの「場所を示す名詞」(計 13 種類)でも支配的である。このグループの名詞の特徴は、それ自体で特定の場所を示し得るという点である。例えば papeterie は「文具店」を、laverie は「ランドリー」という場所をそれぞれ示している[93]。Espace papeterie の場合、「文具店」—より正確には「文具店としての機能」—がその場所に「所属」していると解釈できる。同じように espace laverie には「ランドリーがある場所 (l'espace où se trouve une laverie)」という意味関係を見出すことができる。

ちなみに最後の「その他」には beauté(美容)や santé(健康)などの抽象名詞をはじめ、合計 12 種類が該当した。中には espace fidélité(ご愛顧スペース:ポイントカード保持者が登録情報やポイントを管理できる専用ウェブページ)のように、N2 の意味内容の拡張が示唆されるものもあった。

4.4.6. N2 に見られる傾向と「目的」「所属」の意味関係

このように、[espace + N2]において見られる「関係的」な意味関係の内容は、基本的には「目的」か「所属」のどちらか、あるいは両方である。どちらの意味関係の方がより色濃く見出せるかについては、N2 に入る名詞の意味内容によるところがあり、その「スペース」に関与する「人(やその集団)」を表す場合には「目的」の解釈の余地が大きいが、その傾向は「出来事」、「物」、「場所」という順番で弱まり、対照的に「所属」としての意味合いが強まってくることが示唆された。一方で Noailly (1990)が取り上げていた 4 つの意味関係(cf. 3.3 節)のうち「所有」や「原因」については[espace + N2]ではほとんど認めら

---

[93] Cuisine は場所としての「キッチン」のほかに「料理」という行為あるいはその結果物をも示し得るが、収集された例の文脈では場所としての解釈が認められたため、このグループに分類した。以下がその談話である。

- L1 : je veux dire bon si si vous dépassez si vous êtes déjà une quinzaine de gamins là-dedans c'est déjà bien
  つまりその、もし超えたら、もしそこにすでに 15 人くらいの子どもがいたら、もういいんです。
- L2: ouais
  はい。
- L1: si vous dépassez quinze euh répartissez dans vous dans des salles quoi puis prenez <u>l'espace cuisine</u> hein (…)
  もし 15 人を超えたら、ええと、複数の部屋に分かれてください。それからキッチンスペースもね(…)。

(TCOF > Pap_pet_thi_reu　下線及び和訳は筆者。)

れなかった[94]。

4.5. 空間のセグメント化と下位範疇化

ところで先の第 4 グループにおいて興味深いのは、その名詞自体が場所を示しているにもかかわらず、同じく「場所」を表す espace と組み合わさっている点である。「文具店」と「スペース」を組み合わせることは一見すると冗長的であるが、なぜこのような組み合わせが見られるのだろうか。

この点については[espace + N2]という構造がもたらす 2 つの効果―空間のセグメント化と下位範疇化(cf. 3.4 節)―に着目することで説明が可能である。先に見た倉庫内の描写に関する発話では[coin + N2]という構造を取ることによって、倉庫という広い空間をいくつかのセグメントに区切る効果がもたらされたほか、bibelot（小物）や vêtement（衣服）などその名詞単独では範疇的関連性の希薄な事物同士が、この構造を取ることによって同じ下位範疇ネットワークの下におさまることが可能になった。これと同じように[espace + N2]という構造にも、空間を細分化する効果、そして下位範疇ネットワークを構築する効果を認めることができる。以下の例はそれを示唆するものである。

(68) Cet établissement dispose d'un espace laverie mais aussi d'un espace pressing.
(www.washndry-concept.com/laverie/laverie-grande-lessive-toulouse/ 2017 年 4 月 6 日参照、下線は筆者)
この施設はランドリースペースだけでなくクリーニング屋スペース[95]も備えています。

この発話では 2 つの「スペース」が取り沙汰されているが、いずれもこの施設(établissement)における 1 つの区画を表している。つまり上位範疇として「施設」があり、その下位に「ランドリー」と「クリーニング屋」などの各区画があるという関係になる。ところが laverie と pressing は、それ自体で「ランドリー（または洗い場）」、「クリーニング屋」と

[94] 「所有」の意味関係は第 1 グループのいくつかに認められた(e.g. espace personnel： 従業員スペース → 従業員はそのスペースを所有している)が、「原因」の意味関係はいずれの名詞(N2)との組み合わせにおいても見出せなかった。
[95] 通常の洗濯機では洗えない衣類のクリーニングをここで受け付けるようである。

いう独立したいわば「店舗」としての場所をそれぞれ示し得るため、そのままの形ではこのような範疇の上下関係を示しづらい。「店舗」としての「ランドリー」や「クリーニング屋」は、それ自体が「施設」であり、発話内で言及されている「施設」と、カテゴリーのレベルが同じになってしまうおそれがあるからである。

それに対して[espace + N2]という構造は、与えられた空間を「スペース(espace)」という単位でセグメント化する機能を持つ。その仕組みを図示すると以下のようになる。

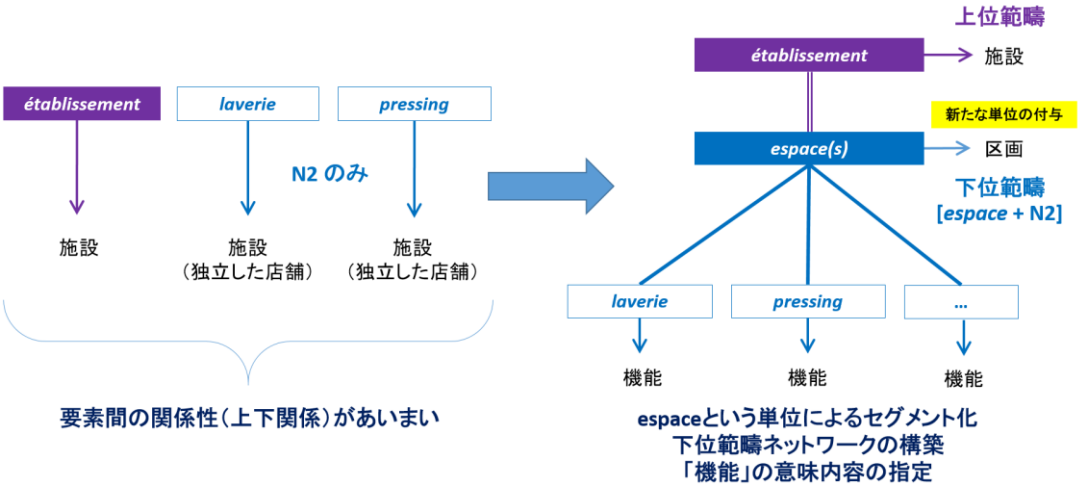


図 26：[espace + N2]による空間のセグメント化と下位範疇化

Espace という共通の単位で示された事物はいずれも同じカテゴリーのレベルに属することになるほか、それらを束ねる上位範疇があることも同時に示されることとなる。したがって単独では独立した店舗を表し得る laverie や pressing も、espace laverie と espace pressing という形になることで、それぞれの指示対象が、とある施設内におけるひとつの区画として存在していることを「説明」し、同時にそれらの区画を「名付け」ることができるようになるのである。

ここでさらに注目したいのは N2 に入る名詞の多義性に関わる問題である。上の図で示したように、espace laverie と espace pressing における laverie と pressing はもはや「場所」（店舗）ではなく、それぞれ「ランドリー」としての「機能」、「クリーニング屋」としての「機能」を表している。この 2 つの名詞はもともと多義的である。Laverie は「衣服を洗う」という「機能」を有した「場所」を、pressing はドライクリーニングなど、クリーニング業

が担う「機能」が実行される「場所」をそれぞれ示しており、「機能」と「場所」の意味内容のどちらか（あるいはどちらも）を引き出すかは、形式や文脈などに依存している。そのような中で[espace + N2]では espace がすでに「場所（区画）」を示しているため、それに続く N2 が「場所」を示す必要性はない。したがって、残る「機能」に関する情報が本構造下では引き出されることになるのではないかと考えられる。

2.4 節において、 [multi + A]という構造においては名詞 discipline の多義性が解消される（「学問分野」、「規律」のうちもっぱら前者の意味になる）ことについて言及したが、ここで取り上げている[espace + N2]の N2 に見られる意味内容の特化も、それと似たような現象と見なせるだろう。語彙的な意味の段階では多義的である laverie のような名詞も、[espace + N2]の N2 として現れる際にはもっぱら「衣類を洗濯する」という「機能」に特化した意味になる。多義性に関わる処理をはじめとする語彙情報の意味的操作は統辞や談話レベルでも行われるが、[multi + A]やここで取り上げている[espace + N2]が示唆するのは、同様の意味的操作（取捨選択）が語形成の段階においても実現し得るということである。

ところで、空間のセグメント化効果によって示された各「スペース」は必ずしも（仕切りなどによって）物理的に区切られているとは限らない。その点については既出の以下の発話からもうかがえる。

(=58) mais tu peux eu~ tu pourras peut-être eu faire euh faire en sorte que le l’espace douche soit vraiment un espace et pas juste un un bac hein tu vois que que qu’on y soit à l’aise enfin toujours

(clapi > reunion_conception_mosaic_architecture 太字化は筆者)

君はその・・・君はシャワースペースを、ただの桶じゃなくてさ、本当に 1 つのスペースとして作っていいんだよ。だってやっぱり快適に利用したいだろう。

施設設計に関するこの発話内では「シャワースペース」のあり方について取り沙汰されているが、espace douche の espace の部分だけが強意の副詞 vraiment と共に再度現れることで強調されている。それに続く「ただの桶じゃなくて」という言明からも示唆されるように、この一連の発話によって示されているのは、問題の「シャワースペース」が周辺

から物理的に明確に区切られた 1 つの区画（ブース）であるべきということである。たしかに[espace + N2]は与えられた空間をセグメント化する効果をもたらすが、それはヴァーチャルな区画割りに過ぎない。つまり salle（大部屋）や chambre（寝室）などとは異なり、そのスペース(espace)が物理的に仕切られている必要性はないのである。上記の発話で話者が espace の部分をことさらに強調した背景には、このようなセグメント化のヴァーチャル性が関わっていると考えることができる。

4.6. Laverie vs. espace laverie： 指示対象への参照の仕方

ここまでの考察で明らかになったのは、espace laverie を始めとする関係的な[N1 + N2]構造では、N1 と N2 が指示対象のそれぞれ異なる次元の情報を参照しているという点である。以下はその参照関係を単一の語彙素の場合と比較して図示したものである。

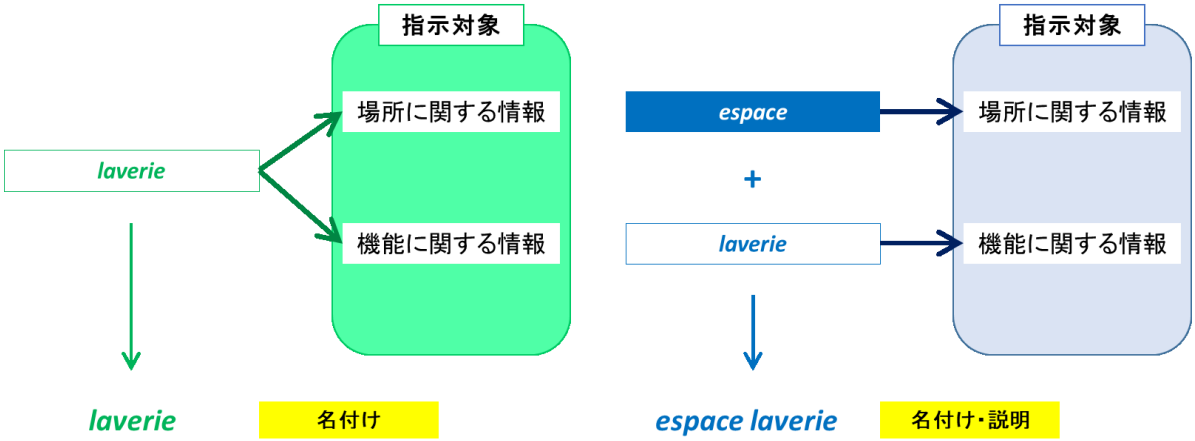


図 27 : laverie と espace laverie における指示対象への参照

上図に示したように、laverie のような単一の語彙素では、指示対象の持つ「場所」と「機能」の両方をこの語彙素が参照している。この場合語彙素と対象物とは一対一関係にあるため、そこに「名付け」の機能はあっても「説明」の機能は必ずしも持ち合わせていない[96]。それとは対照的に espace laverie では N1 が「場所」に関する情報を参照する一

[96] 形態素レベルで見れば lav-が「機能」を、-erie が「場所」を示しているという説明関係を想定する

方、N2 はその場所が持つ「機能」を参照している。つまり各構成素と対象事物との関係は一対一ではなく、むしろ各構成素は同一の対象事物の特定の意味的側面と一対一関係を結んでいる。この点が先の laverie（単独の場合）との違いである。

複合名詞には「名付け」と「説明」の両方の機能が認められるということを 3.4 節以降の議論で確認してきたが、これが可能なのは、まさにこの espace laverie の例が示すように、ある事物への参照を複数の構成素を以って、異なる側面から行うためと言えるだろう。つまり、単一の事物を意味的に分解（分析）したうえで、その分解した要素ごとに espace や laverie といった各記号を与えていることになるが、この分解という作用が「説明」の機能へと結びつく。そしてそれを最終的に 1 つの語彙的項目としてまとめあげることで「名付け」が可能となるのである。

なお[N1 + N2]構造におけるこのような指示対象への参照の仕方は、形式的対応が予期される前置詞付きの構造(i.e. [N1 + PREP. + N2])のそれとも異なることを Fradin (2003 : 203-206)が指摘している。例えば stylo bille（ボールペン）も stylo à bille も、stylo（ペン）の下位範疇を示しているという点では共通しているが、前者では N1 と N2 が同一事物の異なる意味的側面を参照し合うことで成り立っている一方、後者では N1 が示す対象事物が先にあり、その中から弁別的な特性を見出した結果として(PREP. +) N2 が示されるという微妙な違いがある。Stylo bille では対象事物である「ボールペン」が持つ意味側面のうち stylo が道具としての「機能」面を、bille が「材料」面を参照している。それとは対照的に、stylo à bille では上位概念たる stylo（ペン）という対象事物が先にあって、その中で、あるタイプの「ペン」が特徴的に有している「芯を備えている」(i.e. à bille)という性質を取り出している。前置詞付きの構造が N1 で示される上位概念の存在を前提としているのに対し、stylo bille や espace laverie のような[N1 + N2]構造では、「ボールペン」や「ランドリースペース」という対象事物そのものの存在が先にあり、それを構成する 2 つの意味側面を分析し参照した結果として上位概念と下位概念が同時に生ずるのである。

そのように考えることで、espace のような「不完全指定の名詞」が（結果として）上位

ことはできるだろう。ただしそのような分析は pressing や douche（シャワー）のような単純語では困難である。

概念を示す N1 として[N1 + N2]構造によく現れる背景についても説明することができるだろう。[N1 + N2]構造においては espace という上位概念が先に存在していた訳ではない。あくまで対象事物を名付ける必要性を眼前にした際の意味的な分析作業の結果として、この抽象的な空間単位である espace が、laverie など N2 に対する上位概念として副次的に現れたと考えられる。

なお espace は実際には espace de ventes（販売所）などのように前置詞付きの構造でも現れるが、これら espace や type などのような「不完全指定の名詞」が、先の stylo à bille のように上位概念の存在を前提としているのかどうかは微妙である。それ自体で具体的な対象事物を指示するのが困難にもかかわらず、果たして語形成上の前提条件としての上位概念を構築できるのかどうかは疑わしい。むしろこれらは un verre de vin（1 杯のワイン）や un tas de problèmes（山のような問題）のような数量名詞的限定辞 (déterminants nominaux quantifieurs, cf. Buvet 1993, 1994 ; Blanco 2002)に類似した性質を帯びている可能性がある。Un verre de vin の[DET + verre + de]は実質的には凝結した 1 つの限定辞として機能している(i.e. {du / beaucoup de / un verre de} vin)。これと同じように un espace de ventes の[DET + espace + de]や un type de vin（ワインの一種）の[DET + type + de]も、実際には限定辞と同等の性質を帯びていることが示唆される。もしそうであれば、これらは数量ではなく場所（espace の場合）や分類（type の場合）に関わる凝結限定辞と見なすことができるだろう[97]。この問題は本稿の議論の中心となる内容から幾分発展した内容となるため、ここではその可能性について言及するにとどめておく。

4.7. 「場所（区画）」範疇の創設

ここまで「場所」を示す名詞(N2)の場合を中心に見てきたが、それ以外のグループの N2 の場合においても同じような効果を見出すことができる。これらの場合、その名詞自体では「場所」を示さないため、指示対象が何らかの「場所」であることを示すには espace という単位を新たな範疇として設けることが必須となる。例えば出来事名詞の

[97] 例えば分類に関する凝結限定辞としては une sorte de（一種の）, ce genre de（その種の）なども挙げられる。またこれらには comme（～のような）などと同等の近接性を示す機能も示唆される。

location（貸出）は espace location の形になることで「貸出スペース」というひとつの「場所（区画）」として認識できるようになる。

(69) Dès votre arrivée en magasin, pensez à présenter ce voucher à l'acccueil, vous n'aurez pas à compléter la fiche d'inscription et passerez directement à l'espace location.

(www.intersport-rent.fr/station/location-ski-montgenevre.aspx 2012 年 5 月 17 日参照。原文ママ。下線は筆者)

店舗に到着しましたらこのバウチャーを受付でお見せください。申し込み用紙に記入する必要はなく、貸出スペースに直接お進み下さい。

スキー用品レンタルの手続きに関するこのテクストでは店舗(magasin)内における「受付 (acccueil： 原文ママ)」と「貸出スペース (espace location)」という 2 つの「場所（区画）」が提示されている。前者はそれ自体で特定の「場所（区画）」を示し得るため、[espace + N2]の形を取らなくてもよい[98]。一方で後者では espace という単位なしに「場所（区画）」としての解釈は難しい。

(70) vous n'aurez pas à compléter la fiche d'inscription et passerez directement à la location.

申し込み用紙に記入する必要はなく、貸出に直接お進み下さい。

もしこのように location が espace を伴わずに現れた場合には、それは「出来事」として解釈されるだろう[99]。

「場所（区画）」という範疇の創設は[espace + N2]以外の構造でも可能である。以下の例は駅構内の 6 つの施設を列挙したものであるが、[espace + N2]のほかに[pôle + N2]と[point + N2]さらには[espace + de + N2]による形式も確認できる。

[98] Accueil（受付）は独立した店舗のような形態を基本的には取らない。この点は既出の laverie（ランドリー）や pressing（クリーニング屋）がそれぞれ独立した店舗を示し得るのとは傾向が異なっている。
[99] これが非文にならないのは、動詞 passer（進む）が取る補語が「場所」だけではなく「出来事」も受け付けることに因る。

(71) Dans le sens sud-nord : la conciergerie (accueil des personnalités réduites, bagageries, etc.), le pôle informations multimodal (infos sur les trains, tram, bus, taxis, etc.), l'espace détente (créé dans l'ancien salon d'honneur), le point rencontre, le grand hall ensuite et donc le nouvel espace de ventes de billets.

（*Sud Ouest* édition Bordeaux Rive Gauche, 30/06/2011, p.11　下線は筆者）

南から北の順に：守衛所（身障者の案内、手荷物預かり等）、乗り換え情報センター（列車、トラム、バス、タクシー等）、リラックススペース（かつての貴賓室に設置）、ミーティングポイント、それからメインコンコースと新たな切符販売のスペースである。

Informations multimodal[100]は「物」を、détente、rencontre そして ventes de billets はいずれも「出来事」を示す名詞（または複合名詞）である。一方で conciergerie（守衛所）、grand hall（メインコンコース）はそれ自体で「場所」を示す。これら 6 つの対象を駅構内の「場所（区画）」（あるいは「施設」）という範疇の下に同列に配置するためには、espace をはじめとする「不完全指定の名詞」による「場所（区画）」の単位付与が、conciergerie と grand hall 以外の 4 つの名詞においては必須となる。

[100] 複数形の informations に対し、その補語と見られる multimodal が単数形で示されているが、これが単なるスペルミスなのかは判然としない。一方で multimodal が transport multimodal（マルチモーダル交通体系）を略したものである可能性もあり、その場合には[informations [(transport) multimodal]]という形式自体を関係的な[N1 + N2]と見なす（N2 の N1 への性数一致は必須ではない）ことも不可能ではない。

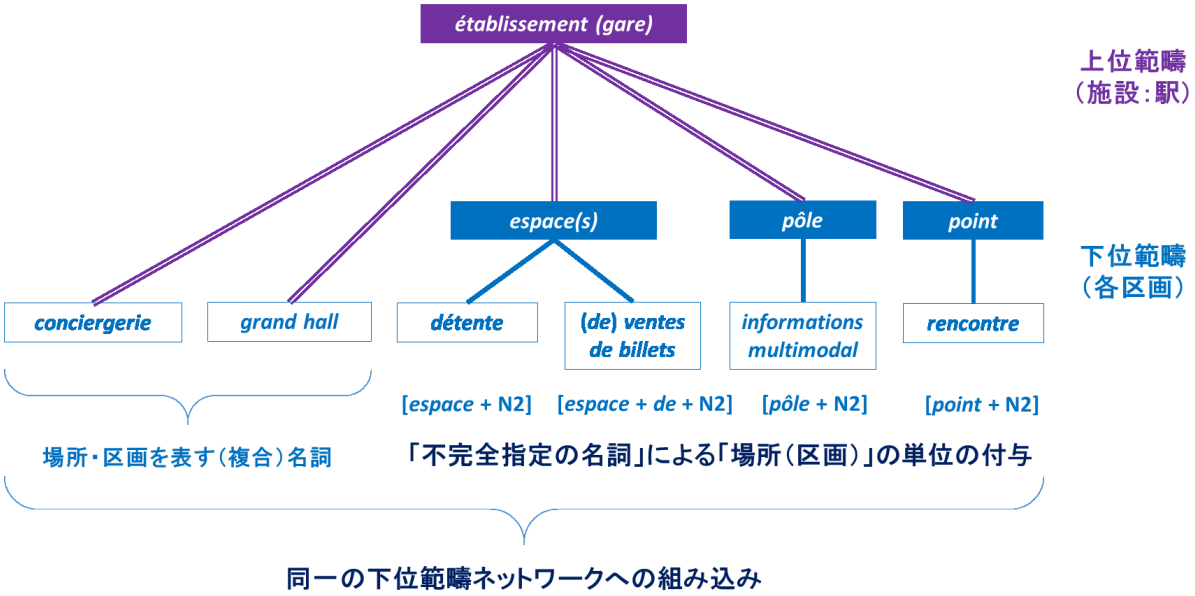


図 28： さまざまな形成法による「区画」範疇の構築

この図は「施設（つまり駅）」に属する「区画」という下位範疇が、ここまで見たように複数の異なる構造によって示されることをまとめたものである。「施設（駅）」のセグメント化は、場所や区画を表す名詞または複合名詞によって直接実現することもある一方、「出来事」や「物」など、「場所」以外を表す名詞が関わる場合には、espace をはじめとする「場所」を表す「不完全指定の名詞」を伴うことでそのセグメント化が可能となる。語形成上のプロセスが異なっていたとしても、これらはいずれも特定の「区画」を示すという点では共通しており、よって同一の下位範疇に属するものとして認識することができるのである。

ちなみに、補部に対し「不完全指定の名詞」をわざわざ付加するのとは対照的な動きとして、補部が主要部名詞を伴わずに名詞として現れることがある。例えば portable は「携帯電話」を意味するが、これは téléphone portable（携帯電話）における AdjR が単独で名詞化したものである[101]。他にも élections législatives > législatives（国会議員選）、machine imprimante > imprimante（プリンター機器）などが挙げられる (cf. Lehmann & Martin-Berthet 2008 : 200-201)。主要部名詞が明示されないということは、一見すると範疇化の効果も期待できないように思われるが、主要部名詞の痕跡が全くな

[101] Ordinateur portable（ポータブルコンピューター）のことを portable と言うこともある。

くなってしまった訳ではない。実際、これら名詞化した AdjR の性・数は省略された主要部名詞のそれに一致するほか、他の名詞を主要部に想定することがほとんど不可能である。例えば législatives はあくまで élections législatives を意味しており、mesures législatives（法的措置）などにはなり難い。元の主要部名詞の指示内容を législatives が引き継いでいる以上、législatives が（同じく名詞化した）présidentielles（大統領選）や cantonales（県議会議員選）などと同じ下位範疇ネットワーク（上位範疇は élection(s)：選挙）を形成することは可能である。ただし形式面では、主要部名詞の省略により意味の構成性が損なわれていることから、このようなタイプの AdjR の名詞化は語彙化の一種と見てよいだろう。

4.8. それぞれの語形成モデルと N2 組み合わせ可能性

4.8.1. 「N1 名詞」次第で組み合わさる名詞の傾向は変わるのか？

ここまで[espace + N2]を例に N2 に入る名詞の分類と意味関係を分析してきたが、「N1 名詞」の性質が異なれば N2 に入る名詞にも違った傾向が見られる可能性がある。そこで以下では[espace + N2]に続きタイプ頻度の高かった[pause + N2], [assurance + N2], [service + N2], [rayon + N2]および[coin + N2]の 5 つを取り上げ、それぞれの N2 に見られる傾向を比較する。

4.8.2. [pause + N2]

まず[pause + N2]であるが、以下のような名詞が N2 として観察された。特にグループ 1 とグループ 4 に該当する名詞が全く見られなかった点は注目に値する。特定の人やその集団を受益者として想定した「休憩(pause)」や、特定の場所に紐づけられた「休憩」は、「休憩」の下位概念としてはほとんど想定されていないことがこの傾向から示唆される。

表 8 : [pause + N2]

	N1	type N2	
グループ1 人やその集団を示す名詞 （該当なし）			
グループ2 出来事を示す名詞 （24種類）			
1	pause	apéro	食前酒
2	pause	bien être et détente	安らぎ＆リラックス
3	pause	cinéma	映画
4	pause	déjeuner	昼食
5	pause	détente	リラックス
6	pause	dodo	おねんね、昼寝
7	pause	Facebook	フェイスブック
8	pause	goûter	おやつ
9	pause	internet	インターネット
10	pause	lecture	読書
11	pause	loisirs, restaurant ou détente	娯楽・レストランまたはリラックス
12	pause	méditation	瞑想
13	pause	musique	音楽
14	pause	pétanque	ペタンク
15	pause	photo	写真
16	pause	pipi	小用、トイレ
17	pause	promenade	散歩
18	pause	repas	食事
19	pause	repos	休息
20	pause	sieste	昼寝
21	pause	spectacles	見世物
22	pause	sudoku	数独、ナンバープレース
23	pause	téléphone	電話
24	pause	yoga	ヨガ

	N1	type N2	
グループ3 物を示す名詞 （14種類）			
25	pause	café	コーヒー
26	pause	café / thé	コーヒー／紅茶
27	pause	café ou thé	コーヒーまたは紅茶
28	pause	chocolat chaud	ホットチョコレート
29	pause	cigarette	たばこ
30	pause	clope	たばこ
31	pause	eau	水
32	pause	paysage	景色（を眺める）
33	pause	soleil	太陽、日光
34	pause	thé	紅茶
35	pause	thé / café	紅茶／コーヒー
36	pause	Twix	Twix（チョコレート菓子の名称）
37	pause	vin blanc	白ワイン
38	pause	vin chaud	ホットワイン
グループ4 場所を示す名詞 （該当なし）			
その他 （2種類）			
39	pause	santé	健康
40	pause	saveur	味わい

対照的に多数派だったのはグループ 2 の「出来事」を示す名詞（24 種類）である。これらはいずれも「休憩」に付随する活動、言い換えれば「休憩」という時間枠の中に所属する出来事を示しており、時間軸上の「所属」の解釈ができる。例えば pause sieste（昼寝休憩）は une pause pendant laquelle on fait une sieste （その合間に昼寝をする休憩）と言い換えられるような意味関係を構築していると思われる。また「目的」の意味合いも同時に認められる (i.e. une pause pour faire une sieste 昼寝をするための休憩)。これらの活動はレクリエーションに関連するものばかりであるほか、「出来事」と「休憩」との間の関係が緊密な点が特筆される。例えば pause sudoku は数独（ナンバープレース）を楽しみながら過ごす休憩であり、sudoku をしないで pause sudoku を過ごすことは想定し難い。この点は先に見た espace poussette がベビーカーの存在なしでも成立し得る点とは対照的である。

同じ傾向は「物」を示す第 3 グループの名詞（14 種類）でも見られた。ここでは飲食物や嗜好品を示す名詞が特に多く見られるが、pause clope は「たばこを吸うための休憩」および「その合間にたばこを吸う休憩」であり、たばこを吸う目的がないのに「たばこ休憩」をとることは考えづらい。ただし pause-café だけは例外で、この休憩中に必ずコー

ヒーを飲まなければならないという訳ではない[102]。その意味ではここに「目的」の意味関係を本当に想定してよいのか微妙なところである[103]。

4.8.3. [assurance + N2]

「出来事」を示す名詞が最も多く、それに「物」を示す名詞が続くという傾向は[assurance + N2]でも見られた。いずれの場合においても「N2 のための保険」という意味関係を認めることができるが、この「目的」が受益者としての「人」に向けられているのか、それとも適用対象としての「出来事」あるいは「物」に向けられているのかは、グループによって異なる。前者の例は assurance étudiants（学生保険 ：学生は保険の受益者）に限られた[104]。それ以外は maladie（疾病）などの「出来事」か、auto（自動車）をはじめとする「物」であった。以下にその一覧を示す。

表 9 : [assurance + N2]

	N1	type N2	
		グループ1 人やその集団を示す名詞 （1種類）	
1	assurance	étudiants	学生
		グループ2 出来事を示す名詞 （15種類）	
2	assurance	accidents	事故
3	assurance	annulation	中止、キャンセル
4	assurance	chasse	狩猟
5	assurance	chômage	失業
6	assurance	décès	死亡
7	assurance	décès, perte totale et irréversible d'autonomie, maladie-accident	死亡・自立性の完全かつ不可逆的な喪失・疾病・事故
8	assurance	incendie	火災
9	assurance	maladie	疾病
10	assurance	manque de neige	雪不足
11	assurance	neige	雪
12	assurance	perte d'emploi	失業
13	assurance	perte et vol	損害＆盗難
14	assurance	plongée	ダイビング
15	assurance	ski	スキー
16	assurance	voyage	旅行

	N1	type N2	
		グループ3 物を示す名詞 （8種類）	
17	assurance	auto	自動車
18	assurance	auto et habitation	自動車＆住居
19	assurance	automobiles	自動車
20	assurance	moto	オートバイ
21	assurance	véhicule de location	レンタカー
22	assurance	véhicule professionnel	業務用車
23	assurance	vélo	自転車
24	assurance	voiture	車
		グループ4 場所を示す名詞 （2種類）	
25	assurance	habitation	住居
26	assurance	logement étudiant	学生向け住居
		その他 （10種類）	
27	assurance	animal	動物
28	assurance	chat	ネコ
29	assurance	chien	イヌ
30	assurance	invalidité	廃疾、障害
31	assurance	prévoyance	（将来の）生活保障
32	assurance	responsabilité civile	民事責任
33	assurance	santé	健康
34	assurance	tous risques informatique	IT関連全リスク
35	assurance	vie	生命
36	assurance	vieillesse	老齢

102 同じことは第 2 グループの pause déjeuner（ランチ休憩）の場合にも言える。Pause déjeuner というもの自体が 1 日のスケジュールの中に組み込まれ、固定された 1 つの時間枠として認識されていることが要因として考えられる。

103 一方で「所属」の解釈は問題とならないだろう。「コーヒーブレイク」が「コーヒーを伴った休憩」であったところで、その事実は「コーヒーを飲む」という行為とは必ずしも直接的に結び付かないからである。

104 「人」ではないが animal（動物）、chien（犬）、chat（猫）が N2 として確認された。ここでは「その他」に分類したが、「保険」の受益者のように解釈することも不可能ではない。

この中でグループ 2 の「出来事」には大きく 2 種類ある。1 つ目は accidents（事故）や incendie（火災）など、未だ起きていない架空の「事象」で、ネガティブなコノテーションを帯びたものが多い。もう 1 つが chasse（狩猟）や plongée（ダイビング）、ski（スキー）、voyage（旅行）といった「活動」である。後者には否定的な含意は特段認められず、「活動」について中立的な対象指示を行っている。一方グループ 3 には「自動車」を中心に、自分で運転するタイプの乗り物に関する名詞が見受けられた[105]。グループ 4 は「保険」の適用対象となる出来事（盗難や水漏れなど）を示す代わりに、その出来事が発生する「場所」を規定したものである。

4.8.4. [service + N2]

全体で 5 番目([coin + N2]と同数)にタイプ頻度が高かった[service + N2]については、グループ 2 の「出来事」を示す名詞が多かったという点と、グループ 4 の「場所」を示す名詞が少なかったという 2 つの点においては[pause + N2]や[assurance + N2]とおおむね同じであった。その反面、前の 2 つではほとんどなかったグループ 1「人やその集団」を示す名詞が 5 種類見られた[106]一方で、「物」を示す名詞（グループ 3）は 2 種類と比較的少数にとどまったというのが、[pause + N2]や[assurance + N2]とは異なる傾向である。

[105] Auto（自動車）は automobile を切除した形式であり、さらにこの automobile はもともとは voiture automobile という形式における automobile を（主要部名詞を省略した上で）名詞化したものである。ただしこれらがいかなる環境下に現れた際にも相互に入れ替え可能かどうかは定かではない。したがってここではそれぞれを異なるタイプとして扱っている。

[106] そのうち étudiants との組み合わせにおいては、service の直後に AdjR である social（社会的な）が置かれている。

表 10 : [service + N2]

	N1	type N2	
		グループ1　人やその集団を示す名詞　（5種類）	
1	service	clients	顧客
2	service	consommateurs	消費者
3	service social	étudiants	学生
4	service	jeunesse	青少年
5	service	sommelier	ソムリエ
		グループ2　出来事を示す名詞　（14種類）	
6	services	baby-sitting	子守り
7	service	communication	通信
8	service	copies	コピー
9	service	décoration	装飾
10	service	documentation	文献管理
11	service	éducation	教育
12	service	expédition	発送
13	service	internet	インターネット
14	service	livraison	配送
15	service	paie	給与支払い
16	service	remorquage auto	自動車牽引
17	service	réservation	予約
18	service	vacances	休暇
19	service	voyage	旅行
		グループ3　物を示す名詞　（2種類）	
20	services	auto	自動車
21	service	web	ウェブ
		グループ4　場所を示す名詞　（2種類）	
22	service	billetterie	切符販売所
23	service	poste	郵便
		その他　（5種類）	
24	service	culture & communication	文化＆コミュニケーション
25	service	emploi	雇用
26	services	minute	（合鍵・靴修理・コピーなどの）クイックサービス
27	service	relations clients Ter Aquitaine	TERアキテーヌ（鉄道）お客様対応
28	service	restauration	飲食業

[service + N2]には「サービス」という意味と（組織内の）「部署」という意味の両方がある。どちらの意味になるかは上記の N2 のグルーピングとも関連していると思われる。

第 1 グループでは最後の service sommelier を除き「目的」の意味関係を認めることができた。これらはいずれも組織内の「部署」を示している。例えば service clients はアフターサービスを始めとする顧客対応の担当部署のことで、「顧客のための部署」ということになる。一方で service sommelier は以下のように料理学校に関する記事の中に現れたが、「ソムリエのための部署」ではなく、「ソムリエとしてのサービス」あるいは「ソムリエによるサービス」という意味合いで用いられていることが確認できる。したがって「所属」あるいは「原因」の意味関係(cf. 3.3 節)を見出すことができるだろう。

(72) Dans la capitale comtoise, l'école doit former chaque année une centaine de stagiaires, moitié en cuisine et moitié en service sommelier.
(www.estrepublicain.fr　2015 年 5 月 17 日、下線は筆者)
フランシュ・コンテの州都で、この学校は毎年約 100 人の見習いを養成することになる。そのうち半分は料理、もう半分はソムリエサービスである。

第 2 グループでは「サービス」としての service と「部署」としての service が混在しているが、やはり後者には「目的」の意味合いが認められる。例えば service documentation は文献管理のために設けられた部署を示す。Service paie は給与支払いを担当する部署である。

それとは対照的に「サービス」としての意味になるケースでは、N2 はサービスの内容そのものを示している。この場合は「目的」ではなく「所属」の意味関係を想定できる。このグループでは services baby-sitting（ベビーシッターサービス）、service copies（コピーサービス）、service expédition（発送サービス）、service remorquage auto（自動車牽引サービス）がそれに該当する[107]。例えば service expédition は「発送」という行為（出来事）が「サービス」という出来事の中に含まれる関係にある。Service が無形財としての活動（サービス）という「出来事」をメタ談話的に示し、N2 がその活動の具体的な内容を示すという構図は、先述の[espace + N2]にも通底するものがある。

第 3 グループには 2 種類のみが該当したが、いずれにも「サービス」の意味を見出すことができる。ただし services auto が「自動車向けのサービス」という「目的」の意味関係を結ぶのに対し、service web は「ウェブ上のサービス」を意味することから「所有」の意味（i.e. N2 は N1 を含む：3.3 節）が想定される。

第 4 グループはそれ自体で特定の「場所」を示し得るが、本構造下では「場所」そのものではなく、その場所が持つ「機能」に関する情報がピックアップされているように見える。例えば billetterie（切符販売所）は切符を販売するという「出来事」と、その出来事が起こる「場所」の両方を語彙情報として持つが、service billeterie における billetterie

[107] なお、service voyage も「サービス」の意味で用いられているが、実際には旅行の手配を代行するサービスのことであり、voyage（旅行）自体が「サービス」の内容にはなっていない点が例外的である。

が示しているのは前者の「出来事」に関する情報のみである。なぜなら service によってがメタ談話的に示された活動（出来事）の具体的な内容を N2 によって示す必要があるからである。つまり N2 に求められる情報はそれが「どういうサービスなのか」ということである。このような関係性において billetterie から引き出されるべき語彙情報は「切符を販売する」という活動（出来事）であり、それが起こる「場所」についての情報まで取り出す必要はない。このように[service + N2]という構造下では billeterie や poste がもともと持っていた多義性が解消され、意味内容が特化すると考えられる。

4.8.5. [rayon + N2], [coin + N2]

最後に[rayon + N2]と[coin + N2]をまとめて取り上げる。これらは[espace + N2]と同じく、「N1 名詞」が「場所」をメタ談話的に示している。したがって組み合わさる名詞の傾向も似ることが予想されるが、実際には異なった傾向がそれぞれで観察された。

表 11 : [rayon + N2]

	N1	type N2	
		グループ1　人やその集団を示す名詞　（2種類）	
1	rayon	enfants	子ども
2	rayon	petits	子ども
		グループ2　出来事を示す名詞　（該当なし）	
		グループ3　物を示す名詞　（17種類）	
3	rayon	bd	漫画
4	rayon	bio	オーガニック食品
5	rayon	boisson	飲み物
6	rayon	diététique	ダイエット食品
7	rayon	fleurs & plantes	花＆植物
8	rayon	fromage	チーズ
9	rayon	fruits et légumes	果物＆野菜
10	rayon	lait	牛乳
11	rayon	marée	鮮魚
12	rayon	pain-pâtisserie	パン＆菓子類
13	rayon	poisson et viande	魚＆肉
14	rayon	télé-hifi-photo-son-multimédia-é lectroménager	テレビ・ハイファイ・写真・音響・マルチメディア・家電
15	rayon	textile	繊維
16	rayon	TV	テレビ
17	rayon	viandes	肉
18	rayon	vin	ワイン
19	rayon	volaille	鶏肉
		グループ4　場所を示す名詞　（10種類）	
20	rayon	animalerie	ペットショップ
21	rayon	boucherie	肉屋
22	rayon	boulangerie	パン屋
23	rayon	charcuterie	豚肉製品屋
24	rayon	crémerie	乳製品専門店
25	rayon	jardin	庭園（ガーデニング）
26	rayon	librairie	書店
27	rayon	papeterie	文具店
28	rayon	pâtisserie	菓子店、菓子類
29	rayon	traiteur	総菜屋
		その他　（4種類）	
30	rayon	anglais	英語
31	rayon	beauté	美容
32	rayon	terroir local	地産（の食品）
33	rayon	traiteur et spiritueux	総菜（屋）＆蒸留酒

まず[rayon + N2]で注目すべきは、「出来事」を示す名詞（第 2 グループ）が全く確認されなかった点である。このグループが[espace + N2]では多数派だったのとは対照的である。また第 1 グループの名詞との組み合わせもわずかにとどまった。

Rayon という名詞[108]はもともと「棚」を意味するが、[rayon + N2]という構造においては意味が拡張し、スーパーをはじめとする小売施設の「売り場」を表すようになる。N2 にはその「売り場」に陳列される具体的な商品、つまり「物」を示す名詞（グループ 3）が入るケースが最も多く、そこには「所属」の意味合いが認められる。例えば rayon vin では「ワイン」はその「売り場」に所属している。次に多かったグループ 4 でも同じで、rayon

108 「光線」や「範囲」を意味する rayon は別の語彙素として区別している。

traiteur は「総菜屋」としての「機能」がその「売り場」に属していることになる[109]。最後の rayon traiteur & spiritueux は異なるグループに分類される名詞同士が等位接続されている点が興味深い（traiteur はグループ 4 に、spiritueux（蒸留酒）はグループ 3 に属するだろう）。この組み合わせは、rayon に対して結ばれる意味関係がいずれの名詞でも「所属」であることを示唆している。また、たとえ traiteur が単独では「総菜屋」という「場所（独立した店舗）」を表し得るとしても、[rayon + N2]という構造下では、spiritueux などと同様に、そこに陳列される「物」―つまり「総菜」そのもの[110]―として解釈される余地があるとも見られる[111]。

[rayon + N2]とは対照的に[coin + N2]では、4 つのグループいずれにおいても同じくらい多くの種類の名詞が観察された。このような比較的均等な分布は[espace + N2]とも似ている。

---

[109] ただし rayon jardin は例外である。これは「庭」という「機能」がこの「売り場」にある訳ではなく、「庭」―正確には「庭仕事(jardinage)」―のための物品、すなわちガーデニング用品(produits de jardinage)が所属する「売り場」である。あるいは「園芸用品店(jardinerie)」の「機能」がここに所属しているという解釈も可能であろう。

[110] Librairie（本屋）が販売する物は livres（本）であるが、それに対して traiteur が販売する物としての「総菜」を示す単独の語彙素はフランス語では存在しない。実際にはそれは plats à emporter（持ち帰り用料理）あるいは plats préparés（出来合いの料理）のような形で示されるが、ここで指摘しているように traiteur によって「総菜」が示される可能性もないとは言えないだろう。

[111] Traiteur は「人」としての「総菜業者」も示す。したがって「総菜業者がいる売り場」という解釈も不可能ではないと思われる。いずれにしても rayon と結ばれる意味関係は「所属」である。

表 12 : [coin + N2]

	N1	type N2	
		グループ1　人やその集団を示す名詞　（4種類）	
1	coin	bébé	赤ちゃん
2	coin	enfants	子ども
3	coin	fumeurs	喫煙者
4	coin	parents	両親
		グループ2　出来事を示す名詞　（10種類）	
5	coin	barbecue	バーベキュー
6	coin	dessin	お絵描き
7	coin	détente	リラックス、休憩
8	coin	internet	インターネット
9	coin	jeux	ゲーム
10	coin	lecture et musique	読書＆音楽
11	coin	pâte à modeler	粘土
12	coin	petit déjeuner	朝食
13	coin	puzzle	パズル
14	coin	repas	食事
		グループ3　物を示す名詞　（5種類）	
15	coin	bibelots	置物
16	coin	couchette	簡易ベッド
17	coin	jouets	玩具
18	coin	meubles	家具
19	coin	presse française et internationale	フランス＆海外の新聞
		グループ4　場所を示す名詞　（8種類）	
20	coin	bibliothèque	書庫、図書館
21	coin	bureau	書斎、オフィス
22	coin	cuisine	キッチン、料理
23	coin	kitchenette	簡易台所
24	coin	nurserie	託児所
25	coin	potager	菜園
26	coin	salon	応接間
27	coin	terrasse	テラス
		その他　（該当なし）	

また、それぞれのグループで見られる意味関係についても[espace + N2]と同じような傾向が見出せる。グループ 1 では「目的」の意味が支配的な一方で(e.g. coin fumeurs： 喫煙者（のための）コーナー)、グループ 2 から 3、4 と移るに連れ「所属」の意味合いの方が強くなっている(e.g. coin potager： 菜園（が所属する）コーナー)。またグループ 4 では先に見た espace laverie などと同様に、coin（コーナー）という単位を付与することによる空間のセグメント化および下位範疇化を認めることができる。Coin kitchenette は「簡易台所」としての「機能」を備えた「コーナー（区画）」であり、coin bureau（書斎コーナー）や coin repas（食事コーナー）といった他の「区画」と同じ範疇ネットワークに属するものとしてこれを位置づけることができる。

ただし[coin + N2]が指示する対象は[espace + N2]のそれと必ずしも同じではない。前者の構造が現れた各文脈を見ると、いずれの指示対象も元々何らかの空間があり、その一角を示したものであることが分かる。以下はその典型的な事例である。

(73) Vous pouvez également prévoir des éléments de bibliothèque en épi par rapport à un mur : ils pourront dans ce cas créer une petite séparation, par exemple entre le séjour proprement dit et le coin repas.
(www.prestigemaison.com/astuces-pour-amenager-un-coin-bibliotheque-dans-un-living/ 2012 年 4 月 25 日参照、下線は筆者)
書棚類を壁に対して斜めに配するのもいいでしょう。この場合、例えば厳密な意味での居間と食事コーナーとの間に、といった具合に、ちょっとした区分けを作ることになります。

このテクストでは元々ある居間という空間を、書棚を用いて物理的に 2 つの区画に分ける方法が話題となっている。区分けの結果としてもたらされるそれぞれの区画は「厳密な意味での居間(séjour proprement dit)」と「食事コーナー(coin repas)」と名付けられている。Coin repas は物理的に区切られたとはいえ、元は「居間」の一角であった[112]。Coin という語彙素が「隅、一角」を意味することからも、[coin + N2]によって表される対象が、漠然とした空間そのものと言うよりは、特定の空間の、さらに特化した一角を示す傾向にあることがうかがえる。

それとは対照的に、[espace + N2]の場合には以下のように与えられた空間の一角(cf. 74)、そして特定の区画そのもの(cf. 75)のいずれも示すことが可能である。

(74) ensuite vous avez un espace à droite qui est un espace accueil accueil et espace détente avec euh des petites tables des petits jeux
(TCOF > Pap_pet_thi_reu, 下線は筆者)
それから右側のスペースには受付スペース、受付と、小さなテーブルとちょっとしたおもちゃがあるリラックススペースがあります。

[112] もう一方の「厳密な意味での居間」に関しても、[coin + N2]構造によって示すことは不可能ではないと思われる。実際今回の調査でも coin salon（客間コーナー）という形式が、異なる文脈においてではあるものの確認できた。

(75) b-libre est un espace coworking atypique avec des bureaux partagés, situé en plein centre ville et à deux pas de la gare de Saint-Quentin-en-Yvelines (78).

(https://b-libre.com/lieu　2017 年 7 月 6 日参照、下線は筆者)

b-libre はシェアデスクを備えた他にはないコワーキングスペースです。中心街の中に位置し、Saint-Quentin-en-Yvelines 駅（78 番 Yvelines 県）からすぐです。

前者のテクストにおいて espace accueil と espace détente はいずれもある施設を構成する区画の 1 つである。一方で後者の espace coworking はそれ自体が 1 つの施設と認識できる。

このように施設の一部であろうと施設そのものであろうと名付けることが可能なのは、espace が「空間、場所」を中立的に示す語彙素であることに起因するものと説明できるかもしれない。Chambre が「寝るための部屋」という、特定の機能を持っていたり、salle（部屋、広間）がある程度以上の広さを持った空間を示すのとは異なり、espace は指示対象の機能や広さを積極的には特定しない。この性質が、[espace + N2]という構造によるあらゆる対象の名付けを可能にしていると考えられる。換言すれば、espace のように指示内容の抽象度が高い名詞、つまり意味的にあまり「色がついていない」名詞の方が、対象指示上の制約も低く、さまざまな N2 と結びつきやすいということになるだろう。

4.6 節で見たように、[espace + N2]の espace は、対象事物の「場所」に関する側面を参照するが、その対象物が果たす「機能」については N2 が参照するので、espace がそこまで参照する必要はない。逆に chambre や rayon のように、N1 がすでに対象物の「機能」に関する部分まで参照してしまっていたり、salle や先の coin のように、対象物の空間的規模や位置づけまで指定してしまっている場合には、その時点で対象指示上の制約がある程度課されることになり、結果としてあらゆる「場所」を名付けることは難しくなる。例えば[coin + N2]はある空間の一角を名付けることはできるが、その対象物が coin（隅、一角）だと認識できない限り、[coin + N2]による名付けの可能性はそもそも想定できないだろう。その点に置いて[espace + N2]は、対象物が「場所」でありさえすれば

（ウェブページのような抽象的な「場所」でも構わない）、その機能や空間的規模・位置づけがどうであれ問題とならないので、名付けとして使いやすいという面がある。本調査に置いて[espace + N2]が突出したタイプ頻度を示した背景には、このような名付けにおける意味的制約の低さがあると考えられる。

4.8.6. N2 の意味特性と構成素間の意味関係

このように、「N1 名詞」が「場所」を示す「不完全指定の名詞」であるという共通点があっても、N2 との組み合わせは同じとは限らない。[espace + N2]が比較的多種多様な N2 との結びつきを見せているのに対し、[coin + N2]や[rayon + N2]では「N1 名詞」が元々持つ語彙的な意味（空間的規模や位置づけ、あるいはその空間の機能）による制約のためか、それぞれ異なる傾向を見せた。しかしながら N2 が示す意味内容と「N1 名詞」との間に結ばれる意味関係との関連性については、分析した 6 つの構造いずれにも共通した特徴が見出せた。基本的に「人やその集団」を示す名詞が N2 に入る場合には「目的」の意味関係が支配的である。一方で「出来事」を示す名詞では「目的」と「所属」の両方の解釈が可能であり、「物」の名詞の場合では後者の意味合いの方が支配的である。さらに「場所」を示す名詞の場合には「所属」の意味関係が同様に強いだけでなく、この名詞が実際には「場所」というよりは、むしろその場所が備える「機能」の方を示していることが明らかになった。また、この 4 つのグループの名詞との組み合わせはあらゆる「N1 名詞」において同様に可能とは限らないことも示唆された。

第 5 章

さまざまな N1 + 特定の N2

5.1. N2 は「名詞」なのか？

前章では特定の N1 を伴った形成モデルの生産性と、そこに構築される意味関係を中心に考察した。その中で[espace + N2]では 83 種類の名詞を、[pause + N2]では 40 種類の名詞をそれぞれの N2 として迎えた形式が確認されたと説明したが、これら N2 に入る要素を「名詞」と認めることが果たして本当に妥当かということについては触れなかった。また、前章で取り扱ったのと対をなすような形成モデル―つまり、特定の N2 を伴った生産的なモデル―の可能性についても、議論の余地が残されている。そこで本章では関係的な[N1 + N2]の N2 の方に着目し、その形態統辞的特性と形成モデルの可能性について検討する。

まず、あくまで形式面について言えば、関係的な[N1 + N2]の N2 は名詞―あるいは厳密に言えば名詞として現れる際の形式と同形―である。このことは、N2 が主要部である N1 に必ずしも性数一致しないことからもうかがえる。例えば piéton（歩行者）は、主要部に女性名詞を取る場合には aire piétonne（歩行者ゾーン）や rues piétonnes（歩行者専用道路）のように性数一致することができる。この piétonne という形式は単独の名詞として用いられることは稀で、ほとんどの場合上記のような N2 の位置に現れる際に観察され得る。しかし実際にはこのように一致させるケースは、上記のような限られた N1 との組み合わせにおいてのみである。むしろ sortie piétons（歩行者出口）や sécurité piétons（歩行者の安全）のように、N2 が男性形で、かつ場合によっては複数形（N1 が単数形にもかかわらず）を示す形式が多数観察される。N2 が複数形になる傾向は、「歩行者」や「学生(étudiant)」のように、特定の集団を示す語彙素の場合に顕著である。

単数形／複数形の違いは音声面では $\text{cheval}_{\text{sg.}}$ – $\text{chevaux}_{\text{pl.}}$のようないくつかの例外を除き現れないため、N1-N2 間のハイフンの有無と同様に表記上の揺れのひとつと考

えることもできるが、男性形／女性形の区別については語彙素によっては音声面でも現れ得る。にもかかわらず N2 が N1 の文法的性に左右されず一定して男性形を示すという点は、当該要素が形態面では不変化であることを示唆している。

5.2. Série(s) télé, garage(s) auto ：切除された語彙素

N2 が形態的に不変化であるという傾向に関連して注目したいのが、télé (< télévision テレビ)や auto (auto < automobile 自動車)をはじめとする、語尾が切除された語彙素の存在である。本研究の調査では、このような切除形式が N2 として現れるケースが少なからず確認され、その中でもいくつかの形式はさまざまな名詞(N1)との組み合わせを実現していることが分かった。

語尾が切除されるということは、形態統辞機能（いわゆる品詞）を示す接尾辞が見えなくなるということである。これは特に photographie_{N} / $\text{photographique}_{AdjR}$（写真／写真の）のような、形容詞形として接尾辞-ique をとる語彙素において問題となる。このケースでは形容詞化を示す-ique という接尾辞が切除によって見えなくなる結果、名詞形と形容詞形が不変化の同形になる（ただし複数形の s は切除後形式にも付加することができる）。例えば appareil photo（写真機、カメラ）の photo は、形式面では名詞なのか形容詞なのか判断がつかない。形式面で区別がつかない以上、統辞的指標、つまり位置によってこの切除語彙素の形態統辞的機能が特定されることになるだろう。それに従えば、photo は主要部たる appareil の後方に位置していることから、形容詞としての機能を想定することができる。以上の点から、appareil photo の photo の「元の形式」は形容詞形の photographique であるとの推定ができる。

しかしながら位置に基づく「元の形式」の再構築が常に必要なのかは疑わしい。例えば exposition photos（写真展）では、photos が複数形で示されている以上、*exposition photographiques という形式は文法的に考えづらい。先の sortie piétons のように、主要部に一致しない名詞が N2 に入り得る点を考慮すれば、むしろ逆に名詞形の photographies がそこに想定される可能性も完全に排除することはできないであろう。

さらに言えば、そもそも元の形式があり、そこから切除が起こるというプロセス自体

がない可能性もある。つまり exposition photos は初めから exposition photos であって、exposition photographique や exposition photographie(s)という形式の存在を前提としないのではないか。もしそうであれば、切除形式と元の形式の間に完全な互換性が保証されていないことになるだろう。例えば前者は N2 としてよく現れる一方で、後者の（元の形式）は同一環境には現れづらいという傾向が観察されるかもしれない。

このような点を踏まえて、今回の実例調査で N2 として観察された切除形式について見てみる。以下はその一覧である。縦に引かれた二重線の左側には、N2 として観察された切除語彙素を N1 との組み合わせが多い順に並べた。一方 N2 には切除された形式(e.g. auto)だけでなく、切除前の元の形式(e.g. automobile)も同様に見られた。それら元の形式は縦の二重線の右側に、N1 との組み合わせ数と共に示した。

表 13：N2 として観察された切除語彙素

	N2 (tronqué)	type N1	exemples		N2 (forme originale)	type N1
1	auto	16	réparation auto	自動車修理	automobile	2
2	photo	10	tirage photo	写真プリント	photographie / -ique	0
3	vidéo	10	archives vidéo	映像アーカイブ	vidéophonie / -ique	0
4	vélo	6	culture vélo	自転車文化	vélocipède	0
5	télé	5	animateurs télé	テレビ司会者	télévision	0
6	info	4	flash info	ニュース速報	information	4
7	déco	4	astuces déco	インテリア装飾のコツ	décoration	1
8	bio	4	vins bio	有機ワイン	biologie / -ique	0
9	audio	3	commentaires audio	オーディオコメンタリー	*	0
10	apéro	2	assiette apéro	アペリティフプレート	apéritif	1
11	tram	2	réseau tram	トラム路線網	tramway	1
12	foot	2	consultant foot	サッカー解説者	football	0
13	moto	2	accès motos	バイク入口	motocyclette	0
14	ciné	1	version ciné	映画版	cinéma	10
15	resto	1	tickets restos	お食事券	restaurant	1
16	loto	1	soirée loto	くじ引きパーティー	loterie	2
17	anime	1	version anime	アニメ版	animation	0
18	conso	1	crédit conso	消費者金融	consommation **	0
19	disco	1	soirées disco	ディスコナイト	discothèque	0
20	météo	1	alerte météo	気象警報	météorologie / -ique	0
21	métro	1	accès métro	地下鉄入口	(chemin de fer) métropolita	0
22	radio	1	audiences radio	ラジオリスナー	radiodiffusion	0
23	taxi	1	station taxis	タクシー乗り場	taximètre	0

* audio < ?

** crédit conso = crédit à la consommation

N2 としての切除語彙素は以上の 23 種類が確認された。一方で、それぞれに対

応する（切除前の）元の形式も audio を除き想定可能であるが[113]、多くの場合、元の形式で N2 として現れるケースは観察されなかった。例えば自転車を意味する vélo の元の形式は vélocipède であるが、[N1 + vélo]が 6 種類見られた一方で[N1 + vélocipède]という組み合わせはゼロであった。その一方で、切除形式と元の形式のどちらもが N2 として現れる場合(e.g. assurance auto / assurance automobile 自動車保険)や、元の形式の方が切除形式よりも N1 との組み合わせ数が多かった cinéma (cf. ciné)のようなケースは少数にとどまった。

この傾向から、切除形式と元の形式との間に完全な互換性がある訳ではないという先の指摘（cf. p.132 註 105）が思い起こされる。確かに télé は télévision の切除形式ではあるが、その事実は[N1 + N2]構造における N2 に現れやすいかどうかという点には直接影響しない。つまり animateur télé（テレビ司会者）という形式が観察されるからと言って、animateur télévision という形式も同様に可能とは限らないということである。ただし télé と télévision の間には意味的な相違は認められない。このことを考慮すると、両者は同じ語彙素の異形態と見なすのが妥当だと思われる。両形態は単独の名詞として現れる際には競合する(la télé vs. la télévision)が、N2 の位置においては切除形式の方が優位であることが、少なくとも今回の実例調査の結果からはうかがえる。

また中には元の形式の頻度が出現環境を問わず全般的に低いケースもある。Vélo に対する vélocipède や métro に対する chemin de fer métropolitain はまさにその例で、日常生活において現れるのはほとんどが切除形式の方である。この場合にはそもそも完全な形式と切除形式との競合はほぼ起こらず、したがって N2 位置においてももっぱら切除形式の方だけが観察されることになる。

いずれにしても言えるのは、N2 位置に現れるのが切除形式の方で固定されているということである。N2 が固定されているということは、[N1 + télé]や[N1 + vélo]といった、特定の語彙形式を N2 に据えた形成モデルの想定可能性を示唆する。N1 の直後

[113] audio は新古典的複合語の構成素 audio-を由来とする語彙素である。したがって厳密な意味では切除語彙素ではなく、拘束形態素が自由形態素化したものと捉えることができるだろう。一方 auto や télé なども新古典的複合語の構成素として同形のもの(i.e. auto-, télé-)があるが、auto はあくまでも automobile の（automatique の切除形式の場合もある）、télé は télévision の切除形式であり、autocorrection（自己修正）の auto-や télétravail（テレワーク）の télé-とは異なる。

に現れるという点を考慮すると、これら切除形式を不変化の形容詞と同等の機能を持つ要素と見なすことができるだろう。この機能は télé や vélo の「元々の形式」(i.e. télévision, vélocipède)には認められない。Exposition photos の photo(s)についても同様で、[N1 + photo]というモデルを想定する限り、photo が N1 に対して果たす統辞的機能はこの時点で（位置の観点から）規定済みである。また意味面でもこの photo が指示するものは規定されている。Exposition photos が「写真」に関する「展示会」であり、appareil photo が「写真」に関する「機械」であるように、N2 としての photo は、N1 が示す対象が関わっている内容としての「写真」を常に示している。具体的な形成モデル（仮）としては以下のような形になるだろう。

(76) $[[x]_{Ni}\ [photo]_{Nj}]_{Nk}$ ↔ $[SEM_i$ with relation R to $SEM_j]_k$

5.3. 形成モデルのあり方

上に示した仮決定版の形成モデルにおいて N2 である photo は形式面では名詞(N)と同形であったが、先述の通り実際に果たす統辞機能は AdjR のそれと同等である。したがって N2 には、[multi + N]の形成モデル(cf. 2.4 節)で想定されたのと同じような、ゼロ接辞による形容詞化を示す以下のスキーマを想定するのが妥当だと思われる。

(77) a. $[[x]_N]_A$ (=37a)

b. $[[photo]_N]_A$

この形容詞化スキーマを組み込んだ上で(76)のスキーマ（左辺）を書き換えると以下のような結合スキーマになるだろう。

(78) a. $[[x]_N]_A + [[x]_{Ni}\ [photo]_{Nj}]_{Nk} = [[x]_{Ni}\ [[photo]_{Nj}]_A]_{Nk}$

b. $[[exposition]_{Ni}\ [[photo(s)]_{Nj}]_A]_{Nk}$

(78a)のスキーマで規定されているのは以下の 3 点である：①N1 が主要部で、N2 がその補部であること；②N2 が photo であるということ；③この photo がゼロ接辞による形容詞化を遂げていること。すでに指摘したように、ここに切除のプロセス(i.e. photographie / -ique > photo)はそもそも想定されないため、スキーマにもそれは組み込まれてはいない。あくまでも特定の形式として photo が指定されており、これが形容詞化

していることになる。N2 固定の形成モデルはこのような形で成り立っていると考えられる。右辺の意味面も記載した完全版（ただし音韻面については引き続き割愛する）は以下のようになる。

(79) a. $[[x]_{Ni}\ [[photo]_{Nj}]_A]_{Nk}$ ↔ $[SEM_i$ with relation R to $SEM_j]_k$

b. $[[x]_{Ni}\ [[télé]_{Nj}]_A]_{Nk}$ ↔ $[SEM_i$ with relation R to $SEM_j]_k$

c. $[[x]_{Ni}\ [[vélo]_{Nj}]_A]_{Nk}$ ↔ $[SEM_i$ with relation R to $SEM_j]_k$

同様のモデルは切除語彙素ではない N2 による[N1 + piéton]や[N1 + étudiant]などでも想定できるだろう。

(80) a. $[[x]_{Ni}\ [[piéton]_{Nj}]_A]_{Nk}$ ↔ $[SEM_i$ with relation R to $SEM_j]_k$

b. $[[x]_{Ni}\ [[étudiant]_{Nj}]_A]_{Nk}$ ↔ $[SEM_i$ with relation R to $SEM_j]_k$

したがって、当該環境に現れる piéton や étudiant は、sécurité routière（道路交通安全）の routière や avantages familiaux（家族特典）の familiaux といった AdjR と同等の機能を果たしていると考えることができる(cf. sécurité piéton(s), avantages étudiant(s))。

ちなみにこの点は N2 が固定された形成モデルだけでなく、前章で扱った N1 固定の形成モデルにおける N2 についても同様である。例えば[pause + N2]の具体的なモデルは以下のようになるが、指定されているスロットが N1 側だという点以外は、N2 の形容詞化も含め、上の(79)や(80)の各モデルと同じ構造を呈すことが分かる。

(81) $[[pause]_{Ni}\ [[x]_{Nj}]_A]_{Nk}$ ↔ $[SEM_i$ with relation R to $SEM_j]_k$

つまりこの時点で、N2 にどのような語彙素が入るかは決まっていないながらも、実際にそこに入った要素が果たす統辞的・意味的機能―AdjR と同等の機能―についてはすでに規定されているのである。

このような点を踏まえ、「N2 は名詞なのか」という本章冒頭の問いに対しては、形式面では名詞としての形式と同じな一方で、機能面では形成モデルの規定内容により AdjR のそれと同等のものになると説明できる。言い換えれば、外見は名詞だが機能としては形容詞化しているということになるだろう。

5.4. さまざまな N1 + 特定の N2： 全体の傾向

それでは、N2 固定の生産的な形成モデルとしては具体的にどのようなものが見られるのか。今度は「N2 名詞」、つまり N2 に入る要素（実質的には形容詞化しているが、便宜的な観点から以降も名詞と呼ぶことにする）ごとに、N1 に入る名詞との組み合わせの数を分析した。組み合わせの数が多い順にリストしたのが以下の表である。前章の「N1 名詞」の時と同じく、観察された組み合わせが 5 種類以下だったものについては割愛している。また、enfant に対する enfantin など、対応する AdjR がある場合には右側に付記した[114]。

表 14： さまざまな名詞(N1)と組み合わさる「N2 名詞」

	N2	type N1	exemples		AdjR corresp.
1	enfant	27	armoire enfant	子ども用たんす	enfantin
2	internet	19	connexion internet	インターネット接続	-
3	auto	18	réparation auto	自動車修理	(= automobile)
4	étudiant	15	réduction étudiants	学生割引	estudiantin
5	bébé	13	transat bébé	ベビー用デッキチェア	-
6	cadeau	13	emballage cadeaux	ギフト包装	-
7	papier	13	dictionnaire papier	紙の辞書	-
8	santé	13	coaching santé	健康管理指導	sanitaire
9	client	12	compte client	顧客アカウント	-
10	cinéma	11	version ciné	映画版	cinématographique
11	piéton	11	passages piétons	歩行者通路	piétonnier
12	jeunesse	10	livre jeunesse	青少年向け書籍	- (cf. jeune)
13	photo	10	tirage photo	写真プリント	photographique
14	vidéo	10	archives vidéo	映像アーカイブ	vidéophonique
15	détente	9	coin détente	休憩コーナー	-
16	voyage	9	kit voyage	旅行キット	- (cf. voyageur)
17	femme	8	pantalons femme	女性用ズボン	féminin
18	homme	8	chaussures homme	男性用靴	masculin
19	info	8	flash info	ニュース速報	informatif
20	jeu	8	carte jeu	スクラッチカード	ludique
21	bus	7	couloirs bus	バスレーン	-
22	dégustation	7	bâtonnets dégustation	試食用スティック	-
23	repas	7	panier repas	ランチボックス	-
24	vacances	7	prêt vacances	休暇貸出	vacancier
25	vin	7	rayon vin	ワイン売り場	vinicole, viticole
26	débat	6	conférence-débat	討論講演会	-
27	fidélité	6	remise fidélité	ご愛顧割引	- (cf. fidèle)
28	fille	6	chambre fille	女の子用寝室	-
29	loisir	6	sorties loisir	余暇のお出かけ	-
30	vélo	6	parking vélo	自転車駐輪場	-

[114] Jeu_{N}（遊び）に対する $\text{ludique}_{\text{AdjR}}$ のように、AdjR が N2 とは異なる語基からもたらされる場合（i.e.補充法）についても N2 との対応形式と見なした。

「N1 名詞」ごとにリストした表（cf. 表 7）との違いは、組み合わせ可能性の大きさのばらつきが比較的小さいという点である。「N1 名詞」の場合には、[espace + N2]のタイプ頻度が 83 種類と突出して多く、またそもそも N1 の位置に現れる名詞の種類が 366 種類と限られていた。それに対して「N2 名詞」の場合では、最もタイプ頻度が高い[N1 + enfant]でも 27 種類、続く[N1 + internet]も 19 種類と、[espace + N2]ほどに突出したタイプ頻度を示した組み合わせが見られなかった上、N2 の位置に現れる名詞は 566 種類と、「N1 名詞」の総数に比べると 1.5 倍余りにのぼっている。

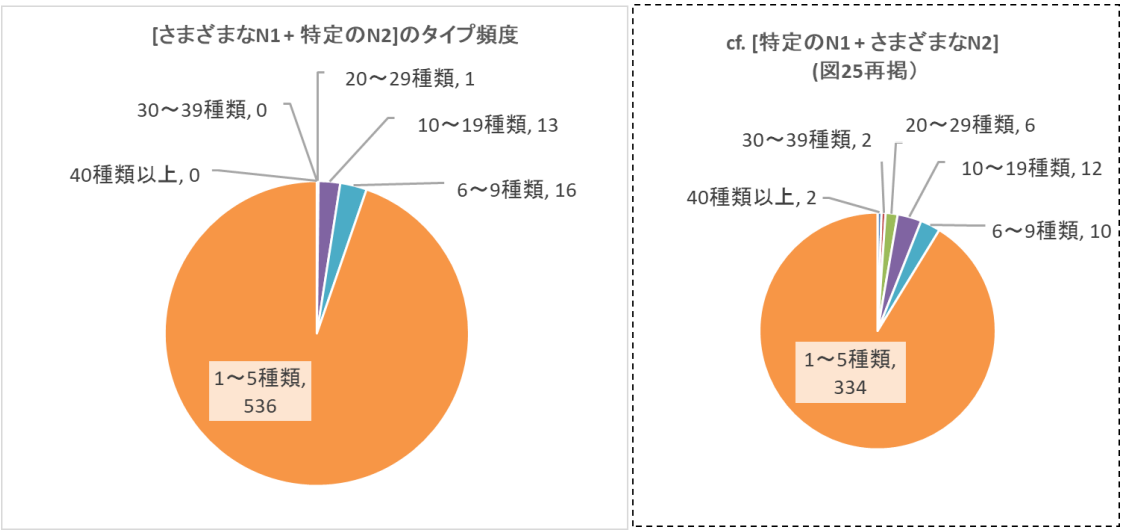


図 29 : N1 との組み合わせ可能性

「N2 名詞」の組み合わせ可能性のばらつき具合をまとめたのが上の図である。比較対象として組み合わせ可能性を「N1 名詞」の側から見た図(cf. 図 25)も再掲した。いずれの場合も組み合わせが 1〜5 種類と小規模だったケースが 9 割を超えている点は同じだが、20 種類以上の組み合わせが見られたケースが「N2 名詞」の場合には[N1 + enfant]のみであった一方で、「N1 名詞」の場合には[espace + N2], [assurance + N2]など合計 10 件が該当したという点が異なっている。

5.5. 「低頻度 N2」と「高頻度 N1」

タイプ頻度が顕著に高かった「N2 名詞」が少数にとどまったのとは対照的に、タイ

プ頻度の低い「N2 名詞」は多く、特に頻度が 1、つまり N1 との組み合わせが 1 つしか観察されなかったのは 566 種類の「N2 名詞」の中で 401 種類（約 70.8%）に及んだ[115]。

興味深いのは、頻度が 1 のこれら「N2 名詞」—便宜的に「低頻度 N2」と呼ぶ—がどのような「N1 名詞」と組み合わさっているかである。調査の結果、espace や assurance をはじめとする、タイプ頻度の高い「N1 名詞」との組み合わせが特に多いことが分かった。ここではタイプ頻度が 6 以上だった 32 種類の「N1 名詞」（4.2 節の表 6 に対応）を「高頻度 N1」として、同様にタイプ頻度が 6 以上だった 30 種類の「N2 名詞」（前節の表 14 に対応）を「高頻度 N2」と位置付けた上で、それぞれの組み合わせの割合を分析した。

表 15：「N2 名詞」が結びつく「高頻度 N1」の割合

	「低頻度N2」(fréq. 1 : 401種類)	「高頻度N2」(fréq. 6-27 : 30種類)
「高頻度N1」(fréq. 6-83 : 32種類)	239 (59.6%)	119 (38.4%)
それ以外のN1	162 (40.4%)	191 (61.6%)
合計	401	310

その結果、表 15 に示したように、「低頻度 N2」の方が「高頻度 N2」よりも高い割合で「高頻度 N1」と結びつく傾向にあることが分かった。中でも espace は、401 種類の「低頻度 N2」の中でも最多（37 種類）の組み合わせ相手であった。例えば boutique（ショップ）や coworking（コワーキング）、poussette（ベビーカー）はいずれも「N1 名詞」としての espace と組み合わさっているが、他の「N1 名詞」との組み合わせは見られなかった。同様に goûter（おやつ）や sieste（昼寝）など 17 種類の「低頻度 N2」は pause のみと、そして plongée（ダイビング）や chat（猫）など 16 種類の「低頻度 N2」は assurance のみと組み合わさっている。

このことから示唆されるのは「高頻度 N1」の影響力の高さである。boutique や sieste といった名詞が N2 の位置に現れたのは、生産性が高い[espace + N2]や[pause + N2]などの「（特定の）N1 名詞」を基にした語形成モデルがそれを可能にしたからであり、boutique や sieste それぞれが[N1 + boutique]や[N1 + sieste]のような語形成モデルを有しているとは考えづらい。N2 位置に現れる頻度がもともと高くない名詞ほど、「高頻度 N1」のいずれかと組み合わさらない限りは、当該位置に現れる蓋然性は低くなるというこ

[115] ちなみに頻度が 1 の「N1 名詞」は 366 種類中 225 種類（約 61.5%）であった。

とが示唆される。

これとは対照的に、N2 位置に頻繁に観察される enfant や internet のような語彙素の場合には、「高頻度 N1」への依存度は 38.1%にとどまっている。つまり[espace + N2]や[pause + N2]といった語形成モデルに頼らなくとも、さまざまな「N1 名詞」との組み合わせを実現できるのである。タイプ頻度の高い「N2 名詞」であればあるほど、[N1 + enfant]や[N1 + internet]といった独自の語形成モデルを有している可能性が高いと考えることができる。

5.6. AdjR の欠如を補完する N2

表 14 にリストされた「N2 名詞」を横断的に見ていくと 2 つの傾向に気づく。1 つ目は enfant（子ども）や étudiant（学生）など、特定のタイプの人や集団を示す語彙素（表中ピンクで色づけした項目）が上位を中心に散見されることである。特に enfant や bébé（赤ちゃん）, femme（女性）, homme（男性）, fille（女の子）, garçon（男の子）, jeunesse（青少年）, senior（シニア世代）など、特定の性別および年齢層の人間を示す名詞や、piéton（歩行者）, cycliste（サイクリスト）, client（顧客）をはじめとする一時的な社会的役割を果たす人間、または pompier（消防士）や secrétaire（秘書）のような職業を表す名詞が観察された。このような「N2 名詞」は合計 58 種類確認できた。全体（566 種類）のうちの約 1 割に匹敵する。

2 つ目は対応する AdjR としての形式をそもそも持たない語彙素が比較的多いという点である。例えば enfant に対応する AdjR は enfantin であるが、bébé はそのように対応する AdjR を持っていない。後者のようなケースは cadeau（プレゼント）や repas（食事）といったフランス語に当初からあったと思われる単純名詞から、internet（インターネット）や bonsaï（盆栽）のような新語、外来語まで広く見られる。全体ではそのような N2 は 566 種類中 444 種類と、割合にして約 78%に及んだ。対応する AdjR を持たない N2 の方が圧倒的に多数派なことが分かる。

ちなみに AdjR を持たないタイプの中には、その N2 が AdjQ から派生した名詞であるケースも 13 種類観察されたが、古賀(2013：115)でも指摘のある通り、AdjQ はそ

のままの形で AdjR の代わりにはなれない。例えば fraîcheur（新鮮さ）は AdjQ の frais（新鮮な）から派生した名詞であるが、sachets fraîcheur が「フレッシュパック」、つまり新鮮さを保つためのパックであるのに対し、sachets frais だと「新鮮なパック」、すなわちそのパック自体が新鮮だというあくまで属詞的な読みにしかならない。したがって関係的な読みを実現させるためには AdjR か N2 のどちらかになる訳だが[116]、名詞 fraîcheur は AdjR としての形式を持ち合わせていないので、必然的に[N1 + N2]構造を取ることになる。

このように、接尾辞を伴って形容詞形を派生するというプロセスはあらゆる名詞において可能という訳ではない。接辞付加を適用できないのであれば、転換、つまりゼロ接辞によって形容詞化すると考えるのが妥当である。今回の調査で 8 割近い N2 がこのケースであったという点は興味深い。現代フランス語における関係的な[N1 + N2]構造の形成の背景には、このような形式的欠如が要因のひとつとしてあるのではないかと考えられる。

3.6 節の numérique（IT の）などに対する papier（紙）の例においても指摘したように、AdjR としての形式が用意されていないために名詞基底がそのままの形で（ゼロ接辞で）用いられたと思われる様子は、他の AdjR とこの N2 とが等位接続に置かれた以下のような例からもうかがえる。

(82) Parmi les mesures qui ont filtré dans la presse, la réduction des allocations chômage et familiales, la baisse d'un euro du salaire minimal (actuellement de 8,65 euros l'heure) ou la suppression de 20 000 emplois dans la fonction publique

(*Direct Bordeaux 7*, 2010 年 11 月 23 日, p.19, 太字化は筆者)

（アイルランド財政支援のための）対策案としてマスコミに漏れ伝わってきた内容として、失業と家族の両手当の減額、現在 8.65 ユーロ／時の最低賃金の 1 ユーロの低下、そして公務員のポスト 2 万件の削減がある。

[116]実際には[PREP. + N2]も考えられるが、議論が過度に交錯するのを避けるため、ここではそれを指摘するにとどめておく。[N1 + PREP. + N2]については第 6 章を参照。

(83) « Les adultes (+ de 28 ans) sont en hausse de 15 %, nous avons multiplié par trois le nombre de titres seniors, et par 4,5 les titres duos », souligne Paul Chaperon, directeur commercial et marketing.

(*20 minutes* édition Bordeaux, 2012 年 2 月 8 日, p.3, 下線は筆者)

「28 歳以上の大人の利用者は 15%増え、シニアパスの販売数は 3 倍に、ペアパスは 4.5 倍になりました」と、商業・マーケティング部長の Paul Chaperon 氏は話す。

前者の(82)では allocation familiale（家族手当）と allocation chômage（失業手当）が取り沙汰されているが、familiale が名詞 famille から派生した AdjR であるのに対し、名詞 chômage は接辞付加による形容詞形を持たないため、ゼロ接辞で AdjR と同等の機能を負っていると考えられる。続く(83)では名詞 commerce から接辞付加によって形成された commercial（商業の）に対し、英語からの借用語である marketing（マーケティング）には接辞付加による形容詞形が用意されていないため、そのままの形で commercial と等位接続されている。このような既存の AdjR と N2 の互換性は et や ou による等位接続以外の環境下でも垣間見ることができる。以下の 2 つのテクストはその例である。

(84) La dématérialisation. On désigne en général à travers ce terme tout ce qui relève de la transformation de documents papier en fichiers informatiques.

(*Sud Ouest* édition Bordeaux rive gauche, 2011 年 6 月 30 日, p.20c, 下線は筆者)

脱物質化。紙の文書から電子ファイルへの移行に関するあらゆることが、この言葉によって一般的に示されている。

(85) Les médecins qui continue d'utiliser la feuille de soins papier plutôt que la carte Vitale et la feuille de soins électronique seront taxés de 50 centimes depuis le 1er janvier 2011, en vertu de la loi Bachelot de 2009.

(www.viva.presse.fr/La-feuille-secu-a-50-c-c-est-prti_14717.html 2012 年 4 月 10 日参照、下線は筆者)

Vitale カードと電子診断書ではなく紙の診断書を使い続ける医師に対しては、2009 年の Bachelot 法に基づき、2011 年 1 月 1 日よる 50 サンチームの税金が課されることになる。

前者では動詞由来の名詞 transformation の補語として documents papier (N2)と fichiers informatiques (AdjR)が配置されている。Papier には複数形のマーカーは付加されていない。後者のテクストでは接続詞句 plutôt que によって feuille de soins papier (N2)と feuille de soins électronique (AdjR)（さらには carte Vitale も）が同一の統辞的ポジション（i.e. 動詞 utiliser の補語）に現れている。この papier に代表されるように、既存の別の AdjR と対をなすものとして、欠如している AdjR の代わりに形容詞化接辞を伴わない名詞形式が用いられる余地があるのである。

ただし中には AdjR としての形式を有しているのもかかわらず、等位接続された相手方の N2 に合わせるように名詞形で現れる以下のようなケースもある。

(86) Un espace ouvert, aménagé avec un coin lecture et musique, propice à la détente et aux rencontres, (…)

(*Vanves Infos* (magazine municipal mensuel de la ville de Vanves (92)), No. 298, Octobre 2015, p.22, 下線は筆者)

ここは読書・音楽スペースを備えたオープンな場で、リラックスしたり人と会ったりするのに適しています(…)。

ここでは lecture と musique が等位接続されているが、lecture には接辞付加による形容詞形がないのに対し、musique には形容詞形 musical がある。にもかかわらずここでは musique (N2)という形式で現れている点が興味深い。その要因としては 2 つ考えられる。

1 つ目は等位接続が起こる統辞的位置に関する点である。上の feuille de soin papier と feuille de soin électronique では、指示されているのがそれぞれ独立した異なる対象であり、等位接続は複合名詞同士の間で行われている(i.e. [N1 + N2] et [N1 + AdjR])。これとは異なり、coin lecture et musique の指示対象は 1 つ(un coin)であるという点である。つまり等位接続は N2 の位置上で行われている (i.e. [N1 + [$N2_i$ et $N2_{ii}$]])。

しかし(83)の directeur commercial et marketing のように、統辞的には coin lecture et musique と同じ構造を呈しながらも、AdjR の形式が採用されるケースも存在する(i.e. [N1 + [AdjR et N2]])。したがって N2 と AdjR のどちらの形式を呈するかに関して、等位接続の統辞的位置が決定的な指標になっているとまでは言えない。

2 つ目の要因は N2 よりもむしろ N1 である coin の方に求められる。具体的には、前章でも取り扱った[coin + N2]という N1 固定の形成モデルがもたらす影響である。すでに指摘したように、[coin + N2]は今回の調査で確認された関係的な[N1 + N2]構造の中でも比較的高いタイプ頻度（28 種類）を示している。この結果は、coin の補部の実現形式として名詞形式（つまり N2）が許容されやすい傾向にあることを示唆する。Coin repas や coin barbecue などさまざまな[coin + N2]が実際に観察されるという事実は、N2 に入る名詞が AdjR の形式を持つか否かという点とは直接関係している訳ではない。[coin + N2]という形成モデルがあらゆる名詞を N2 として受け入れる余地を含んでいるのであれば、たとえ musique のように AdjR としての形式(i.e. musical)を有しているような名詞が N2 として現れたとしても不思議ではないはずである。

このように、関係的な[N1 + N2]の N2 に AdjR の形式的欠如を補完するような働きが示唆される一方で、両者が完全な相互補完の関係にあるとは限らず、場合によっては両形式が競合する可能性も示唆されるのである。

5.7. AdjR と N2：競合か棲み分けか

5.7.1. 4 つの可能性

上の musique に対する musical のように、AdjR としての形式も有している N2 は今回の調査では 566 種類中 122 種類（割合にして約 22 %）確認された。「X に関する N1」という意味関係は[N1 + AdjR]という構造でも基本的に可能な点、そしてこの「名詞+形容詞」という構造は形式的には統辞規則に符合している点を考慮すると、AdjR の形式がある限り[N1 + N2]の構造の方をわざわざ採用する必要がないようにも思われるが、実際には[N1 + AdjR]と[N1 + N2]の両方が可能な場合もあり得る。あるいは既存の AdjR が何らかの要因によって「X に関する N1」という意味関係を表しづらくなった結果

として[N1 + N2]が採用された可能性も考えられるだろう。後者の場合には両構造は厳密には競合しているとは言えず、棲み分けが成されていることになる。

棲み分けが示唆されるものとしては、以下のような形式が今回収集した[N1 + N2]構造の中から見出せる。

(87) a. assurance accidents 事故保険 (cf. accidentel(le))

b. soin lumière 光線（紫外線）ケア (cf. lumineux)

c. chambre enfant 子ども部屋 (cf. enfantin(e))

d. chèque musique 音楽ギフト券 (cf. musical)

e. crème main ハンドクリーム (cf. manuel(le))

f. plan d'évacuation incendie 火災時避難経路図 (cf. incendiaire)

g. carte étudiant 学生証 (cf. estudiantin(e))

上に示したそれぞれの N2 は AdjR としての形式を有してはいるものの、実際には両形式の間に互換性を認めるのは難しい。その要因としては、AdjR が実際には関係的な読みではなく属詞的な読みをもたらしている可能性などが考えられる。具体的には以下の 4 つの可能性が考えられる。

I. その形容詞の語彙的な意味が属性叙述的である可能性

II. 関係的な読みが特定の組み合わせの時のみ成立する可能性

III. 関係的ではあるが、成立する意味関係が微妙に異なる可能性

IV. AdjR の頻度が低い可能性

この 4 つは完全に別個の動きという訳ではなく、実際には互いに関係し合っている。以下それぞれの可能性について整理していく。

5.7.2. 属性叙述的な AdjR：事実上の AdjQ 化

1 つ目は、接辞付加による名詞の形容詞化という AdjR 形成における一般的な手続きを経ていながらも、実際には AdjQ と同様に属性叙述の機能を果たしているような形容詞がある可能性についてである。上の accidentel (cf. 87a)や lumineux (cf. 87b)がそれに該当する。確かに accidentel は名詞 accidents（事故）から、lumineux は名詞

lumière（光）から派生したものであるが、実際に示される意味はそれぞれ「偶発的な」、「光輝く」という属性叙述的な内容である。Assurance accidentelle という組み合わせの場合には、「保険」自体の属性として「偶発的な」という内容が accidentelle によって示される構図となるため、「事故に関する（事故のための）保険」ではなく、「偶発的な保険」という意味になってしまう。同様に soin lumineux も soin（ケア）そのものが「光り輝く」という意味になるため、soin lumière とは意味的に互換性が取れない。このようなタイプの形容詞は、ほとんどどのような主要部名詞に付く場合にも属性叙述的となる[117]ことから、形式的には AdjR の体裁を呈しつつも、実際には AdjQ と同様の機能を持つに至っていると考えることができるだろう。

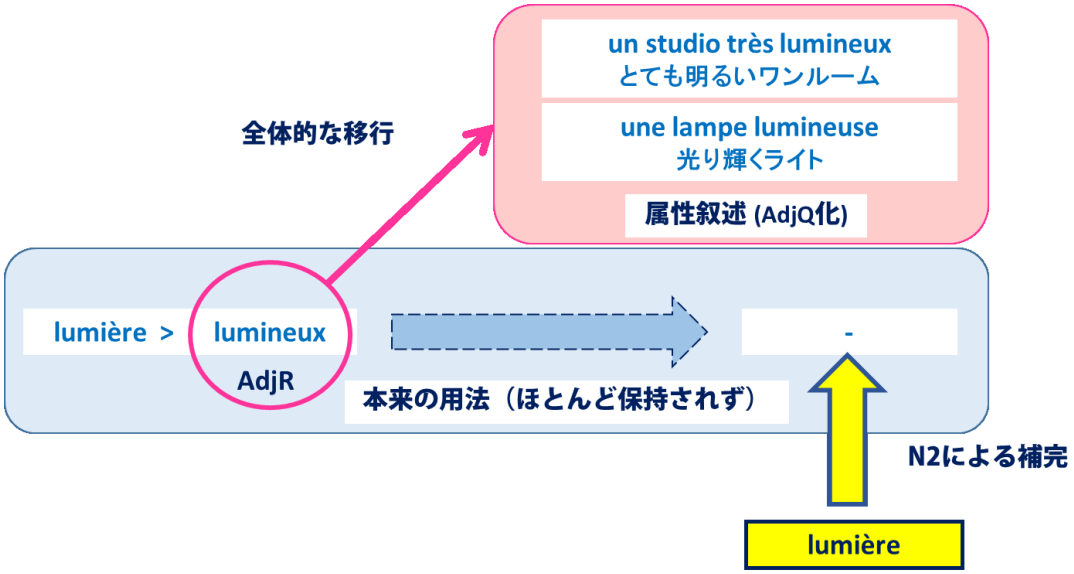


図 30 : lumineux の AdjQ 化と N2 による補完

上の図は lumineux の AdjQ への実質的なシフトについて示したものである。全体的に属詞化している以上、関係的な意味合いの構築のためにこれら形容詞形を使うことができない。したがってその代わりとして N2 としての lumière による補完が期待されるのである(cf. soin lumière)。

5.7.3. 凝結と分類的性質

実質的に AdjQ へ移行したと思われる AdjR の中には、特定の主要部名詞との組

[117] 例外としては mort accidentelle（事故死）が挙げられる。

み合わせに限って関係的な読みを保っているように見えるケースがある。元々は AdjR として関係的な意味を示していた形容詞が、通時的変遷の結果、一部の化石的に残った組み合わせを除いて AdjQ 化したのではないかと見られる。

Bartning & Noailly (1993)はその最たる例として形容詞 sympathique を挙げている。16 世紀頃初出のこの形容詞は ophtalmie sympathique（交感性眼炎）など医学用語で用いられてきたが、「交感性の」から「共感する」さらには「好感の持てる」という方向への意味の拡張を伴って、学術用語以外にも現れるようになった。その結果として属性叙述的な sympathique の用法が生まれ、その用法の方がむしろ一般化するに至ったと分析している(pp.28-29)。その一方で元の AdjR としての用法については、この ophtalmie sympathique のように医学用語の中でいわば化石的に残っている。この変遷を図にすると以下のようになるだろう。

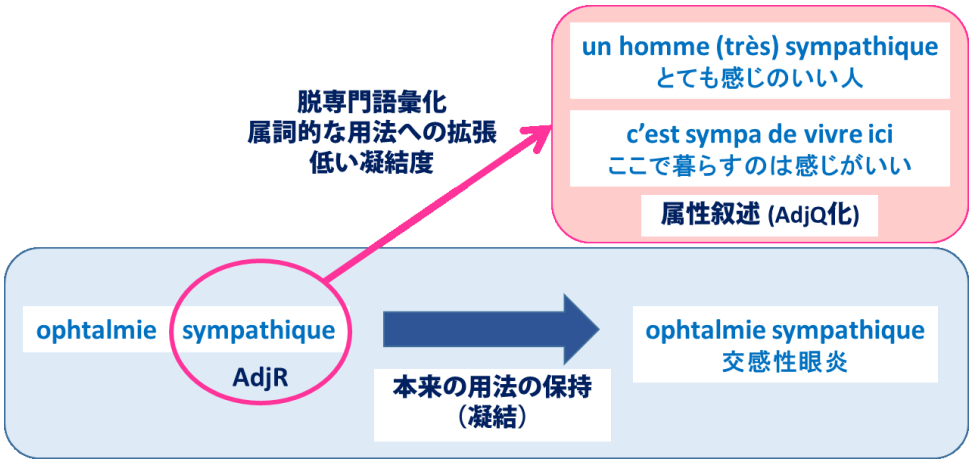


図 31：sympathique の用法の拡大

本来の関係的な用法は ophtalmie sympathique など、元々あった組み合わせにおいては保持される。一方でそれ以外の新たな出現環境（他の主要部名詞との組み合わせや、外置(extraposition)における c'est の補語位置での出現）においては、軒並み属性叙述的になる。また、属詞性の問題は凝結と表裏一体の関係にある（cf. 1.5 節）。本来の限られた主要部名詞との組み合わせは凝結しているが、それ以外のさまざまな環境・組み合わせにおいて sympathique が現れるということは、それらの構造の凝結度は

低いことを意味する。

関係的な読みの保持に関連して、凝結と同じように考えられる要因として、これらAdjR が実現する分類的な性質がある。例えば enfant（子ども）から派生した形容詞として enfantin (cf. 87c)があるが[118]、以下に示したような組み合わせでは enfantin の「子どもに関する」という AdjR 本来の意味が保持されている。

(88) a. littérature enfantine　児童文学

b. psychologie enfantine 児童心理学

c. classe enfantine　児童学級

d. art enfantin 児童芸術

e. langage enfantin　幼児語

これらはいずれも分類的な性質を帯びている。例えば「児童文学」は「文学」の中の 1 つのジャンルである。「児童学級」は幼稚園のない地域において小学校の中に設けられた学級のことであり、「小学 1 年生の学級(classe(s) de première année primaire)」、「小学 2 年生の学級」などと同じように、その小学校に設けられた「学級(classes)」を構成する 1 つの下位概念であることがうかがえる。

Enfantin が示しているのは「文学」「心理学」「学級」などが対象とする集団としての「子ども」であり、指示対象そのものに内在的に備わっている属性を叙述している訳ではない。つまり「文学」「心理学」「学級」などそのものが「子ども」に特徴的な性質―いわゆる「子どもっぽさ」―を備えていることにはつながらない。もちろん art enfantin や langage enfantin のように、対象物に「子どもっぽさ」を認めることができるケースもあるが、それでも enfantin が示しているのは分類的な意味合いである。なぜなら「児童芸術」はあくまで子どもが手掛けた芸術であり、「幼児語」は子どもが発する言語のことだからである。したがって例えば大人が手掛けた子どもっぽい作風の芸術作品があったとしても、それは art enfantin たり得ない。また大人が子どもっぽい喋り方をしたり、dodo（おねんね）や pipi（おしっこ）などの幼児語を使ったとしても、それは幼児語の一端に擬似的に

[118] 他に infantile という形容詞も存在するが、réaction infantile （幼稚な反応 = réaction enfantine）など限られた例を除けば、ほとんどが学術用語の中でしか現れない。組み合わせ可能性や頻度が限られるという点では、後述の estudiantin と同じ傾向を示していると言える。

触れただけであり、厳密な意味での langage enfantin ではない。このことからもこれら関係的な enfantin は属性としての「子ども（っぽさ）」ではなく、主要部名詞が想定する対象として、あくまで人間としての「子ども」を参照していることがうかがえる。

それとは対照的に chambre enfantine（子どもらしい寝室）や jouet enfantin（子どもっぽい玩具）などにおいては、指示対象自体に備わる「子どもっぽさ」という属性が参照されている。そのことは以下のように enfantin が別の AdjQ と等位接続に置かれる可能性からも示唆される。

(89) Les tons naturels tels que le gris, le taupe et le blanc sont et resteront des coloris intemporels, peu importe le sexe de votre enfant. Enfin, l'étoile ajoutera une touche de sophistication, pour une chambre enfantine et apaisante.
(www.allobebe.fr/nova-G414-1.html　2018 年 3 月 14 日参照、下線は筆者)
グレーや灰褐色、白のようなナチュラルなトーンはお子さんが大きくなっても、また性別にも関係なく使い続けられる色です。そして星の飾りは洗練されたタッチを添えて、子どもらしくほっとする寝室にしてくれるでしょう。

このテクストでは「子どもらしい(enfantine)」と「ほっとする(apaisante)」という 2 つの属性が寝室(chambre)に備わっていることを示している。あくまでも属性として備わっているだけのため、この寝室が対象として想定する使用者が実際に子どもかどうか、大人でも可能なのかということは直接問題にはならない。この点が先ほどの littérature enfantine などの場合との違いである。

ではなぜ chambre enfantine や jouet enfantin では関係的（分類的）な意味合いではなく属詞（修飾）的になるのだろうか。要因として考えられるのは、これらが具体物を指示しているという点である。分類的だった各例の主要部名詞(cf. 88)を見てみると、いずれも抽象的な概念を示していることが分かる。また classe（学級）がまさにそうであるように、中にはその名詞自体が何らかの下位分類を想起させるものもある。その一方で chambre や jouet の指示対象はそれぞれ「寝室」、「玩具」という具体物であり、またそれ

ら自体に分類的な性質が内在的に備わっている訳ではない。中には idées enfantines（子どもっぽい考え）のように抽象物を示す例も見られるものの、「考え」自体が下位分類を自動的に構築するとは考えづらいという点では chambre や jouet と同じである。

このように enfantin には本来の関係的意味合いを実現する分類的用法と、指示対象が内包する属性を叙述する属詞的用法の 2 つがあると言える。前者は主要部名詞が何らかの下位分類の可能性を示唆する抽象名詞の場合に観察される一方、主要部名詞にそのような性質が認められない場合には、後者の属詞的用法になると考えることができるだろう。

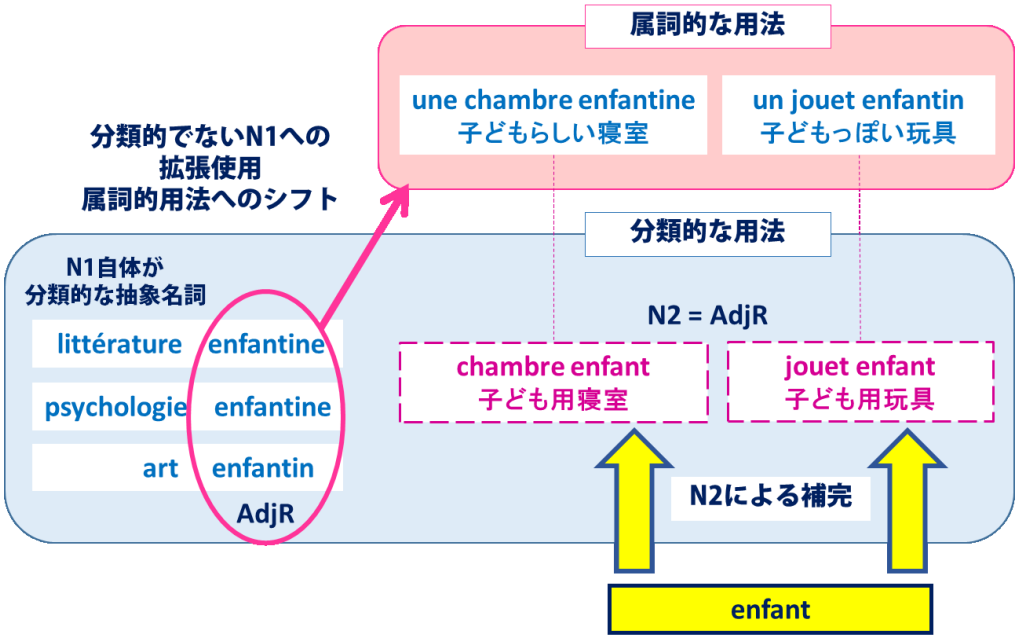


図 32 : enfantin の 2 つの用法と N2 による補完

上の図で示したように、enfantin の分類的な用法が実現するのは特定の名詞（それ自体が分類的な性質を持つ抽象名詞）との組み合わせの場合に限られており、いわば例外的なケースである。つまりそれらの例外を除き、分類的な用法を可能にする enfant の形容詞形は事実上欠如しているとも言える訳で、その点では先に見た lumineux（全体的に AdjQ にシフトしている）のような形容詞のケースと似た傾向を示していると言える。

Chambre や jouet との組み合わせにおいて「子どもに関する」あるいは「子ども向

けの」といった関係的（分類的）な意味合いを示すためには、したがって enfantin 以外の形式を適用する必要がある。そこで、その選択肢の一つとして N2 としての enfant が想定されるのである。この enfant は littérature enfantine などにおける enfantin(e)と同じく、属性ではなくあくまで人間としての「子ども」を参照している。その結果 chambre や jouet などの名詞との間に、littérature と enfantine との間に構築されるのと同じ意味関係—具体的には「目的」になるだろう—を成立させることが可能になると考えられる。

この enfantin と同じような傾向は femme（女性）から派生した féminin、famille（家族）から派生した familial など、主に人間のタイポロジーに関わる他の AdjR においても認められる。関係的な意味合いは分類的な N1 との組み合わせに限り例外的に実現するにとどまっており、それ以外の N1 で同じ意味関係を成立させるためには N2 (i.e. femme, famille etc.)が補完的に用いられている。今回収集した[N1 + N2]の N2 に人間やその集団を示す名詞が比較的多く観察された背景には、そもそも AdjR の形がない bébé などのケースと合わせて、このような事実上の AdjR の欠如が要因としてあるのではないかと考えられる。

5.7.4. 「事行」か「対象物」か

Enfantin や familial などと似た傾向は、musical (< musique)など、人間のタイポロジーに関する名詞以外にも見出せることができる。ただしこの場合には、関係的な意味合いを実現する形式としての AdjR が欠如している訳ではなく、むしろその「関係的な意味合い」の具体的な内容、つまり意味関係の細分化が問題となるようである。その中でも特に注目すべきは、AdjR によって示されている事物が「事行(procès)」として捉えられているのか、それとも単なる「対象物(objet)」として認識されているのかという点である。この違いが「関係的な意味合い」の細分化と密接に関わっている可能性が、musique（音楽）から派生した AdjR である musical の例から示唆される。

「音楽」の指示対象は「事行」としても「対象物」としても捉えられる。その中で、「事行」としての「音楽」が主要部との間で構築する意味関係は「所属」である。例えば comédie musicale（ミュージカルコメディー）は音楽を伴った喜劇であり、livre musical は

開くと音楽が流れる本のことである[119]。そして représentation musicale（音楽実演）では音楽を奏でるという活動が「実演」の内容として示されている。いずれの場合も「音楽」は単なる物としてではなく、厳密には（音楽の）「演奏」あるいは「再生」という、ひとつの事行として示されている。この事行としての「音楽」が、それぞれの主要部名詞の指示対象の中に埋め込まれているという関係性が成り立っているのである[120]。

その一方で「対象物」としての「音楽」がもたらす意味関係は「目的」である。例えば étude musicale（音楽研究）において「音楽」はその「研究」が対象とする物であり、「研究」という出来事に音楽の演奏や再生が伴っている訳ではない。同様に connaissance musicale（音楽知識）においても、「音楽」は「知識」の対象物である。

しかし「目的」の意味関係は比較的限られた N1 との組み合わせにおいてしか実現しないようである。具体的には先の enfantin の例と同じく、N1 が抽象名詞で、特にそれ自体に分類的な性質が内包されている場合に「対象物」としての「音楽」が musical によって示される傾向にある。したがってむしろ例外的なケースとして扱うべきかもしれない。

それらを除けば、属詞的な用法も含め、大半の場合において musical はひとつの「事行」としての「音楽」を示す傾向にあり、したがって「所属」の意味合いになると考えることができる。

---

119 Livre sonore（音が鳴る本）とも呼ばれる。

120 ちなみに「出来事」としての「音楽」を示す musical は属詞位置に現れることもある(e.g. une semaine très musicale : とても音楽的な一週間)。この場合にも主要部名詞の指示対象である「一週間」という時間的枠組みの中に所属する出来事として「音楽」が示されていることがうかがえる。

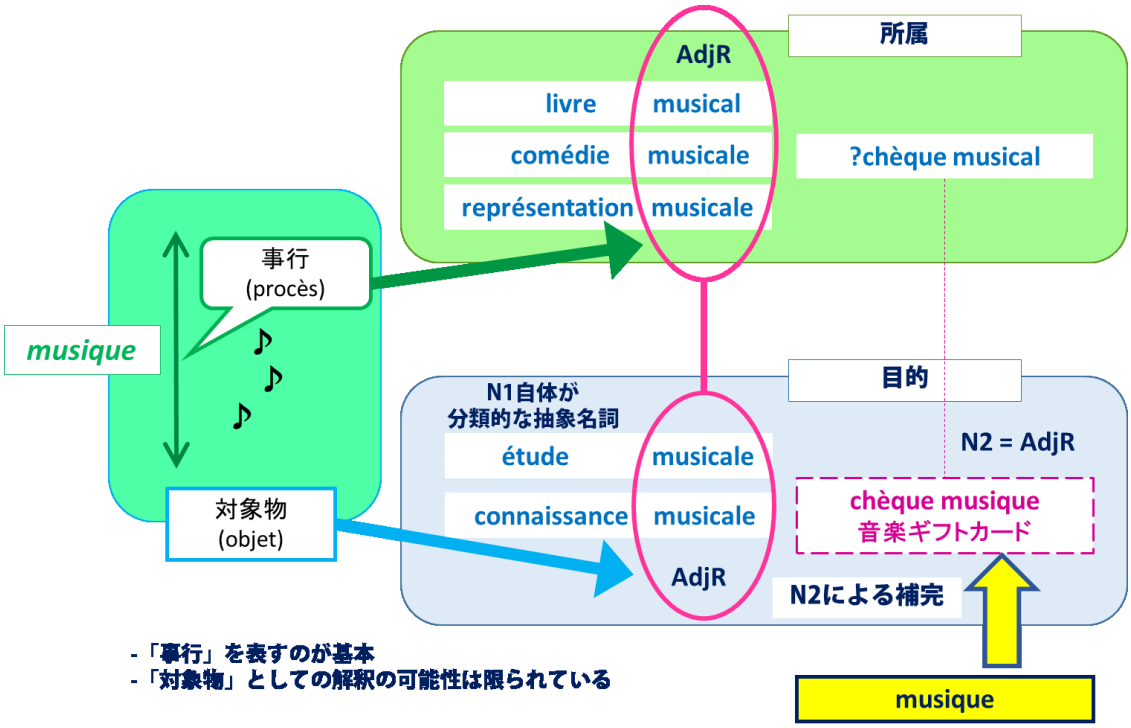


図 33 : musical の多義性と N2 による「目的」関係の補完的構築

上の図は musical における多義性と、そこに生じ得る形式的欠如について説明したものである。Musical が「事行」としての「音楽」を示し、[N1 + musical]が「音楽を伴った N1」という意味関係を構築するのがデフォルトである以上、一部の例外を除いて、[N1 + musical]によって「音楽のための N1」という「目的」の意味関係が実現されることはない。したがって chèque musical という形式を想定した場合、それが示すのは「音楽のためのギフトカード」ではなく、「音楽を伴ったギフトカード」になるだろう。つまり所属的な意味関係が構築されることになる。しかし「音楽ギフトカード」は対象物としての「音楽」を購入するための「ギフトカード」であって、それ自体が音の鳴る小切手状の物体という訳ではない(cf. livre musical : 音が鳴る本)。そこで、[N1 + musical]とは別のかたちで「音楽のためのギフトカード」という「目的」の意味合いを成立させる必要が生じる。この「目的」の領域の形式的空白を埋めるのが N2 としての musique である。Chèque musique (cf. 87d)という形式がもたらされた背景には、このように「対象物」としての「音楽」を指示するための対応形式(cf. AdjR)が事実上ほとんど欠如していたという要因があったと考えられる。

N2 としての musique は上の chèque musique をはじめ、「目的」の意味関係を musical によって構築するのが難しい場合にのみ用いられている。この意味関係がすでに成立している étude musicale や connaissance musicale の musicale をこの musique によって置き換える必要性はなく、また逆に「所属」の意味関係を N2 としての musique で表すことも難しいと思われる(e.g. ?livre musique)。このことから、意味上の観点において N2 としての musique は AdjR である musical との間で相互補完的な関係にあると考えられる。

同様の構図は crème main（ハンドクリーム：cf. 87e）や plan d'évacuation incendie（火災時避難経路図：cf. 87f）でも見出すことができる。それぞれの AdjR がカバーする意味的な領域は微妙に異なっているが、「目的」の意味関係を実現するために N2 が補完的に用いられているのは共通である。

Main（手）に対応する AdjR は manuel であるが、この形容詞も musical と同様に、基本的には対象物としての「手」ではなく、ある事行の中に位置づけられる要素としての「手」を示す。例えば travail manuel（手仕事）は travail という事行における道具あるいは手段としての「手」を示す。[N1 + manuel]によって表されるのはもっぱら「手によって成される何らかの出来事」であり、そもそも travail や opération（操作）など出来事に関する名詞以外と manuel との組み合わせがほとんど見られない[121]。したがって「ハンドクリーム」のように、N1 がモノ名詞だったり、N1 が目的として据える対象としての「手」を示す場合には manuel を適用することが困難だということになる。そこで crème main のように main を manuel の代わりに用いることで、「手のための N1」という意味関係を成立させるに至ったと考えられる。

Incendie（火災）から派生した incendiaire の場合には「目的」の方向性が問題となる。この AdjR は「火災を引き起こす」という意味を示し[122]、N1 で示されるのはその事行を引き起こす原因や手段となる物である(e.g. bombe incendiaire 焼夷爆弾)。別の見方

[121] モノ名詞と manuel の組み合わせは téléphone manuel（手動ダイヤル式電話）などごく限られた例のみである。その場合でも実際には「電話をかける」など何らかの動作が含意されており、「手」はその事行における道具・手段であるという点は travail manuel などの場合と同じである。
[122] そこから発展して「扇動的な」、「挑戦的な」という意味でも用いられる。また名詞として用いられる場合には「放火犯」という意味になり、「火災」を引き起こす原因としての人物が示されることになる。

をすれば「火災（を引き起こす）ための N1」という意味関係になるとも言える訳で、「火災」の発生を指向する事物以外を incendiaire と組み合わせることは難しい。Plan d'évacuation の場合、その「避難経路図」自体が「火災」の発生を誘発するものではなく、それは「火災」が発生した際に利用する目的で用意されたものである。つまりここでは「火災」は発生させるべきものではなく、対処すべきものという意味で「目的」に掲げられていると言える。前置詞に例えるならば前者のポジティブな指向は pour の方向性、後者のネガティブかつ受身的な指向は contre の方向性と表すことができるだろう。Incendiaire は pour の方向性しか示すことができないため、contre の方向性を示すためには別の手立てが必要となる。N2 としての incendie はこのネガティブで受身的な指向を持った「目的」の意味関係を実現するために用いられていると考えられる(e.g. plan d'évacuation incendie, assurance incendie etc.)。

5.7.5. 頻度の低い AdjR

ここまでは、AdjR によってもたらされる意味関係が「目的」の関係にそぐわないために N2 が補完的に用いられるケースを主に見てきたが、その一方でそもそも AdjR としての形式にあまり生産性がないために、その代わりとして N2 が適用される可能性もある。その場合には N2 は AdjR の欠如を補完するにとどまらず、結果的に両形式が同じ N1 との組み合わせにおいて競合することもあるようである。

その代表的な例として étudiant（学生）から派生した AdjR の estudiantin が挙げられる。*TLFi* をはじめとするいくつかの辞書では、この形容詞形は 19 世紀末にスペイン語の形容詞 estudiantino をモデルにもたらされたと説明されているが、現在では vie estudiantine（学生生活）や club estudiantin（学生クラブ）のように、N1 との組み合わせは特定のいくつかに限られているのが実態である[123]。さらには vie estudiantine に対する vie étudiante[124]のように、これら特定の N1 との組み合わせにおいても estudiantin と

[123] *TLFi* の記述（cf. estudiantin の項目）によると estudiantin には滑稽なコノテーションが含まれていると言う。したがって中立的に「学生の」という意味を表すためには必ずしも適さず、その代わりとして étudiant という形式が用いられるようになったと考えられる。ただしベルギーにおいては estudiantin は未だに用いられていると同書では報告されている。

[124] この組み合わせの時には étudiant は N1 に性数一致して étudiante となる。このような一致は他の女性名詞を主要部とする場合にはほとんど観察されない。

étudiant が競合していることが確認できる。関係的な意味合いの構築が難しい形容詞の中には、lumineux や sympathique などの例のように（cf. 図 30, 31）、特定の組み合わせを残して属詞的な用法へのシフトが想定できるものがあるが、estudiantin もそのようなタイプかと言うと、そういう訳でもない。この形容詞は属性叙述的か関係的かという意味合いの区別や出現環境の条件などが問題となる以前に、そもそも全体的に頻度が低いのである。いわば形容詞形はほぼ欠如しているに等しく、したがって bébé や cadeau, bonsaï などと同様に（cf. 5.6 節）、N1 との間で関係的な意味を成立させるための形式としては、N2 としての étudiant がむしろ適用されることになると言える。

ここまで見てきたように、N2 と、それに対応する AdjR の両形式は、表面上は N1 の直後という位置において競合しているように見えるが、実際に N1 との間で結ばれる意味関係や、N1 との組み合わせ可能性について詳しく見てみると、両形式は競合し、かつ相互入れ替え可能な状況にある訳では必ずしもなく、ある程度の棲み分けが成されていることが明らかになった。

5.8. 別の語形成モデルがもたらす競合

5.8.1. [N1 + culinaire] vs. [atelier + N2]

AdjR の欠如を N2 が補完し得る一方で、両者が統辞的にも意味的にも同等の環境下で競合するケースもない訳ではない。その場合には[N1 + AdjR]とは別の語形成モデルの影響があるのではないかと考えられる。

その一例として、2.9 節で挙げた atelier culinaire (cf. 47b)と atelier cuisine (cf. 47c)の競合を見てみたい。ここでは両形式とも「料理教室」を表しているが、前者は[N1 + AdjR]（具体的には[N1 + culinaire]）という語形成モデルに依拠しているのに対し、後者は[atelier + N2]という、特定の N1 を基にした語形成モデルからもたらされていると考えられる。実際この[atelier + N2]としては、atelier cuisine を含め、以下の図中に示した 20 種類[125]が今回の調査（cf. 表 6）で確認されている。

[125] そのうち ateliers-débats については同格としての解釈（i.e. ワークショップ兼討論会）の余地も残されていることを注記しておく。

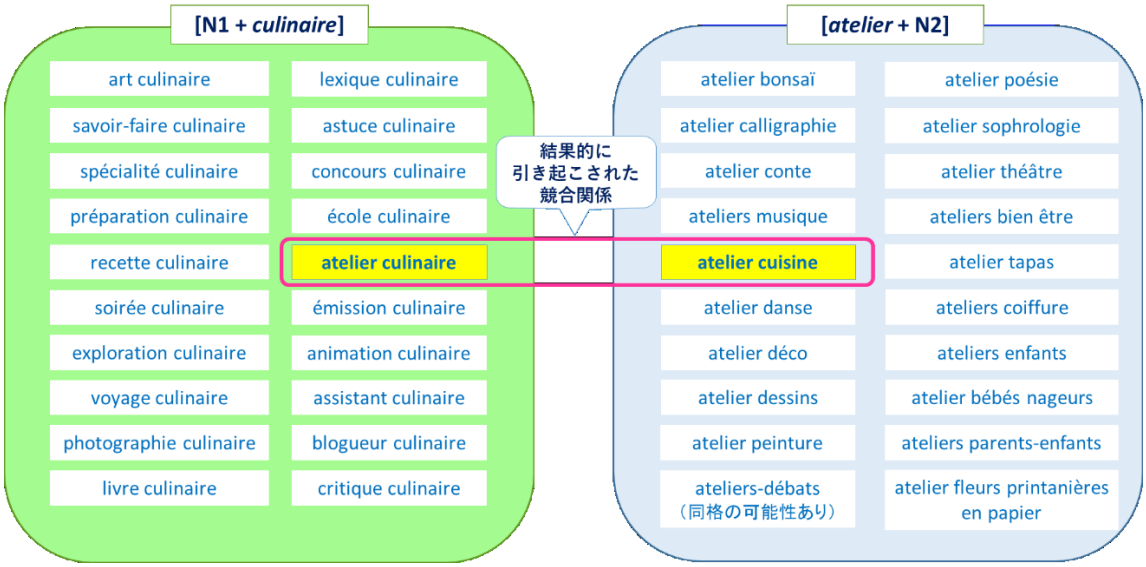


図 34 : atelier culinaire と atelier cuisine の競合[126]

Atelier culinaire と atelier cuisine が競合するに至ったいきさつはこの図のように要約することができるだろう。ここで問題となるのは culinaire と cuisine の対立ではない。なぜならタイプ頻度の観点から、[N1 + cuisine]という語形成モデルが想定できるとは考えづらいからである。今回の調査で N2 位置に確認された cuisine は 4 件だったが、組み合わせ相手である「N1 名詞」はそれぞれ atelier, coin, côté, espace だった。これらはいずれも「高頻度 N1」である（cf.5.5 節）。atelier cuisine は[atelier + N2]から、coin cuisine は[coin + N2]から形成されたと考える方が自然であり、ここで[N1 + cuisine]という語形成モデルをわざわざ想定する必要性はない。

したがってここで問題となる対立は「料理に関する N1」という意味を示す [N1 + culinaire]と、「N2 に関する教室（ワークショップ）」という意味内容を示す[atelier + N2]の 2 つである。「料理に関する教室（ワークショップ）」を名付ける際にはこの 2 つの語形成モデルが潜在的に利用可能であり、結果としてそれぞれの語形成モデルによってもたらされた両形式が競合することになったと考えられる。

ところで、この両形式が競合するもうひとつの要因として、名付け上の揺れが考え

[126] [atelier + N2]の実例において atelier が複数形になっているものがあるが、これは本調査で実際に観察された形式をそのまま掲載しているためである。なお[N1 + culinaire]の諸形式については、実際に観察される組み合わせの一例を参考として同じ数だけ示したものであり、網羅的なリストではない。

られる。複数の語形成プロセスが潜在的に適用可能であっても、いずれかが既存形式として先に存在し、かつそれがタイプ頻度あるいはトークン頻度において潜在的に競合する形式を圧倒している場合には、その既存形式が他方をブロックすることで競合が回避される場合がある。このブロッキング(blocking)については Aronoff (1976：43)をはじめとする数々の研究で指摘されているところである。

例えば imprimante（プリンター）は動詞 imprimer（プリントアウトする）から派生した名詞であるが、これと同様に動詞 photocopier（コピーする）から*photocopiante という形式を作ったとしても、実際には「コピー機」を意味するものとして容認されない。なぜなら photocopieuse（または photocopieur）という既存の形式がこれをブロックしているからである。「コピー機」の名付け方は photocopieuse (photocopieur)で既に決定済みであり、それが広く定着しているからこそ、それ以外の方法による名付けは排除されることになる。

それとは対照的に、ここで問題にしている atelier culinaire と atelier cuisine の間には、そのようなブロッキングの可能性は見出せない。どちらかが頻度の面で他方を圧倒しているとは言えないからである。「料理教室」の名付け方が統一されておらず、依然として揺れているからこそ、この両形式（ひいては atelier de cuisine という第 3 の形式も）が競合しているのだと考えられる。

同様の要因で[N1 + AdjR]型と[（特定の）N1 + N2]型の語形成が競合していると見られるケースは他にもある。例えば「ファミリーサイズ」を示すものとして format familial (AdjR)と format famille (N2)の両形式が競合している。[N1 + familial(e)]の形式をとるものは allocation familiale（家族手当）や maison familiale（実家）など枚挙に暇がないが、対する[format + N2]もある程度のタイプ頻度があるようで、本調査でも format voyage（旅行サイズ）や format poche（ポケットサイズ）など 5 種類が確認されている。また、「（携帯電話の）サイレントモード」は mode silencieux (AdjR)とも mode silence (N2)とも呼ばれる。[mode + N2]は mode avion（機内モード）や mode économie d’énergie（エネルギー節約モード）など 14 種類が本調査では確認された。

5.8.2. 文体上の使い分け？

ここで見てきたような経緯で発生する競合の場合、どちらの形式を実際に選択するかは、実際の文脈や文体と言った要因に左右される部分が大きい。2.9 節でも触れたように、[N1 + N2]型の語形成は商業的文脈など、軽妙で人目を惹く意図がある場合に積極的に用いられる傾向がある程度認められるが、新聞記事のように推敲された文章においては、以下のように同じような語形成の連続を避ける意図で、複数の語形成プロセスを使い分けていると見られるケースもある。

(90) Les démonstrations de recettes avec en vedette Carinne Teyssandier, animatrice culinaire, et le chef Vincent Poussard du Quai des saveurs à Bordeaux, les ateliers cuisine avec les chefs de l'Agence aquitaine de promotion agroalimentaires, et, nouveauté cette année, un concours de cuisine ouvert à tous (lire ci-dessous) mettra encore davantage la lumière sur l'asperge.
（www.sudouest.fr/2012/03/26/l-asperge-prepare-sa-fete-669373-706.php 2012 年 3 月 26 日、下線は筆者）
話題の料理コーディネーターCarinne Teyssandier 氏と、ボルドーの Quai des saveurs のシェフ Vincent Poussard 氏によるレシピ実演、アキテーヌ農業加工品推進組合のシェフ達による料理教室、そして今年新たに行われる、誰でも参加可能な料理コンテスト（以下を参照）がアスパラガスにさらなるスポットライトを当ててくれるだろう。

この文章では「料理に関する N1」を表す形式として animatrice culinaire (AdjR), ateliers cuisine (N2), concours de cuisine (PREP. + N2)の 3 つが観察されるが、それぞれ異なる語形成モデルに依拠していることが分かる。このうち N2 としての cuisine が ateliers cuisine のみと組み合わせ可能であることは先の節でも指摘したとおりであるが、[N1 + culinaire]と[N1 + de + cuisine]に関してはこの 3 つの N1 いずれに対しても適用可能である。したがってこの文で animatrice culinaire が animatrice de cuisine であったり、ateliers cuisine が ateliers culinaires または ateliers de cuisine であっても、さらには

concours de cuisine が concours culinaire であっても不思議ではない。

別の言い方をすれば、これら 3 つの N1 と語彙素 cuisine を組み合わせるという状況下で 3 種類の語形成法が使用可能だからこそ、同じ語形成法の連続使用を避けるための文体上の選択の余地が生じたということになるだろう。仮に以下のように[N1 + de + N2]型の語形成しか利用可能でない場合には、同一の語形成法の連続使用を避けることは難しくなるだろう。

(91) Cette année, a détaillé le maire Christian Estrosi, il y aura "des portiques de sécurité plus nombreux, contrôlés par davantage d'agents de sécurité privés", "des panneaux occultants plus hauts", ainsi que "la présence d'agents du service Sécurité événementielle pour la détection de comportements, de véhicules ou d'individus suspects" et "des contrôles et briefings quotidiens des personnels des sociétés de sécurité et des dispositifs anti-intrusion", le tout pour un budget de 6 millions d'euros identique à 2017.
(www.europe1.fr/societe/carnaval-de-nice-plus-de-securite-pour-plus-de-visiteurs-attendus-3566888　2018 年 2 月 6 日、下線は筆者)
Christian Estrosi 市長が明らかにしたところによると、今年は「より多くのセキュリティーゲートを設置し、より多くの私設セキュリティースタッフによる検査を実施する」ほか、「より高さのある防護壁」そして「不審な動き・車両・個人の検知のためのイベントセキュリティー部門の要員」および「セキュリティー会社スタッフおよびハッキング防止装備の日常的な検査とブリーフィング」を強化するという。すべて含んだ 600 万ユーロの予算は 2017 年と同額である。

上の例では同一文中に「セキュリティーに関する N1」を意味する形式が 3 種類現れるが、いずれも[N1 + de + sécurité]という構造を採用している。Sécurité から派生した AdjR は存在しないため、[N1 + AdjR]型の語形成は利用できない。また sécurité を N2 として用いるのも難しい。本調査では N2 としての sécurité のタイプ頻度は sécurité routière を含んでも 3 種類にとどまった（そのうち 2 つは「高頻度 N1」との組み合わせ：

solution sécurité, journée sécurité routière）。[N1 + sécurité]という語形成モデルの想定は難しいと言えるだろう。N1 側の portique, agent, société についても同じで、いずれも本調査では N1 位置では確認されなかった。結果的に利用可能な構造は[N1 + de + sécurité]だけであり、異なる形式同士の競合は起こらないということになる。

このように、文体上の理由で複数の語形成法を使い分ける余地は、あくまでも 2 つ以上の語形成プロセスが利用可能な場合に限られる。前置詞を伴った構造は潜在的な適用余地が広範な一方で、AdjR を伴った語形成はそもそもその形容詞が存在しなければ適用の余地はないうえ、仮にその形式があったとしても、5.7 節で見たような数々の制約が存在する。一方 N2 によって N1 の補部を示す構造の利用可能性は、語形成モデルの段階でどちらか一方に入る語彙素があらかじめ決められているために、潜在的な適用範囲は限られたものとなる。

5.9. サブスキーマとしての[N1 + AdjR]と[N1 + N2]

5.9.1. 3 種類のサブスキーマ

ここまで[N1 + AdjR]型の語形成の適用範囲にある程度の制約があること、そしてその制約部分を補完するように[N1 + N2]型の語形成が一定の条件下で適用可能であることを論じてきた。5.1 節から 5.3 節にかけて既に指摘したように、この AdjR と N2 は主要部である N1 の補部を示すという機能の面で共通している。したがって両者を同一のスキーマに属するサブスキーマと見なすことができるだろう。これを図示すると以下のようになる（cf. 図 8： オランダ語の-er 名詞の場合）。

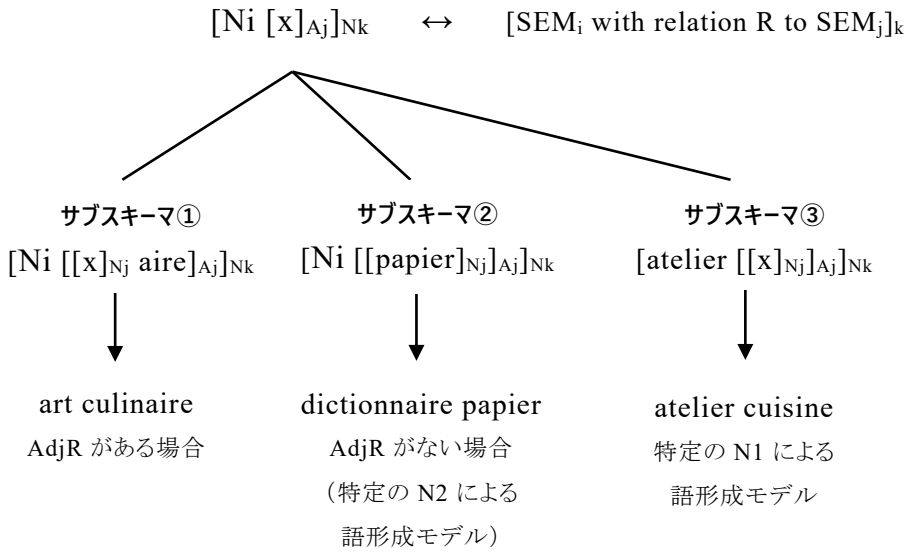


図 35： フランス語の関係的な複合名詞のスキーマとサブスキーマ

(N1 と N2/AdjR が機能辞なしに結びつく場合)

まず形態部門であるが、「N1 の補部を（前置詞なしで）後方から示す」という構造が共通のスキーマとなる。一方意味部門は「N2 に関係(R)のある N1」という内容である。この下に[N1 + AdjR]型のサブスキーマが 1 つ（便宜的にサブスキーマ①とする）、[N1 + N2]型のサブスキーマが語彙的に固定される側に応じて 2 つ想定される（N2 が固定されているものをサブスキーマ②、N1 が固定されているものをサブスキーマ③とする）。

サブスキーマ①は名詞派生の AdjR の成立が前提条件である。したがって以下のようなスキーマの適用が必要となる。なおここでは接尾辞-aire による形容詞化を例に挙げているが、語幹と接尾辞との組み合わせはそれぞれで異なるため、実際には-al や-el, -ier などそれ以外の接尾辞による形容詞化のスキーマも存在する。

(92) a. $[[x]_N \text{ aire}]_A$ (= 34a)

b. $[[\text{culin}]_N \text{ aire}]_A$

一方で形容詞化のための接尾辞が用意されていない papier のような語彙素の場合には、ゼロ接辞による形容詞化の道が残されている。それが以下のようなスキーマである。

(93) a. $[[x]_N]_A$ (= 37a)

b. $[[papier]_N]_A$

ただし 2.5 節で指摘したように、このスキーマが単独で無条件に適用できる余地は少ない。実際には何らかのスキーマの中に埋め込まれた形で機能することがほとんどである。その一つがサブスキーマ②である。このサブスキーマは特定の語彙素が N2 に位置する場合にもっぱら有効となる。例えば$[Ni\ [[papier]_{Nj}]_{Aj}]_{Nk}$というサブスキーマはあると考えられる一方、$[Ni\ [[boutique]_{Nj}]_{Aj}]_{Nk}$というサブスキーマは本稿の調査での結果を見る限り想定できない（cf. espace boutique : 5.5 節）。

残るサブスキーマ③は②と同じく転換のスキーマ(cf. 93)を組み込んだものであるが、特定の語彙素が N1 に入る場合にのみ有効なサブスキーマである。$[atelier\ [[x]_{Nj}]_{Aj}]_{Nk}$というサブスキーマは想定できるが$[après\text{-}midi\ [[x]_{Nj}]_{Aj}]_{Nk}$というサブスキーマも同様にあるかどうかは、今回の調査結果を見る限りでは疑わしい（cf. après-midi guinguette : 4.2 節）。このように、どの語彙素がそれに該当するかは個別に規定されているため、語彙情報的側面が強いのがこのサブスキーマ②および③である。

5.9.2. [N1 + AdjR / N2]の限界

このように、それぞれのサブスキーマには語彙的あるいは形態的な制約があるために、潜在的なあらゆる N1 と N2 との組み合わせの実現をこれら 3 種類のサブスキーマですべてカバーするには限界があると言える。

例えば「きのこ(champignon)に関係するナイフ(couteau)」、つまり「きのこ用ナイフ」を意味する対象物を名付けようとした場合、上の 3 種類のサブスキーマはいずれも適用不可能である。なぜなら champignon という名詞は AdjR としての形式を持たないうえ、そのままの形で N2 位置に高頻度で現れている形跡も認められないからである。一方で主要部の couteau に関しても、[couteau + N2]という組み合わせは今回の調査では確認されなかったことから、そのような語形成モデルがあるとは考えづらい。結果として$[Ni\ [x]_j]_{Nk}$というスキーマによって「きのこ用ナイフ」を名付けることは困難だと言わざるを得ない。

しかし N1 の直後に特定の形容詞が入ると状況が変わるようである。実際 couteau spécial champignon という形式が「きのこ用（専用）ナイフ」を意味するものとして本稿の調査でも観察された。この構造では形容詞 spécial が N1 の couteau を修飾しているように見えるが、なぜ[N1 + AdjR / N2]では難しいはずの組み合わせが、spécial が中に入ることによって可能になったのだろうか。また、この[N1 + spécial + N2]という構造と[N1 + N2]との関連はどのようになっているのだろうか。次章にて検討することとする。

第 6 章

もうひとつの語形成モデル：[N1 + spécial + N2][127]

6.1. Pause-café 型複合名詞の一変種？

前章の最後で指摘したように、今回 pause-café 型複合名詞の実例を収集する過程において、N1 の直後に特定の形容詞―特に spécial―が現れる構造が少なからず観察された。この[N1 + spécial + N2]は pause-café 型複合名詞の一種と見なすべきか、それとも別物と扱うべきかということが問題となる。以下に収集された例の一部を挙げておく。

(94) a. fromage spécial raclette　　ラクレット用チーズ

b. couteau spécial champignon　きのこ用ナイフ

c. offre spéciale printemps　　春の特別割引

d. stage de tissage spécial vacances d'été　　夏休み特別織物体験会

e. jeunes pousses d'endives spéciales apéritif　アペリティフ用チコリ若芽

[N1 + spécial + N2]は、N2 が N1 の補部として機能しているという点において、pause-café 型複合名詞と共通している。例えば couteau spécial champignon における N2 の champignon は couteau の属性（i.e. きのこのような）を叙述している訳ではなく、それが意図する「目的」の対象物を示している。この関係性は例えば rayon fromage（チーズ売り場）の fromage が rayon それ自体がチーズのような属性を帯びていることを示し

[127] 本章は以下の 2 つの論文の内容をベースに、本稿前章までの内容と照らし合わせた議論が展開できるように再構成したものである。

- 古賀健太郎(2015)「現代フランス語における [N1 + *spécial* + N2] 型の複合名詞について」,『ロマンス語研究』No.48, 日本ロマンス語学会, pp.45-54.
- ――― (2016)「複合名詞におけるコネクターとしての spécial に関する考察」,『フランス語学研究』第 50 号別冊『パロールの言語学』, 日本フランス語学会, pp.71-83.

なお分析対象のデータに関しても、本稿の pause-café 型複合名詞の収集時期に符合させるかたちで、適宜追加・更新を施している。

ている訳ではなく、むしろ rayon における「所属物」やその「目的」を示し、それによって rayon（売り場）の下位概念を提示しているのと同じようなものと言える。

問題となるのは N1 直後に存在する形容詞の扱いについてだろう。Noailly (1990 : 101)も指摘している通り、pause-café 型複合名詞において N1 のみに対する修飾が行われるのは稀である。むしろ、以下のように複合名詞の内部構造への操作は受け付けられないのが普通である。

(95) a. une pause-café　コーヒーブレイク

b. une pause-café <u>conviviale</u>　和やかなコーヒーブレイク

c. *une pause <u>conviviale</u> café

もちろん N1 の直後に spécial 以外の形容詞が置かれるケースは皆無ではないが、多くの場合[N1 + Adj]そのものが 1 つの分類的範疇を示す語彙的単位として機能しているか、少なくとも N1 と Adj とのつながりの方が N1 と N2 のつながりよりも強いためにこのような語順になったのではないかと推察される。以下は今回の調査で観察されたものの一部である。

(96) a. <u>chocolat noir</u> dégustation　試食用<u>ダークチョコレート</u>

b. <u>journal intime</u> vidéo　動画<u>私的日記</u>

c. <u>plantes artificielles</u> Toussaint　万聖節用<u>人工植物</u>

これらそれぞれの構成素を以下のように入れ替えることは容易ではない。

(97)　a. ?chocolat dégustation noir

b. ?journal vidéo intime

c. ?plantes Toussaint artificielles

例えば chocolat noir は chocolat blanc（ホワイトチョコレート）や chocolat au lait（ミルクチョコレート）などと共に chocolat の下位概念を形成している。同様に journal intime は journal de voyages（旅行日記）などと、plantes artificielles は plantes naturelles（自然植物）などとの対立関係の中で下位概念を形成し、それぞれが 1 つの語彙的単位のように機能していることがうかがえる。つまり chocolat noir や journal intime, plantes artificielles はいずれも複合名詞の一種と言える。それに対して、それぞ

れの N2 である dégustation, vidéo, Toussaint は、それら複合名詞の成立を受けた上で、さらなる概念の細分化を実現するために付加されたと考えられる。Chocolat noir dégustation は、chocolat の下位分類としての chocolat noir の、さらなる下位概念として示されている（cf. chocolat noir pâtissier： 製菓用ダークチョコレート ; chocolat noir à tartiner： スプレッド用ダークチョコレート etc.）のである[128]。つまり下位概念化が以下のように、いわば入れ子状に発生していることになる。

(98) [[chocolat noir] dégustation]

このような構造において、N1 の直後に現れている形容詞は N1 の補部として機能しており、*pause conviviale café の conviviale (cf. 95c)のように、後から挿入される要素とは異なるものである。(98)は chocolat noir が N1 で、dégustation が N2 のれっきとした pause-café 型複合名詞だということができる[129]。

では、couteau spécial champignon のような[N1 + spécial + N2]の場合はどうだろうか。もし(98)のような入れ子状の下位概念化が起きているのだとすれば、まず couteau spécial（特別なナイフ）が「ナイフ」の下位概念として存在し、そのさらなる下位概念として「きのこ用の『特別なナイフ』」が存在することになるだろうが、「特別なナイフ」が「ナイフ」の下位概念のひとつとして成立しているかは微妙である。

(99) a. un couteau spécial　　特別なナイフ

b. un couteau <u>assez spécial</u>　それなりに特別なナイフ

c. un couteau <u>spécial et très pratique</u>　特別でとても便利なナイフ

もしこの spécial が分類的な性質を持っているならば、café glacé（cf. 1.4 節）などと同じく[N1 + Adj]の内部構造への操作は困難になるはずであるが、実際には(99)に示したように内部操作が可能である。また chocolat noir において chocolat と noir が緊密に結びついていたのに対し、couteau と spécial の間にはそのような強い結びつきは認められない。したがって couteau spécial の spécial はむしろ属詞的であると言えるだろう。

---

[128] ちなみにこの「目的」に関する下位分類だけを行うことも実際には可能なようだが（e.g. chocolat dégustation 試食用チョコレート, chocolat pâtissier 製菓用チョコレート）、chocolat {noir / blanc / au lait / ...}といったチョコレートそのものに関わる下位分類を前にした時には、そちらの方が分類上では優先されることが、この組み合わせ上の制約から示唆される。

[129] このような理由によって、chocolat noir dégustation などについては[N1 + spécial + N2]ではなく pause-café 型複合名詞の実例集の方に掲載している。

N1 直後に現れる形容詞が N1 の補部として機能しているケースを除き、pause-café 型複合名詞では[N1 + Adj + N2]という連鎖はほとんど現れないはずである。それにもかかわらず couteau spécial champignon のような構造は一定の生産性を示しているようにさえ見える。なぜこのようなことが起こっているのだろうか。ここで示唆されるのは、[N1 + spécial + N2]における spécial が、couteau spécial のような名詞連辞中に現れる属詞的な spécial とは性質を異にしている可能性である。もしそうならば pause-café 型複合名詞の一変種として当該構造を位置づけることは妥当性を欠くだろう。むしろこの spécial を語形成上の核とした、まったく異なる 1 つの語形成モデルを想定する必要があるかもしれない。

6.2 Spécial の形態統辞的特徴

[N1 + spécial + N2]の生産性を説明するためには、この spécial が実際にどのような文法的機能を果たしているかを明らかにすることが必要である。先に述べたように、当該構造中の spécial は通常の品質形容詞とは異なる振る舞いを見せている。

(100) samedi midi nous faisons une raclette en famille et j'aimerai rajouter d'autres ingrédients avec <u>le traditionnel fromage spécial raclette</u> et la charcuterie habituelle (jambon cru, blanc, rosette...etc).
(www.marmiton.org/communaute/forum-fil.aspx?ThemeId=9&ThreadId=101775 2012 年 1 月 12 日参照、下線は筆者)
土曜日の昼に家族でラクレットをやるんですが、定番の<u>ラクレット用チーズ</u>や、いつものハム・ソーセージ類（生ハム、ボンレスハム、ロゼット等）の他にも食べ物を入れたいと思っています。

この例では fromage spécial raclette（ラクレット用チーズ）が品質形容詞 traditionnel（定番の）を伴って現れているが、この traditionnel を spécial と等位接続することは困難である。

(101) a. le traditionnel fromage spécial raclette

b. *le fromage traditionnel et spécial raclette

c. ?le traditionnel et spécial fromage raclette

d. ?le fromage raclette traditionnel et spécial

(101b)のように、N1 直後の位置での等位接続は容認されない。(101c-d)ではいずれも、spécial は traditionnel と同じく通常の品質形容詞として機能している。等位接続された 2 つの品質形容詞が?fromage raclette という構造（このような[N1 + N2]の組み合わせは本稿の調査では確認されなかったが）の全体を修飾していることになり、fromage のみに spécial がかかっている(101a)とはそもそも異なる位置に置かれていることが分かる。つまりこれらは複合名詞の内部構造には含まれていない。(101a)における traditionnel もそうである。以下に示したように、fromage spécial raclette の外側に位置している。

(102) le [traditionnel [fromage spécial raclette]]

裏を返せば、ここに現れる spécial は複合名詞の構成上で不可欠な要素のひとつとして位置付けられていることになる。

さらに言うと、この spécial は他の品質形容詞にほとんど取って代われない。例えば cadeau spécial Noël（クリスマス特別プレゼント）に対し、「クリスマスの独創的なプレゼント」を意図して??cadeau original Noël という構造を形成することは難しい。中には tarif exclusif Internet（インターネット限定料金）のような例も見られるが、いずれも「特別な」を意味する spécial に意味的に近い形容詞であった。そのような類推に基づく形成を除けば、当該位置に現れることのできるのはもっぱら spécial だけということになる。

この spécial の特殊性は N1 への性数不一致という形でも現れ得る。観察された[N1 + spécial + N2]の中には以下のように N1 が女性名詞や複数形になっていても spécial が不変化（男性単数形）なケースが散見された。

(103) a. assurance$_{f.sg.}$ spécial sports d'hiver　ウィンタースポーツ特別保険

b. arrivages$_{m.pl.}$ spécial ouverture　新規開店特別入荷

c. papillotes$_{f.pl.}$ spécial poêle　フライパン用パラフィン紙

N1 への性数一致が必ずしも起こらない要因としては 2 つが考えられる。1 つはこの spécial が形容詞としての性質をある程度失い、一種の機能辞のようになり始めている可能性、もう 1 つは spécial との結びつきが強いのはむしろ N2 の方であり、[spécial + N2]が N1 から幾分遊離している可能性である。特に 2 つ目の可能性については、N1 を伴わない[spécial + N2]という構造が実際に観察されることからも検討してみる余地があるだろう。また、この 2 つの可能性は互いに関連し合いながら連動している可能性もある。

6.3 実例調査

Spécial の形態統辞的性質をより明らかにするために[N1 + spécial + N2]および、N1 を伴わない[spécial + N2]の各実例を収集した。実例調査は以下の 2 本立てで行われた。

① Pause-café 型と並行する形での実例収集（2010 年 8 月～2017 年 9 月）: 110 件（延べ数）

② *Est Républicain* 紙コーパス[130]を用いた調査: 189 件（延べ数）

その結果、合計で 299 件の実例が収集できた。以下は各データベースごとに spécial がどのような形態で現れているかという観点で整理した表である。

表 16 : [(N1 +) spécial + N2]の内訳（spécial の形態別に整理）

		N1					合計
		MS	MP	FS	FP	なし	
*筆者データ (110件)	spécial [+accord]	42+3	1	19+1	6	-	72
	spécial [-accord]	0	3	6	6	23	38
Est Républicain (189件)	spécial [+accord]	69	4	57	8	**13	151
	spécial [-accord]	0	1	4	1	32	38
合計 (299件)	spécial [+accord]	114	5	77	14	**13	223
	spécial [-accord]	0	4	10	7	55	76

【凡例】MS : 男性単数形, MP : 男性複数形, FS : 女性単数形, FP : 女性複数形, spécial [+accord] : spécialがN1に性数一致した場合
*spécialの代わりにexceptionnel, exclusif, spécifiqueが現れたケース計4件を含む（表中の+3と+1）
**N1が不在ながらもspéciale(s)となっているケース。各文脈の中で既出の女性名詞が事実上のN1と認められる。

[130] Corpus Est Républicain « www.cnrtl.fr/corpus/estrepublicain/ » CNRTL. 地方紙 *Est Républicain* の内容を収録したコーパス。本調査では 2003 年版のデータ（2003 年 1 月 2 日から 2003 年 2 月 24 日まで収録）を使用した。2016 年 2 月 21 日アクセス。

まず現れた形容詞の種類についてだが、ほとんどが spécial であった。筆者データ 110 件のうち、N1 直後の位置に現れた spécial 以外の形容詞は exceptionnel（例外的な）と spécifique（特定の）が各 1 件、exclusif（限定の）が 2 件の合計 4 件にとどまった。いずれも「特別な」を意味する spécial と同じように、目的となる対象を抽出・選定する意味合いを含んだ形容詞であることから、[N1 + spécial + N2]からの類推で形成された可能性がある。

Spécial の N1 への性数一致の比率は、筆者データでは約 65.5%（110 件中 72 件）、*Est Républicain* コーパスでは約 79.9%（189 件中 151 件）、全体では約 74.6%（299 件中 223 件）であった。筆者データの方が性数一致の比率が比較的低くなった要因としては、収集された実例に商品のパッケージ等の、より商業的な文脈で観察される対象が少なからず含まれていることが考えられる。

逆にそれほど商業色が濃くない文脈であっても、当該環境下の spécial の性数不一致は一定の割合で起こり得る。

(104) Dans la famille des <u>montres de sport spécial natation</u>, il existe la Poolmate, mise au point par des triathlètes anglais.
（www.guide-piscine.fr/s-entrainer-et-progresser/perfectionnement-natation/poolmate-la-montre-connectee-pour-les-nageurs-416_C　2017 年 6 月 28 日参照、下線は筆者）
<u>水泳用スポーツ腕時計</u>の系列の中には、英国のトライアスロン選手向けに開発された Poolmate というのがある。

これは水泳に関する情報サイトの記事で見られた例で、N1 の montres de sport が女性複数形であるのに対し、それに続く spécial は男性単数形のままである。

同様の現象は *Est Républicain* コーパスでも 6 件と、わずかながら観察できた。一方で N2 を伴わない通常の形容詞としての用法の場合には、このような現象は全く見られなかった。

表 17 : *Est Républicain* コーパスにおける spécial の出現形態

	N1:	MS	MP	FS	FP	なし	その他*	TOTAL
N2なし (675件)	spécial [+accord]	371	99	153	50	2	-	675
	spécial [-accord]	0	0	0	0	0	-	0
N2あり (189件)	spécial [+accord]	69	4	57	8	13	-	151
	spécial [-accord]	0	1	4	1	32	-	38
	TOTAL	440	104	214	59	47	169	864 + その他 169

*その他：コピュラ動詞にspécialが連なっている場合や、spécialeが女性名詞として用いられている場合。

Est Républicain コーパス（2003 年データ）中に現れたすべての spécial を洗い出したところ、表 17 のような結果を得た。Spécial の後に N2 が伴わない 675 件のうち全てで、N1 への性数一致が行われていた。38 件観察された N1 への不一致はいずれも [(N1 +) spécial + N2]という構造の中で起こっていた。

(105) L'Amicale des Retraités Villarois et le club Chanteclair organisent une sortie « Spécial Carnaval » le jeudi 13 février au Royal Palace de Kirrwiller. （*Est Républicain*, 2003 年 1 月 4 日、下線は筆者）
Villers-lès-Nancy シニアの会と Chanteclair クラブは 2 月 13 日木曜日、Kirrwiller 町の Royal Palace への「カーニバル特別」お出かけツアーを開催する。

ただし同コーパスにおける spécial 不一致の例ではいずれも(105)のように、[spécial + N2]の部分が引用符で括られていたことを注記しておく必要がある。引用符なしで現れた[N1 + spécial + N2]では spécial の N1 への性数一致が必ず行われていた。

6.4. [spécial + N2] : N1 を伴わない場合

Spécial が不変化であったり、上の例のように[spécial + N2]の部分を引用符で括る表記が見られたりすることが示唆するのは、この[spécial + N2]が N1 から幾分遊離しているのではないかということである。同じことをうかがわせる別の例を見てみたい。

表 16 の結果にも現れているように、spécial において最も N1 への一致率が低かったのは N1 が男性複数形(MP)の場合であった。spécial の男性複数形は spéciaux であり、語末の音が明確に変わる。それにもかかわらず以下のカタログの例のように spécial のままになっているのは興味深い。

図 36 : Arrivages spécial ouverture（新規開店特別入荷 =106b）

（Castorama の Lormont 店新規開店時のカタログ, 2011 年 9 月）

ただしカタログ中の文字のレイアウトからも示唆されるように、spécial ouverture が N1 と見られる arrivages と本当に緊密に結びついているのか微妙な面がある。同じような傾向は製品のパッケージでも見られる。

（左）図 37 : Papillotes spécial poêle

（フライパン用パラフィン紙, 2015 年 9 月確認 =106c）

（右）図 38 : *Purina One* spécial chat stérilisé

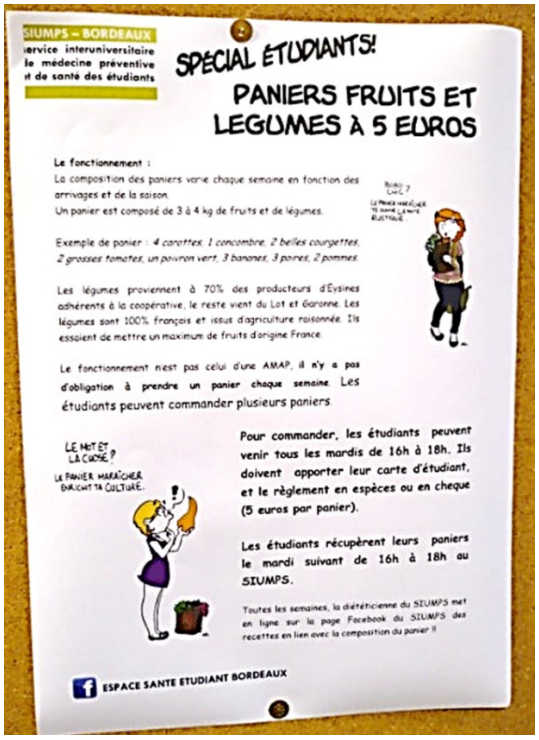
（Purina One 避妊去勢済みネコ用, 2011 年 7 月確認）

図 37 では spécial poêle（フライパン用）という文字が、N1 と見られる papillotes（パラフィン紙）から行を改めて表示されている。また文字のフォントやサイズも N1 とはだいぶ異なっているのが分かる。図 38 ではその傾向がさらに顕著で、N1 と見られる *Purina One*（商品名）と、それの補部と思われる spécial chat stérilisé（避妊去勢済みネコ用）のサイズが極端に異なるだけでなく、両者の間に別のテクスト（商品のキャッチコピー）[131]がレイアウトされてさえいる。

さらには以下のように、N1 が全く明示されていないケースも、筆者データで 23 件、*Est Républicain* コーパスで 45 件[132]確認できた。

[131] Des résultats visibles aujourd'hui et demain（今日も明日も、目に見える効果）と表記されている。

[132] ただし、このうち 13 件は既出の名詞を省略したと思われるケースであった。



SIUMPS – BORDEAUX
service interuniversitaire
la médecine préventive
et de santé des étudiants

SPÉCIAL ÉTUDIANTS!

PANIERS FRUITS ET LEGUMES À 5 EUROS

Le fonctionnement :
La composition des paniers varie chaque semaine en fonction des arrivages et de la saison.
Un panier est composé de 3 à 4 kg de fruits et de légumes.

Exemple de panier : *4 carottes, 1 concombre, 2 belles courgettes, 2 grosses tomates, un poivron vert, 3 bananes, 3 poires, 2 pommes.*

Les légumes proviennent à 70% des producteurs d'Evsines adhérents à la coopérative, le reste vient du Lot et Garonne. Les légumes sont 100% françois et issus d'agriculture raisonnée. Ils essaient de mettre un maximum de fruits d'origine France.

Le fonctionnement n'est pas celui d'une AMAP, il n'y a pas d'obligation à prendre un panier chaque semaine. Les étudiants peuvent commander plusieurs paniers.

Pour commander, les étudiants peuvent venir tous les mardis de 16h à 18h. Ils doivent apporter leur carte d'étudiant, et le règlement en espèces ou en cheque (5 euros par panier).

Les étudiants récupèrent leurs paniers le mardi suivant de 16h à 18h au SIUMPS.

Toutes les semaines, la diététicienne du SIUMPS met en ligne sur la page Facebook du SIUMPS des recettes en lien avec la composition du panier !!

ESPACE SANTE ETUDIANT BORDEAUX

図 39 : Spécial étudiants !（学生向け特別！）
（ボルドー大学学生保健課のポスター, 2011 年 9 月, ボルドー第 3 大学（現ボルドー・モンテーニュ大学）構内にて）

これはポスターの見出し部分に[spécial + N2]が現れた例であるが、先ほどの arrivages spécial ouverture もカタログの見出しのような形で現れていることを考えると、両者の出現文脈に類似性が見出せて興味深い。実際、今回の調査で確認された 55 件の[spécial + N2]（cf. 表 16）はいずれも、ポスターや、以下のような雑誌の見出しなど、テクストの受け手がまっさきに目を留める箇所で現れているケースがほとんどである。

図 40 : Spécial orientation 進路特集

（*l'Étudiant* 誌表紙、2012 年 12 月 11 日号）

この[spécial + N2]についてとりあげた先行研究はこれまでほとんど成されてこなかったが、わずかな先行研究の 1 つである *Le Trésor de la Langue Française informatisé (TLFi)*の « SPÉCIAL, -ALE, -AUX »の項[133]でも、ここで指摘しているような[spécial + N2]の文脈的特性への言及が成されている。その中では「特別な見出しや刊行物を導き入れるため(Pour introduire une rubrique ou une publication exceptionnelle)」に[spécial + N2]が用いられると説明されている。

TLFi ではあくまでもこの spécial を形容詞として扱っているが、今回の調査結果が示しているのはむしろ形容詞としての一般的な用法や機能と比べた際の、当該構造中の spécial の異質さである。[(N1 +) spécial + N2]では、同じ位置に spécial 以外の形容詞が現れる余地がほとんどないこと、そして現れた spécial が不変化なことがあるだけでなく、場合によっては N1 から遊離しているように見えたり、極端な場合 N1 が現れないことさえあるという傾向が見出せた。このことから、[(N1 +) spécial + N2]における spécial は品質形容詞とは多かれ少なかれ性質を異にするものと見なすべきではないかと考えられ

[133] http://atilf.atilf.fr/ 2016 年 2 月 20 日参照。

る。

6.5. [(N1 +) spécial + N2]と[N1 + à + N2]

6.5.1. 2 つの語形成モデルの対応関係

むしろこの spécial は couteau à beurre（バターナイフ）における前置詞 à のように、複合名詞を形成する上でのコネクターとして機能している可能性がある。ただ spécial そのものが前置詞化していると見るよりは、[(N1 +) spécial + N2]という形成モデルそのものが[N1 + à + N2]と同じような働きをするようになった結果、さまざまな N1 と N2 の組み合わせが可能になったと捉えるべきであろう。以下ではまず N1 を伴う[N1 + spécial + N2]の特徴について、[N1 + à + N2]との比較を通じて論じる。そしてそれを踏まえて[spécial + N2]の問題に立ち返ることにする。

[N1 + à + N2]のような構造を Benveniste (1974 : 171-176)はシナプシ(synapsie)と呼んでいる。これは、統辞的な方法で何らかの語彙的単位を作り出す仕組みであるが、既存の統辞構造に当てはまらない構造のモデルだというのが特徴である。また、de や à が N1 と N2 をつなぐ「コネクター(joncteur)」として機能していることにも言及している(p.172)[134]。ここで言うコネクターの機能とは、単に 2 つの語彙的な構成素を並列的につなぐハイフンのようなものというよりは、N1 の補部として N2 を導くという、文法的性格の強い機能だと考えられる。

このシナプシという概念を踏まえた上で、さらに当該構造の凝結的側面にも注目した Anscombre (2000, 2011)は「語彙的マトリックス(matrice lexicale)」という概念を提案している。Anscombre によると、語彙的マトリックスとは以下のようなものだという(Anscombre 2011 : 25. カッコ内の補足説明は筆者によるものである)。

[134] 本稿では議論のための比較分析の対象が膨大かつ複雑になるのを避けるため、[N1 + de + N2]についての考察は行わない。たしかに[N1 + de + N2]も N1 の下位分類を構成する場合があるが（e.g. avion de chasse： 戦闘機）、それ以外の用法も非常に多く、また[de + N2]が実質的には形容詞のように機能していると見られるものもあり（e.g. d'occasion： 中古の）、ひとくくりに扱うことは難しいのが実際である。この構造の意味的観点に基づく詳細な分析については Markussen (2016)を参照されたい。

① 固定された単位は文法的要素である

② 変数部分（つまり未指定部）は語彙的要素である

③ 一定の生産性を発揮する枠組みである

④ 変数部分の具体化（つまり構成素組み合わせ）における制限は、この構造そのものに由来するもので、既存形式で構築された意味関係によって変数部分の具体化が成される。

固定された要素と自由な（未指定の）要素からなり、その枠組み自体に意味関係に関する情報も規定されているという語彙的マトリックスの考え方は、本稿で拠りどころとしている CM の考え方にも通じるものがある。

上記の語彙的マトリックスの特徴のうち、ここでは特に①に注目したい。ここで言う「固定された単位」とは、[N1 + à + N2]では à のことである。そして[N1 + spécial + N2]では spécial がこれに相当することになる。つまり spécial は à と同じく文法的要素であり、具体的には複合名詞のコネクターとして機能していることが示唆されるのである。もしそうであれば、[N1 + à + N2]と[N1 + spécial + N2]は語形成モデルとしてかなり似通ったもの同士ということにもなるだろう。

この 2 つの語形成モデルの対応関係は、それぞれに基づいて形成した形式がほぼ同じ事物を示すことからもうかがうことができる。

(106) a. couteau à champignon　　きのこ用ナイフ

b. couteau spécial champignon　きのこ専用ナイフ

(107) a. papier à aquarelle　　水彩画用紙

b. papier spécial aquarelle　水彩画専用紙

(106), (107)いずれの場合にも、N2 が N1 の目的物であり、全体で N1 の下位項目を示している。違いがあるとすれば、[N1 + spécial + N2]の方が「N2 専用の」という、より特定的かつ排他的な意味合いを含みうるという点が考えられる（これについては 6.5.5 節で改めて取り上げる）。

ここで留意したいのは、[N1 + spécial + N2]の spécial はあくまで[N1 + à + N2]の à と同じような文法的機能（つまり複合名詞のコネクター）を示しているのであり、spécial

が前置詞化したとまでは言えないということである。実際、前置詞 à には動詞連辞や形容詞連辞など、名詞（連辞）以外の中でも機能しているが、これらの環境下にある à を spécial に置き換えることはできない。また、[spécial + N2]が N1 の「目的」を示すからと言って、前置詞 pour で表されるような以下の構造を spécial 単独で代用することも不可能である。

(108) a. Club Med vous propose ses plus belles offres spéciales pour partir selon vos envies : (…) .
(www.clubmed.com/cm/offre-sejour-profiter-des-offres-speciales_p-133-l-FR-pa-OFFRES-ac-so.html, 2014 年 5 月 19 日参照。下線は筆者)
クラブ・メッドはあなたが希望に応じて旅立てるために、最もお得な特別割引を提供します: (…) 。

b. *offres spéciales partir selon vos envies

このように、spécial は前置詞化した訳ではなく、正確には[N1 + à + N2]における à のような、複合名詞のコネクターとして機能するようになったととらえるべきである。コネクターは実際には特定の語形成モデルの中でのみ機能していることから、実際には spécial と à を比べるのではなく、[N1 + spécial + N2]と[N1 + à + N2]という 2 つの語形成モデル自体を比較して論ずるのがより妥当であろう。

6.5.2. 構成素組み合わせ可能性の高さ

Benveniste (1974)や Anscombre (1990)、さらには Bosredon & Tamba (1991)をはじめとする先行研究において、[N1 + à + N2]という構造が N1 で表される事物の下位分類を実現し、かつ高い生産性を示していることが指摘されている。確かに、例えば N1 を couteau とした場合では、さまざまな名詞を N2 に置くことで「ナイフ」の下位分類を示すことができるのが分かる。参考までに、N2 に「切る対象物」を表す語彙素が置かれる場合のいくつかを以下に挙げておく[135]。

[135] 実際にはこの他に、couteau à peindre（ペンキ塗り用パレットナイフ）のように、à の後に動詞（不定詞）を置くケースもある。この場合は不定詞で表される動作が couteau の対象事物として認識されることになる。

(109) a. couteau à beurre　　バターナイフ[136]

b. couteau à pain　　パン切りナイフ

c. couteau à viande　　肉切りナイフ

d. couteau à fromage　　チーズ用ナイフ

e. couteau à champignon　きのこ用ナイフ

f. couteau à papier　　ペーパーナイフ

g. couteau à bois　　木彫りナイフ

h. couteau à verre　　ガラス切断用ナイフ

ただし実際にはどのような名詞でも良いという訳ではなく、分類上意味を成す語彙素でなければならないようである。ステレオタイプ理論(théorie des stéréotypes)を提案している Anscombre (2011 : 24-25)によると、例えば avion à moteur（モーター付き飛行機）は avion（飛行機）の下位分類として有効な一方で、?avion à ailes（翼付きの飛行機）は分類として意味をなさない。なぜなら ailes（翼）というのはあらゆる飛行機に備わった「本質的な特性(propriété essentielle)」(p.24)だからである。一方で「モーターを有している」ことは、特定の「飛行機」だけが持っている「偶発的な特性(propriété accidentelle)」(ibid.)であり、「飛行機」における特定のタイプの名付けに有効となる[137]。

この意味的制約は[N1 + spécial + N2]に対しても当てはまるだろう。例えば?insecticide spécial insectes（昆虫用殺虫剤）は、「昆虫」という対象物が「殺虫剤」に関わる本質的かつ内在的な特性であり、分類として意味をなさない。すべての殺虫剤は昆虫（少なくとも何らかの）を駆除する機能を持っているからである。ただし以下のように「殺虫する」対象物がさらに指定された場合には、下位分類は有効となる。

[136] なぜ「ジャム用ナイフ」を意図した?couteau à confiture という形式がほとんど見られないのかという問題については 6.5.5 節で検討する。

[137] ただし偶発的であればいかなる特性でも下位分類の構成をもたらすわけではないと Anscombre は指摘している。下位分類の構成のためには、問題となる特性が対象物の「内在的な特性(propriétés intrinsèques)」である必要性もあるという (ibid.)。

(110) L'insecticide spécial insectes volants permet de détruire rapidement et efficacement les moustiques, mouches, guêpes, mites... par un effet choc à action instantanée.
(www.produitsentretien.fr/fr/produit/insecticide-special-insectes-volants-en-aerosol-750-ml.php　2017 年 8 月 30 日参照、下線は筆者)
飛翔昆虫用殺虫剤は速攻ショック効果によって蚊や小バエ、スズメバチ、衣蛾などをすばやく効果的に駆除することができます。

この例の場合、テクスト内の説明からも分かる通り「殺虫剤」の使用対象は「飛翔昆虫」に特化している。それが「偶発的な特性」となるため、下位分類としての有効性が生じることになると考えられる。

このように、[N1 + à + N2]で指摘されている意味的制約が[N1 + spécial + N2]においても見られることから、両者がそれぞれ形作る意味構造の間に類似性を認めることができる。

たしかに、このような意味的制約によって、[N1 + à + N2]および[N1 + spécial + N2]の N1 と N2 の組み合わせ自由度には、実際には一定の制限がかかる。しかしながら語形成モデル上は、N1 と N2 のスロットはいずれも未指定であるため、構成素の潜在的な自由度という観点では、先に見た pause-café 型よりもはるかに高い組み合わせ可能性が想定できるだろう。

これに対して pause-café 型の場合では、意味的な制約を仮にクリアしていても成立が難しい組み合わせがあることは既に確認したとおりである（e.g. centre-ville（中心街）に対する*centre village, *centre commune : cf. 3.3 節）。Pause-café 型複合名詞の形成には、意味的な制約以上に語彙的な制約、つまり[pause + N2]のような語彙情報としての語形成モデルが存在するか否かという条件が、生産性の実現において重要な指標となっている。それが生産性における[N1 + à + N2]や[N1 + spécial + N2]との違いである。このように、構成素組み合わせ可能性の面からも、[N1 + spécial + N2]が pause-café 型よりもむしろ[N1 + à + N2]に近い性質にあることが示唆される。

ところで、[N1 + spécial + N2]の構成素組み合わせ自由度の高さをうかがわせる

もうひとつの傾向として、以下のように語彙的に複雑な要素が N1、N2 それぞれのスロットに入り得るということについても注目しておきたい（下線はいずれも筆者による）。

(111) a. code de la route spécial vélo[138]　自転車用交通法規

b. week-end à Paris spécial famille[139]

家族向けパリでの週末（プラン）

c. recettes spéciales allergies alimentaires[140]

食物アレルギー向け特別レシピ

d. pain d'épices spécial foie gras[141]　フォアグラ用パンデピス

e. visites guidées spécial Nouvel an chinois à Paris[142]

パリでの旧正月特別ガイドツアー (NB. spécial は不変化)

N1 や N2 自体が複合名詞と見られるケースが多い一方で、(111b)や(111e)の à Paris のように、付加部としての性質の強い要素が N1 または N2 の中に含まれている点が興味深い。week-end à Paris（パリでの週末）も Nouvel an chinois à Paris（パリでの旧正月）も、全体で名詞連辞としての性格を帯びているように見えるが、そのような統辞寄りな要素でさえ受け入れる余地を持ち得るという点で、[N1 + spécial + N2]の組み合わせ自由度はかなり高いのではないかと予測できる。

6.5.3. 無冠詞の N2

しかしながら N2 が無冠詞ではない場合には当該構造は容認されない。例えば week-end à Paris spécial famille (cf. 111b)が成立する一方で、*week-end à Paris spécial votre famille は容認不可となる。N2 に限定辞が伴う場合には pour などの前置詞がこれに先立つ必要が生じるだろう（i.e. week-end à Paris spécial pour votre famille : あなたの家族のための特別なパリでの週末）。そうなった場合、全体の構造は複合名詞

---

138 www.lacub.fr/le-velo-dans-la-cub/code-de-la-route-special-velo　2014 年 5 月 19 日参照。
139 www.voyages-sncf.com　2011 年 2 月 18 日参照。
140 www.leparisien.fr/laparisienne/cuisine/sorbet-au-citron-et-lait-de-coco-03-08-2015-4987309.php　2015 年 8 月 3 日。
141 Labeyrie 社製品のパッケージ、2014 年 12 月確認。
142 www.sortiraparis.com/loisirs/guides/47124-le-nouvel-an-chinois-a-paris-2015 2015 年 3 月 2 日参照。

（あるいはシナプシ）ではなく、通常の名詞句になってしまうだろう。したがってこの場合の spécial は、week-end à Paris を修飾する品質形容詞として認識されることになる。このように、[N1 + spécial + N2]や[N1 + à + N2]では、N2 が無冠詞であるという点がひとつの重要な指標となる。

N2 が無冠詞である、つまり個別の発話環境に紐づけられていないということは、N2 が分類的性質を帯びるための条件であると言える。別の言い方をすれば、限定辞を伴うと、その構造はより具体的かつ特定的になり、無冠詞の構造はより抽象的になるということである。これに関して Anscombre (1991 : 107-108)は、限定辞を伴う構造の方がより構成的(compositionnel)になる傾向にあることを指摘している。例えば prendre un congé は文字通り「休暇を取る」という意味であるが、prendre congé は「別れのあいさつをする」を表し、意味の構成性が下がる(ibid.)。

[N1 + spécial + N2]や[N1 + à + N2]では、prendre congé などに比べると意味の構成性は高いものの、無冠詞の N2 にはやはり多かれ少なかれ抽象性が見出せる。Couteau spécial champignon における champignon は、例えば「さきほど採ってきたばかりのきのこ」など、「きのこ」のうちの特定のどれかに積極的に言及していない。あくまで対象となる事物（ここでは「きのこ」）を総称的に示しているに過ぎないのである。逆に、総称的に事物を示しているからこそ、N1 の下位分類を実現することが可能になると考えられる。

ところで、N1 の下位分類を示す[N1 + à + N2]に対して、限定辞(DET.)付きの[N1 + à + DET. + N2]という構造が競合していると思われるケースがある。代表的なのは boîte à lettres と boîte aux lettres の対立である。どちらも「郵便受け」を示している。前者は「箱」の下位分類の一翼を担っている。このことは、さまざまな[boîte + à + N2]が観察されることからうかがい知ることができる。なお N2 は特に可算名詞の場合には複数形になることが多い。

(112) a. boîte à lettres　　郵便受け

b. boîte à outils　　道具箱

c. boîte à bijoux　　宝石箱

d. boîte à pain　　パン保存用ケース

e. boîte à gâteaux　　ケーキ箱

f. boîte à pique-nique　ピクニックボックス

g. boîte à chaussures　靴箱

一方で[N1 + à + DET. + N2]で「箱」の下位分類を構築しているのは boîte aux lettres 以外に見つけることができなかった。形式上このような構造を取る場合には、名詞連辞としての解釈が成される傾向にあるようである。例えば boîte au micro-ondes は「レンジ用の容器」ではなく、むしろ「レンジに入れた容器」あるいは「レンジに容器が入っている」状態を叙述している解釈になる可能性がある。他方 boîte à micro-ondes は「レンジ用の（レンジ対応の）容器」を示しており、こちらでは à micro-ondes が分類的性質にあることが分かる。

このような結果から、boîte aux lettres は「郵便受け」を示す形式として、いわば例外的に凝結したものであると推測できる。一方で「箱」の下位分類は[boîte + à + N2]の形でシステマティックに実現できるため、その枠組みによってもたらされた boîte à lettres という形式が、この boîte aux lettres と競合することになったのだと思われる。

6.5.4. 結合スキーマとしての[N1 + [spécial + N2]]

ここまでの議論を踏まえて、[N1 + spécial + N2]および[spécial + N2]の生産性の根拠となる語形成モデルのあり方を明らかにしていくことにする。

まず N1 の下位分類を示す[N1 + à + N2]であるが、実際には以下のようなスキーマによって生産的に形成されていると考えられる。

(113) a. $[[x]_{Ni}\ [[à]_{P}\ [y]_{Nj}]_{PP}]_{Nk} \leftrightarrow [SEM_i \text{ with relation R to } SEM_j]_k$

b. $[[\text{couteau}]_{Ni}\ [\text{à}\ [\text{champignon}]_{Nj}]_{PP}]_{Nk}$

これに対し[N1 + spécial + N2]も同じような語形成モデルになると思われるが、先

述の通り spécial は形容詞ではなく実質的にはコネクターとして機能している。これを考慮するためには、2 段階にわたるスキーマ構成プロセスを想定する必要がある。まず第 1 段階として、以下のような 2 つのスキーマを結合させることによって、この spécial の特殊な機能を規定しておく必要があるだろう。

(114) $[[\text{spécial}]_{Aj}]_P + [[y]_P\ [z]_{Nk}]_{PP} = [[[\text{spécial}]_{Aj}]_P\ [z]_{Nk}]_{PP}$

このうち 1 つ目は形容詞 spécial を前置詞化するスキーマ(i.e. $[[\text{spécial}]_{Aj}]_P$)である。ただしこのスキーマ自体が独立して機能する訳ではない。実際には 2 つ目の前置詞連辞を形成するスキーマ(i.e. $[[y]_P\ [z]_{Nk}]_{PP}$)に埋め込まれて初めて機能する。もし仮に前者のスキーマが独立して使用可能であったとしたら、spécial が前置詞のあらゆる用法・機能にあまねく対応できることになってしまうからである。実際にはコネクターとしての spécial は少なくとも直後に N2 を従えた構造でないと成立できないことはすでに確認した。このような結合スキーマによって、まずは[spécial + N2]という形式が成立することになる。

次に、第 2 段階として先の[spécial + N2]を内包する形で[N1 + spécial + N2]を実現させる以下のような結合スキーマが想定されるべきである。

(115) a. $[[x]_{Ni}\ [[y]_P\ [z]_{Nk}]_{PP}]_{Nl} + [[[\text{spécial}]_{Aj}]_P\ [z]_{Nk}]_{PP} = [[x]_{Ni}\ [[[\text{spécial}]_{Aj}]_P\ [z]_{Nk}]_{PP}]_{Nl}$

b. $[[\text{couteau}]_{Ni}\ [[[\text{spécial}]_{Aj}]_P\ [\text{champignon}]_{Nk}]_{PP}]_{Nl}$

1 つ目のスキーマは(113a)と大枠が同じの、[N1 + PREP. + N2]を実現するスキーマである(i.e. $[[x]_{Ni}\ [[y]_P\ [z]_{Nj}]_{PP}]_{Nk}$)。2 つ目は先ほど用意した[spécial + N2]のためのスキーマである。つまり[N1 + PREP. + N2]のスキーマに[spécial + N2]のスキーマを組み込むことによって、couteau spécial champignon のような[N1 + spécial + N2]が形成されると考えられるのである。

このような 2 段階のスキーマ構成プロセスを想定することで、[N1 + spécial + N2]と[spécial + N2]の関係性も説明することが可能になる。ポスターや雑誌等の見出しによく現れる[spécial + N2]は、第 1 段階である(114)の結合スキーマが独立的に作用した結果もたらされる形式だと言える。一方で第 2 段階の(115)の結合スキーマが実行されると、N1 を主要部とする[N1 + spécial + N2]が実現するということになるだろう。

ただしこれはあくまでスキーマの構成上の段取りに過ぎず、通時的な変遷とは直接の関連はない。よって[spécial + N2]のスキーマが第 1 段階であるからと言って、その構造が[N1 + spécial + N2]よりも先んじて出現したとは限らない。形容詞の前置詞化スキーマがそうであったように(cf. 114)、結合スキーマを構成するスキーマが常に単独で使用可能とは限らないからである。

むしろ先に[N1 + spécial + N2]を形成する結合スキーマが存在し、その後、当初は単独使用できなかった[spécial + N2]のスキーマが単独でも機能し始めたという可能性がある。というのも、雑誌等で[spécial + N2]が現れた際には、それは実際には numéro spécial XXX（XXX 特集号）や、あるいは édition spéciale XXX（XXX 特集版）などを表しているとも考えられるからである。*TLFi* に記載されている以下の例はそれを示唆している。

(116) un « Spécial régimes-retour-de-vacances »

「ヴァカンス帰りのダイエット特集」号

(*Elle*, 1976 年 9 月 27 日号, TLFi より引用)

この例では引用符に括られた[spécial + N2]が男性単数形不定冠詞 un に続いて現れているが、雑誌の巻数に関わる事柄である点を考慮すると、この un が受けているのは男性名詞 numéro（号）であると推定できる。つまり、特集号の名付けではもともとは numéro spécial XXX と表されることが多かったが、文脈上すでに明白な N1 を省略するのが定着していったのではないかと考えられる。そしてその流れの結果、N1 をそもそも想定しないような[spécial + N2]の形成も可能になっていったのではないかと推察される。

6.5.5. Spécial の語彙的意味はどうなったのか？

このように語形成モデル上では、[N1 + spécial + N2]および[spécial + N2]における spécial は完全に形容詞としての性質を失い、前置詞連辞の構成素のように振る舞っているようにも見える。しかし、spécial が元来持っていた「特別な」という語彙的意味が全くなくなってしまったかというと、そうとも言えない。むしろ語彙的な意味を保ったままで当

該構造の形成が行われるからこそ、構造上は似ている[N1 + à + N2]との差異化に成功しているとも言えるだろう。

例えば couteau spécial champignon と couteau à champignon が同じような意味になるのとは対照的に、[N1 + à + N2]型の構造に容易には置き換えられない[N1 + spécial + N2]の組み合わせが存在する。

(117) a. offre spéciale printemps　春の特別セール

b. ?offre à printemps

c. offre de printemps　　春のセール

(117)では offre spéciale printemps に意味的により忠実に対応するのは offre à printemps ではなく offre de printemps の方になる。これは、N2 の printemps が N1 の「目的」となる事物を表しているとは言えないことに起因する。Offre spéciale printemps は「春」という期間に限って開催される事象ではあるが、「春」は「セール」の目的事物ではなく、時間軸上の位置づけを示したに過ぎない。一方で?offre à printemps の à printemps はあくまでも、N1 である offre がターゲットとする事物を示す方向に働くようである。したがって[N1 + à + N2]では offre spéciale printemps に対応する形式を提供できず、代わりに offre de printemps が対応形式として浮かび上がってくるのである。Vacances d'été（夏季休暇）や équinoxe d'automne（秋分）のように、[N1 + de + N2]では N2 に季節名を置くことで、指示対象が時間軸上のどの期間（季節）に位置づけられているかを表すことができる。

ただ場合によっては[N1 + de + N2]によって表される事物が[N1 + spécial + N2]による形式のそれとは一致しないこともある。

(118) a. formule spéciale vacances　ヴァカンス特別パッケージプラン

b. ?formule à vacances

c. formule de vacances　　ヴァカンス（自体の）形式

Formule spéciale vacances の spéciale vacances は、N1 たる formule（パッケージプラン）がターゲットとする期間（あるいは事象）を明確に規定している。そのパッケージプランがヴァカンスのためだけに提供されているという、spécial が本来持っている排他的

な意味合いが、ここでは色濃く反映されていると言えるだろう。一方で formule de vacances はヴァカンス向けのプランではなく、どこへ行ってどれくらいの期間何をして過ごすかなどの「ヴァカンスそのものの形式」を意味するようである。したがって意味する内容が formule spéciale vacances とは異なっている。ちなみに「ヴァカンス向けの」という「目的」の意味合いが formule spéciale vacances に認められるのであれば?formule à vacances という形式が成立してもおかしくはなさそうだが、実際にはこのような形式は確認できなかった。Formule spéciale vacances に最も近い意味を実現させる前置詞付きの構造は、formule pour les vacances（ヴァカンスのためのパッケージプラン）であると思われる。

N1 が「特別に」ターゲットとする対象を[spécial + N2]によって示すもう一つの例を見てみたい。

(119) "Les conditions de vie, c'est être enfermé 23h45 sur 24, deux sorties pour aller aux toilettes à l'aube et le soir, une nourriture pas spécial otages, mais une nourriture spécial montagnes afghanes, c'est-à-dire très peu à manger, toujours la même chose", a poursuivi son acolyte.
（www.france24.com/fr/20110630-journalistes-ghesquiere-taponier-france-aeroport-villacoublay-afghanistan-otages-france3　2011 年 6 月 30 日、下線は筆者）
「生活環境は 24 時間中 23 時間 45 分は監禁状態でした。外に出られたのは夜明け時と夕方の 2 回あるトイレの時だけで、人質向けの特別な食べ物なんかではなく、アフガニスタンの山々特有の食べ物でした。つまりほとんど食べるものがなく、いつも同じものだったのです。」彼の助手はそう続けた。

これは武装勢力グループに長期間拘束されていたジャーナリストが当時の様子を語った発話の一部であるが、2 つの[N1 + spécial + N2]の、特に[spécial + N2]の部分が(non) pas X mais Y という構文によって対比されている点が注目に値する。このように N1 の補部に当たる部分を対比させることは[N1 + à + N2]でも可能である（e.g. une cuillère non pas à café, mais bien à soupe： 小さじではなく大（さじ）の方）。ただし

spécial によって実現されている「特別な」あるいは「特有の」という語彙的意味をそれぞれの[N1 + spécial + N2]に見出せる点が[N1 + à + N2]との違いである。[N1 + spécial + N2]という構造を用いたからこそ、その「食事」が人質のために「特別に」用意された（わけではない）ことや、アフガニスタン山中で摂ったその「食事」の特殊さあるいは異質性を表すことができたのだと考えられる。

それとは対照的に、[N1 + à + N2]の[à + N2]で表されているものは、たしかに N1 が「目的」として定める対象ではあるものの、その結びつきは[spécial + N2]のそれと比べると弱い。例えば couteau à beurre (cf. 109a)はたしかに「バター用のナイフ」ではあるものの、バターを切って取り分けるのに特化したわけではなく、実際にはジャム(confiture)など、他の対象の取り分けの際にも用いられる余地がある。逆に言えばジャムを取り分ける時に、それに特化したナイフが存在している訳ではなく（もしあったならば、それは couteau spécial confiture と名付けられるであろう）、couteau à beurre とあらかじめ名付けられたナイフを使っているということになる。

これがなぜ couteau à confiture と名付けられなかったのかは、おそらくそのナイフのプロトタイプ的な使用対象が「ジャム」よりも「バター」だったからではないかと考えられよう。ひとたびその名付けが定着すると、その事物に対するそれ以外の名付け方(i.e. couteau à confiture)はブロッキングによって棄却されることになる。

その一方で、「バター用」というのはたしかにそのナイフのプロトタイプ的な性質を示してはいるものの、それ以外の用途におけるバターナイフの使用を積極的に制限するには至らない。この点は[spécial + N2]とは対照的である。例えば couteau spécial champignon はまさにきのこを切るために設計されたナイフであり、きのこ以外の物を切るという用途は基本的には想定されていない。

このように[N1 + spécial + N2]の[spécial + N2]は、[N1 + à + N2]における[à + N2]と同じく、N1 が「目的」とする対象を示す一方で、[à + N2]以上に「N1 限定の」、「N1 のためだけに用意された」といった、よりはっきりとした形で「目的」事物を指示しているのである。その特別的・排他的意味合いを実現しているのは、他ならぬ spécial の語彙的意味である。

これらを考慮すると、[N1 + spécial + N2]という構造においても、spécial は完全に文法化して語彙的な意味が漂白されたとまでは言えず、もともとの形容詞としての意味情報を未だに保持していると考えるのが適切であろう。したがって「固定された単位は文法的要素である」という Anscombre (2011)の語彙的マトリックスの想定（cf. 6.5.1 節）は、[N1 + spécial + N2]の場合には必ずしもそのまま当てはまる訳ではないと言える。むしろ CM が想定するように、[N1 + spécial + N2]という語形成モデルそのものがひとつの語彙的情報としてレキシコンに記載されていると考えた方が妥当ではないだろうか。(115)で示した形態部門のスキーマに意味部門を合わせて表記すると、全体として以下のような語形成モデルになるだろう。

(120) a. $[[x]_{Ni}\ [[[\text{spécial}]_{Aj}]_{P}\ [z]_{Nk}]_{PP}]_{Nl}$

$\leftrightarrow [\text{SEM}_i \text{ intended to SEM}_k \text{ as a SEM}_j \text{ target}]_l$

b. $[[\text{couteau}]_{Ni}\ [[[\text{spécial}]_{Aj}]_{P}\ [\text{champignon}]_{Nk}]_{PP}]_{Nl}$

Spécial が保持する語彙的意味は、このモデルの意味部門（右辺）に反映されていれば事足りる。一方で、その spécial が果たす文法的機能については左辺の形態部門に記載されればよい訳で、こうして語彙的意味と文法的機能の間の齟齬を回避しながら、当該構造の spécial の性質を説明することができるのである。

6.6. [N1 + N2], [N1 + AdjR]と[N1 + spécial + N2]：まとめ

ここまで[N1 + spécial + N2]およびそれに準ずる[spécial + N2]の生産的な形成について、[N1 + à + N2]との比較を通じて論じてきた。その結果、これらの構造は当初の見立てとは異なり、pause-café 型複合名詞とは異なる独自の語形成モデルを有し、それはむしろ[N1 + à + N2]に近い構造にあることが明らかになった。[N1 + spécial + N2]の spécial は、もとの語彙的意味を保持しながらも複合名詞のコネクターとして機能しており、文法形式上は[N1 + à + N2]や[N1 + de + N2]と同じく、コネクターを介して 2 つの構成素がつながるタイプの関係的複合名詞だと見なすことができる。

その一方で pause-café 型複合名詞や art culinaire のような[N1 + AdjR]については、同じ関係的複合名詞ながらも、こちらはコネクターを介さないで N1 と N2 が結びつく

タイプとして分類できる。このようにフランス語の関係的な複合名詞は、コネクターを含むものと含まないものの 2 つに大別できる。それをまとめると以下のような関係になる。

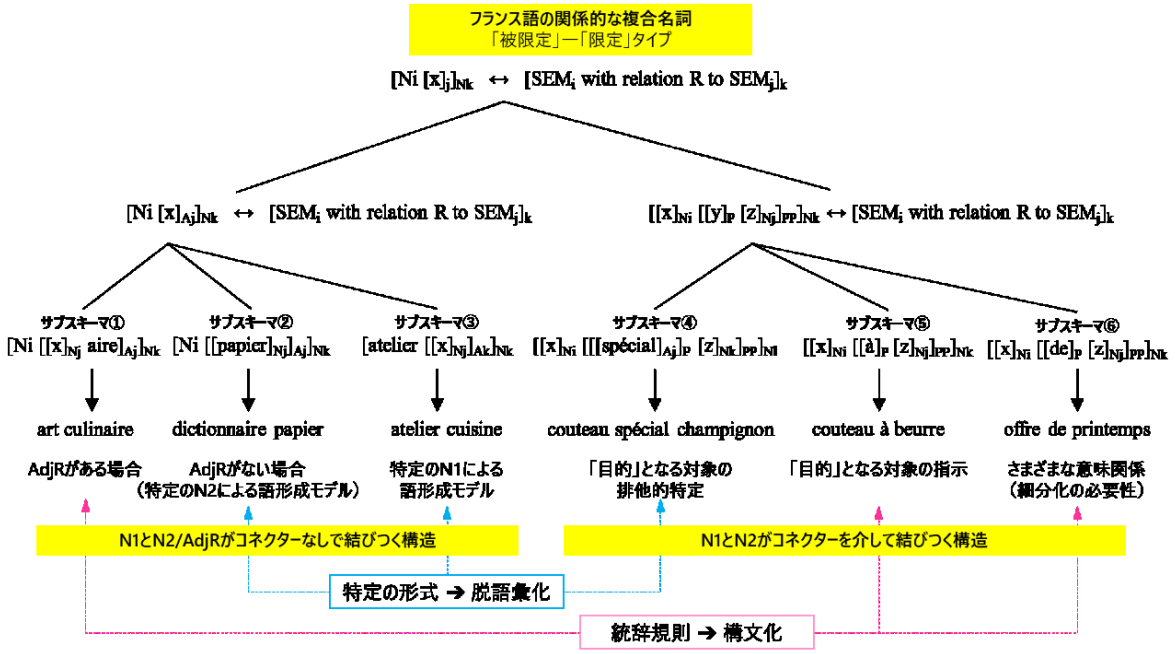


図 41： フランス語の関係的な複合名詞のスキーマとサブスキーマ

関係的な複合名詞（「被限定」-「限定」の語順をとるタイプ）を形成するうえでもっとも基本となるのは、図中最上に示したスキーマである。この時点では N1 の直後に入る要素の文法的機能は指定されていない[143]。

(121) $[\text{Ni } [x]_j]_{Nk} \quad \leftrightarrow \quad [\text{SEM}_i \text{ with relation R to SEM}_j]_k$

その下に 2 つのサブスキーマが想定される。1 つはコネクターなしのスキーマで、形式的には[N + A]の形を取っている。そしてその下に、それぞれの生産性に関する制約に応じて 3 つのサブスキーマ①～③が置かれる。この 3 つについては第 5 章で確認した。[N + A]型に対するもう一つのサブスキーマは、何らかのコネクターによって N1 と N2 が結ばれる構造のために想定される。この場合、形式的には[N + PP]の形を取ること

143 実際にはこれに対を成すように、「限定」ー「被限定」タイプの関係的な複合名詞のスキーマも想定される。具体的には cardiologie のような新古典的複合語、擬似接頭辞を伴う vélotourisme（サイクルツーリズム）のような構造、brochettes party のような英語法に基づく構造などがそれぞれこの下にサブスキーマを展開するものと考えられる。これら「限定」ー「被限定」構造に関するより詳細な検討は今後の課題としたい。

になる。その下にはサブスキーマ④～⑥が配置され、それぞれで構築される意味関係に基づきながら生産性を実現していることになる。

また、これらサブスキーマは統辞と語彙の両側からの動きによってもたらされている。そのどちら側に由来するかは、コネクターを含むか含まないかという問題とは直接は関係がない。サブスキーマ①、⑤、⑥の 3 つは統辞規則をベースとしながら、構成素組み合わせ可能性に一定程度の制限を受ける形で構文化したことでもたらされた。一方でサブスキーマ②、③、④の 3 つは、それぞれに対応する特定の形式をベースとして、そこから脱語彙化することで得られた語形成モデルである。

なお[N1 + de + N2]を形成するサブスキーマ⑥の実際の構造（特にその意味部門の記載のされ方）については、実際に観察される[N1 + de + N2]の意味的な観点に立脚した細分類などを通して、さらに詳細に検討される必要がある。これについては稿を改めて論じることとしたい。

結論

本稿では Booij (2010)の提唱する Construction Morphology の理論に基づき、現代フランス語における pause-café 型複合名詞、およびコネクターとしての spécial を介した[N1 + spécial + N2]それぞれの生産性がどのような仕組みで実現しているか考察した。その中で、形式的には現代フランス語の統辞構造に対応しないにもかかわらず高い生産性を実現する仕組みとして、語彙情報の一種としての語形成モデルの想定可能性を提案した。またこの考察に並行するかたちで、フランス語における語彙と統辞の間の連続体関係、そして両者間で見られる動的な変化の実態についても検討した。そして、語彙と統辞は直線上の両端に位置するものではなく、生産性という別の変数も絡めた 2 次元的な関係の中で位置づけられるべきだということを主張した。

第 1 章では複合名詞の定義について、自由連辞や凝結構造、さらには成句やかばん語といった、複合名詞を取り巻くさまざまな規模の言語学的単位との比較検討を通して論じた。また、対象の規模に関係なくさまざまなサイズの単位が語彙化したり、生産性を発揮したりすることに着目し、語彙と統辞の連続体に、さらに生産性という指標を取り入れる試みを行ったほか、通時的変化に関しても言及した。

続く第 2 章ではそれを受け、統辞部門に対する語彙部門をどのように位置づけるべきかを、生産性との関連で論じた。その中で、語彙により動的な性質を見出す語彙素ベースの形態論の有効性について検討したうえで、その流れを組む Booij (2010)の Construction Morphology (CM)の理論に着目した。そして英語やオランダ語において、それぞれの統辞規則から逸脱した構造の生産性が CM においてそのように説明されているか、スキーマの概念と適用方法についての確認を通して考察した。そしてこの概念をフランス語の[multi + N/A]構造や[Tu es belle comme X]のような成句にも応用してみたところ、フランス語の語形成プロセスにおいても CM の考え方が十分に適用可能であることが示された。さらに、スキーマ化と成句度の関係性についても検討し、スキーマ化

の高まりと成句度の低下が連動した「レ」の字型モデルを提案した。その上で、この「レ」の字型モデルの中に構文化、成句化および語彙化、脱語彙化の各現象が見せる動きを落とし込み、「語彙―統辞」・「生産性」の二次元的連続体における動的な変化の流れを説明した。

このような理論的枠組みを基に、第 3 章では pause-café 型複合名詞がフランス語の[N1 + N2]型構造の中でどのような位置づけにあるのか、特に属詞的な性質の N2 と関係的な N2 との対比に着目しながら検討した。その結果 pause-café 型複合名詞は関係的な複合名詞であることを確認した。さらにこの関係的な複合名詞と省略的な連辞との比較を通して、複合名詞は「名付け」と「説明」の機能を両方持ち合わせているのに対し、parking cars 200m のような省略的な連辞は「説明」の機能のみを有しているという違いがあることが分かった。それを踏まえて両者は明確に区別される必要があることを主張した。また pause-café 型の生産性については、構成素のどちらか片方が事前に指定された語形成モデルのあり方が示唆された。

第 4 章では構成素の片側が指定された語形成モデルの有効性と、その具体的な現れ方を検討するため、筆者が収集した 1,083 種類の pause-café 型の実例データを、主に構成素組み合わせの可能性という観点から分析した。その結果「N1 名詞」の種類と生産性（タイプ頻度）の関係には大きな偏りが見られ、[espace + N2]や[pause + N2], [assurance + N2]など、特定の「N1 名詞」を伴った場合にのみ高い生産性が実現していること、またその中でも特に espace, rayon, coin, accès, pôle などの、場所に関する「不完全指定の名詞」(noms sous-spécifiés)が多く関わっていたことが明らかになった。また、これら「不完全指定の名詞」には空間の単位を名付ける機能があり、それによって、単独ではカテゴリーの観点での結びつきが希薄な N2 同士を同一の下位概念ネットワークに組み込むことが可能になるということを、収集された実例のテクストを分析しながら論じた。さらに、N2 との意味関係については、収集された実例の分析の結果、大きく「目的」と「所属」の 2 つの意味関係があることが確認された。

主に N1 の方に着目した第 4 章とは逆に、第 5 章では pause-café 型複合名詞の N2 の性質と生産性について議論した。「N2 名詞」の生産性については、実例調査の結

果「N1 名詞」に見られたほどの偏りは見られなかった一方、enfant や étudiant など、人の一集団を示す N2 が比較的さまざまな名詞を N1 として迎える傾向にあることが分かった。N2 の性質については、AdjR との機能的類似性が示唆されることに着目し、両者の対応関係がどのようになっているかを分析した。その結果、そもそも対応する AdjR が存在しないケースが全体の 78％にも及んだことが分かったほか、たとえ形式上は競合が予期されても、実際には AdjR が属性叙述的であったり、関係的な読みが実現する組み合わせが限られていたりなど、実際には競合せずに N2 と AdjR の棲み分けが成されていることも多いことが示唆された。そして競合が認められる atelier cuisine と atelier culinaire のような対立においては、[atelier + N2]のような N1 固定の語形成モデルによる生産的な形成が、結果的に 2 つの形式の競合を招いたという可能性が指摘された。そして、このような複数の異なる語形成モデルによって関係的な複合名詞が形成されていることを、スキーマとサブスキーマの関係として説明した。

最後の第 6 章では、pause-café 型の一変種のように見える[N1 + spécial + N2]について注目し、特に spécial が果たしている文法的機能を、収集した 299 件の実例の分析を交えながら検討した。その結果、この spécial が他の品質形容詞とは異なる振る舞いを見せる点、当該位置の spécial を他の形容詞に置き換えることが困難な点、N1 への性数一致が必ずしも行われていない点などから、spécial が[N1 + à + N2]における à のような、複合名詞のコネクターとして機能している可能性が浮き彫りになった。また[N1 + spécial + N2]の生産性に関しては、[N1 + à + N2]と同じように N1、N2 両方のスロットが未指定であることから、実際には意味的な制約をある程度受けるものの、基本的にはあらゆる組み合わせ可能性が見込まれることを指摘し、またそうした傾向からも、[N1 + spécial + N2]を（もともとコネクターを介さない）pause-café 型複合名詞とは異なるタイプとして、むしろ[N1 + à + N2]に類似した構造として捉える方が妥当であるという見解を示した。そして、この spécial が形式的にはコネクターとして機能する一方で、「特別な」というもともとの語彙的意味を保持している点にも言及し、この文法機能と保持された語彙的意味の間のずれを説明するうえでも、CM で提案されているスキーマの概念が有効であることを示した。そして最後に総括として、現代フランス語の関係的な複合名詞を実現さ

せるスキーマとして、コネクターを介さない 3 つのサブスキーマと、コネクターを介する別の 3 つのサブスキーマが存在していることを提示した。

1980 年代から 90 年代にかけて盛んに行われたフランス語の複合名詞研究だが、それ以来は統辞論や新しい諸分野の研究に比べると下火がちに推移してきた印象がある。しかしながら言語は常に変化しており、常に新しい語彙的単位がさまざまな語形成プロセスを通じて作られるだけでなく、dictionnaire électrique（電子辞書）という事物の出現が dictionnaire papier（紙の辞書）という下位概念の成立を有効にしたという例が如実に示すように、既存の語彙体系も新語や新事物との関係の中で常に改変の波にさらされている。そのような状況の中、語彙自体を刻々と記録、記述していくことは、言語の変化を追う上で不可欠な活動であり、同様に語彙に関する研究も、その変化に応じて常にアップデートする必要がある。

事実、本稿で筆者が収集した実例データは、他の複合語研究のデータと比べると比較的新しいものとはいえ、最も初期に収集した例は 2010 年頃と、すでに 10 年近くが経過しようとしている（当時はスマートフォンが出始めてまだ間もない頃であった上、SNS も普及途上であった）。本研究が「最新の」データに基づく研究でなくなるのは時間の問題で、その頃にはまた新たな実例を集めて研究に取り組む必要があるだろう。その一方で、本研究は 2010 年代の始めから後半の数年間という特定の時代に見られた複合名詞を記録・記述したという点は今後も変わらず、本研究の独自性と研究的価値は、今後そういった点に求められていくものと思われる。

今後の pause-café 型のような特定の複合名詞の研究においてぜひとも改善が望まれるのは、実例収集の効率化である。特にこの pause-café のように、表面上の形式（i.e. 名詞+名詞）と実際の文法的役割の間にずれが見られる場合には、品詞タグに頼った調査が難しい。また、どのような構成素組み合わせがどれくらいあるのか、特に生産性については先行研究における記述も限られている。結局のところ、自力で新聞の端から端まで目を通したり（それでも 1 件も見つからないこともある）、日々の生活の中でたまたま遭遇した実例を逐一記録するなど、コーパスの整備が比較的進んでいる言語の研究方法にしては、いささか原始的だと言わざるを得ない研究方法にもっぱら頼ることにな

ってしまう。したがってもう少し効率的かつ体系的に研究対象の収集ができるような技術的な革新が、今後の語彙研究の継続および発展のためにも待たれるところである。

そして純粋に研究における課題としては、本稿で一部のみしか扱えなかったタイプの語形成—特に[N1 + de + N2]や擬似接頭辞を伴った複合名詞の形成など—についても、いま現在見られる実例を収集した上で、どのようなスキーマの構造をしているのか、そしてそれらが pause-café 型などの他の複合名詞形成モデルとどのような関係にあるのかをひとつずつ明らかにしていき、最終的にはフランス語のあらゆる語形成プロセスを包括的に説明できることが望ましい。またその過程で、本稿で拠りどころとした CM の理論がどこまで有効なのか、理論はどのようにアップデートされるべきなのかといった点についても、引き続き検証する必要がある。

参考文献

Amiot, D. (2004) « Préfixes ou prépositions ? Le cas de *sur(-)*, *sans(-)*, *contre(-)* et les autres », *La formation des mots : horizons actuels*, Villeneuve d'Ascq : Presses Universitaires du Septentrion.

——— (2005) « Between compounding and derivation : Elements of word-formation corresponding to prepositions », *Morphology and its demarcations : selected papers from the 11th Morphology meeting*, Vienna, February 2004, Dressler, W., Katovsky, D., Pfeiffer, O. & Rainer, F. (éds.), Amsterdam : John Benjamins, pp.183-195.

Anscombre, J.-C. (1990) « Pourquoi un moulin à vent n'est pas un ventilateur », *Langue française*, 86, pp. 103-125.

——— (1991) « La détermination zéro : quelques propriétés », *Langages*, 102, pp. 103-124.

——— (2010) « Figement, idiomaticité et matrices lexicales », *Le figement linguistique : la parole entravée*, Anscombre, J.-C. & Mejri, S. (éds.), Paris : Honoré Champion, pp. 17-40.

Arnaud, P.J.L. (2003) *Les Composés* Timbre-poste, Lyon, Presses Universitaires de Lyon.

——— (2004) *Le Nom Composé Données sur Seize Langues*, Lyon, Presses Universitaires de Lyon.

——— (2015) "Noun-noun compounds in French", Müller, P.O., Ohnheiser, I., Olsen, S. & Rainer, F. (eds.), Word-Formation : An International Handbook of the Languages of Europe, Volume 1, Article 38, Berlin / Boston : Walter de Gruyter, pp. 673-687.

——— (2016a) "Categorizing the modification relations in French relational subordinative $[NN]_N$ compounds", *The Semantics of Compounding*, Ten Hacken, P. (ed.), Cambridge : Cambridge University Press, pp. 71-93.

——— (2016b) « L'analogie dans la dénomination binominale des concepts combinatoire en français », *Language Design* Special Issue, pp. 93-108.

Aronoff, M. (1976) *Word Formation in Generative Grammar*, Cambridge : MIT Press.

——— (2000) "36. Morphology between lexicon and grammar", *Morphology : An International*

Handbook on Inflection and Word-Formation, Booij, G., Lehmann, C., Mugdan, J. & Skopeteas, S. (eds.), Berlin / New York : Walter de Gruyter, pp. 344-349.

——— (2007) "In the beginning was the word", *Language*, 83-4, pp.803-830.

Aronoff, M. & Fudeman, K. (2005) *What is morphology ?*, Malden / Oxford : Blackwell.

Avanzi, M. (2017) *Atlas du français de nos régions*, Malakoff : Armand Colin.

Bally, C. (1965) *Linguistique générale et linguistique française*, 4ème edition, Berne : A. Francke AG Verlag.

Barbéris, J.-M. (1997) « « Rue X » : La grammaticalisation à l'œuvre dans la parole », *Faits de langues*, 9, Mars 1997, pp.165-174.

Bartning, I. (1980) *Remarques sur la syntaxe et la sémantique des pseudo-adjectifs dénominaux en français*, Stockholm : Almqvist & Wiksell International.

——— (1984) « Aspects syntaxiques et sémantiques des adjectifs ethniques en français », *Revue Romane*, 19-2, pp.177-216.

——— (1996) « Éléments pour une typologie des SN complexes en *de* en français », *Langue française*, 109, pp.29-43.

Bartning, I. & Noailly, M. (1993) « Du relationnel au qualificatif : flux et reflux », *L'Information Grammaticale*, 58, pp.27-32.

Baudouin de Courtenay, J. (1972) "An attempt at a theory of phonetic alternations", English translation by Edward Stankiewicz [original in German : 1885], *A Baudouin de Courtenay Anthology*, Stankiewicz, E. (ed.), Bloomington : Indiana University Press, pp.144-212.

Bauer, L. (1983) *English Word-formation*, Cambridge : Cambridge University Press.

——— (1998) "Is there a class of neoclassical compounds and if so is it productive ?", *Linguistics*, 36-3 (355), pp. 403-422.

——— (2001) *Morphological Productivity*, Cambridge : Cambridge University Press.

——— (2000a) "26. Word", *Morphology : An International Handbook on Inflection and Word-Formation*, Booij, G., Lehmann, C., Mugdan, J. & Skopeteas, S. (eds.), Berlin / New York : Walter de Gruyter, pp. 247-257.

——— (2000b) "80. System vs. norm : coinage and institutionalization", *Morphology : An*

International Handbook on Inflection and Word-Formation, Booij, G., Lehmann, C., Mugdan, J. & Skopeteas, S. (eds.), pp. 832-840.

——— (2003) *Introducing Linguistic Morphology*, 2nd edition, Washington DC : Georgetown University Press.

——— (2009) "Typology of Compounds", *The Oxford Handbook of Compounding*, Lieber, R. & Štekauer, P. (eds.), New York : Oxford University Press, pp.343-356.

Beciri, H. (1997) « Dérivés, composés… A propos des affixes », *Cahier du CIEL*, 1996-1997, pp.49-72.

Beck, J. (2000) "When Dictionaries Disagree : Notes on Neologisms and Linguistic Method", *The French Review*, 73-3, pp.498-510.

Benveniste, E. (1974) « Fondements syntaxiques de la composition nominale », *Problèmes de linguistique générale II*, Paris, Gallimard. pp.145-162.

——— (1974) « Formes nouvelles de la composition nominale », *Problèmes de linguistique générale II*, Paris, Gallimard. pp.163-176.

Blanche-Benveniste, C. (2000) *Approches de la langue parlée en français*, Paris : Ophrys.

——— (2010) « Les pseudo-clivées et l'effet deux points », Marie-José Béguelin, Mathieu Avanzi et Gilles Corminboeuf (éds.), *La parataxe*, tome II, Berne : Peter Lang, 185-218.

Blanco, X. (2002) « Les déterminants figés », *Langages*, 145, pp.61-81.

Bloomfield, L. (1933) *Language*, New York : Holt.

Bonami,O., Boyé, G. & Kerleroux, F. (2009) « L'allomorphie radicale et la relation flexion-construction », *Aperçus de morphologie du français*, Bernard Fradin, Françoise Kerleroux et Marc Plénat (sous la direction de), Saint-Denis : Presses Universitaires de Vincennes, pp.103-125.

Booij, G. (2008a) « Composition et morphologie des constructions », *La composition dans une perspective typologique*, Amiot, D. (éd.), Arras : Artois Presses Université, pp. 49-74.

——— (2008b) "Paradigmatic morphology", *La raison morphologique : hommage à la mémoire de Danielle Corbin*, Amsterdam / Philadelphia : John Benjamins, pp. 29-37.

——— (2009) "Compounding and construction morphology", *The Oxford Handbook of*

Compounding, Lieber, R. & Štekauer, P. (eds.), New York : Oxford University Press, pp.201-216.

——— (2010) *Construction Morphology*, Oxford : Oxford University Press.

——— (2013) "Morphology in Construction Grammar", *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, Hoffmann, T. & Trousdale, G. (eds.), New York : Oxford University Press, pp.255-273.

Bosredon, B. (1988) « Un adjectif de trop : l'adjectif de relation », *L'information grammaticale*, 37-1, pp.3-7.

——— (2011) « Dénominations monoréférentielles, figement et signalétique », *Le figement linguistique : la parole entravée*, Anscombre, J.-C. & Mejri, S. (éds.), Paris : Honoré Champion, pp. 155-169.

——— (2012) « Entre dénomination et catégorisation : la signalétique », *Langue française*, 174, pp. 11-26.

Bosredon, B. & Tamba, I. (1991) « *Verre à pied, moule à gaufres* : préposition et noms composés de sous-classe », *Langue Française*, 91, pp.40-65.

Buvet, P.-A. (1993) *Les déterminants nominaux quantifieurs*, Thèse de doctorat, LLI – Université Paris XIII : Villetaneuse.

——— (1994) « Déterminants : les noms », *Langvisticæ investigationes*, 18-1, pp. 121-150.

Chauveau-Thoumelin, P. (2016) « De l'exemplification à la catégorisation approximative : étude de la construction [[X]$_{SN}$ genre [Y]$_{SN}$] », *Actes du Congrès Mondial de Linguistique Française – CMLF 2016*, 16p. DOI : 10.1051/shsconf/20162712005.

Cheminée, P.(1999) « Statut lexical, statut lexicographique : le nom composé dans le dictionnaire », *LINX*, 40, pp.187-217.

Corbin, D. (1987) *Morphologie dérivationnelle et structuration du lexique*, Thèse de doctorat d'État soutenue à l'Université de Paris VIII - Saint-Denis le 7 janvier 1987, 2 vol. Tübingen : Max Niemeyer Verlag.

——— (1991) "Introduction : La formation des mots, structures et interprétations", *Lexique*, 10, pp. 7-30.

——— (2004) “121. Français (Indo-européen : Roman)”, *Morphology : An International Handbook on Inflection and Word-Formation*, Booij, G., Lehmann, C., Mugdan, J. & Skopeteas, S. (eds.), Berlin / New York : Walter de Gruyter, pp. 1285-1299.

Dal, G. & Amiot, D. (2008) « Composition néoclassique en français et ordre des constituants », Dany Amiot (éd.), *La composition dans une perspective typologique*, Arras : Artois Presses Université, pp. 89-113.

Dal, G. & Namer, F. (2016) « À propos des occasionalismes », *Actes du Congrès Mondial de Linguistique Française – CMLF 2016*, 18p. DOI : 10.1051/shsconf/20162708002.

Danon-Boileau, L. & Morel, M-.A. (1997) « *Question*, *point de vue*, *genre*, *style*... : les noms prépositionnels en français contemporain », *Faits de langues*, 9, mars 1997, pp.193-200.

Darmesteter, A. (1874) *Traité de la formation des mots composés dans la langue française comparée aux autres langues romanes et au latin*, [1967] Paris : Librairie A. Franck.

David, S. (1993) « Remarques à propos du mode de construction des unités de forme NN », *T.A.L. (Traitement Automatique des Langues)*, 2, pp. 59-74.

Delaplace, D. (1999) « *Parano, perpèt(t)e, polar(d), redingue* et *situasse* ou comment l’apocope parvient à certaines de ses fins… », *Silexicales*, 2, publication de l’UMR 8528 du CNRS (SILEX) – Université de Lille III, pp.49-58.

Dugas, A. (1992) « Le préfixe *auto-* », *Langue française*, 96, pp. 20-29.

Feigenbaum, S. (1997) « Le mot composé [SANS + SN] : ses rapports syntaxiques, sémantiques et morphologiques», *Traveaux de linguistique*, 34, pp.21-47.

Fradin, B. (2003) *Nouvelles approaches en morphologie*, Paris : PUF.

——— (2008) « Les adjectifs relationnels et la morphologie », *La raison morphologique : hommage à la mémoire de Danielle Corbin*, Amsterdam / Philadelphia : John Benjamins, pp. 69-91.

——— (2009) “IE, Romance : French”, Lieber, R. & Štekauer, P. (eds.), *The oxford Handbook of Compounding*, New York : Oxford University Press, pp.417-435.

Fradin, B., Montermini, F. & Plénat, M. (2009) « Morphologie grammaticale et extragrammaticale », *Aperçus de morphologie du français*, Bernard Fradin, Françoise

Kerleroux et Marc Plénat (sous la direction de), Saint-Denis : Presses Universitaires de Vincennes, pp.21-45.

Fujimura, I., Nakao, H. (2005) « Les “noms composes” et le choix de l’article indéfini *de* et *des* en français », *Cahiers de l’Institut de Linguistique de Louvain*, 31/2-4, Louvain-la-Neuve, pp.27-44.

Giurescu, A. (1975) *Les Mots Composés dans les Langues Romanes*, La Haye, Mouton.

Gleßgen, M.-D. (2009) « 237. Histoire interne du français (Europe) : lexique et formation des mots », G. Ernst, M. Glessgen, C. Schmitt et W. Schweickard (dir.), *Romanische Sprachgeschichte – Histoire linguistique de la Romania*, tome 3, Berlin / New York : Walter de Gruyter, pp.2947-2974.

van Goethem, K. (2012) « Le statut des séquences “*N+N* à *N2* productif” : le cas de *N-clé* », *Lingvisticae Investigationes*, 35 :1, pp. 76-93.

Goldberg, A. (2006) *Construction at Work*, Oxford : Oxford University Press.

——— (2009) “The nature of generalization in language”, *Cognitive Linguistics*, pp.93-127.

——— (2013) “Constructionist Approaches”, *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, Hoffmann, T. & Trousdale, G. (eds.), New York : Oxford University Press, pp.15-31.

Gross, G. (1988) « Degré de Figement des Noms Composés », *Langages*, 90, pp.57-72.

——— (1990a) « Définition des noms composés dans un lexique-grammaire», *Langue française*, 87, Paris, Larousse, pp.84-90.

——— (1990b) « Les mots composés», *Modèle Linguistiques*, 12, Presses de l’Université de Lille III, pp.47-63.

——— (1996) *Les expressions figées en français*, Paris : Ophrys.

Groud, C. & Serna, N. (1996) *Regards sur la troncation en français contemporain*, Paris : Didier Érudition.

Guilbert, L. (1971) «Fondements Lexicologiques du Dictionnaire», *Grand Larousse de la Langue Française.* Paris : Larousse, pp.IX-LXXXI.

——— (1975) *La Créativité Lexicale.* Paris, Larousse.

ten Hacken, P. (2000) “37. Derivation and compounding”, *Morphology : An International Handbook*

on Inflection and Word-Formation, Booij, G., Lehmann, C., Mugdan, J. & Skopeteas, S. (eds.), Berlin / New York : Walter de Gruyter, pp. 349-360.

ten Hacken, P. & Smyk, D. (2003) « Le rôle de l'analogie et des règles dans la formation des mots », *Morphosyntaxe du lexique*, vol.2, Gilles Col & Jean-Paul Régis (sous la diréction de), Rennes : Presses universitaires de Rennes, pp.11-26.

Herslund, M. (1980) *Problèmes de syntaxe de l'ancien français : compléments datifs et génitifs*, Copenhague: Akademisk Forlag.

Jackendoff, R. (2002) *Foundations of Language*, Oxford / New York : Oxford University Press.

Kavka, S. (2009) « Compounding and idiomatology », Lieber, R. & Štekauer, P. (eds.), *The oxford Handbook of Compounding*, New York : Oxford University Press, pp.19-33.

Kerleroux, F. (1999) « Sur quelles bases opère l'apocope ? », *Silexicales*, 2, publication de l'UMR 8528 du CNRS (SILEX) – Université de Lille III, pp.95-106.

Kleiber, G. (1981) *Problèmes de référence: description définie et noms propres*. Paris : Klincksieck.

———(1996) « Noms propres et noms communs : un problème de dénomination », *Meta*, XLI, 4, pp.567-589.

———(2000) « Sur le sens des proverbes », *Langages*, 139, pp.39-58.

———(2016) « Déterminants et noms de propriétés », Gautier, A., Havu, E. & Raemdonck, D. (dir.) *DéterminationS*, Bruxelles : Peter Lang, pp.127-143.

Koefoed, G. & van Marle, J. (2000) "33. Productivity", *Morphology : An International Handbook on Inflection and Word-Formation*, Booij, G., Lehmann, C., Mugdan, J. & Skopeteas, S. (eds.), pp. 303-311.

Koga, K. (2014) "Formation productive des composés du type *pause-café*", *Études de Langue et Littérature Françaises*, 104, 日本フランス語フランス文学会, pp.53-68.

———(2018) « Un *espace papeterie* n'est-il pas une (simple) papeterie ? : composition binominale sous-catégorisante », *Actes du Congrès Mondial de Linguistique Française – CMLF 2018*, 16p.

DOI : https://doi.org/10.1051/shsconf/20184608004 Publié le 9 juillet 2018.

Krott, A. (2009) "The role of analogy for compound words", *Analogy in Grammar : form and*

acquisition, Blevins, J. P. & Blevins, J. (eds.), Oxford / New York : Oxford University Press, pp. 118-136

Kupferman, L. (1996) « Un bien grand mot : de. de la préposition au mode de quantification. Présentation », Langue Française, 109, pp.3-8.

Lauwers, P (2012) "*Le prix est (de) 15 euros* : on copular constructions expressing quantification in French", *Constructions in French*, Bouveret, M. & Legallois, D. (eds.), Amsterdam / Philadelphia : John Benjamins, pp.233-256.

Leeman, D. (2004) *Les déterminants du nom en français : syntaxe et sémantique*, Paris : PUF.

Legallois, D. (2006) « Quand le texte signale sa structure : la fonction textuelle des noms sous-spécifiés », *Corela*, HS-5, mis en ligne le 27 octobre 2006, consulté le 16 octobre 2015.

Lehmann, A. & Martin-Berthet, F. (1998) *Introduction à la lexicologie : sémantique et morphologie*, 3ème edition [2010], Paris : Armand Colin.

Lerat, P. (1994) « Composé syntagmatique, dénomination, terminologie », *Cahiers de lexicologie*, 65, 2, pp.151-158.

Lieber, R. & Štekauer, P. (2009) "Introduction : status and definition of compounding", *The Oxford Handbook of Compounding*, Lieber, R. & Štekauer, P. (eds.), New York : Oxford University Press, pp.3-18.

Loock, R. (2012) "The emergence of Noun + Noun constructions with a regressive order in contemporary French ? ", *Journal of French Language Studies*, FirstView Article, September 2012, pp. 1-21.

Magri V. & Purnelle G. (2012) « *Mot à mot*, *brin par brin* : les suites [Nom préposition Nom] comme motifs », *JADT 2012 - Actes des 11èmes Journées internationales d'Analyse statistique des Données Textuelles*, pp.659-673.

Marchello-Nizia, C. (2009) « 236. Histoire interne du français : morphosyntaxe et syntaxe », G. Ernst, M. Glessgen, C. Schmitt et W. Schweickard (dir.), *Romanische Sprachgeschichte – Histoire linguistique de la Romania*, tome 3, Berlin / New York : Walter de Gruyter, pp.2926-2947.

Markussen, M. (2016) *La construction Nom + de + Nom en français contemporain : essai d'une*

approche cognitive, Caen : Presses universitaires de Caen.

Martinet, A. (1960) *Éléments de linguistique générale*, 4ème éd. [1996], Paris : A. Colin.

——— (1967) « Syntagme et synthème », *La linguistique*, 2, pp.1-14.

——— (1979) *Grammaire Fonctionnelle du Français*, Paris : Didier.

——— (1985) *Syntaxe générale*, Paris : Armand Colin.

——— (2000) « Le synthème », *Linguistique*, 35/2, pp.11-16.

Mathieu-Colas, M. (1988) « Typologie des noms composés », Rapport de recherches, 7, Laboratoire de linguistique informatique, Université Paris XIII, Villetaneuse.

———(1994) *Les Mots à trait d'union, problèmes de lexicologie informatique*, Paris : Didier, « Érudition ».

——— (1995) « Syntaxe du trait d'union : structures complexes », *Lingvisticae investigationes*, 19/1, pp.153-171.

——— (1996) « Essai de typologie des noms composés en français », *Cahiers de lexicologie*, 69, pp.65-118.

Matthews, P.H. (1991) *Morphology*, 2nd edition [1974], Cambridge : Cambridge University Press.

Mejri, S. (1997) *Le figement lexical*, Tunis : Publications de la faculté des lettres de la Manouba

——— (2000) « Figement et renouvellement du lexique : quand le processus détermine la dynamique du système », *Le français moderne*, 68/1, pp.41-62.

——— (2001) « La structuration sémantique des énoncés proverbiaux », *L'information grammaticale*, 88, pp.10-15.

——— (2005) « Figement, néologie et renouvellement du lexique », *LINX*, 52, pp.163-174.

Mélis-Puchulu, A. (1991) « Les adjectifs dénominaux : des adjectifs de "relation" », *Lexique*, 10, pp. 33-60.

Monceaux, A. (1992) « Un exemple de formation productive de composés de structure nom adjectif », *Langue française*, 96, pp.74-87.

Nylop, C. (1930) *Grammaire historique de la langue française*, Genève, Slatkine.

Nakao, K (2003) « Une réflexion sur la construction 'nom + nom' » *Étude de langue et littérature françaises*, 82, 日本フランス語フランス文学会, pp.220-230.

Nicoladis, E. (2002) « When is a preposition a linking element ? : bilingual children's acquisition of French compound nouns », *Folia linguistica : acta Societalis Linguisticae Europaeae*, 36/1-2, Berlin, pp45-63.

Noailly, M. (1990) *Le substantif épithète*, Paris, PUF.

——— (1999) *L'adjectif en français*, Paris : Ophrys.

——— (2000) « Apposition, coordination, reformulation dans les suites de deux GN juxtaposés », *Langue française*, 125, pp.46-59.

Noailly-Le Bihan, M. (1982) « Côté, Question et quelques autres », Lingvisticae Investigationes, 6-2, Amsterdam : John Benjamins B.V., pp.333-343.

Norde, M. (2009) *Degrammaticalization*, Oxford : Oxford University Press.

Nyrop, K. (1899) Grammaire historique de la langue française, 6 vols., Copenhagen : Gyldendalske Boghandel Nordisk Forlag. ([2011], 4ème édition revue, Genève : Slatkine Reprints)

Olsen, S. (2000) "87. Composition", *Morphology : An International Handbook on Inflection and Word-Formation*, Booij, G., Lehmann, C., Mugdan, J. & Skopeteas, S. (eds.), Berlin / New York : Walter de Gruyter, pp. 897-916.

——— (2001) « Copulative compounds: a closer look at the boundary between morphology and syntax », *Yearbook of Morphology 2000*, Dordrecht, pp. 279-320.

Petit, G. (2012) « Pour un réexamen de la notion de dénomination », *Langue française*, 174, pp. 27-44.

Péroz, P. (2002) « Le mot *clé* : variations sémantiques et régularité des fonctionnements », *Langue française*, 133, pp.42-53.

Picabia, L. (2000) « Appositions nominales et déterminant zéro », *Langue française,* 125, pp.71-89.

Picone, M. D. (1991) « L'impulsion synthétique : le français poussé vers la synthèse par la technologie moderne », *Le Français Moderne*, 59-2, pp.148-163.

——— (1992) « Compound word formation in French », *Theoretical Analyses in Romance Linguistics*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins. pp. 181-195.

——— (1996) *Anglicisms, Neologisms and Dynamic French*, Amsterdam / Philadelphia : John

Benjamins.

Pinchon, J. (1980) « Syntagme prépositionnel et adjectif de relation », *Cahiers de lexicologie*, 37, pp. 91-100.

Polguère, A. (2011) « Figement et ellipse dans une perspective lexicographique : le cas de *dé à jouer* et *dé à coudre* », *Le figement linguistique : la parole entravée*, Anscombre, J.-C. & Mejri, S. (éds.), Paris : Honoré Champion, pp. 363-373.

Pollard, C., & Sag, I. (1994) *Head-Driven Phrase Structure Grammar*, Chicago : University of Chicago Press.

Rosier, L. (2002) « *Genre* : le nuancier de sa grammaticalisation », Travaux de linguistique, 44, pp.79-88.

Sablayrolles, J.F. (2000) *La Néologie en Français Contemporain*, Paris : Champion.

Scalise, S. & Bisetto, A. (2009) "The classification of compounds", Lieber, R. & Štekauer, P. (eds.), *The oxford Handbook of Compounding*, New York : Oxford University Press, pp.34-53.

Tamba-Mecz, I. (1980) « Sur quelques propriétés de l'adjectif de relation », *Travaux de linguistique et de littérature*, XVIII, 1, pp. 119-132.

Takada, H. (2004) *Étude contrastive de certains types de mots composés japonais et français*, Thèse de doctorat d'État soutenue à l'Université Paris 13, Lille : Atelier national de reproduction des thèses.

Tsuruga, Y. (2007) « Le classement combinatoire et fonctionnel des emplois de la préposition *de* en français contemporain », *Area and Culture Studies*（東京外国語大学論集）, Tokyo University of Foreign Studies, 75, 1-25.

Villoing, F. (2003) « Les mots composés VN du français : arguments en faveur d'une construction morphologique », *Cahiers de grammaire*, 28, pp. 183-196.

——— (2008) « La composition VN du français a-t-elle un correspondant en anglais ? : similitudes et différences entre la composition VN du français et NN de l'anglais », *La composition dans une perspective typologique*, Amiot, D. (éd.), Arras : Artois Presses Université, pp. 211-235.

——— (2009) « Les mots composés VN », *Aperçus de morphologie du français*, Bernard Fradin,

Françoise Kerleroux et Marc Plénat (sous la direction de), Saint-Denis : Presses Universitaires de Vincennes, pp.175-197.

——— (2012) “French Compounds”, *Probus*, 24, pp.29-60.

Wagner, R.-L.(1968) « Réflections à propos des mots construits en français contemporain», *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*, 63, pp.65-82.

Wulff, S. (2013) “Words and Idioms”, *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, Hoffmann, T. & Trousdale, G. (eds.), New York : Oxford University Press, pp.274-289.

Yaguello, M. (1998) « Genre, une particule d’un genre nouveau », *Petits faits de langue*, Paris : Le Seuil, pp.18-24.

Zwanenburg, W. (1992) « Morphological heads, French « compounding » and Germanic « prefixation » », *Theoretical Analyses in Romance Linguistics.* Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins. pp. 167-179.

市川智子（1985）「連辞と合成基」，フランス語学の諸問題』，三修社，pp. 139-148.

古賀健太郎 (2010)「Pause-café の pause-について: 接辞付加に近似した複合語形成」,『ふらんぼー』，No.36，東京外国語大学フランス語研究室, pp.73-87.

——— (2012)「生産的な名詞複合に関する辞書記載の現状について」,『ふらんぼー』No.38，東京外国語大学フランス語研究室, pp.73-90.

——— (2013)「関係形容詞の欠如を補完する名詞について」,『ふらんぼー』No.39，東京外国語大学フランス語研究室, pp.110-130.

——— (2015)「現代フランス語における [N1 + *spécial* + N2] 型の複合名詞について」,『ロマンス語研究』No.48，日本ロマンス語学会, pp.45-54.

——— (2016)「複合名詞におけるコネクターとしての spécial に関する考察」,『フランス語学研究』第 50 号別冊『パロールの言語学』，日本フランス語学会, pp.71-83.

小石悟（1998）「N1 -à- N2 型構文の限定詞について」,『フランス語を考える』，三修社, pp. 182-192.

中尾(後藤)和美（1998）「«le premier ministre Lionel Jospin»は同格か？」,『言語・地域文化研究』4, 東京外国語大学大学院地域文化研究科, pp.59-72.

中尾和美（1999）「Rue X について」,『フランス語学研究』（日本フランス語学会）33, pp.40-51.

———（2002）「Le bateau Jean は誰のもの？」,『ふらんぼー』（東京外国語大学欧米第二課程フラ

ンス語研究室フランス研究会）28, pp.21-38.
———（2004）「N1 が N2 を限定する＜名詞＋名詞＞構造 N1N2 について」,『ふらんぼー』（東京外国語大学欧米第二課程フランス語研究室フランス研究会）30, pp.23-36.
———（2005）「Une pizza jambon-tomate-fromage style New-York のような構造について」,『フランス語を探る』, 三修社, pp.229-241.
高田晴夫（1982）「語構成の規則と新語について」,『高崎経済大学論集』, 25, pp. 157-179.
———（1985）「派生と合成」,『フランス語学の諸問題』, 三修社, pp. 233-241.
———（1986）「語構成規則について」,『人文科学研究』(新潟大学人文学部）,70, pp.83-93.
———（1988a）「合成語に関する若干の考察」,『人文科学研究』（新潟大学人文学部）, 73, pp.1-14.
———（1988b）「アルセーヌ・ダルメステテールの『合成語構成概論』に見られる合成法の概念をめぐって」,『人文科学研究』(新潟大学人文学部）,74, pp.77-96.
———（1989）「現代フランス語における〈名詞＋名詞〉型表現の意味構造」,『人文科学研究』(新潟大学人文学部）,75, pp.75-98.
———（1990）「シナプシについて」,『人文科学研究』（新潟大学人文学部）77, pp.27-44.
———（1991）「シナプスと一時的な連辞について」,『ふらんぼー』（東京外国語大学欧米第二課程フランス語研究室フランス研究会）18, pp.1-12.
———（1992a）「シナプシ再考」,『人文科学研究』（新潟大学人文学部）81, pp.61-86.
———（1992b）「合成語理論に関する若干の史的考察」,『人文科学研究』（新潟大学人文学部）82, pp.37-56.
———（1994）「語形成法の＜言語位相＞と＜意味効果＞に関する若干の考察」,『人文科学研究』（新潟大学人文学部）85, pp.47-81.
———（1997）「現代フランス語の合成法の占める位置とその機能的役割について」,『人文科学研究』（新潟大学人文学部）94, pp.25-38.
———（1998）「合成語の占める位置と役割」,『フランス語を考える』, 三修社, pp. 241-251.
———（1999）「フランス語における『動詞＋名詞』型合成語の複数形について」,『人文科学研究』（新潟大学人文学部）100, pp.69-92.
———（2002a）« Étude contrastive de la construction du type Nom de Nom (français) et celle du

type Nom no Nom (japonais) (1) », 「人文科学研究」(新潟大学人文学部) 109, pp.71-88.
———(2002b) « Étude contrastive de la construction du type Nom de Nom (français) et celle du type Nom no Nom (japonais) (2) », 「人文科学研究」(新潟大学人文学部) 110, pp.41-82.
敦賀陽一郎 (2009)「現代フランス語における前置詞 à の統辞機能と用法」, 『東京外国語大学論集』, 79, 273-305.

謝辞

本論文を完成させるまでの間に、実にたくさんの方々にお世話になりました。

主任指導教官の東京外国語大学 川口裕司先生には学部の時から数えると 12 年もの長きにわたって、さまざまなご指導を賜りました。私がかなりマイペースなために、ご迷惑やご心配をおかけしてしまったことも多々ありました。それにもかかわらず、研究発表や留学、進路のことなどを常にお気にかけてくださいましたこと、あらためて感謝申し上げます。

副指導教官の東京外国語大学 黒澤直俊先生には修士の時より論文審査やロマンス語学会にてお世話になりました。同じく副指導教官を引き受けてくださった東京外国語大学の藤縄康弘先生からは、理論に関する事柄についてこの度ご指導をいただけたことは本当に幸いなことでございました。どうもありがとうございます。

そしてご多忙の中にもかかわらず論文審査をお引き受けくださった東京外国語大学の浦田和幸先生ならびに新潟大学の高田晴夫先生にも感謝申し上げます。高田先生には早い段階から拙稿にお目を通していただけただけでなく、「語彙-統辞」の考え方を中心にたくさんのご助言を賜ることができましたこと、心よりお礼申し上げます。

本論文で収集した実例は、ボルドーとパリへ留学していた延べ 5 年間のうちに収集したものが多くを占めますが、期間中はボルドー・モンテーニュ大学の Gilles Boyé 先生ならびにパリ第 3 大学の Jeanne-Marie Debaisieux 先生から貴重なご指導を賜りました。ここに感謝申し上げます。特に Debaisieux 先生からは、統辞や談話的観点を中心とするご助言だけでなく、フランス語の大規模コーパスを用いた実例収集の可能性など、さまざまな観点から研究のヒントをいただくことができました。改めてお礼申し上げます。またボルドーへの留学はロータリー財団の、パリへの留学は日本学生支援機構の奨学金プログラムのおかげで実現しました。これらの機会のおかげで実例や文献の収集だけでなく、研究発表や日本では出来なかった気づきなど、かけがえのない収穫を得ることができました。プログラムを提供してくださった両団体の方々にもここに感謝申し上げます。

東京外国語大学大学院にて共に研究の時を過ごした方々にも謝意を表します。川口ゼミの先輩・後輩の皆様からは、毎回の発表にて率直なご指摘や質問をいただくことができ、大いに鍛えられました。川口ゼミの、それぞれが自分のやりたい研究をやるという自由な空気の中でここまで研究できたことも非常にありがたいことだと実感しております。特に、頼もしい先輩である杉山香織さんと近藤野里さんには、ボルドーならびにパリ留学中を含めて、さまざまな場面で本当にお世話になりました。菊池美里さんと、院生研究室でよくお世話になった新城真理奈さん、山崎亜希子さんにも、ここにお礼を申し上げます。

留学先で出会った皆様にもたいへんお世話になりました。悶々と過ごす時もありましたが、それを乗り越

えられたのも皆様のおかげです。特に、パリ留学を無事に終えられたのは平沢春菜さんの支えがあってのことでした。心から感謝します。

そして、ここまでの長い間ずっと、私の研究や進路について理解して見守ってくれた両親に感謝の意を表します。不安定な情勢の中の留学などで心配をかけたりしましたが、こうして一つの区切りに到達できたのは、ひとえに両親の温かい支えのおかげだと感じています。本当にありがとうございました。

お世話になったすべての方のお名前を挙げることはかないませんが、この度こうして博士論文をようやく完成させられたのも、皆様のお力添えがあったからこそだと実感しております。ここにあらためて感謝の意を表します。

2019 年 3 月

古賀　健太郎

付録　1

Pause-café 型複合名詞

筆者収集分

収集期間 : 2010 年 8 月～2017 年 9 月

収集 : 1,282 件（組み合わせ 1,083 種類）

本付録では、確認された 1,083 種類の[N1 + N2]の組み合わせを一覧として示す。

No.	N1	N2
1	abonnés	internet-TV-téléphone Orange
2	accès	backstage
3	accès	centre ville
4	accès	chantier
5	accès	client
6	accès	commerces
7	accès	facilités
8	accès	handicapés
9	accès	hôtel de ville
10	accès	internet
11	accès	livraison
12	accès	marché
13	accès	médias
14	accès	métro
15	accès	motos
16	accès	parking
17	accès	piétons
18	accès	plage
19	accès	pompiers
20	accès	pompiers et livraisons
21	accès	tramway
22	accès	tranport en commun
23	accès	véhicules
24	accès	visiteurs
25	accès	wi-fi
26	accès piéton	bibliothèque
27	accessoires	high-tech
28	accueil	licence
29	accueil	livraisons
30	accueil-	filtrage
31	achat	auto
32	acheteur	vins
33	acheteurs	auto
34	acteurs-	prisonniers
35	adresse	email
36	adresse	mail
37	affichage	heure/date
38	alerte	canicule
39	alerte	météo
40	alerte	SMS
41	allocations	chômage
42	allocations	chômage et familiales
43	ambiance	match de foot
44	ambiance	prohibition
45	amis	Facebook
46	animateurs	télé
47	animations	jeunesse
48	année	anniversaire
49	annonces	auto
50	apéro	tapas
51	appareil	photo
52	appartements	relais
53	appel	piétons
54	application	iPhone
55	applis	navigation gratuites
56	après-midi	guinguette
57	archives	vidéo
58	armoire	enfant
59	arôme	foie gras, crêpe suzette, tarte au citron meringué, lardons et pommes de terre rissolées
60	arômes	chocolat-orange
61	arrêt	bus
62	arrêt	tram
63	arrêts	maladie
64	artistes interprètes	parade
65	aspect	cuir
66	aspect	denim
67	aspect	voyage
68	assiette	apéro
69	assiette gourmande	traiteur
70	assiettes	bébé
71	assistante-	vétérinaire
72	assurance	accidents
73	assurance	animal

No.	N1	N2
74	assurance	annulation
75	assurance	auto
76	assurance	auto et habitation
77	assurance	chasse
78	assurance	chat
79	assurance	chien
80	assurance	chômage
81	assurance	décès
82	assurance	étudiants
83	assurance	habitation
84	assurance	incendie
85	assurance	invalidité
86	assurance	logement étudiant
87	assurance	maladie
88	assurance	manque de neige
89	assurance	moto
90	assurance	neige
91	assurance	perte d'emploi
92	assurance	perte et vol
93	assurance	plongée
94	assurance	prévoyance
95	assurance	responsabilité civile
96	assurance	santé
97	assurance	ski
98	assurance	tous risques informatique
99	assurance	véhicule de location
100	assurance	véhicule professionnel
101	assurance	vélo
102	assurance	vie
103	assurance	vieillesse
104	assurance	voiture
105	assurance	voyage
106	assurance facultative	décès, perte totale et irréversible d'autonomie, maladie-accident
107	assurances	automobiles
108	astuces	déco
109	atelier	bébés nageurs
110	atelier	bonsaï
111	atelier	calligraphie
112	atelier	conte
113	atelier	tapas
114	atelier	cuisine
115	atelier	danse
116	atelier	déco
117	atelier	dessins
118	atelier	fleurs printanières en papier
119	atelier	peinture
120	atelier	poésie
121	atelier	sophrologie
122	atelier	théâtre
123	ateliers	bien être
124	ateliers	coiffure
125	ateliers	enfants
126	ateliers	musique
127	ateliers	parents-enfants
128	atelier-	débats
129	atouts	voyageurs
130	attestation	CAF
131	audiences	radio
132	autocars	travaux
133	avantage	carte
134	avantage	client
135	avantage	famille
136	avantage	internet
137	avantages	étudiant
138	avantages	mamans
139	avant-premières	cinéma
140	avions	cargo
141	bandes-	annonces
142	banque	poubelle
143	bar-	concert
144	barbecue	gaz
145	base	clients
146	bateau	bus

No.	N1	N2
147	bâtonnets	dégustation
148	bergère	enfant
149	beurre	pommade
150	bibliothèque	enfant
151	bibliothèque	secrétaire
152	bilan	planète
153	billet	papier
154	billets	iDTGV
155	boîte	retour
156	boîtes	portion repas
157	bonus	fidélité
158	boutique	cadeaux
159	boutique	internet
160	budget	alimentation
161	budget	automobile
162	budget	voyage
163	budgets	communication
164	bulletins	BD
165	bureau	enfant
166	bus	restaurant
167	bus-	plage
168	cadeau-	souvenir
169	cadeau-	surprise
170	cadeaux	enfant
171	café	expresso ou filtre
172	café-	citoyen
173	café-	sciences
174	camion	scanner mobile
175	camions-	bennes
176	canapé	relaxation
177	canapé	velours
178	carnet d'entretien	constructeur
179	carte	cadeau
180	carte	étudiant
181	carte	jeu
182	carte	mémoire
183	carte de séjour	étudiants
184	carton	télé
185	case	départ
186	catégorie	animation
187	catégorie	humour adulte
188	catégorie	prévoyance
189	catégorie	vin
190	cave	vins et champagne
191	cédez-le-passage	cycliste
192	centrale	vapeur
193	centre	animation jeunesse
194	centres	piéton
195	chaîne	YouTube
196	chaîne-	boîte-à-clips
197	chaise	enfant
198	chaise	médaillon
199	chambre	bébé
200	chambre	enfant
201	chambre	fille
202	champagne	discount
203	charte	internet
204	chaussure	mariage
205	chaussures	femmes
206	chaussures	homme
207	chaussures	sport
208	cheminement	piéton
209	chemises	femmes
210	chèque	cadeau
211	chèque	découverte
212	chèque	parking
213	chèque	réduction
214	chèque	restaurant
215	chèque-	livre
216	chèque-	musique
217	chèque-	vacances
218	chèques	déjeuner
219	chocolat	dessert
220	chocolat noir	dégustation
221	circuits	matin et soir

No.	N1	N2
222	circulation	auto
223	cité	dortoir
224	clients-	sociétaires
225	coaching	santé
226	coca	bio
227	code	jeu
228	code	jeunesse
229	code-	barres
230	coffret	Blu-ray
231	coffret	livre et puzzle
232	coffret	pompier
233	coffrets	cadeau
234	coffrets et (les) chèques	cadeaux
235	coin	barbecue
236	coin	bébé
237	coin	bibelots
238	coin	bibliothèque
239	coin	bureau
240	coin	couchette
241	coin	cuisine
242	coin	dessin
243	coin	détente
244	coin	enfants
245	coin	fumeurs
246	coin	internet
247	coin	jeux
248	coin	jouets
249	coin	kitchenette
250	coin	lecture et musique
251	coin	meubles
252	coin	nurserie
253	coin	parents
254	coin	pâte à modeler
255	coin	petit déjeuner
256	coin	potager
257	coin	presse française et internationale
258	coin	puzzle
259	coin	repas
260	coin	salon
261	coin	terrasse
262	coin	travail
263	commentaires	audio
264	communication	internet
265	complémentaire	santé
266	complémentaire assurance	santé
267	compte	client
268	compte	fidélité
269	compte	YouTube
270	concert-	rencontre
271	concours	photo
272	concours	vidéo
273	conférence	atelier
274	conférence-	débat
275	conférence-	rencontre
276	confiture	fraises
277	congé	formation
278	congé	maladie
279	congé	maternité
280	congé	paternité
281	connexion	internet
282	connexion	WiFi
283	consultant	foot
284	contrat	santé
285	contre-sens	cycliste
286	côté	animations
287	côté	bagage
288	côté	bus
289	côté	cabane
290	côté	caractère
291	côté	chanteur
292	côté	cinéma
293	côté	cuisine
294	côté	esplanade
295	côté	gangster
296	côté	gare

No.	N1	N2
297	côté	pain
298	côté	peau
299	côté	pont du Guit
300	côté	portefeuille
301	côté	sandwich
302	couloirs	bus
303	coupons	beauté
304	coupons-	réponse
305	coups de coeur	mode, food ou sorties
306	courriers	électroniques ou papier
307	cours-	jardins
308	crédit	accessoire
309	crédit	auto
310	crédit	conso
311	crédit	logement
312	crédit	temps
313	crème	lendemain de fête
314	crème	main
315	crème	visage
316	crèmes	dessert
317	crochet	jupe
318	cuisine	vapeur
319	culture	cinéma
320	culture	vélo
321	cycle	auto
322	danse	étudiant
323	débat	sport santé
324	débit	vapeur
325	déclaration	papier
326	défilés de mode	printemps-été
327	dégraissant	four
328	dessins	hommages
329	détartrant	lave vaisselle / lave linge
330	développement	photo
331	déviation	piétons
332	dictionnaire	papier
333	diététique	minceur
334	diffusion	vidéo
335	dîner-	colloque
336	dîner-	concert
337	dîner-	débat
338	dîner-	spectacle
339	directeur	commercial et marketing
340	directeur	marketing
341	directeur	marketing on-line
342	directeur éditorial	BD
343	documentaires	enfants
344	documents	papier
345	dommages-	intérêt
346	dossier	client
347	DVD	fictions et documentaires
348	échantillons	canapés
349	écoute	bébé
350	effet	peau neuve
351	effets	monstres
352	emballage	cadeaux
353	entrée	livraisons
354	entrepreneuriat	étudiant
355	entretiens	auto
356	épargne	logement
357	épargne	retraite
358	ère	MySpace
359	espace	0%
360	espace	2 roues
361	espace	abonné
362	espace	accueil
363	espace	achats
364	espace	adhésion
365	espace	adultes
366	espace	animateurs
367	espace	art et culture
368	espace	audition
369	espace	bagages
370	espace	beauté
371	espace	bébé

No.	N1	N2
372	espace	boutique
373	espace	boxe
374	espace	bureau
375	espace	carte de séjour
376	espace	chaussures et souliers
377	espace	chocolat
378	espace	cinéma
379	espace	client
380	espace	coiffure
381	espace	communication
382	espace	conduite
383	espace	conseil
384	espace	convivialité
385	espace	coureur
386	espace	coworking
387	espace	cuisine
388	espace	dégustation
389	espace	dégustation vente
390	espace	détente
391	espace	douche
392	espace	enfant
393	espace	famille
394	espace	fidélité
395	espace	foot
396	espace	gym
397	espace	high-tech
398	espace	infos jeunes
399	espace	internet
400	espace	jeux
401	espace	jeux-vidéo
402	espace	langues
403	espace	laverie
404	espace	location
405	espace	loisirs
406	espace	maman
407	espace	membre
408	espace	milk et bar
409	espace	multimédia
410	espace	naissance
411	espace	notes
412	espace	nurserie
413	espace	papeterie
414	espace	paquets cadeaux
415	espace	parapharmacie
416	espace	personnel
417	espace	poussette
418	espace	presse
419	espace	pressing
420	espace	prière
421	espace	projet
422	espace	rentrée
423	espace	repas
424	espace	ressource
425	espace	restauration
426	espace	retrait
427	espace	santé
428	espace	santé beauté
429	espace	sciences
430	espace	secrétariat
431	espace	seniors
432	espace	services
433	espace	société
434	espace	stagiaires
435	espace	travail
436	espace	vélos
437	espace	vente
438	espace	vin
439	espaces	bar et salon
440	espaces	colis Cityssimo
441	espaces	fauteuils roulants
442	étage (tout)	enfant
443	exemplaire	client
444	expert	maintenance des LGV
445	exposition	photos
446	exposition-	vente

No.	N1	N2
447	façon	auberge
448	façon	grand mère
449	façon	pub
450	fauteuil	détente
451	fauteuil	enfant
452	fauteuil à bascule	enfant
453	fer	vapeur
454	feuille	décor
455	feuille de soin	papier
456	feuille intérieure	fraîcheur
457	fichiers	audio, vidéo, Powerpoint, etc.
458	film	fraîcheur
459	film-	documentaire
460	finale	retour
461	flash	info
462	fonction	copier-coller
463	forfait	journée
464	forfait	mobile + Bbox
465	forfait	voyage
466	forfait-	jour
467	format	album
468	format	famille
469	format	papier ou numérique
470	format	poche
471	format	voyage
472	formulaire	papier
473	foyers	témoins
474	galeries	photos
475	gants	vaisselle
476	garantie	canapés
477	garantie	constructeur
478	garantie	crevaison
479	garantie	loyers impayés
480	garantie	protection contre les dommages accidentels
481	gel	douche
482	gel	entretien canalisations
483	gel	WC
484	goût	banane
485	goût	citron
486	goût	figue
487	goût	fraise
488	goût	myrtille
489	goût	orange
490	goût	pêche de vigne
491	goût	pomme
492	goût	pomme d'amour ou barbapapa
493	goût	vanille ou chocolat
494	gôut	chocolat
495	halls d'accès	piétons
496	idée	dégustation
497	idée	détente
498	idée	loisir
499	idée	recette
500	idée	repas
501	idée	séjour
502	idée	vacances
503	idée	week-end
504	idée-	plaisir
505	idées	cadeaux
506	idées	déco
507	idées	train
508	identification	client
509	images	satellite
510	improvisation	vidéo
511	information	jeunesse
512	informations	concours
513	informations	horaires
514	informations	passagers
515	infos	cycliste
516	inscription	étudiants
517	inventaire	meubles
518	itinéraire	journée
519	jeu	concours
520	jeu	ouverture

No.	N1	N2
521	jeux	vidéo
522	jouet	enfant
523	jouet	fille
524	jouets	garçon
525	journal	vérité
526	journal intime	vidéo
527	journaux	papier
528	journée	détente
529	journée	pêche
530	journée	portes ouvertes
531	journée	sécurité routière
532	journée	tir à l'arc
533	journées	découverte
534	journées	enfants
535	journées	essais
536	journées	mer
537	journées	rencontres
538	journées	shopping
539	journées	ski
540	jours	amende
541	jupes	fille
542	kit	bureau
543	kit	dégustation
544	kit	oreillette
545	kit	patrimoine
546	kit	sommeil
547	kit	voyage
548	laboratoires	photo
549	lait	bébé
550	lait	corps
551	lampe	range CD
552	lessive	liquide
553	lessive	poudre
554	lettre	métal
555	lingettes et quelques savons	bébé
556	liquide	vaisselle
557	lit	bébé
558	lit	enfant
559	lit	garçon
560	livre	jeunesse
561	livre	papier
562	livre-	enquête
563	livres	photo
564	livres de poche	jeunesse
565	local	poubelle
566	local	reprographie
567	location	gestion
568	locations	étudiants
569	locations	vacances
570	look	usine
571	maillot	domicile
572	maillot	extérieur
573	maître	composteur
574	maîtres	nageurs-sauveteurs
575	malaise	voyageur
576	mandrin	carton
577	manèges	enfants
578	manteau	fille
579	marque	auto
580	marteaux-	piqueurs
581	matinée	retraités et seniors
582	médiateurs	chantier
583	meuble	CD
584	meuble	CD & DVD
585	meuble	TV
586	missions	handicap
587	mode	3G
588	mode	avion
589	mode	clavier
590	mode	conférence
591	mode	diaporama
592	mode	économie d'énergie
593	mode	lecture continue
594	mode	nuit

No.	N1	N2
595	mode	paysage
596	mode	portrait ou paysage
597	mode	silence
598	mode	sonnerie
599	mode	vibration
600	mode	wi-fi
601	mode (f)	enfant
602	modèle	Halloween
603	mutuelle	santé
604	mutuelle	santé prévoyance
605	mutuelle complémentaire	santé
606	navette	bus
607	niveau	baccalauréat
608	niveau	départ
609	nouveautés	jeunesse
610	nuit	détente
611	objectif	zéro pesticide
612	offre	abonnés
613	offre	adhérent
614	offre	apéritif
615	offre	découverte
616	offre	étudiants
617	offre	internet
618	offre	internet haut débit
619	offre	jeunes / étudiants
620	offre	ouverture
621	offre	voyageur
622	opération	bus-plage
623	opération	campus
624	opération	communication
625	opération	coup de frein
626	opération	DVD
627	opération	escargot
628	opération	films
629	opération	loisirs
630	opération	loisirs créatifs
631	opération	rapatriement
632	opération	reconquête
633	opération	recyclage
634	opération	sandwich
635	opération	sauvetage
636	opération	séduction
637	opération	tranquilité vacances
638	opercule	fraîcheur
639	optique-	laser
640	orientation	emploi
641	originaux	papier ou informatiques
642	page	entreprise
643	page	Facebook
644	pages	internet
645	pancake	fromage / épinards BIO
646	panier	vapeur
647	panier-	repas
648	paniers	fruits et légumes
649	panoplie	Halloween
650	pantalons	femme
651	pantalons	homme
652	papa	conteur
653	papa	musicien
654	papier	aquarelle
655	papier	cadeau
656	papier	cuisson
657	papier	cul
658	papier	journal
659	papier	toilette
660	papier	traiteur
661	papier-	cristal
662	papier-	enveloppe
663	papier-	filtre
664	papier-	impression et écriture
665	papiers	dessin
666	paquet	cadeau
667	parapluie	tempête
668	parc-	relais

No.	N1	N2
669	parfums	homme
670	parking	résidents
671	parking	vélo
672	partie	LGV
673	pass	cinéma
674	passage	cycliste
675	passages	piétons
676	passeport	multimédia
677	passerelle	piétons
678	pause	apéro
679	pause	bien être et détente
680	pause	café / thé
681	pause	café ou thé
682	pause	chocolat chaud
683	pause	cinéma
684	pause	clope
685	pause	déjeuner
686	pause	détente
687	pause	eau
688	pause	Facebook
689	pause	goûter
690	pause	internet
691	pause	lecture
692	pause	loisirs, restaurant ou détente
693	pause	méditation
694	pause	musique
695	pause	pétanque
696	pause	repas
697	pause	santé
698	pause	saveur
699	pause	sieste
700	pause	soleil
701	pause	spectacles
702	pause	sudoku
703	pause	téléphone
704	pause	thé
705	pause	thé / café
706	pause	Twix
707	pause	vin blanc
708	pause	vin chaud
709	pause	yoga
710	pause-	café
711	pause-	paysage
712	pause-	photo
713	pause-	promenade
714	pause-	repos
715	pauses	cigarette
716	pauses	dodo
717	pauses	pipi
718	péage	parking
719	photo	souvenir
720	piano-	voix
721	pièces	auto
722	piste	vélo
723	plan	canicule
724	plan	épargne
725	plan	hiver
726	plan	vigilance
727	plan d'épargne	entreprise
728	plan d'épargne	retraite
729	plan d'évacuation	incendie
730	plantes artificielles	Toussaint
731	plateau	dégustation
732	plateau	raclette
733	plateforme	internet
734	pneus	neige
735	poêle	revêtement
736	point	accueil
737	point	argent
738	point	assaisonnement
739	point	courses
740	point	fax-photocopie
741	point	info tourisme
742	point	information jeunesse

No.	N1	N2
743	point	information médiation multi services
744	point	informations
745	point	infos
746	point	nutrition
747	point	poste
748	point	renconre
749	point	retrait
750	point	WC
751	points	fidélité
752	points	relais
753	pôle	alternance
754	pôle	concours
755	pôle	doctorat
756	pôle	entrepreneuriat
757	pôle	exploration-production
758	pôle	histoire géographie
759	pôle	image
760	pôle	impression
761	pôle	informations
762	pôle	lettres & arts
763	pôle	logement
764	pôle	projets
765	pôle	ressources national sport santé
766	pôle	restauration
767	pôle	santé
768	pôle	santé mentale des détenus-psychiatrie légale
769	pôle	sciences
770	pôle	sciences humaines & sociales
771	pôle	téléréalité
772	pôle municipal	emploi
773	pôles	promotions
774	politique	jeunesse
775	politique	senior
776	poussette	canne
777	présentations	vidéos
778	prêt	vacances
779	prévisions	grève
780	priorité	enfants piétons
781	prix	cadeau
782	prix	catalogue
783	prix	découverte
784	prix	déjà client SFR
785	prix	détente
786	prix	étudiants
787	prix	internet
788	prix	kiosque
789	prix	nouveau client
790	prix	ouverture
791	prix	sans timbres
792	prix	week-end
793	production	jeunesse
794	produit	camping
795	produit	vaisselle
796	produits	bébé
797	produits	bien-être
798	produits	détente
799	produits	femmes
800	produits	hommes
801	produits	multimédia et énergies
802	programme	fidélité
803	programmes	jeunesse
804	projection-	débat
805	pyjama	homme
806	pyjamas	femme
807	pyjamas	filles
808	pyjamas	garçon
809	pyjamas	homme
810	quai	bus
811	quai	Thalys
812	qualité	traiteur
813	question	bonus
814	question	téléspectateurs
815	raisins	bio

No.	N1	N2
816	rallye	lecture
817	randonnées	VTT
818	rayon	anglais
819	rayon	animalerie
820	rayon	bd
821	rayon	beauté
822	rayon	bio
823	rayon	boisson
824	rayon	boucherie
825	rayon	boulangerie
826	rayon	charcuterie
827	rayon	crémerie
828	rayon	diététique
829	rayon	enfants
830	rayon	fleurs & plantes
831	rayon	fromage
832	rayon	fruits et légumes
833	rayon	jardin
834	rayon	lait
835	rayon	librairie
836	rayon	marée
837	rayon	pain-pâtisserie
838	rayon	papeterie
839	rayon	pâtisserie
840	rayon	petits
841	rayon	poisson et viande
842	rayon	télé-hifi-photo-son-multimédia-électroménager
843	rayon	terroir local
844	rayon	textile
845	rayon	traiteur
846	rayon	TV
847	rayon	vin
848	rayon	volaille
849	rayons	traiteur et spiritueux
850	rayons	viandes
851	réception	fournisseurs
852	recette	douceur
853	recherches	auto
854	réduction	demandeurs d'emploi et handicapés
855	réduction	étudiants
856	relation	clients
857	relations	presse
858	remise	fidélité
859	rencontre-	débat
860	rencontre-	signature
861	renseignements	voyageurs
862	rente	éducation
863	réparateurs	auto
864	réparation	auto
865	repas	minceur
866	repas	vitalité
867	reportage	audio ou vidéo
868	réseau	ambition réussite
869	réseau	tram
870	résidences	seniors
871	résolution	vidéo
872	responsable	biodiversité
873	responsable	marketing
874	responsable	sécurité
875	retour	pièces
876	retrait	espèces
877	retrait	marchandises
878	revêtement	cuir
879	révision	garantie constructeur
880	revues	papier
881	robes de chambre	fille
882	robes de chambre	garçon
883	robot	aspirateur
884	rocking chair	enfant
885	rôle-	titre
886	sac	cadeau
887	sachet	cuisson
888	sachet	fraîcheur

No.	N1	N2
889	sacs	congélation
890	sacs	poubelle
891	salle	atelier
892	salle	cellier
893	salon	bibliothèque
894	salon-	salle à manger
895	sauce	pamplemousse
896	sauce	soja
897	saveur	chocolat blanc
898	saveur	pomme
899	saveur	vanille
900	schéma	directeur d'immobilier et d'aménagement
901	secret-	défense
902	secteur	sciences et technologies
903	section	boules lyonnaises
904	section	golf
905	section	natation
906	section	travail corporel
907	sécurité	piétons
908	sélection	vidéo
909	série	télé
910	sérum	lumière
911	service	billetterie
912	service	clients
913	service	communication
914	service	consommateurs
915	service	copies
916	service	culture & communication
917	service	décoration
918	service	documentation
919	service	éducation
920	service	emploi
921	service	expédition
922	service	internet
923	service	jeunesse
924	service	livraison
925	service	paie
926	service	poste
927	service	relations clients Ter Aquitaine
928	service	remorquage auto
929	service	réservation
930	service	restauration
931	service	sommelier
932	service	vacances
933	service	voyage
934	service	web
935	service social	étudiants
936	services	auto
937	services	baby-sitting
938	services	minute
939	shampooing	homme
940	shopping	mode
941	shopping	Nöel
942	site	internet
943	soin	corps
944	soin	femme
945	soin	lumière
946	soin	pieds
947	soins	bébé
948	soins	spa
949	soirée	belote
950	soirée	cabaret
951	soirée	cinéma et concert
952	soirée	clubbing
953	soirée	conte
954	soirée	création de pages personnelles
955	soirée	étape
956	soirée	événement
957	soirée	facteur
958	soirée	jeux
959	soirée	jeux de société
960	soirée	karaoké
961	soirée	loto
962	soirée	moteur et recherche de cyberchasse

No.	N1	N2
963	soirée	moules-frites
964	soirée	pizza
965	soirée	spectacle
966	soirée	spectacles, images, appareil photos numériques, scanner, webcam
967	soirée	télé
968	soirées	débat
969	soirées	disco
970	solution	budget
971	solution	cadeau
972	solution	crédit
973	solution	déco
974	solution	emploi
975	solution	internet
976	solution	repas
977	solution	sécurité
978	solutions	communication
979	solutions	entreprise
980	solutions	voyage
981	sondage-	loterie
982	sortie	patinoire
983	sortie	piétons
984	sortie	plage
985	sortie	voitures
986	sorties	cinéma
987	sorties	loisir
988	spécialiste	piéces auto
989	spécialiste	véhicules
990	stage	ballon-sonde
991	stand	maquillage
992	station	taxis
993	station	vélos
994	stationnement	PMR
995	stations	relais
996	studio	photo
997	support	client
998	supports	papier
999	surveillance	vidéo
1000	tableau	bois
1001	tablettes	lave-vaisselle
1002	taille	adulte
1003	taille	enfant
1004	taille	voyage
1005	tapis-	puzzle
1006	tarif	demi-journée
1007	tarif	électricité
1008	tarif	enfant
1009	tarif	étudiants
1010	tarif	haute saison
1011	tarif	internet
1012	tarif	journée adute
1013	tarif	plafond
1014	tarif	plancher
1015	tarif	vacances de Noel
1016	tarif	week-end
1017	tarif normal	adulte
1018	tarifs	étudiants
1019	test	souris
1020	tête de lit	enfant
1021	ticket	cadeau
1022	ticket	cinéma
1023	ticket	client
1024	ticket	famille
1025	ticket	jeu
1026	ticket	réduction
1027	tickets	restaurant
1028	tickets	restos
1029	timbre	code/barre
1030	timbre	gibier d'eau
1031	timbre	grand gibier
1032	timbre	réduction
1033	timbre	sanglier
1034	timbre-	cachet
1035	tirage	photo
1036	titre	restaurant

No.	N1	N2
1037	titres	seniors
1038	titres-	repas
1039	toilettes	adultes
1040	toilettes	étudiants
1041	toilettes	UFR
1042	touche	dessert
1043	transat	bébé
1044	traversée	piétons
1045	trousse de toilette	serviette
1046	trucs	enfants
1047	t-shirts	garçon
1048	tuniques	femme
1049	type	11-Septembre
1050	type	jus de fruits
1051	type	porto
1052	type	whisky ou pastis
1053	types	COS ou CCAS
1054	univers	bébé
1055	univers	homme
1056	ustensiles	beauté
1057	véhicule	école
1058	ventes	auto
1059	version	anime
1060	version	ciné
1061	version	cinéma
1062	version	cuir
1063	version	DVD
1064	version	papier
1065	version	shampoing et savon
1066	version	Smartphone
1067	version	XXL
1068	vêtements	enfant
1069	vêtements	femme
1070	villages	vacances
1071	ville	arrivée
1072	ville	départ
1073	vins	bio
1074	voie	pompier
1075	voiture	bar
1076	voiture-	relais
1077	voiture-	salon
1078	vol	passagers
1079	volailler-	produits du terroir
1080	volant	cuir
1081	week-end	camping
1082	week-end	découverte
1083	week-end	portes ouvertes

付録　2

[N1 + spécial + N2]

筆者収集分

収集期間 : 2010 年 8 月～2017 年 9 月

収録数 : 110 件

本付録では、確認された 110 件の[N1 + spécial + N2]を一覧として示す。

No.	(N1 +) spécial	N2	N1性数	spécial 性数
S_001	100 % immersion, spécial	Tour de France	N/A	MS
S_002	spécial	natation	N/A	MS
S_003	spécial	anniversaire	N/A	MS
S_004	spécial	Halloween	N/A	MS
S_005	spécial	VINEXPO 2009	N/A	MS
S_006	spécial	porteurs de carte	N/A	MS
S_007	spécial	étudiants	N/A	MS
S_008	spécial	étudiants & apprentis	N/A	MS
S_009	spécial	plancha	N/A	MS
S_010	spécial	barbecue	N/A	MS
S_011	spécial	ceviche	N/A	MS
S_012	spécial	coktails	N/A	MS
S_013	spécial	étudiant	N/A	MS
S_014	spécial	orientation	N/A	MS
S_015	spécial	alternance	N/A	MS
S_016	spécial	étudiants	N/A	MS
S_017	spécial	Lyon	N/A	MS
S_018	spécial	vins de fêtes	N/A	MS
S_019	spécial	peaux sensibles	N/A	MS
S_020	spécial	barbecue	N/A	MS
S_021	spécial	canicule	N/A	MS
S_022	spécial	vin	N/A	MS
S_023	spécial	week-ends	N/A	MS
S_024	atelier cuisine spécial	Mardi gras	MS	MS
S_025	blind test spécial	"Musiques de films"	MS	MS
S_026	cahier spécial	étudiant	MS	MS
S_027	cahier spécial	Alternance	MS	MS
S_028	chewing-gum spécial	stress	MS	MS
S_029	code de la route spécial	vélo	MS	MS
S_030	coffret cadeau spécial	bébé	MS	MS
S_031	couteau spécial	champignon	MS	MS
S_032	emballage spécial	micro-ondes	MS	MS
S_033	Emmental français tranché spécial	baguette	MS	MS
S_034	événement spécial	recrutement	MS	MS
S_035	format spécial	voyage	MS	MS
S_036	fromage spécial	raclette	MS	MS
S_037	fromage spécial	croque-monsieur	MS	MS
S_038	insecticide spécial	insectes volants	MS	MS

【凡例】MS： 男性単数形, MP： 男性複数形, FS： 女性単数形, FP： 女性複数形, N/A： 該当なし

No.	(N1 +) spécial	N2	N1性数	spécial 性数
S_039	insecticide spécial	poisson d'argent	MS	MS
S_040	jambon sec spécial	raclette	MS	MS
S_041	Lunéa Prem's spécial	web	MS	MS
S_042	mozzarella spécial	cuisson	MS	MS
S_043	nescafé spécial	filtre	MS	MS
S_044	numéro "spécial	canicule"	MS	MS
S_045	pain d'épices spécial	foie gras	MS	MS
S_046	papier spécial	informatique	MS	MS
S_047	papier spécial	aquarelle	MS	MS
S_048	plat spécial	réveillon	MS	MS
S_049	pont spécial	tram	MS	MS
S_050	prix spécial	application site mobile	MS	MS
S_051	prix spécial	application pour les tablettes	MS	MS
S_052	programme spécial	bébé	MS	MS
S_053	programme spécial	vacances	MS	MS
S_054	PURINA ONE spécial	chat stérilisé	MS	MS
S_055	Qui sera le meilleur ce soir ? Spécial	enfants	MS	MS
S_056	quiz spécial "	embouteillages "	MS	MS
S_057	stage de tissage spécial	vacances d'été	MS	MS
S_058	tarif exclusif	internet	MS	MS
S_059	tarif spécial	étudiants-Crous	MS	MS
S_060	tarif spécial	Bordeaux 3	MS	MS
S_061	Tchin-Tchin nouvelle génération spécial	été	MS	MS
S_062	ticket spécial	Navigo	MS	MS
S_063	vélo spécial	fille	MS	MS
S_064	vélo spécial	rando	MS	MS
S_065	week-end à Paris spécial	famille	MS	MS
S_066	arrivages spécial	ouverture	MP	MS
S_067	menus spécial	entreprises	MP	MS
S_068	tissu(s) spécial	vitres	MP	MS
S_069	cahiers spéciaux	"étudiant"	MP	MP
S_070	assurance spécial	ski	FS	MS
S_071	assurance spécial	sports d'hiver	FS	MS
S_072	journée spécial	Vélib'	FS	MS
S_073	montre connectée spécial	tennis	FS	MS
S_074	nourriture pas spécial	otages	FS	MS
S_075	nourriture spécial	montagnes afghanes	FS	MS
S_076	caisse spéciale	livraison	FS	FS

【凡例】MS： 男性単数形, MP： 男性複数形, FS： 女性単数形, FP： 女性複数形, N/A： 該当なし

No.	(N1 +) spécial	N2	N1性数	spécial 性数
S_077	édition spéciale	fnac	FS	FS
S_078	émission spéciale	Paris 2024	FS	FS
S_079	formule spéciale	vacances	FS	FS
S_080	journée de travail spéciale	LGV	FS	FS
S_081	journée spéciale	LGV	FS	FS
S_082	journée spéciale	chocolat	FS	FS
S_083	journée spéciale	impôts	FS	FS
S_084	journée spéciale	parcours dans les arbres	FS	FS
S_085	offre spéciale	étudiants	FS	FS
S_086	offre spéciale	St Valentin	FS	FS
S_087	offre spéciale	printemps	FS	FS
S_088	offre spéciale	Paris II	FS	FS
S_089	offre spéciale	fidélité	FS	FS
S_090	page spéciale	incendie	FS	FS
S_091	semaine spéciale	Patrick Timsit	FS	FS
S_092	soirée conte spéciale	Berry	FS	FS
S_093	soirée spéciale	Aïda	FS	FS
S_094	vente spéciale	cyclisme	FS	FS
S_095	allumettes géantes spécial	barbecue	FP	MS
S_096	idées de DIY spécial	voyage	FP	MS
S_097	montres de sport spécial	natation	FP	MS
S_098	papillotes spécial	poêle	FP	MS
S_099	recettes spécial	ramadan	FP	MS
S_100	visites guidées spécial	Nouvel an chinois	FP	MS
S_101	endives rouges spéciales	salade	FP	FP
S_102	endives spéciales	four	FP	FP
S_103	offres spéciales	été	FP	FP
S_104	pousses d'endives spéciales	apéritif	FP	FP
S_105	recettes spéciales	allergies alimentaires	FP	FP
S_106	tongues spéciales	piscine	FP	FP
S_107	fiche horaire spécifique	travaux	FS	*
S_108	tarif exceptionnel	abonnés scolaire	MS	*
S_109	tarif exclusif	Internet	MS	*
S_110	tarif exclusif	internet	MS	*

【凡例】MS： 男性単数形, MP： 男性複数形, FS： 女性単数形, FP： 女性複数形, N/A： 該当なし

* S_107 から S_110 は spécial 以外の形容詞が当該位置に入っているケースである。

付録　3

[N1 + spécial + N2]

Corpus *Est Républicain*

« www.cnrtl.fr/corpus/estrepublicain », CNRTL

使用データ：2003 年版

（2003 年 1 月 2 日版～2003 年 2 月 24 日版）

収録数：[(N1 +) spécial + N2] 189 件

本付録では、同コーパスで確認された 189 件の[(N1 +) spécial + N2]を一覧として示す。

No.	N1	間に入る要素	spécial	N2	N1性数	spécial 性数	出版日
EST_001	après midi		spécial	crêpes	MS	MS	28/01/2003
EST_002	bal		spécial	années 70	MS	MS	04/02/2003
EST_003	calendrier	"	spécial	danse"	MS	MS	21/01/2003
EST_004	centre de loisirs		spécial	ados	MS	MS	22/02/2003
EST_005	classement		spécial	Karting	MS	MS	23/02/2003
EST_006	concours		spécial	jeunes	MS	MS	24/02/2003
EST_007	concours		spécial	jeunes	MS	MS	06/01/2003
EST_008	concours		spécial	jeunes	MS	MS	05/01/2003
EST_009	concours		spécial	Saint-Valentin	MS	MS	15/02/2003
EST_010	concours		spécial	Saint-Valentin	MS	MS	11/02/2003
EST_011	concours de belote		spécial	"Saint-Valentin"	MS	MS	12/02/2003
EST_012	concours de belote		spécial	"Saint-Valentin"	MS	MS	11/02/2003
EST_013	concours de belote	"	spécial	Saint-Valentin"	MS	MS	15/02/2003
EST_014	concours de mots croisés pour enfants		spécial	Harry Potter	MS	MS	13/02/2003
EST_015	cours de gymnastique		spécial	enfants	MS	MS	11/01/2003
EST_016	grand prix	"	spécial	25e anniversaire"	MS	MS	09/02/2003
EST_017	hors-série		spécial	BD	MS	MS	19/02/2003
EST_018	jeu		spécial	collégien	MS	MS	10/02/2003
EST_019	loto		spécial	"enfants"	MS	MS	13/02/2003
EST_020	loto	"	spécial	bijoux"	MS	MS	16/02/2003
EST_021	loto	"	spécial	bijoux"	MS	MS	15/02/2003
EST_022	loto		spécial	enfants	MS	MS	18/02/2003
EST_023	loto		spécial	enfants	MS	MS	15/02/2003
EST_024	loto		spécial	enfants	MS	MS	14/02/2003
EST_025	loto		spécial	enfants	MS	MS	13/02/2003
EST_026	loto		spécial	enfants	MS	MS	07/02/2003
EST_027	loto		spécial	enfants	MS	MS	24/01/2003
EST_028	loto		spécial	enfants de 3 à 14 ans uniquement	MS	MS	06/02/2003
EST_029	menu		spécial	"Saint-Valentin"	MS	MS	15/02/2003
EST_030	menu		spécial	anniversaire	MS	MS	24/02/2003
EST_031	menu		spécial	anniversaire	MS	MS	21/02/2003
EST_032	menu		spécial	anniversaire	MS	MS	18/02/2003
EST_033	menu		spécial	Saint-Valentin	MS	MS	17/02/2003
EST_034	mouchoir en papier		spécial	rhume	MS	MS	14/01/2003
EST_035	numéro		spécial	"Histoire et Patrimoine"	MS	MS	19/02/2003
EST_036	numéro		spécial	euro	MS	MS	24/02/2003
EST_037	numéro	"	spécial	rentrée"	MS	MS	07/01/2003
EST_038	porte-monnaie		spécial	euros (déstiné à ...)	MS	MS	09/01/2003
EST_039	prêt bancaire		spécial	soldes	MS	MS	20/01/2003
EST_040	prix		spécial	enfants	MS	MS	09/02/2003
EST_041	prix		spécial	étudiants	MS	MS	19/02/2003
EST_042	prix		spécial	jury	MS	MS	24/02/2003
EST_043	prix		spécial	jury	MS	MS	14/02/2003
EST_044	prix		spécial	jury	MS	MS	17/01/2003
EST_045	prix		spécial	jury	MS	MS	14/01/2003
EST_046	prix		spécial	public	MS	MS	09/01/2003
EST_047	repas dansant		spécial	Saint-Valentin	MS	MS	02/02/2003
EST_048	repas dansant		spécial	Saint-Valentin	MS	MS	26/01/2003
EST_049	repas dansant		spécial	Saint-Valentin	MS	MS	19/01/2003
EST_050	saut		spécial	filles	MS	MS	19/01/2003

【凡例】MS : 男性単数形, MP : 男性複数形, FS : 女性単数形, FP : 女性複数形, N/A : 該当なし

No.	N1	間に入る要素	spécial	N2	N1性数	spécial 性数	出版日
EST_051	séjour		spécial	petits	MS	MS	13/02/2003
EST_052	séjour		spécial	petits	MS	MS	03/02/2003
EST_053	séjour		spécial	petits	MS	MS	24/01/2003
EST_054	séjour		spécial	petits	MS	MS	17/01/2003
EST_055	séjour		spécial	petits	MS	MS	16/01/2003
EST_056	sujet		spécial	Saint-Valentin	MS	MS	16/02/2003
EST_057	TGV		spécial	Pièces Jaunes	MS	MS	07/02/2003
EST_058	thé dansant		spécial	Saint-Valentin	MS	MS	10/02/2003
EST_059	thème	"	spécial	teuf"	MS	MS	02/01/2003
EST_060	tirage		spécial	enfant	MS	MS	20/01/2003
EST_061	tirage		spécial	enfant	MS	MS	14/01/2003
EST_062	tirage		spécial	enfant	MS	MS	11/01/2003
EST_063	tirage		spécial	enfant	MS	MS	09/01/2003
EST_064	tirage		spécial	enfant	MS	MS	02/01/2003
EST_065	tirage		spécial	enfants	MS	MS	18/01/2003
EST_066	tirage		spécial	enfants	MS	MS	17/01/2003
EST_067	tournoi		spécial	vétérans	MS	MS	12/01/2003
EST_068	tournoi en salle de football		spécial	jeunes	MS	MS	27/01/2003
EST_069	week-end		spécial	gestion du stress	MS	MS	07/01/2003
EST_070	menus	"	spécial	Saint-Valentin"	MP	MS	08/02/2003
EST_071	services		spéciaux	Algérie 1955-1957	MP	MP	22/02/2003
EST_072	services		spéciaux	Algérie 1955-1957	MP	MP	21/02/2003
EST_073	services		spéciaux	Algérie 1955-1957	MP	MP	20/02/2003
EST_074	trophées		spéciaux	Ski nordique	MP	MP	30/01/2003
EST_075	découverte d'Internet	"	spécial	retraité et seniors"	FS	MS	06/02/2003
EST_076	soirée karaoké	"	spécial	Saint-Valentin"	FS	MS	13/02/2003
EST_077	sortie	"	spécial	Carnaval"	FS	MS	14/01/2003
EST_078	sortie	"	Spécial	Carnaval"	FS	MS	04/01/2003
EST_079	activité		spéciale	neige	FS	FS	15/02/2003
EST_080	autorisation		spéciale	paiement de facture	FS	FS	10/02/2003
EST_081	brochure		spéciale	voyages de noces	FS	FS	13/02/2003
EST_082	carte postale		spéciale	"festival des mots d'amour"	FS	FS	14/02/2003
EST_083	collection		spéciale	Saint-Valentin	FS	FS	15/02/2003
EST_084	composition	"	spéciale	Saint-Valentin"	FS	FS	09/02/2003
EST_085	déclinaison		spéciale	"Sida"	FS	FS	07/02/2003
EST_086	demi-rame	"	spéciale	" de TGV	FS	FS	24/01/2003
EST_087	dotation		spéciale	instituteur	FS	FS	31/01/2003
EST_088	émission		spéciale	"Art"	FS	FS	12/02/2003
EST_089	enquête		spéciale	"Jazz, rock et littérature"	FS	FS	19/02/2003
EST_090	galette	"	spéciale	femmes"	FS	FS	18/02/2003
EST_091	grande enquête		spéciale	consommation 2003 Lorraine	FS	FS	08/01/2003
EST_092	journée		spéciale	"chats"	FS	FS	31/01/2003
EST_093	journée		spéciale	bandes dessinées	FS	FS	17/02/2003
EST_094	journée		spéciale	BD	FS	FS	22/02/2003
EST_095	journée		spéciale	entretien de l'étang	FS	FS	31/01/2003
EST_096	journée		spéciale	immobilier	FS	FS	05/02/2003
EST_097	journée	←実際は順序逆→	spéciale	VTT	FS	FS	13/02/2003
EST_098	matinée		spéciale	retraité et seniors	FS	FS	04/02/2003
EST_099	mention		spéciale	affiche	FS	FS	20/02/2003
EST_100	nuit		spéciale	Extra-dance RNB techno, hip-hop	FS	FS	22/01/2003

【凡例】MS : 男性単数形, MP : 男性複数形, FS : 女性単数形, FP : 女性複数形, N/A : 該当なし

No.	N1	間に入る要素	spécial	N2	N1性数	spécial 性数	出版日
EST_101	nuit		spéciale	extra-dance, RNB techno, hip-hop	FS	FS	25/01/2003
EST_102	partie		spéciale	"cave à vins"	FS	FS	22/01/2003
EST_103	partie		spéciale	enfant	FS	FS	30/01/2003
EST_104	partie		spéciale	enfants	FS	FS	20/02/2003
EST_105	partie		spéciale	enfants	FS	FS	12/02/2003
EST_106	partie		spéciale	enfants	FS	FS	08/02/2003
EST_107	partie		spéciale	enfants	FS	FS	01/02/2003
EST_108	partie		spéciale	enfants	FS	FS	01/02/2003
EST_109	partie		spéciale	enfants	FS	FS	30/01/2003
EST_110	partie		spéciale	enfants	FS	FS	26/01/2003
EST_111	partie		spéciale	enfants	FS	FS	17/01/2003
EST_112	partie		spéciale	enfants de moins de 12 ans	FS	FS	30/01/2003
EST_113	prison	"	spéciale	débitants"	FS	FS	12/02/2003
EST_114	redevance		spéciale	déchetterie	FS	FS	23/02/2003
EST_115	séance		spéciale	enfants	FS	FS	01/02/2003
EST_116	séance		spéciale	enfants	FS	FS	01/02/2003
EST_117	séance		spéciale	jeunesse	FS	FS	27/01/2003
EST_118	séance		spéciale	Saint-Valentin	FS	FS	15/02/2003
EST_119	séance		spéciale	Saint-Valentin	FS	FS	11/02/2003
EST_120	semaine de congé	"	spéciale	fermeture"	FS	FS	06/01/2003
EST_121	soirée		spéciale	adolescents	FS	FS	08/02/2003
EST_122	soirée		spéciale	création de pages personnelles	FS	FS	25/01/2003
EST_123	soirée		spéciale	image, appareil photo numérique, scanner, Webcam	FS	FS	30/01/2003
EST_124	soirée		spéciale	image, appareil photo numérique, scanner, Webcam	FS	FS	25/01/2003
EST_125	soirée		spéciale	image, appareil photo numérique, scanner, webcam etc.	FS	FS	04/02/2003
EST_126	soirée		spéciale	Madagascar	FS	FS	12/02/2003
EST_127	soirée		spéciale	Madagascar	FS	FS	10/02/2003
EST_128	soirée		spéciale	moteurs de recherche	FS	FS	25/01/2003
EST_129	soirée		spéciale	natation	FS	FS	17/01/2003
EST_130	soirée		spéciale	natation et démonstration	FS	FS	16/01/2003
EST_131	soirée		spéciale	rock'n roll	FS	FS	02/01/2003
EST_132	soirée		spéciale	Saint-Valentin	FS	FS	18/02/2003
EST_133	soirée		spéciale	Tolkien	FS	FS	07/02/2003
EST_134	tournée		spéciale	dessert	FS	FS	03/02/2003
EST_135	voirie forestière	"	spéciale	tempête"	FS	FS	11/01/2003
EST_136	réductions	"	spécial	salon"	FP	MS	13/02/2003
EST_137	(=parties)	deux	spéciales	enfants	FP	FP	15/01/2003
EST_138	(=parties)	deux "	spéciales	enfants"	FP	FP	12/01/2003
EST_139	parties	adultes, mixtes ou	spéciales	enfants	FP	FP	12/02/2003
EST_140	parties		spéciales	enfants	FP	FP	07/02/2003
EST_141	parties		spéciales	enfants	FP	FP	17/01/2003
EST_142	Pizzas		spéciales	monstres	FP	FP	12/01/2003
EST_143	Pizzas		spéciales	monstres	FP	FP	17/01/2003
EST_144	tenues		spéciales	ski	FP	FP	21/02/2003
EST_145			spécial	"Sixties"	N/A	MS	08/02/2003
EST_146			spécial	B.D.	N/A	MS	19/02/2003
EST_147		un	spécial	bandes dessinées	N/A	MS	19/02/2003
EST_148			spécial	BD	N/A	MS	19/02/2003
EST_149		"	spécial	BD"	N/A	MS	24/02/2003
EST_150			spécial	bricolage	N/A	MS	03/02/2003

【凡例】MS : 男性単数形, MP : 男性複数形, FS : 女性単数形, FP : 女性複数形, N/A : 該当なし

No.	N1	間に入る要素	spécial	N2	N1性数	spécial 性数	出版日
EST_151		"	spécial	chorale"	N/A	MS	21/02/2003
EST_152			spécial	collégiens et lycéens	N/A	MS	04/02/2003
EST_153	(programme)		spécial	collégiens et lycéens	N/A	MS	25/01/2003
EST_154			spécial	consommation	N/A	MS	08/01/2003
EST_155			spécial	cru du professeur	N/A	MS	19/01/2003
EST_156	(régime)		spécial	dialysé	N/A	MS	18/01/2003
EST_157	(programme)		spécial	élus et personnels communaux	N/A	MS	30/01/2003
EST_158			spécial	Enfantina	N/A	MS	19/02/2003
EST_159	(les jeux multiples)		spécial	félin	N/A	MS	03/02/2003
EST_160	(programme)		spécial	généalogie	N/A	MS	30/01/2003
EST_161			spécial	général de Gaulle	N/A	MS	19/02/2003
EST_162			spécial	groupes	N/A	MS	17/02/2003
EST_163			spécial	groupes	N/A	MS	24/02/2003
EST_164			spécial	groupes	N/A	MS	10/02/2003
EST_165			spécial	groupes	N/A	MS	03/02/2003
EST_166			spécial	groupes	N/A	MS	27/01/2003
EST_167			spécial	groupes	N/A	MS	20/01/2003
EST_168	(programme)		spécial	jeunes (collégiens et lycéens)	N/A	MS	30/01/2003
EST_169	(programme)		spécial	jeunes collégiens et lycéens	N/A	MS	29/01/2003
EST_170			spécial	jeunes et lycéens	N/A	MS	11/02/2003
EST_171	*(Maisons Côté Est* de décembre,)		spécial	Montagne	N/A	MS	05/01/2003
EST_172			spécial	musée	N/A	MS	19/02/2003
EST_173	(programme)		spécial	retraité et seniors	N/A	MS	30/01/2003
EST_174			spécial	spiritualités et régions	N/A	MS	19/02/2003
EST_175			spécial	stéréo	N/A	MS	08/02/2003
EST_176			spécial	Watts'in	N/A	MS	04/01/2003
EST_177	(réunion du comité syndical du Val de Meuse)		spéciale	"développement local"	N/A	FS	11/02/2003
EST_178	(rencontre ?)		spéciale	"pommes"	N/A	FS	08/01/2003
EST_179	(sélection)		spéciale	duo	N/A	FS	29/01/2003
EST_180	(sélection)		spéciale	enfants	N/A	FS	29/01/2003
EST_181	(émission)		spéciale	fictions	N/A	FS	29/01/2003
EST_182	(émission)		spéciale	fictions	N/A	FS	28/01/2003
EST_183	(émission)		spéciale	fictions	N/A	FS	26/01/2003
EST_184	(émission)		spéciale	fictions	N/A	FS	25/01/2003
EST_185	(découverte internet??)	une "	spéciale	image"	N/A	FS	06/02/2003
EST_186			spéciale	Meuse	N/A	FS	07/02/2003
EST_187	(émission)		spéciale	reportages	N/A	FS	22/01/2003
EST_188	(émission)		spéciale	reportages	N/A	FS	21/01/2003
EST_189		deux	spéciales	jeunes	N/A	FP	17/02/2003

【凡例】MS : 男性単数形, MP : 男性複数形, FS : 女性単数形, FP : 女性複数形, N/A : 該当なし